THE CENTRAL REVIEW

中央公論

3-1925

三月號

4C

第四十年第三號　第四百四十五號

此廣告を見て御申込の方は中央公論愛讀者なる旨御申添を乞ふ

コレハ實よ立派な目藥だ!!



理想的の眼病良薬

直治水

醫藥學の進歩に伴ひ、深遠なる學理と、数多の實驗から、絶對の偉効ありと信認せられたる直治水は、今や智識階級から盛んに實用せらるゝ、新時代の貴重なる眼科新薬である。

主効
- トラホーム　やに目　雪目
- はやり目　うみ目　ち目
- かすみ目　めくさ　星目

薬價　新式点眼器付　二十錢　三十錢　五十錢

●全國各藥店に取次販賣せり

本舗　大阪　東京　丹平商會藥房

ショーペンハウエル著・増富平藏譯

獨逸 ショーペンハウエル著・増富平藏譯

宇宙及人生

上巻出來

全三巻 ― 原稿全部完成 中巻組版中

四六判ポイント組總布製函入・九百五十頁

定價 四圓五拾錢

郵税十八錢

最・新・刊

幽渺難讀、容易に理解されないのは、必ずしも哲學書の本色でない。本書は在來の西洋哲學に一生面を拓いたショーペンハウエルの主著『意志及び心識としての世界』の逐字的口語譯である。原書はニイチエも『二週日の間、一時に寢ね、六時に起きて二千ページを讀破した』といった位、深淵の思想と無限の興味とを兼ね具ふる點に於て有ゆる哲學書中の白眉を以て目さゝ世界的名著である。内容は譯書名の示す如く、宇宙及人生に對して最後の哲學的斷案を下せるもの而かも譯筆の明快さは、讀下直ちに了會して、一語一句と雖も曖昧模糊の點を遺さゞる玲瓏徹底的のものである。苟も宇宙間の理法や實人生の諸問題にして根本的理解を欣求する讀者は、本書に依って小説以上の興味を見出し得るであらう。

六版

印度マドラス大學 ナラス教授著

曹洞宗大學教授 立花俊道譯

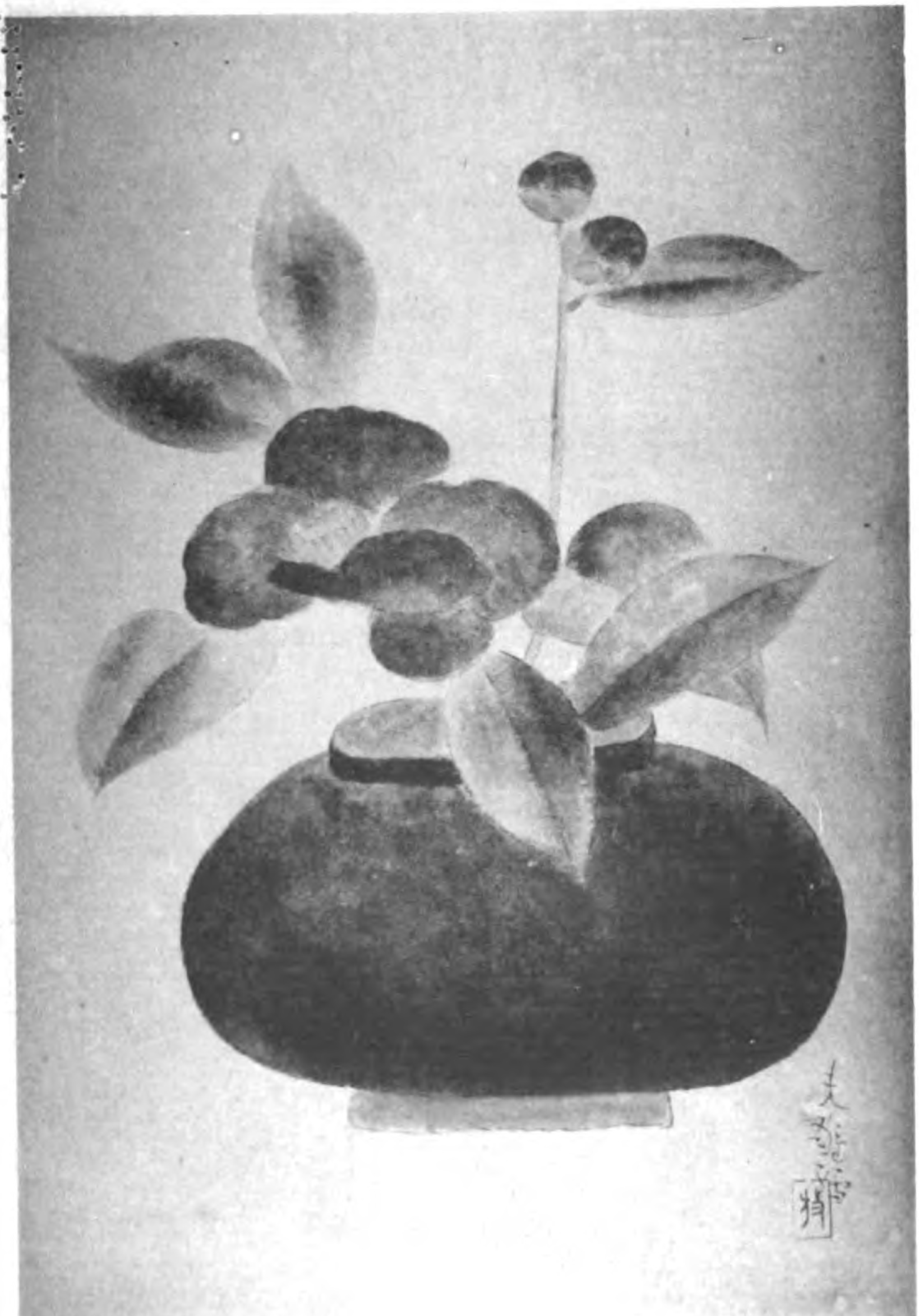
佛教の要諦

釋尊像、アジャンタ壁畫等の寫眞版十一頁入

四六判總洋布製 定價 參圓貳拾錢 郵税十二錢

▼「余は佛教の智識を得んと欲する萬人に此書の熟讀をすすむ。憶ふに此書はかゝる主題に關する空前の良書と稱するを得ん」―スマンガラ大僧正

東京本郷西片町 **玄黄社** 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番



椿　小杉未醒筆


サクラビール
その醉ひ心地は
無限の蒼穹に
のす凧のそれ!!!
帝國麥酒株式會社

大正十四年

中央公論

三月一日發行

三月號

第四十年第三號

第四百四十五號

首相と文相に對する不滿

——首相圓滿にして政治は舊型依然・教育は似而非新式にして文相は頑迷——

桂公が沒落してから後十年の間は、大隈内閣の二年間を除き（山本、寺内兩内閣は準政友會内閣）日本の政界は全く政友會の獨舞臺の觀を呈し、政友會及其總裁原敬の勢威は、一般世人をして萬年平氏、萬年清盛が出現したのでもあらうかと疑はしめた。併しながら天、偏安を好まず、人、極盛を忌む。多少の識ある者は、東京驛頭の兇刃を待たず、改革非改革兩派の睨み合ひを見ざるも、久しからずして人心の轉じ、形勢の變ずべきを察した。況んや驛頭の兇變は、人心の離反をあからさまに表現して其勢ひを促進し、兩派の軋轢は中心人物の亡失によつて一層醜く暴露せられ、終に收拾すべからざるの窮所に陷つて政・本二黨に分裂した。而して雌伏十年、世人より最早や忘れ去られんとした、少くも馬鹿にされ切つてゐた憲政會が、富籤に當つた僥倖者の如く、ノコ〳〵と政界の表面に乘り出し。西園寺其他の長老及び手下の一部から政友會總裁の資格なしと目槌られて、爵位を抛つて、眞つ裸かの平民となつて飛び出した愉快なる好々爺高橋是清を戴く政友會と。慢性消化器病患者の如く、月に年に細り行く犬養毅の家の子郎黨から成る革新倶樂部たる痩世帶と。三派相提携し。全然時代錯誤的なる清浦老人の率ゐし特權内閣によつて極度の侮蔑を痛憤しつゝある人心の潮先に乘じて、玆に所謂護憲内閣なるものを手際よく組織したのである。

政治科と經濟科と分化しない以前の事ではあるけれど、僕は兎に角帝大政治科に學んだ者であり、僕の郷里から出てゐる八人の代議士の中、一人は僕の叔父であり、一人は母の從兄（即ち僕とは一いとこ半とか二いとことか云ふ關係）であり、而して叔父の方は與黨の中で最も重き役割を演じてゐる一人であり、又從兄の方は反對黨の幹事長である。かく個人的の事を記するのは僕自身の身分に箔を附けようなどいふ考でない事は無論である。實は、よく二人とも馬鹿〳〵しくなく代議士などになる氣になつたものだと思つてゐる位だ。（尤も二人とも大して

得意がつてゐる譯ではないやうだが）只僕は自分の學歴上又親戚・姻戚關係上今の政治に冷淡であり得ない、可なり深い興味を有ち得べき筈であると云ふことを云ひたいのである。所が、正直の所、今から廿年ばかり前、僕が此雜誌に關係するやうになる頃から、僕は日本の實際政治には興味を有てなくなつたのである。個人々々の政治家について好惡はある、政黨についてもない事はない。一つ〳〵の政策方針については無論是非善惡の批評はある。併しながら大觀した所、日本の政治なるものは、朧ろげながら、併し動かすことの出來ない大體の國是と大體の型式とに從ふの外途無きものになつて居るので、甲黨乙黨A首領B首領の宣言や行動が、一見違つたやうに思はれても、實は大した差異が無いもので、內閣の更迭や、政權の爭奪やの活劇も、實は源平藤橘乃至織田豐臣德川の興亡史よりも遙かに興味薄きものである。だから僕等の眼は自然、外に於ては日本の國際關係、內に於ては其社會思想の方に向けらるゝことになり、國內の政爭問題については、どうしても冷淡になり、無感覺にならざるを得なかつたのである。

併しながら今回の加藤內閣――世人の所謂護憲內閣の出現は、珍らしくも、吾人の全身の血を湧かさせぬまでも、頰に多少の紅味を帶びしむる位の感じはあつた。それは二代も續いた超然內閣―山本、清浦―によつて馬鹿にされてゐた憤懣に對する腹いせが一つと、十年間も續いて來た舞臺面の變化に對する興味が一つとの外に、加藤高明といふ一個の特異の人物に對する一種の期待であると分析され得る。

三菱の聟なるが故にアレ程に出世した。併しアレしか伸びられぬのも三菱の聟なるが爲めだ――それと同じやうな批評――加藤は金持ちだから憲政會の首領になつた。併し金を遣はぬから首領として勢力が無く、又憲政會が大きくならぬ。加藤子に對する批評はいろ〳〵あつた。今もある。併し僕は今の政治家の中では、比較的彼を買つて居り、彼に好意を有つて居つた一人だ。權勢に有り附きさへすればよいと云ふ考で桂公の傘下に集つたものの多い憲政會――尤もさう云へば政友會だつて同じだらうが――は、隨分雜駁な分子の政黨で、僕は餘り好意を有たなかつたが、加藤總裁其人は比較的好きであり、高く買つてゐた、それは何故かと云ふに、彼は日本の政

治家に珍らしく、其世間に發表する政見が、正々堂々として、且つ條理が立つてゐたことゝ、彼の出處進退が現在に於ては寧ろ偏屈と思はるる程憲政的理論の上に立つてゐたからである。在野黨であり、無責任の地位にあるからと云ふ人もあるけれど、彼の憲政大會席上に於ける演説は更に我國政の全般に渉つて正面から堂々と論歩を進めて居る。別に深刻とか卓見とか云ふ程でなくとも、一通りの筋道は通つて居る。之を原敬の曖昧模糊たる宣言や小川平吉の揚足取りの辨賢やに比べると、演説としては三役と十兩どこ位の差はあつた。又西園寺内閣、大隈内閣に於ける彼の辭職も、憲政常道論より出立してゐた。で此男に一度政界に立たして、彼の言論通り、主張通り遣らして見たならば、日本の政治の舊き型を破り、政治家の立憲的行動を奬勵する上にも効力があるだらうと考へてゐた。

組閣の大命は加藤に降つた。護憲三派の聯合は人心自然の要求だ。併し高橋は兎に角曾て第一黨の首領であり、總理大臣の經歴あり、犬養は加藤を隨分こき卸したこともあり、又有名な旋毛曲りであり、又各政黨共從來の感情や行掛りもあつて見れば、理屈通りの聯合が出來るや否やは隨分問題であつた。併し加藤は大命を拜するや否や直ちに赤坂の高橋邸を訪ひ、其足で時を移さず四谷の犬養邸を訪うた。(之には犬養老も一寸面喰つたのは面白い。ナニ加藤はオレの所へなんか來るもんかといつて居る所へノツコリ來たさうだ)大勢は此一事で決した。此の所置は加藤もなか〳〵遣るわいと僕も一寸感心してゐたのだつた。所が今になつて見れば、之は加藤も年を取つて、如才なくなつて、大隈が曾て評したやうに所謂練達の士となつた證據であつて 僕が今彼に對して抱くに至つた不滿の情は、即ち組閣當時の如才ない此同じ態度であるのかも知れない。

兎に角僕は現内閣の組織には多少の好意を有ち、加藤の行動にも一寸感服して、之ならば此内閣は可なり遣るだらうと一種の期待を有つたのであつた。所が、僕の其期待は段々に裏切られて行つた。政務次官、參與官の設置は、何と理屈を附けやうとも行・財政整理、一般緊縮方針を以て國是とする現内閣に於ては、黨員の獵官熱緩和の爲めの一策であることは蔽ふ事が出來ない。護憲内閣成立の重大動機たる普通選擧及び貴族院改革に對

する熱意の缺乏と、實行の緩慢、何か問題が起れば、西園寺詣で。研究會幹部招待。鬼ても齒排ゆくつて見てゐられない。そんな渡りをつけたり、妥協をしたりすることは君はから下手なのだ。まる柄にない。およしなさい」といひたくなる。杯でも原でもそれ專門でやつて來た大家のあとに、君のやうな、しかめつつらのむつちり屋の無愛嬌やの理屈屋が、やつたのでは鵜の眞似をする烏にもならない。君はよろしく英國流の憲法論でも眞向に振り翳して、西園寺無視、研究會無視、軍閥無視、只三派と三派を支持する國民の後援とによつて仕事をすることが出來ぬのか。もう實際其元氣はなさゝうですね。六十お幾つでしたつけ。六でしたかね。間滿にやつて、日露新協商其他の功績によつて、おやめになる時は伯爵ですか。それから二三年後もう一回内閣首班になつて、とうとう準元老になつてめでたしめでたしですか。マサカネ。さう餘り馬鹿にしたら、加藤さん、あなただつて怒るでせう。併し實際を云ふと少し怒つて欲しいのだ、永田秀次郎を捕へて、貴院改革は狼狽にあらず世間では怠慢と云つて居るといつたり、鳩山一郎に向つて「貴下の如き博學の人を委員に擧げ得ざりしは殘念なり」など皮肉つて、小さな快に入つてゐるやうでは全く仕方がない。ナゼ元老軍閥、貴族院、樞密院等を向ふに廻して鬪ひ、鬪つて而して勝ち、日本の非立憲的なる政治型式に向つて一大變革を加へ、日本政局の更迭は加藤高明によつて一新せられたと云ふ、我より古を爲すの雄志なきのか。其雄志あらば普選實行後も政治的命脈あるべし。雄志なければ命脈も亦無きものと知れ。

僕の三番目の女の兒は今年高等女學校の入學試驗を受ける準備に熱中してゐる。一番目二番目の女の兒の時も略ぼ同樣であつたらうし、僕自身も中學、高等學校と入學試驗に惱まされて來たのであるから、試驗のつらさと馬鹿馬鹿しさは今初めて知つた譯ではない。併し自分自身の時は理屈を云つてゐる餘裕はなかつたし、最初の二人の兒の時は、僕が家にゐる事が少かつたので、しみじみと其狀況を觀察しなかつたが、今は病氣の爲めに引籠つて、朝から晩まで家に居つて觀て居ると、今の入學試驗制度の馬鹿馬鹿しさにはつくづく呆れざるを得ない。よく新聞などには某々の教師などの意見として、「試驗勉强の必要がない」とか試驗前には勉强よりもよく安眠をせ

よ」とか、「學校の課業以外に豫習せずともよい」とか讃美されて居るけれども、若し之を眞面目に受取る父兄及び生徒があれば入學不合格の憂目を見ることは分り切つて居る。半年も前から學校で、豫習をやり、特別の教師に就きて勉強し、特別の金を拂つて數種の模擬試驗を遣り、一つ〱受驗料金を納めて少くも二つ乃至は三つ四つの學校に入學願書を出しても、志望者の多い、評判のよい學校にはなか〱入れない。殊に近頃新流行のメンタル・テストなるものに至つては全く言語道斷の代物で、先づ此メンタル・テストを出して居る先生のメンタル・テストを行ふことが第一の急務と思はれる。斯う云ふのがあつた。問題の範圍は政治・法制・經濟・地理・歷史等の各方面に亘つて問題の數は五十。而して其れに廿分間に讀み方を附けて各項目に大體の要領を書くべしと云ふのだ。一問題に要する時間正に平均廿四秒。天狗の早業ならば兎に角、恐らく普通の人間には出來ぬ藝當だ。それに小學校の生徒に、「民法」とか「公債」とか「自治」とか「檢事」とか「國是」とか「手續」とか「判事」とか「體積」とか「理事官」とか云ふ言葉が、一分間の半分足らずの時間で、他人に分るやうに解釋を書き得るかどうか、大抵判斷が出來さうなものぢやないか。メンタル・テストの學術上の根據は兎に角、常識から云へば、普通人が一寸誤り易き又は思ひ違ひをし易き問題を、正しく間誤附かずに解釋するのが其本旨であらうのに、教師に頭腦が無い爲めに、問題を履き違ひ、成るべく、誤るやうな、間誤附くやうな、出來ぬやうな、問題を、問題をと選むやうになつたものであらうと思ふ。前に云つた五十題廿分の問題などは僕は兒どもに向つて「この問題は廿分間では到底出來ません。先生御自身が廿分でおやりになつたのを拜見するのが樂しみです」と書けば、お父さんならば滿點を附けると激語したら、「落第を取る積りならばネ」と兒どもは苦笑してゐた。其他夏冬の休暇中に於ける宿題の多過ぎることなどは、全く休暇本來の意義を減却するものと云つてい丶。又教育の萬般の形式は、何でも新式新式と云ふ風で、其新式の出來た精神は理解されずに、——寧ろ反對の根據に立ちながら——形式丈けが、猿眞似的に模倣されるの現狀であるのは、全く情けない氣がする。

教育が似而非新式を採用するに急にして、日も維れ足らざるを憂ふるの時、ここに一大喜劇が演ぜられること

になつた。――そは反動思想の持主岡田良平氏が現内閣の文相になつた事である。

護憲を標榜し、普選即行、貴院改革を政綱の重要なるものとする現内閣が、尊德宗の信者にして、少廉曲謹を以て知られたる岡田氏を、假令貴族院關係を顧慮する上からとはいへ、重大なる文政の首班に措えるとは何事であらうと、此内閣の成立當初から心ある人は危んでゐた。彼の就任以來爲す所を觀るに、果然、一切萬事反動的、保守的にして、新時代に對する理解を缺き、一部の軍閥及び老人閥を除いては誰一人として滿足の意を表するものがない。學生の演劇禁止。裸體畫取締の峻嚴（内務方面と合議）學生の社會科學研究壓迫。中學校以上の專門學校に軍事教育の施設、一つとして反動思想、保守思想の表現でないものはない。此の中のどの一つで以つても鼓を鳴らして責むるに足る。斯う澤山重なり合つては寧ろ手の附けやうも、批評のしようもないに呆然とする。

今の代議士が、或は政黨が、心から好むと好まざるにせよ、普選は通過し、實行さるべき運命になつた。時代の要求であり、大勢の力であるからだ。次の選擧からは泣いても笑つても普通選擧だ。我等は普通選擧が、直ちに日本の政界をして、地獄を化して天國とするものとは思はない。併しながら、新たに選擧權を得べき知識階級の大多數が、我が日本の國際關係に着眼し、國内に於ける社會狀態に眼覺め、單にブルジョアの手先とならず又單にプロレタリアの煽動を以て能事とせず、我國家と民人の福利安寧の爲めに、新たなる政治的機能を行使するの覺悟あらば、我國の政界は必らず其面目を一新すべきことを信ずる。若しさうなれば、現内閣の現狀の如き、固より深く論評するの價値なきが如きも、併し國際的には可なり困難なる環境に立ち、國内的には經濟上、社會問題上最も危險なる狀態にある我國として、假令二四年たりとも、不良の狀態に放任することは心ある國民の默視し得べき所でない。我等は加藤首相に向つて柄にも無き圓滿振りを捨てゝ、我國政治型式の改善を敢行するの勇氣無くば速かに首相の印綬を解かんことを希望し、文相には、到底自ら頑迷を悟るべき見込なきを思ひ、他より强制しても、文相の更迭は是非實行して貰ひたいと思ふ。――（大正十四年二月八日病床にてT・T生）――

中央公論



第四十年第三號
三月號
第四百四十五號

社會思想の現實化的傾向

大山郁夫

一　社會思想の動揺時代（上）

——それの經過——

さきごろ、『東京朝日』の學藝欄で、島崎藤村氏の感想めいた一文を讀んでゐると、次の數行の文句が、特に永く私の記憶の上に殘つた。——

『一頃やかましかつたデモクラシイの聲なぞも、私には同胞の內部を、其根柢の冷靜を證據立てるやうに思はれてならない。もしもデモクラシイの深い基礎が民衆のインスピレェションであり、良心の至醇な聲であり、素朴なものの直覺力であるならば、こんなに早くその叫びが沈靜に歸するといふことはあるまいと思ふ。どうして私達はこんなに物に熱することが出來ないほど單純な心を持たないのか。ニイチェといひ、ベルグソンといひ、タゴォルといひ、あいふ人達の仕事が恰度夏の夜の兩國の花火のやうに、皆の心の空に輝いた日もあつた。それと同じやうなあわただしさを以て、今また社會的の問題が迎へられるならば、問題は唯問題として私達の前を流れ過ぎて行くことを氣遣ふ。極端から極端へと動く振子の波のやうに、今日の社會思想が反動の大勢を喚起することの無いとは奈何して言へよう。私はその反動がわれらの內にある好いものを護り育てて行くやうなものでなくて、狹い頑な保守的な思想であることを恐れる。』(一月二十一日の『東京朝日』學藝欄所載、島崎藤村氏の『大正十四年を迎へて』の中から。)

これは、筆者の藤村氏が直ぐその次に斷つてゐる趣旨に據ると、氏が數年前に書いておいたものを、一昨年秋の大震災後に於ける反動思想及び反動運動の大勢を振り返つて見てゐる際にふと思ひ出して、わざわざそこに再錄したものだ、といふことである。が、それは兎も角、私は新聞紙上で藤村氏の署名のしてある右の一文を發見して、それに心を惹かれて讀んで行つてゐた間に、上に引用した數行にまで來たところで、私は急にその先きへ讀みつづけることを止めて、しばらくの間は、それからそれへと私自身の考への筋を追うてゐる自分を、そこに見出したのであつた。

無論私は、右の藤村氏の言葉に同意しようとしてゐたのではなく、と言つて、反對しようとしてゐたのでは、尙ほ更らなかつた。私は寧ろ、それを切つ掛けとして、數年前に樣々の社會問題や社會思想が、異常の『あわただしさ』を以て『迎へ』されてゐた時代の上へ、私の記憶を辿らせて行つたのであつた。如何にもその頃には、世界大戰勃發當時に

於けるデモクラシーの思潮の流行の後を受けて、各種の社會思想の流れが一時に來り集まつて、凄まじい勢で我々の周圍に渦巻いてゐた。かくて我々は、曾てオイッケンとか、ベルグソンとか、タゴールとかへの呼び聲が刻々と轉變して行つた時代を見たと同樣に、その頃にはまた、リフォーミズムとか、マルキシズムとか、レヴィジョニズムとか、サンディカリズムとか、キルド・ソーシアリズムとか、そして最後にボルシェヴィズムとかが、息をつがせるひまもなく、ひしひしと我々の上に押し寄せて來たのを見た。

かうした間にも、當時猛然として擡頭した我國の勞働運動の上に最も強く影響したものは、實にサンディカリズムの思想であつた。がしかし、それと同時に、ボルシェヴィズムの流れを汲んだところの一種の社會運動も、もとより或る比較的に狹き方面に限られての事ではあるが、社會の基底に於て次第に醞釀されて行く形勢を示した。そして、かうした傾向は、明かにそれに依つて誘發されて現はれたに違ひないところの反動思想及び反動運動に絡み合つて、一般社會生活の上に、烈しき動搖を惹起したものであつた。

その頃の狀勢に比らべると、最近に於ける社會思想及び社會運動の行き方は、何といふ變り方を見せてゐるのであらう！　即ちまづ第一に、現在では勞働運動の主流が、次第に議會を中心とする政治行動の採用の力へ赴きかけて居る。そして、この新しき傾向に沿うて、無產階級の政黨の組織も、早晚實現されようとする兆候を見せてさへゐる。またそれにつれて、一般の社會思想の大勢も、それが久しく來て顧みなかつた當面の現實の社會的諸關係に順應することから出直ほして、そこに將來への展開の發足點を求めようとするやうに、大體はなつて來てゐる。

かうした新局面の轉換は、震災後に各種の反動運動が一層猛烈になりかけた頃から特に顯著になつたものであるところから、世間ではやゝもすれば、それとこれとを同一傾向上の現象と見て、『極端から極端へと動く振子の波』の一連續

として眺めてゐる人々も、決して少くないやうである。私が引用した藤村氏の言葉も、若し私に誤解がなければ、多少ともそれに關聯してゐるもののやうに取られる。從つて氏が、そのすぐ次に、『大震災が來た。反動の大勢は果してその後に押し寄せて來た。……』と書き足して居るのも、矢張り同樣の解釋が許されるべきもののやうに見られるのである。だが、氏がそれを書いた心持が實際どうであつたかは、實は私にはどちらでも構はないことなのだから、これ以上それを詮索することは、私には全然無用な仕事である。寧ろ私はただ、この機會を利用して、我々の周圍の社會思想の主流が現在辿りつつある傾向が、『反動の大勢』とは、發生的に全然別物であることだけを明かにしさへすれば、それで事が足りるのである。無論私は、それらの二つのものの間に何等の相互的影響もなかつた、とは言はなかつた。だが、私がそれらのものの間に相互的影響のあつたことを認めたのは、その事自體が、既にそれらのものを全然異つた二つのものとして眺めての上であることは、いふまでもないことであらう。

二　社會思想の動搖時代（下）

——それの意義——

更らにまた、我國の社會思想の主流が現在辿りつつある傾向は、その局外にある傍觀者たちから屢々『右傾的』といふ形容詞で性質づけられてゐるが、この見方もまた、たしかに的を外づれてゐる。少くとも、その傾向の本質を始終凝視して居る人々は、それには決して同意が出來ないことでなければならない。私から見れば、それは寧ろ、社會思想の現實化的傾向と呼ぶのを最も適當とするものである。そして、その理由を詳述することは、私が本文の起稿に際して、私の當面の主要目的として決めておいたものであるから、私はこれから先き、當然それに觸れない譯にはゆかないわけ

れども、私がそれを試みる前に、私は何ほ順序上、我々が數年前に社會思想の激動期を通り越して來たことが今日の社會思想の現勢から見て、決して無意味な過程でなかつたといふことを、一應明かにしておかねばならぬ。

デモクラシーの思潮の全盛期から、様々の社會問題の送迎期へ。そこから各種の社會思想の流れの渦卷きの方へ。そこから更らに現在の社會思想の現實化的傾向への推移。——思想界に於けるかうした激烈なる動搖は、保守的若しくは靜寂的心境に浸つてゐる人々には、實際苦々しきことでもあらうし、また堪へ難いことでもあらう。であればこそ、官僚及び政黨政治家たちは、今日の青年が徒らに新奇な外來思想を追うて轉々する『輕佻浮薄』を難詰するし、また藤村氏のやうな内觀的傾向の強いやうに見られる思想家たちは、『どうして私達はこんなに物に熱することが出來ないほど單純な心を持たないのか』と反問して嗟歎するのであらう。

けれども、私たちから見れば、少くとも最近十年ほどの間——それは私一己の立場から見れば、私が始めて論壇に出た時から今日に至るまでの期間に亘るものである——に於て、我々が我々の思想生活の上に、轉々として寸刻も休みなく通り越して來た幾多の段階は、我々が何の目標もなしに行き當りばつたりに飛躍して來たものではなくて、それらは寧ろ、我々の身體が少年期から自然に成年期に成長して行くやうに、我々の思想がそれ自身の内部の活力からの衝撃に驅られて、一定の必然的順序を追うて次々と踏み越して來た道程を如實に表示するものである。それは、思想界の他の方面に於ける一部の人々が、朝にオイッケンを迎へ、夕にベルグソンに走り、更にタゴールに赴いた、といつたやうな態度と同一視することが出來るものか否かは、もとよりその方面のことに暗い私には充分解りかねる。が、私は寧ろ、曾て明治時代の初期に當つて、ルソーや、モンテスキューや、ベンタムや、スペンサーや、バジョットなどを始めとし、その他の幾多の海外の巨星の政治、經濟、社會に關する諸思想が、當時の我國の一部のインテリゲンツィアの間に迎へ入

れられたといふ歷史的事實を、我々が最近に經て來た社會思想の動搖期に關聯して追想するのを、最も自然な行き方だと考へる。當時のさうした諸思想が、その後の憲政實施の日に於て、何等の果實を結ばなかつたものだとは、誰れにも言ひ得られまい。殊に我國の憲法が、それの多くの主要點に於て、官僚國プロシヤの憲法を典型として制定されたものであつたにも拘らず、我國の憲政の實際上の運用が、當初の官僚式超然內閣主義から、次第に——似而非な部分が少くないにもせよ——イギリス流の政黨內閣主義の方へと推移して行つたやうなとは、一體何に基因してゐるものであるか？無論それは、我國の特殊な社會事情の特殊な史的展開過程に負うてゐることも少くはあるまいか、しかし曾てフランス流及びイギリス流の民主思想が我國に流行した時代から暗々裡に培はれて來た政治思想及び政治的知識が、かうした大勢を助成する上に貢獻したことも、決して少くはなかつたのではあるまいか？我々は、それが果して望ましいものであつたか否かの評價から離れて、先づその事實に對する率直なる認識から出發しなければならないのである。

世界大戰といふやうな、幾度言ひ直ほしてみても、第二十世紀の向後の世界の社會史の新方向を基礎づけるべき運命を持つてゐたものに相違ないところの大事件からの烈しき波動が、我々に尙ほまざまざと感じられてゐた最中に、我々はまづデモクラシーの思潮の洗禮を享けて、それから多種多樣な社會問題の討究に沒入したと同時に、同樣に多種多樣な社會思想の渦卷の中に投げ込まれた。が、かうしてゐた間に我々が直面した社會思想の樣々の流れは、決して『夏の夜の兩國の花火のやうに、皆の心の空に輝いた』瞬間を名殘りとして、そのまま永遠の闇に消え去つてしまつたやうなものではなかつたのである。寧ろそれらの社會思想の流れの各々は、若しさうした譬喩を以て言ふことが必要だとすると、皆の心の畑に播かれた種のやうに、その環境上の諸關係の變移につれて、次第に芽生えから若木へと成長し行つて、それから更に現在に於ける實行運動上の用材となり得るまでに伸びて行つたものだ、とのやうに言ひ替へられなけ

れぱならないのである。實際我々は、先年のデモクラシーの思潮の基礎なしには、その後に起つた社會問題の烈しき論爭や、社會思想の急激なる流布の因つて來るところを見究めることが出來ないのでもあり、またその間に我々の社會思想が幾多のきびしき鍛錬を潜ぐつて來たといふ事實を抜きにしては、今日我々の眼前に展開されつつある社會思想の現實化的傾向の根ざすところを確めることが出來ないのでもある。もとより、我々がさうしたことの推移の跡を尋ねる際には、我々は當然、それをそれの環境の變遷に交渉せしめて考察しなければならない必要のあることは事實である。が、それにしたところで我々は、我々がこれまでに經て來た社會思想の動揺期が、現在の我々の社會思想及び社會運動の有意義なる進行のための必要な準備時代であつたことを疑ふことが出來ない。かういふのは、さうした社會思想の激動の中を分けて、右に左に轉々して來た我々自身の經歴の辯護のためでは決してない。我々はただ、我々が事實だと考へてゐるところのものを、ありのままに述べようとしてゐるだけのことである。だが、それを事實と見るか否かは、渦中に卷き込まれて動いてゐる人々と、局外から傍觀してゐる人々との、それぞれの立場々々に依つて岐れるのだと言ふならば、我々はこれ以上は、ただ默つて引ツ込んでゐるより外はないのである。

三　社會思想の新傾向と反動運動との交渉

私は既に、我々の周圍の社會思想が現在辿りつつある新傾向は、決してそれの『右傾的』傾向といふべきものでなくて、寧ろそれの「現實化的」傾向といふべきものであるといふことを一言しておいた。かういふことに關する私の考察は、私が追つてこの論文に於て詳述したいと考へてゐることだが、しかし差し當りそれに說き及ぼす前に、尙ほ別にこの際一つ二つ附け足しておきたいことがあるから、今しばらくは右の現實化的傾向といふことを、それの字義通りに受

け容れていただくことを、讀者諸君に要請しなければならぬ。

勞働運動——若しくはもつと廣い意味でいへば無產階級運動——が、從前の政治行動否認の態度から、漸次にそれの肯定の態度の方に移つて行つたのにつれて、社會思想の主流もまた矢張りそれに順應して變遷するやうになつた形勢は、大震災以後に於て特に顯著に眼立つて來たところから、恰もそれがあの驚天動地の大變異の直接の產物でもあるかのやうに言ひ立てるやうな人々も、時々は見受けられるが、しかしかうした見方が根據のないものであることは、深く追究するまでもないことである。すなはち、政治行動の肯定への轉換を意味する社會運動及び社會思想上の所謂「方向轉換」の形勢は、大震災前から既に明かに萌ざしてゐたものである。ただ、大震災直後に起つた一時的性質の大事變やまたはそれ以後段々と社會的環境上の諸關係の間に現はれ始めた比較的永續的性質の變化などが、その形勢を大いに促進したらうやな形跡があることは、我々にも無視することが出來ない事實である。換言すれば、無產階級運動の政治行動採用への方向轉換が、實際上及び理論上、殆んど不可抗的な機運として一般に見られるやうになつた形勢は、大震災後數個月の間に段々と明白になつたものであることは、疑ひもなき事實である。この點から見て、大震災——それについで起つた一切の社會的變化を含めて——が、それ以前から既に起つてゐたところの右の形勢の進捗を大に助成したものだといふことは、如何にも間違ひのないことだとは言へる。が、しかし、その形勢の發生そのものは、それにも拘らず、大震災には全然無關係のものであつたといふ斷案は、右に述べた理由に依つて、どこまでも支持し得られるものである。

同樣の根據から、現在の社會思想が辿りつつある新傾向は、近來段々と兇暴化しかけて來た反動運動に依つて惹き起されたものだ、といふやうな議論も、決して正しい見方から出たものだとは言へないのである。かうした說明は屢々、

右の傾向を『右傾的』性質のものとして嫌惡する人々の側から提供される。そしてそれは、一應は有理のやうに響が、しかしそれも問題の核心に觸れたものではない。如何にも、政府の政策や、市井の反動團體の行動などの上に現はれてゐる通りの反動的氣勢の兇暴化が、この一二年來に於て特に眼立つて來たといふことは、我々が不愉快ながらも承認しない譯には行かない事實である。殊にそれが、大震災直後に當つて、幾多の無限に凄慘な場面を現出させたことも、我々の記憶の上から到底拭ひ去るとの出來ないところのものである。しかしながら、さうした反動運動の兇暴化は、一方に於ては成るほど社會運動家並に社會思想家等をして、彼等自身の言動の上に、從前よりも一層細密なる警戒を加へることの必要を意識せしめたには相違ないが、しかしそれはまた同時に、他方に於ては、彼等をして益々彼等の決心を固めしめ、益々彼等の鬪志を擴充せしめた効果を奏したものであることも、我々が忘れてはならない事實である。しかのみならず、或る種の暴力團體に依つて組織された反動運動は、曾て勞働運動がまだ政治行動否認の態度を固守してゐて、そしてそれが社會思想の上に於ても支持されてゐた時代から、既にそこここに擡頭してゐて、相當の活躍振りを見せて居たものであつた。更らにまた、他の一面に於ては、既に前にも一言しておいた通りに大震災直後の大慘害公行時代以前にも、勞働運動及び社會思想の上に於ける政治行動肯定への方向轉換の機運は、既に相當の程度に醞釀しつつあつたものである。かう考へて來るとき、近來の反動運動の兇暴化が、現在の社會思想が辿りつつある新傾向の進捗を促す上に或る刺激を與へたものだとこそは言へるにしても、その新傾向の發生そのものは、それにもまた無關係なものだつたとする斷案は、どうしても動かしやうがないものである。我々はそれ故に、その新傾向の發生を促した眞の動機を、他の方面に求めなければならないといふ結論へ、自然と導かれざるを得ない。

四　社會科學の社會思想への浸透

前節で言つた通りに、最近に於て無産階級運動が政治行動の方へ移動するやうになつた大勢と相呼應して、社會思想の一般的傾向が段々と現實味を帶びるやうになつて來た現象は、本來は決して、大震災に依つて産み出されたものでもなく、また大震災後に於て特に兇暴化して來た反動運動に依つて激發されたものでもないことは、明白なる事實である。だとすると、それの發生の直因は、果して何處に求められるべきものであらうか？

私の見るところを以てすれば、それは、最近に於て漸次に社會科學の基礎の上に持ち來たされる傾向を示すやうになつて來た社會思想そのものの本質の裡に求められるべきものである。數年前の社會思想の樣々の流れの激烈なる闘爭の渦中から、徐々に擡頭しかけたものは、社會科學への要求であつた。――といふことは、その頃からその渦中でしたたかに揉まれて來た覺えのある我々が、何よりも殊に、我々自身の體驗から痛感してゐる事であつた。當時の社會思想の紛糾裡に在つて、各種各樣の學説や、主張や、ドグマや、公式などに打ツ突かつて行つて、それらのものを一つ一つと理解しようとして頭腦を絞つた我々が、さうした努力をし盡くした後に、終極に於て贏ち得たものは、屢々、我々の心の裡の或る空虚感であつた。無論、それらの或るものは、それぞれに我々の理解力に應じて、我々に或程度の知的滿足を與へるには充分であつた。が、さうした知的滿足が得られた後に於ても尚ほ、或るものへの憧憬が充されぬままに、我々の心の底に殘つた。それは煎じ詰めると、現實的行動への熱情であつた。知識のための知識、理論のための理論、――さうしたものは、間もなく我々を飽滿させた。「行動へ！　現實的行動へ！」さうした心の叫びが、直にそれにつづいて湧き起つた。

社會思想の動搖期は、それの中を滑り抜けつつあつた多くの人々の心の裡に、現實的行動への熱情を植ゑ附けた。のみならず、彼等の或るものは、早急にも無準備のままで、行動の方へ飛び出して行つた。そこには、多分の躁狂的態度も見えた。そして、さうしたことの結果が、當然豫期されるべき筈であつた通りに、犧牲だけが餘りにも多く、しかも實際上の效果が毫もそれに伴はなかつたやうな種類の輕擧妄動に終らなければならなかつたことは、悲しむべき必然であつた。

が、さうした犧牲者たちの蹉跌は、それにも拘らず、一の貴重なる教訓を貽した。それは手短かにいふと、具體的實行を期する社會的行動は、科學的でなければならない、といふことであつた。換言すれば、それは、單なる空想や、好奇心や、思慮を拔きにした勇氣や、省察の伴はない熱情の衝動から出たものと言ふだけでは不充分だ、といふことであつた。若しくはそれは、熱と共に光を伴はなければならない、といふことであつた。若しくは更らに詳言すれば、それは、それ自身が立ち向ふところの社會的環境上の諸關係の現實相に對する透徹した理解や、それ自身が當然用ひなければならない手段方法等に關する精密なる研究を前提としなければならない、といふことであつた。しかのみならず、單なる個人的な、若しくは朋黨的な、そして突飛的な、若くしは煽情的な劇的效果を狙つたやうな英雄的行動は、實質的效果を期する社會的行動のためには、却て有力なる妨害的要素とこそなれ、價値ある助成的條件となるものでないと言ふことが、幾多の高價なる『實驗』に依つて、次第に明確に認識せしめられるやうになつた。そして、さういふ觀察からの當然の歸結は、社會的行動は、結局は、大衆運動の流れに溶け込まなければならない。といふことであつた。—が、大衆運動となると、その運動のための團結の形態、組織、戰術などといふやうな諸條件が、更らに精細なる檢討の下に持ち來たされなければならないといふことが痛切に味識せしめられるやうになつて來た。

かういふところから、社會思想が社會科學に滲透されて行く傾向は、益々不可抗的なものとなつて來たのである。社會思想が單なる社會思想だけのものとして止まり得る間は、それは空想的でもあり得たし、浪漫的でも、概念的でも、思辯的でもあり得た。それは要するに、我々に或る程度の知的滿足を與へることだけで、——若しくは或る程度に我々の知的矜持に媚びるだけで、——事が足りたのであつた。ところが、社會思想がそこから更に一歩を進めて、實際の社會運動に奉仕しなければならない様になると、それは必然的に、社會科學に育ぐくまれて來なければならなくなるのである。少くともそれは、社會科學の基礎の上に立脚せしめられて來なければならなくなるのである。でなければ、社會思想は、社會運動がそれから必然的に要求すべく運命づけられてゐるところのものを、充分に供給することが出來ない、といふことになるのである。それは、私が理解する意味に於ける『科學の現實性』といふことから來る當然の歸結である。

五　科學の現實性

科學の現實性、——それは、私から見ると、自然科學の場合に於ては、誰にでも最も容易に認められ得ることでなければならない。自然科學がそれ自身への一般人の尊重を要求し得る權利の根據は、それの應用可能性の上にある。それが、我々が科學の『現實性』と呼ぶところのものである。そして我々は、この現實性のために、科學にそれの人生價値を認めようとするものである。さういふことは、科學の本質から推論し得られることである。自然科學上の知識そのものは、自然現象の基底を貫通する因果關係に對する、原始人の簡單なる理解から、現代人の高度に發達したる知識に至るまで、一律に人間生活の現實の必要に應じて獲得され、推進されたものであつた。それ故に、科學の現實性は、それのレーゾン・デートルである。現代人は屢々、科學上の原理をそれの應用から引離して、それをそれ自體の價値に依つ

て肯定しようとする誘惑に陥る。しかし、さういふとは、ただ觀念の上に於てのみ、なし得られることにすぎないのであつて、實際上に於ては、原理は常に應用に合流し、應用は常に原理に歸着する傾向を示すものであるが。假りに、我々が觀念の上で、原理を應用から引離して、それに或る價値を認めることに多少の意義があるものとするにしても、さうした價値は、ただそれの研究當事者の知的滿足の具としてのそれに止まるだけのものであつて、そして單にそれだけのことでは、科學は一般的意味に於けるそれの人生價値の承認を要求することが出來ないものである。で、結局私から見れば、科學の人生價値はそれの現實性の上にあるものだ、と言はなければならないことになるのである。

以上の趣旨は、それの出發點から、私が專ら自然科學の場合に關してのこととして說いたものであるが、しかしそれは同時に、そのまま社會科學の場合にも適用し得られるものである。我々は社會科學に對しても、それの現實性を强調する。換言すれば、我々が社會科學の人生價値を肯定するのも、それの現實性のためである。もとより、現在の發達狀態の下に於ける社會科學が、現在の發達狀態の下に於ける自然科學と比較が出來る程の現實性を持つてゐるか否かは、差し當つて私の問題ではない。私はここではただ、社會科學が現在に於て持つてゐるだけのそれの現實性――それが如何に貧弱なるものであるにもせよ――に依つてでも、我々がそれの人生價値を肯定しなければならないものであることを言ひさへすれば、私の當面の用が足りるのである。けれども私は、尙ほその上に、現在の社會科學がまだ如何に幼稚な狀態の上にあるにもせよ、それは從來の支配階級がその所屬の學者たちを通じて我々の間に宣傳して來たところの、社會現象に關する樣々の空疎なる概念の寄せ集めよりは、遙かに多く現實性に富んでゐるものであつて、從つて遙に多く我々から見たままの人生價値を包含してゐるものである、といふことを信ずるものである。

更に私は、一旦社會科學の現實性を認めた上は、我々は最近に於ける社會思想の現實化的傾向の因つて來るところ

の源泉を精確に突きとめることが出來る、と考へるものである。それは要するに、社會思想の動搖期の進行中に於て科學社會の浸透を受けた社會思想の本質上の裡に發見されるものである。だとすると、最近に於ける社會思想の現實化的傾向は、多くの人々がただ漫然と考へるやうに見える通りに、大震災が齎らした引出物でもなければ、その後の反動運動の凶暴化が促進した機運でもないといふことの理由が、一層明白にならなければならない譯である。それは、——私の信ずるところを率直に表白すれば、——それは實に、社會科學の浸透を受けた社會思想の核心の向外的展開の成果に外ならないものである。

六　無産階級運動の政治行動への轉向（上）

——社會運動の大衆化——

最近に至つて、社會運動が次第に大衆運動化しかかつてゐることが、著るしく眼に立つて來た。で、それは最早、單純に勞働運動といはれるものと同じ範圍に亘るだけではなくなつて、寧ろ一般的意味の無産階級運動といふのが適當なものとなりつつある。私は無論、かく言ふことに依つて、單純に勞働運動といふものの必要が少しでも薄らいで來てゐるといふことを、示唆しようとしてゐるものではない。單純に勞働運動といふものの必要は、依然として存續してゐる。しかもそれは、我々が有理に展望し得る限りの將來へかけて、それが益々有効にその本來の機能を果たし得るために、この上益々發展して行かなければならないものでもあれば、また發展させて行かなければならないものでもある。が、それにも拘らず、現在の我國の社會的諸關係の下に於ては、社會運動が、單純に勞働運動を包含するばかりでなく、まだその上に、一般的意味の無産階級運動の上へも廣がつて行かなければならない必然性のあることに、我々には

當然のことのやうに考へられるのである。

この點からしても、近來勞働階級が次第に政治行動肯定の態度に出るやうになつて、そこから無産政黨組織の企ての上へも一歩を踏み出さうとしてゐることが、最も順當な行き方だと考へられる。それは少くとも、我國の社會的諸關係の現實の下に於て、最も機宜に適つた行き方だと考へられる。で、昨年の勞働總同盟の大會に於て、政治行動肯定の態度が決せられた際に、それに參加した勞働者たちの或るものが、『我々は現實に叫ざめなければならない』と言つたやうな趣旨を高唱してゐたことが、その意味に於て我々に理解されることも、支持されることも出來るのである。

が、それかと言つて、私は決して、その頃より以前の勞働運動の政治行動否認を基準としてゐた態度が、全然現實無視的だつた、と言はうとしてゐるものではない。否、それどころか、私は更に一歩を進めて、その頃より以前の勞働運動が政治行動否認を基準としてゐたことは、その當時の我國の社會的諸關係の現實から見て當然至極のことだつた、とさへ言はうとしてゐるものである。即ち、當時に在つては、まづ第一に、勞働階級の政治行動のための先決條件でなければならないところの普通選擧が、まだ政黨政治家たちの玩弄物に供されて居て、それが何時實現されようとしてゐるかの目途さへも附かなかつたのであつた。さうした狀態の下に於て、勞働階級の人々が、政黨政治家たちの口車に乘せられて、幾らかでも政治運動の渦中に卷き込まれるといふことは、結局政黨政治家たちの喰物になつてしまふのが落ちになるであらうといふことは、自明の事理であつた。それ故に、勞働階級の人々が、政治行動を一種のタブーとして取扱つて、決してそれに觸れまいと努力したのは、當然すぎたことであつた。それが彼等に取つては、最も賢明な處置だつたのである。

しかのみならず、當時は歐洲戰爭好景氣の餘勢で、財界が眼ざましき活況を呈してゐた。そこに資本階級の黃金時

代が出現してゐたのは無論だつたが、それと同時に、勞働運動も比較的順調に進捗した。そして、所在に櫛の齒を引くが如くに起つた勞働爭議が、勞働者側に比較的有利に解決された場合も、相當の多數に上つてゐたのであつた。少くとも、勞働者側から見たストライキの奏効率は、到底今日のそれとは比べものにはならないほどの良好の狀態に在つたのであつた。從つて、當時に於ては、『勞働運動は單に勞働條件の改善を目指すばかりではなく、それは究極に於て社會改造の實現に導く可能性のあるものだ。』と言つたやうなことが主張されても、それは必ずしも、一片の空想とばかりには聞かれなかつた。手短かにいへば、それは、ジェネラル・ストライキの『神話』が、勞働者側の階級意識を固め、且つ彼等の鬪爭意志を喚び覺まし得る時代であつた。かうした時期に際して、勞働運動家たちが、勞働者側の全勢力を經濟行動の上に集注することに熱中したのは、極めて自然な行き方であつた。當時のさうした狀態の下に於て、勞働者側が憖じひ政治運動の方へも手を出すといふことは、經濟行動の方へ有効に向けなければならなかつた彼等の勢力の幾分をでも、好ましからざる方向へ分散せしめる譯合ひになるべきものであつた。それを、彼等の本能が直感した。そしてその結果は、彼等が政治行動の方へ背を向けたことだつた。

七　無産階級運動の政治行動への轉向(下)

——無産政黨組織への準備——

けれども、現在に於ては、社會事情がその頃とは一變して來てゐる。殊に、大戰が齎らした好景氣時代は、今は跡方もなく消え去つて、歸らぬ昔のものとなつた。それにつれて資本家側の意氣も銷沈したが、勞働者側の氣勢も挫じけた。勞働爭議は、最早以前のやうな奏効率を示さなくなつた。從つて、ストライキの勝算が彼等に力づけるよりは、寧

ろ失業の恐怖が彼等を脅かす度合ひの方が高くなつた。しかも、かういふ悲況の根源をなしてゐる我國の資本經濟の行き詰まりは、殆んど慢性的のものとなつて來てゐるやうにさへ見られる。そして、國民生活が、何時その狀態から恢復出來るかは、全然見當が附かない問題となつた。現內閣の藏相の『無い袖は振られない』の一點張りの國家經濟悲觀說も、全然根據のないものとは、誰れにも考へられないやうになつた。それは、資本家側に大なるショックを與へたと同時に、勞働者側の上にも重苦るしき壓迫感を投げた。かくて、勞働者側に在つては、ジェネラル・ストライキの『神話』が彼等の階級意識を固めたり、鬪爭意志を喚び起したりするといふやうなことも、段々とその確實性を失ひかけて來てゐるのである。

かういふことは無論、前にも言つた通り、經濟行動に終始する純粹の勞働運動の重要性を否定することにはならないが、それはしかし、經濟行動に終始する純粹の勞働運動だけで社會改造が實現し得られるといふ見込が非常に薄らいで來たことを——殆んど空に近いほども薄らいで來たことを——明白に物語つてゐるものである。若しくは、更らに一歩を進めていへば、それは勞働運動が單に純粹の勞働運動としてのその本來の陣地を固守するに止らず、更らにそれ以外に、それが一般的意味の無產階級運動の上へ擴大して行くことの必要を指示してゐるものである。

勞働運動が無產階級運動の上へ擴大して行くといふことは、それが從前より以上に一層大衆運動化して行くといふことを意味するものである。で、若し我々がそれを肯定するときは、我々は同時に、純粹の勞働運動の基調である經濟行動以外に、政治行動の採用が不可抗的のものであることを承認しない譯には行かないのであろ。すなはち、經濟行動に終始する純粹の勞働運動に在つては、組織されたる勞働者たちだけを當事者として糾合するだけで足りるものであるが、しかし一旦それが大衆運動化して一般的意味の無產階級運動に擴大するやうになると、組織されざる勞働者たちを

もその上に加へなければならないばかりでなく、更らにまた、如何なる理由からでも無産階級側に加擔し得る地位に在る限りの諸分子をも包容することを必要とするものである。だが、さういふことは、ただ政治行動の採用に依つてのみ、なし得られることである。詳言すれば、無産階級運動は、それの政治行動採用の結果として當然企てられなければならない筈の政黨の組織の中へのみ、それらの諸分子を集團的に受け容れることが出來るものである。それ故に、今日無産政黨の組織が計畫される段取りになつてから、それの構成要素として、勞働組合や農民組合やに屬するところの、組織されたる勞働者たち以外に、組織されざる勞働者たちとか、俸給生活者の群れとか、小市民階級の或る部分とか、それからまた、純粹の無産階級の集團でなくても、社會的に被壓迫狀態の下に置かれてゐるといふ一事に於て無産階級と共通點を持つ水平社とか、思想傾向上無産階級運動を支持し援護する各種の思想團體とかが、眞つ先に着眼の標的とされるやうになつたのである。

が、前に言つた通り、無産階級の政治行動の先決條件は、普通選擧の實施といふ一事であらねばならぬ。もとより、無産政黨の組織に關しては、物質的資力といふことなどもまた、非常に重大な中心問題の一つとなるべきものであるが、しかし眼前直接の問題としては、何と言つても、普選の實施といふことを以て、その先頭のものとしない譯には行かないのである。ところが、一昨年の秋の大震災と共に成立した山本内閣の下に於て、一時稍々その曙光を見せかけた普選實施の見込は、昨年五月に於ける清浦内閣の瓦解の後を受けて現在の所謂『護憲内閣』が產まれてからこのかた、その機運が一層促進されて、普選案が第五十議會を通過するといふことは、殆んど確實的のものと見られるやうになつた。無産政黨組織の計畫は、それから大に刺激を受けて、いよいよ着々とその準備時代に入つたのである。無論、物質上の資力の問題は、今でも尙ほ一個の謎として殘つてゐるものであるが、しかし無産政黨組織計畫者たちは、兎も角

その問題は『時』をして解決せしめることとして、何よりも先づそれのための準備運動へと急いで行つたのである。

八　社會運動の現實化的傾向

無産階級運動が政治行動の方へ進んで行くといふこともまた、或る意味に於て、社會運動そのものの現實化的傾向を代表してゐるものと見做すことが出來ると考へられる。もとより私は、かくいふことに依つて、勞働運動が曾て政治行動否認の態度の上に立つてゐたのは、當時の社會事情の現實を無視してゐたからだ、と言はうとしてゐるものではない。當時の社會事情の現實は、勞働運動をしてさうした方向に赴かしめるより外はなかつた、といふとは、私が既に詳說しておいた通りである。けれども、勞働運動が組織されたる勞働者たちの勢力を基礎として、直接行動の旗幟の下にただ一本調子に進められてゐた間は、社會的諸關係の現實を、それの各方面に亘つて仔細に顧慮することに依つて、その陣立て及び行動樣式を複雜に調節して行くと言つたやうなことの必要は、縱し絕無でなかつたにせよ、比較的に少かつたのである。が、しかし、それが一旦純粹の勞働運動の範圍を超脫して、一般的意味の無産階級運動に擴大されて行つて、殊に政治行動肯定の立場から政黨を組織して、組織されたる勞働者たちを糾合すると共に、それ以外の幾多の社會的分子をも包容し、それらのものの全勢力を擧げて現實の社會的環境に直面し、場合々々の必要に應じて、或は能動的に、或は受動的に、複雜に作戰を變化せしめて行かなければならないとなると、それは社會的諸關係の現實を、それの各方面に亘つて巨細に觀察することから出發しなければならないのである。かういふ譯で、無産階級運動が政治行動に突入して行くといふことは、或る意味に於て、より深く社會的諸關係の現實に喰ひ込んで行くといふこととして觀ることが出來る。この意味に於て、――そしてこの意味に於てのみ、――これは、社會運動そのものの現實化的傾向を代

表してゐるものだ、といふことが出來るのである。

社會運動の方面に於けるかうした傾向の新展開は、必然的に、直に社會思想の上にも反映されるやうになつたのである。すなはち、曾て勞働運動が政治行動否認の態度を示して居た間は、社會思想の方面に於て、議會の無價値及び直接行動の價値が極度に高唱され、しかもさうした主張の氣勢が、或る期間に亘つて、論壇を風靡する概を示したものであつた。けれども、さうかうしてゐるうちに、社會事情の上に或る著るしき變化が起つた。そして、それにつれて、勞働運動が益々大衆運動化して行つて、次第に一般的意味に於ける無産階級運動にまで擴大されるやうになり、從つて段々と政治行動肯定の態度の方へ轉向するやうになつた。それと同時に、社會思想の上にもまた、同樣の變化が起り始めた。換言すれば、私の所謂『社會思想の現實化的傾向』が、それと同時に現はれ始めたのである。で、結局、それは一方に於ては、社會科學の浸透を受けた社會思想の本質そのものの向外的展開を標識するものだ、といふことが出來ると同時に、他方に於てはまた、右に述べた意味に於ける社會運動の現實化的傾向と相互的に相呼應しつつ前進して來たものだ、ともいふことが出來るのである。

社會思想が尙ほそれの動搖時代の渦中を潜り拔けつつあつた間は、——少くともその時代の初期の間は、——それは概して主知的であり、論理的であり、概念的であり、思辨的であり、現實無視的であり、公式一點張り的であるのを、その特徵の一つとしたものであつた。勿論、さうした時期に於ても、『科學的』といふ言葉が、所謂『空想的』社會理論に對する糺彈的意味で盛に濫發されてゐたことは事實である。が、その所謂『科學的』社會理論と稱せられてゐたものも、實は單に『科學的』社會理論であるものとして玩賞されてゐただけで、その實踐的効果が眼前の社會的諸關係を基準として眞面目に檢討されるといふやうな重要な仕事が、非常に疎略にされがちな傾向があつたことは、我々には爭ふ

べからざる事實のやうに見える。即ちその頃に於ては『科學的』といふ言葉が甚だ無雑作に使用されてこそゐたが、我我の所謂科學の現實性の精神が、まだ充分に社會思想に徹するまでにはなつてゐなかつたのである。

けれども、さうした時期が一應經過した後に於て、漸く社會思想の現實化的傾向が始まつた。それは、その時期を通じて行はれた思想的鬪爭の進んでゐた間に、科學の現實性の精神が、段々と社會思想の內容の實際を擴充して行つた徑路を反映するものである。かうして、社會思想が社會科學の基礎の上に持ち來たされる傾向が益々昂進して行つたのであつて、そして、さうした傾向が益々昂進して行つただけづつ、社會思想と社會運動との間の聯繫關係も益々密接なものになつて行つたのである。

九　思想團體の新傾向

社會思想が益々密接に、社會運動に結び付けられる傾向が見え出してからは、それは先づ第一着に、社會運動が行はれる場面であるところの、現實の社會的環境方面に對する科學的檢討から出發して、そこから更らに、その社會運動の實行的方面に關係ある方法手段の問題の研究の方へも歩みを向けるやうになつた。殊に最近に及んでは、社會思想家たちの多くが、單に從前通りに資本的經濟組織の窮極的崩壞といつたやうな、社會進化過程に關する廣汎な一般的概括的性質の諸問題の論究だけには滿足が出來なくなつて、そこから更らに一轉歩して、次第に現在の我國の資的本經濟組織の細部、乃至それに並行して作用する政治的機構の組織及び運用、並に現實政治事情の推移變遷などに關する客觀的研究とか、或ひはまた、近く擡頭することが豫期されてゐる無產政黨に取つて可能と見做される――若しくは有利と見做される――それの組織、形態、戰術、及びそれらのものと相互的に表裏の關係をなすところの主張、綱領、政策などに關

する實際的檢討とかのやうな、樣々の特殊的個別的性質の諸問題を取扱ふことに沒頭して行く傾向が、可なり顯著に見え出したことは、我國の論壇の上に絶えず注意を拂つてゐる人々には、一の見逃がせない現象である。

更らにまた右の傾向を代表する思想團體が續々と簇出し始めてゐることも、既に多くの人々から注意されてゐる現象であらねばならぬ。またそれに關聯して、從來から存續して來た或る種の思想團體が、右の傾向に影響されつつ、次第にその本來の性質を轉換せしめつつあると言つたやうな事實も、共に擧げられねばならないものである。いづれにしても、社會思想の現實化的傾向が、そこに強い輪廓を描いて表はれてゐるといふことは、一つである。このことは殊に、それらの思想團體が、どういふ點かで、或る種の實行運動に聯繫せしめられてゐるのを普通とする事實の上に於て、最も明瞭に認識し得られるのである。

かうした性質の思想團體の若干を例示すれば、無産政黨組織の媒介となることを、それ自身の任務として、昨年の春に組織されて、それ以來極めて堅實な成長を遂げつつある政治研究會の如きも、その一つだとしなければならぬ。また、一昨年の末、若しくは昨年の初め頃から、東京及び京都から始まつて、間もなくその他の各地にも波及し、種々の重大な障碍にも拘らず、漸次に優勢に赴きつつある學生間の社會科學研究上の諸團體、及びそれら諸團體の聯合の如きもまた、他の一である。それらの諸團體は、名實共に社會科學的方法に依る研究及び調査の遂行を以てその主要事業とするものであるが、しかし科學の現實性からの當然の歸結として、さうした研究及び調査が、或る點に於て、實行運動に流れ込んで行く可能性のあるといふことは、避くべからざる勢ひとすべきものであらう。それからまた、社會主義のすべての流派を超越して、廣い範圍から社會思想家たちを糾合する使命を宣言しつつ、政治研究會と相前後して產まれた日本フェビアン協會の如きも、社會思想の現實化的傾向の一線上に置いて眺められるべき要素を多分に持つて居るや

うに、私には見られる。その外、かうした種類の團體の小さなものまでも算へて居ると、縱し際限がない程とは言はれないまでも、相當の件數に上ることだけはたしかである。

一〇 啓蒙時代から建設的實行時代へ

前に言つた通りに、社會思想の現實化的傾向は、或る種の觀察者たちから、屢々それの『右傾的』傾向だといふ評語を向けられてゐる。無論それは、多分の否認的意味を含めて言はれてゐるのである。が、それを否認するか肯定するかは、それを見るものの社會觀及び生活態度に依つて岐れるものだと言へるにしても、それに『右傾的』といふ形容詞を冠ぶせることは、私が上來諄いまでに述べた理由に依つて、決してそれの本質を凝視したものの言ふこととしては受け取れないのである。私から見れば、『左傾』とか『右傾』とかいふやうな、單に表面上若しくは形式上に亙るに過ぎないことは、この問題に關しては寧ろ枝葉末節に渉る事柄にすぎないものであつて、全然その中心點から外れてゐるものである。この問題の重要性は、さうした皮相的な斷案を許すものではない。それはその本質上、もつと深くそれの根本まで掘り下げて觀察されるべきものである。

社會思想の現實化的傾向といふことは、その『現實化』といふ言葉自體が指示する意味通りに受け容れられるだけで充分のものであつて、別にそれ以外の見地からの說明を必要としないものである。だが、若し假りにさうすることが強ひて要求されるならば、私は寧ろかう言ひたい。――即ちそれは、社會思想が啓蒙時代から一轉して、漸次に建設的實行時代に移入しかけてゐることを表示するものだ、と。

啓蒙時代から建設的實行時代へ！　社會思想がかうした經路を辿つてゐることは、現實の社會的諸關係の移行、及びそ

れから促進された社會運動の新展開と、一つにして見られなければならないものである。で、この點からいへば、それは社會思想の飛躍でなくて、それの深化であり、それの後退でなくて、それの前進である。

が、茲で序に一言注意しておきたいことは、かういふのは決して、現在では啓蒙運動の必要がなくなつたといふやうなことを意味してゐるものではない、といふ一事である。啓蒙運動の必要は、今日でも依然として存在してゐる。のみならず、それは現在から展望し得られる限りの將來まで、永遠に存在しつづけて行くことであらう。が、それにも拘らず、社會思想の全部が何時までも啓蒙運動の具としてだけの意味で持續されて行くといふことは、我々には堪へられないことである。且つまた、社會運動の實際上の進行も、それが或る點に於て、さうした性質の殼を破つて、建設的實行期の段階へ突入することを要求しても居るのである。社會思想の現實化的傾向は、かうした機づみから、不可避的のものとして出て來たのである。

社會思想がまだ大體に於て純粹の啓蒙時代に在つた間は、理論のための理論、公式のための公式を究明することが先きに立つて、さうした理論や公式などの實踐的効果とか、その現實化のための諸條件とかの研究や考察が、屢々著るしき程度に閑却された。さういふとは無論、理論や公式の究明が活きた實行意志に依つて確かりと裏附けられてゐなかつたからであつた。もとより、その頃に於ても、行動の價値が全然高唱されなかつた譯ではなかつた。が、しかし、それが高唱されたこと自體が、單に理論としてであつて、從つてそれは多くの場合、言葉のための言葉として終つた。それ故に、その頃に屢々、インテリゲンツィアの群れの間で、「街に出でよ!」といつたやうな壯快な言葉が、密室に於て絶叫されて、そのままその四壁に反響されただけで消えて行つたやうなことも、決して珍らしいことではなかつた。時としては、彼等の或るものが、自分達が絶叫した聲に驚かされて、唐突に街頭に飛び出したやうなこともあつたが、さう

した場合に、彼等は直に何等の効果の伴はない犠牲者として蹉跌したのが普通であつた。彼等の多くは當初から、社會主義の古典などから學び得た理論や公式などを丸呑みに受け容れただけで、それらのものの當否を、眼前の社會事實の現實相に照らして檢討しようとするやうな意向をさへ示さなかつた位だから、從つて彼等は、彼等の理論が有効に行動化するための前提條件ともなるべき現實の社會的環境に對する實際的研究とか、行動の方法手段に關する具體的考察とかを缺いて居たのが普通であつた。彼等の失敗の原因は、主としてさうしたところに潛在してゐたのであつた。

社會科學の浸透を受けた社會思想の使命は、何よりもまづ、前車の覆轍ともいふべき、さうした失敗の繰返しを豫防することの上に現はれた。それ故に、社會思想の現實化的傾向が、それの成果として生じてからは、社會理論の行動化の前提條件に對する社會科學的方法に依る研究及び調査が、それの最初の仕事として着手される氣運が、眞つ先きに現はれ始めたのであつた。現實の社會的環境上の諸關係に對する研究とか、與へられたる社會的環境上に作用する實際運動の方法手段に關する考察とかは、さうしたものの範疇に屬するものとして見られるべきものである。

二　啓蒙時代の社會思想の業績

それにしても、今日の狀態にまで展開して來た社會思想が、曾て一度啓蒙時代を通り越して來たことは、――そしてその時代の思想的鬪爭の坩堝の中に投げ込まれたことは、――非常に有益なことでもあり、有意義なことでもあつた。第一に、社會思想がさうした間に鍛錬の功を積んだ程度は、決して少いものではなかつた。更らにまた、現在の立場から展望し得られる限りの社會運動の終極目標は、社會思想が啓蒙時代の訓練を經つつあつた間に於て確立されたものであつた。そしてそれが、向後の社會思想の足取りをどれほどに堅實なものにするかは、計り知れないのである。もと

より、社會運動の終極目標が確立されたといふことは、それに到達されるための諸條件が究明されたといふことではない。さうした諸條件の究明は、社會科學の浸透を受けた社會思想の手に殘された今後の重要な仕事である。で、大體上から見れば、啓蒙時代の社會思想の業績の一つは、社會進化の必然的過程に關する一般的概括的性質の問題の討究を通じて、社會運動の終極標目を確立したことの上にあるといふことが出來る。これに反して、建設的實行時代の社會思想の主要事業の一つは、その終極目標への到達の道程に關する特殊的個別的諸問題の具體的討究の上に置かれてあるものだといふのも、大して的を外れた言ひ方ではないと考へられるのである。

現在の立場から展望し得られる限りの社會運動の終極目標が確立されたことが、如何に向後の社會運動の足取りを堅實なものにすることの上に貢獻する可能性があるものであるかといふことは、次の一點の考察に依つても、大體は豫測することが出來るのである。——即ち、將來無産政黨の組織が實現されて、それがいよいよ實際上の政治的活動に突進することになれば、それは屡々、既成諸政黨——殊に既成諸政黨の左翼をなすもの——との安易なる妥協に依つて、當面の難關を糊塗しながら乘り切らうとする誘惑に晒される機會が出現するに違ひはあるまい。で、若しさうした場合に、無産階級運動の前途の終極目標が曖昧模糊なものであらうものならば、無産政黨の態度の上に表裏反復の測られない狀態が生ずる危險がない譯には決して行かないのであらう。それは、一九一三年までのイギリスの勞働黨の議會內に於ける進退に徵しても、容易に推斷し得られるのである。けれども、さうした場合に於ても、無産階級運動の前途の終極目標が確立されてゐて、しかも無産政黨がそれに忠實である限りは、恰度イギリスの勞働黨內閣が、如何なる理由からでも、兎に角內閣の唐突な崩壞を賭しても、最後まで自由黨と妥協することを肯んじなかつた通りの態度に出ることとも、必ずしも不可能事ではなからう。疑ひもなく、すべての場合に於てさうした態度に出ることは、無産政黨に取つて

は、可なりに痛烈な苦行であるに違ひはあるまい。のみならず、その苦行は、無産階級運動の終極目標が確立されてゐなければ、到底堪へられないものであらうことも、今のうちから容易に豫想が出來る。が、それと同時に、その苦行にしたところで、無産階級の終極目標が確立されて居て、且つ無産政黨がそれに對して忠實である限りは、全然堪へられないものでもないといふこともまた、同様に有理に主張し得られることである。

二　現實化的傾向の肯定の根據

社會思想の現實化的傾向を『右傾的』として批難しようとする人々は、これと密接の聯繫關係にあるところの、無産階級運動の政治行動化を糺彈することから出發するのを常とする。彼等は概して、組織されたる勞働者の經濟行動だけが、社會改造を實現するための唯一の手段だと考へてゐる。けれども、社會改造の實現といふことは無論、無産階級運動のために確立されたる終極目標であるから、それは臨機應變的に勝手に變更する譯に行かないものであるが、しかし經濟行動とか政治行動とかの採用の如きは、それへの途中での、手段の問題――若しくは戰術の問題――であるから、それらのうちのいづれを取るべきかといふことは、場合々々の形勢に從つて適宜に參酌されて差支のないものであつて、その點に關しては、すべての場合に共通した固定的な原則がある譯ではない。時としては、二つのうちの何れを取ることの上にも、同等の強さの論據があつて、當事者らが甚だしく去就に迷はされる場合さへも起り得るのである。そして、さうした場合には、彼等が言はば匙を投げるやうな氣持で、殆んど盲目的に何れかを採擇することを決すると言つたやうな、所謂『悲劇的採擇』さへも全然起り得ないとは言へないのである。が、しかし、今日の我國の現實の社會的諸關係の下に於ては、我々から見れば、上に既に述べた多くの理由に依つて、政治行動への轉向が、無産階級運動の當

面の戰術のために開かれてゐる殆んど唯一の關門として殘つてゐるものだと斷定し得られる根據があるのであつて、そして、聊か極端に聞える語氣を以て言へば、それを否定することは、無產階級運動そのものを否定することにも當るとまでも言へると考へられるのである。

或ひはまた、無產階級の政治行動への轉向を『右傾的』として否認する人々の間には、それが無產者側の階級意識及び鬪爭意志を銷磨する結果に導くものだと言つた樣な論據から出發してゐるものもある。それに對して我々が言ふべきことの要旨は、社會的に實效を期する運動は、畢竟するに、それが有效に行はれ得る場面に於て、有效に行はれ得る諸條件に從つて進められなければならない、といふことに盡きるのである。無論、それが有效に行はれ得る場面が絕無な場合には、それは當事者たちに依つて創造され開拓されなければならないが、そのこともまた、それが有效になし得られる諸條件に從つて企てられなければならないのである。でなければ、社會的に實效を期する運動といふものも、結局は、概念上のものに止まり、談理上のものに終らなければならないのである。更らにまた、無產者側の階級意識や鬪爭意志やが活きた狀態に保たれるのは、それらのものに立脚する行動の反復連續に依つてのみ可能なことであつて、表面上痛快に聞えるだけで、實は內容の空虛な談論に依つて可能なものではない。それ故に、無產階級の立場から、行動可能の場面に於て、それの可能の諸條件に從つて行動を反復連續することが、寧ろ與へられたる狀態の下に於て、無產者側の階級意識や鬪爭意志やを活きた狀態に保つための、唯一の方法でなければならないのである。だとすると、さうした行動に對して初めから皮肉な眼を投げ掛けつゝ、批評的にそれを傍觀する談理派の連中の態度こそ、却て無產者側の階級意識や鬪爭意志やを抽象化し概念化して、結局それを無內容なものにする結果を招來する虞れのあるものである。實際上の問題として見ても、今日に於て無產階級の立場から、現實の戰を戰つてゐるものは、ただ社會的に行動の可能

な場面で、それの可能の諸條件に從つて、如何なる方法に依つてでも、現實的行動を續けてゐる人々だけではないか――それに反して、公式一點張りの現實無視的立場から、これらの現實に行動を續けてゐる人々に對して『右傾的』といふ評語を侮蔑的に投げかけて、獨りで、高見の見物に興がつてゐるやうな談理派の連中こそは、安易な拱手無爲の狀態に甘んじて、現實の戰ひを逃避してゐるものである。それは、實は體のいい隱遁的態度に外ならないものである。が、彼等は自らそれに心附かないで、妄りに他を嘲笑して得意になつてゐるのである。そして、かういふことの病根は、我々から見れば、要するに彼等が何時までも、抽象的、概念的、思辯的、談理的、公式一點張り的、現實無視的、――手短かにいへば非科學的――社會思想に依つて惹起された昏睡から覺め切らないで居るところから來てゐるものと見て、大した間違ひがないのである。

米國を一巡りして

——米國文明の基調たる『邊境生活』の進展——

澤田謙

一

精神の海に泛ぶ物質であるか。物質の容器に盛られた精神であるか。それはわたくしの究めやうとするところではない。現代の思惟的傾向がおほむね、物心兩界の對立を是認し、事象の物質的解釋と精神的解釋とに、立脚點的差異を觀取するときにおいて、わたくしの米國觀は、あるひは哲學的批難の對象であるかもしれない。しかし、『世界の謎』であり、『二十世紀の運命』である米國が、ことに近時とみに旺盛なる活動期に入りきたれる米國が、正當に理解されるためには、是非とも、その歴史的、地理的基礎があきらかにされねばならぬとは、わたくしが米國を一巡りしての僞らざる感銘である。現代米國の說明は——そしてその將來の展望は——少くとも、その『歴史』と『地理』とにまで、堀り下げられうる。(その哲學的辯明はしばらく措いて。)——わたくしはかく信ずるのである。——そしていはゆる『邊境生活』とは、その歴史と地理との基調をなすものである。

もとより、わたくしは、唯物史觀を絕對に信認するものでもないし、社會現象の物質的解釋のみをもつて、自得するものでもない。いはんや、『王室地學協會』の會員でもなんでもない。しかし、マウント・ヴァーノンに立ち上つたウイルソンに從ひ、全米國の青年が、銃を肩にして大西洋を押し渡つたるあのスリリングな態度。大膽にして盲目なる、かの『民族自決主義』によつて、歐洲のバルカン化を敢行したるその平和外交。世界の富の半をにぎる『金貨國』として、右に歐洲、左に東洋を睨みながら、ワシントンに世界の軍縮會議を招集して、弗の神聖羅馬帝國の威嚴を、萬民の威服にたゝへあげたるその

帝國主義。——惹いては現時の政治的、經濟的、社會的、而して文化的中心問題たるかの『米國化』(アメリカニゼーション)運動。小さく現はれては、移民問題、排日問題。——それぞれ多くの解釋と說明とが加へられたに拘らず、なんとなく靴を隔てゝ痒を搔くの觀に堪えなかつたこれらの諸現象。——それらのすべては、コロンブス以來、(コロンブス自身が一個の邊境生活者であつた)五百年に亘る永き邊境生活の延長であり、またその一進展であると觀ることによつて、はじめて說明がつくのである。少くともわたくしは、米國を一巡りして、さう考へた。

二

『米國とはなんであるか』わたくしは、この大きな問題に、答へやうとするのではない。しかし、目下の米國に、『米國化』(アメリカニゼーション)だとか、『米國主義』(アメリカニズム)だとかいふ聲が、意外に大きいばかりでなく、それが實際の政治的、經濟的、社會的、文化的運動の基調として、中心的地位を占めつゝある事實に、眼をふさぐことはできない。さすれば、米國『化』(アメリカナイズ)せんとする、その『米國』とは、『米國主義』とは、而して『米國精神』(アメリカンスピリツト)とは、何であるか。それが當然の疑問とならねばならぬ。

言ふまでもなく、北米合衆國とは、面積二百萬方哩、人口一億一千萬、わが國と太平洋を隔てゝ相對する大國である。しかし、それは、當面の問題の解答とはならぬ。その國富は七千億圓と稱せられ、世界の金貨の半を保有し、そして世界の自動車の八割二分、世界の電話の六割三分、世界の鐵道哩數の五分の二が、この國を動かしてゐる。それは、米國の富盛と強大とを、物語るものであるが、しかし『米國主義とは何であるか』といふ問の解答とはならぬであらう。

或は曰ふ。——米國は大資本國である。大資本國なるがゆえに、大帝國主義國である。戰時中に蓄積した巨億の資本で、豚の如くに肥え太つた米國の資本家は、國內勞働者の膏汗を搾り取るばかりでは、滿足することが出來なくなつた。いや、『資本』自體がこれをゆるさぬのである。『資本』とは『利潤』を生み出す『元本』である。資本は、利潤を生み出すがゆえに、資本なのである。ピラミツトよりも高く積み上げられた『弗』の山は、いづれのところにおいてか、利潤を生み出すがために、運用されねばならぬ。さればこそ、米國は、(米國を代表するこの國の資本家は、)右の手に歐洲を把握し、左の掌に東洋を弄ぶのである。その軍國主義が、資本主義の落胤として、必須なるに不思議はない。現代の米國は資本主義の絕頂に立つ。かるがゆえに帝國主義なのである。すなはち、米國とは、資本主義的帝

國主義である。——と。

わたくしは、この明答を、『非』なり、といふのではない。なるほど米國は帝國主義である。おそらく、現在において、米國ほど、帝國主義的色彩の强烈な國は、あるまい。夫れ然り、である。しかし、帝國主義といへば、現在に於いて、帝國主義ならざる强國が、どこにあらう。英國は、近代において、帝國主義の宗本家である。獨逸は、その帝國主義のために、世界大戰の犧牲者となつた。そして近代の帝國主義が、近代的特質たる、資本主義的色彩を帶ぶるに、なんの不思議があらう。すべてこれ資本主義的帝國主義である。しからば米國の帝國主義を、英國の、また獨逸の帝國主義と、區別する特徴は、なんであるか。

わたくしは、この間に答へて、曰ふ。——英國の帝國主義は、殖民政策を背景とする帝國主義である。獨逸の帝國主義は、國家主義の歸結としての帝國主義である。これに對して、米國の帝國主義は、『邊境生活』の一進展としての帝國主義である。——と。

現代の米國は、なほ、聖書と鋤とを携へて、ニウ・イングランドの沃野を耕やしたる淸敎徒——その淸敎徒を動かしたる『力』——それと同じ『力』によつて動かされつゝある。獵銃を肩にしてアレゲニー連山を超え、ミシシッピー河の蘆荻の間に、インディアンと屯し、カリフォルニヤの金山に、ダイナマイトの火繩を揮つたると、同樣の精神が、現代の米國を動かしつゝあるのである『邊境生活』が米國をつくり、『邊境生活』が米國を動かしつゝあるのである。

『ウエストワード・ボー!』といふ叫びは、米國民の耳朶に、まだ新たなのではあるまいか。

三

上古のことは、しかとは知らねど、神武天皇が宮居を畝傍山の麓におかせ給ひし後の日本は、殖民政策によつて終始したのではあるまいか。雄略天皇のその雄略、四道將軍の傳說、日本武尊の東征西伐、神功皇后の雄圖など。大和の國一圓に建國したる上古の日本は、北九州や山陽道山陰道、關東や東海道、中仙道、はては南朝鮮にまで、豐饒の地『日の照る土』に大和民族の殖民地を開いて、いはゆる『國威を四邊に照明』したものと思はれる。

これを大規模に敢行したのが英國であつた。ころは中世紀の末葉。おりから『航海者（ナヴィゲーター）』の續出せるに乘じて、敢果なる英國民は、アフリカに、インドに、オーストラリアに、カナダに、

いはゆる『世界の未開發土』に、いたるところ殖民地を開いた。これが英國の帝國主義である『英帝國』とは、これ等の殖民地を、引つ括めての名である。英國から、加奈陀と濠洲と印度と南阿聯邦とを除いて、どこに英帝國の帝國主義があらう。英國の帝國主義は、殖民政策上の帝國主義である。（そして米國の帝國主義は、フイリツピンと、アラスカとキユバとにあるのではない。）

獨逸の帝國主義を想ふごとに、わたくしは織田信長を回顧せざるを得ない。今川、武田、上杉、松平などの諸强國に狹まれたる織田家が、いかに艱難のうちに國を建てたか。戰國時代に於て、國を建てゝ國を保つのは、命がけの大事業であつた。桶狹間の合戰は、實に『生か死か』（ライフ・オア・デス）の戰ひであつた。隣强ならび立つところ、强からざれば亡ぶ。たゞ進み且つ取るよりほかに、自己を保存するの途はないのである。松平と婚を通じ、武田と戰ひ且つ和し、今川を亡ぼし、北條を征めたのは、自己保存の唯一途であつた。すなはち、現代的にいへば、帝國主義は國家主義の順潮なる發展だつたのである。安土の築城と桶狹間の合戰との間には、それほど密接な、そして必至な連鎖關係がある。

獨逸の帝國主義がそれであつた。東を見れば露西亞があつた。南を眺めれば墺太利がゐた。そして西にはラインを隔てゝ佛蘭西がある。油斷も隙もないとは、このことである。この間に國を建てた獨逸が、自己を保存する唯一の途は、國境を堅むるほかにない。『ラインの守り』が國歌となつた。國民歌となつた。守るとはすなはち攻むることである。鐵血宰相ビスマルクの二大政策。すなはち、國内の政治・經濟・社會組織を、强烈に統一化することと、その統一的國力を、彈力的に外方に發條することとは、實は二にして一だつたのである。國内關稅政策と、普佛戰爭とは、楯の兩面にすぎない。國家主義の歸結としての帝國主義。それが獨逸の帝國主義なのである。英國が自由主義・個人主義を標謗するに對して、獨逸が國家主義・統一主義の本場であるが如くに言はれるのは、まつたく、この故である。英國民が遠く大西洋の彼方を望むに對して、獨逸の國民が、土を掘り工場を建てゝ、營々といそしむのもこの故である。獨逸人が、飽くまで科學的に組織的に、少しの無駄もなく、社會と企業を營み行く姿は、この長き國家生活が、國民性化したる證左である。すなはち、獨逸の帝國主義は、國家主義的帝國主義たつたのである。（そして、米國の帝國主義とは、カナダとメキシコに對するものではない。）

四

わたくしは、歸米まもなく、眞山青果氏の『平將門』といふ戯曲を讀んだ。(中央公論、一月號所載)その藝術的力作たることは、姑らく別問題として、それ以外に、わたくしは、その史實の正確なる理解にうたれた。平將門の血脈を流れる血は、『邊境生活者』の子孫の血である。その『士』に對する執着。その同族に對する『民族的』黨派精神。その勇敢なる男性的道義心。京都を中心とする貴族とは、全然別種なる文明を、かれ等武人は建設してゐたのである。奈良朝から平安朝にかけて、近畿には一つの文明國が發育した。(あたかも歐洲の文明國のやうに。)それは燦として紫に匂ふ貴族文明である。綠なる東山の麓を、衣冠したる若き貴族が、輕輿を搖らせた。加茂川の清流には、京の女御が涼風をとる。それは、詩歌管絃、歌舞音曲の美はしき國である。この美はしき文明國を背にして、自己の運命を拓かんと、東國の荒野に走る『冒險者』もあつた。政黨的闘爭に敗れて、築紫の海に『流された』ものもあつた。官命を帶びて、當時の野蠻國に屯在する『鎭守府』もあつた。あまりに煩鎖なる官紀禮讓を厭ひ、『自由』の空氣を呼吸せんとて、『都』を落ち行く人々もあつた。——平將門と、その時代の東國人は、すべて、これらの人々の子孫である。

その原因の如何を問はず、一たび東國に身をおく人々は、まづ第一に、その偉大なる自然と、力づくの角力を角力にねばならなかつた。かれ等は、弓矢を背にして、鋤鍬をとり、朝の大氣に、力强い呼吸を息づいたのである。そこには、官紀も禮讓も、社會制度の厭迫はなかつた。自由である。絶對の自由である。その代り、『自然』とのはげしい闘爭である。一つの流域を征服したならば、その流域がすなはち、一つの『邊境』である。それは、自然の邊境である。その邊境の彼方には、誘ふやうに雜木の小山があり、小山の彼方には森林があつた。小山を開拓したかれ等は、森林に斧を入れた。一年より一年と、その『邊境』は擴がつて行く。それが『邊境生活』である。たとへ京都との間に、大西洋はなくとも。また東國の風物が、『新世界』ほどの廣漠をもたずとも。

邊境生活を送つた人々は、肉體的には壯健である。社會的には無作法である。かれ等は、自由にして奔放である。禮讓的道德よりも、實利的德義を重んずる。樂觀的であり、情熱的(エンスージアスチック)であり、實行的であり、個人的であり、粗暴であり、無反省であり、獲得慾が旺盛である。それが『東國武士』の特徵であつた。そして、それが『米國人』の國民性である。

若し、英國の帝國主義が、神功皇后の帝國主義であり、獨逸の帝國主義が、織田信長の帝國主義であるならば、米國の帝國

主義は、實に、平將門の帝國主義である。

五

『米國精神』とはなんであるか、との問に答へて、ある人は『自由』を愛する心だと言つた。またデモクラシーだとも言つた。或ひは、その『愛錢心』を除くならば、歐洲人と異るところはない、とも言つた。外れたるにあらずと雖も、いさゝか群盲摩象の誚を免れない。わたくしは、米國精神の眞諦は、『邊境生活者』の心緒であるといふ。

米國を、はじめて開拓したものは、――いや、はじめて發見したものさへが、一個の邊境生活者であつた。コロムブスが、黄金と、絹布と、ジンジャーと、紅玉と、ゴルコンダの金剛石と、眞珠と、絨緞との、豐かに産する印度を夢み、その印度へ、西からする近道を發見せんとて、船出したものであることは、有名な話である。『白銀（しろがね）の壁や黄金の砦塔。……眞珠の滿てる湖や、「一都市の富にも當る黄金と寶玉」を腕に裝へる印度王女』を憧れて、かれ等は帆船を操つたのであると、カアル・ベッカー教授は、その『米國民のはじめ』の第一章に記してゐる。これ等の夢が、かれ等に對して、『具體的のまた肉眼的の目標を提示したのである。……それは冥想によつてでなく、たゞ能動的努力によつてのみ獲得しうる』コロンブスもまた、かゝる具體的、能動的『邊境生活者』であつたのである。

まことや、これぞ一の『邊境』であつた。先驅者たちは、かくして『新世界』へと殺到したのである。この『邊境生活者』の精神が、ラレー、ドレーキ、ホウキンス時代の特色であり、さらに、燦たるエリザベス時代の國民精神に具體化したのである。

米國に渡來した開拓者たちの間には、利得を夢みる『商賣人』もあつた。征服に熱中せる『政治家』もあつた。殉教の地を求むる『宗教家』もあつた。黄金脈を探す『冒險者』もあつた。しかし、それが誰であつたかを問はず、大西洋を押し渡るほどの人は、――いや、米國の地に踏み止まるほどの人は、多少たりとも『邊境生活者』としての適應性をもつ人達でなければならなかつた。さうでなければ、『新世界』での生活は堪えられなかつたのである。またもし、その適應性が少なかつたにせよ、無理やりに、新世界生活を營まされたにせよ、烈しい風雪や、やくやうな天日に曝されて、自然と鬪つてゐるうちには、膚の皮が堅くなり、顔色が日に燒けるほかに、丁度『東國武士』におけるやうな、一種の邊境生活者的精神が、養はれざるを得なかつたのである。現代の米國人が、一たいに、自由で奔放

で、無作法で實利的であり、且つまた、樂觀的、情熱的、實行的、個人的色彩を強く有するばかりでなく、粗暴で、無反省で、獲得慾が旺盛なのは、この祖先の血を享け、この生活に、陶冶された結果であると思ふ。旅行者の眼には、白粉をぬり、頬紅、口紅を染めた斷髮のアメリカ女が、肉も露はに華美な衣裝をつけ、肩を聳かして街路を濶歩してゐるのに眼を惹かれる。それは、巴里好みだとか言ふ話である。しかしそのスタイルを、巴里ッ子(パリジアン)に見せたら、『沐猴にして冠するものなり』と、旭將軍義仲を、嘲笑つたる京童のやうに、さぞや苦笑することであらう。

六

米國の民族史が、かりに一六二〇年の巡禮者時代から始まつたものとしても、それは四百年以上までのことである。現代の米國は、四百年以前に於ける祖先の『邊境生活者』の血を、いまに至るまで保存してゐるのであらうか。わたくしは、さう言つた。それは保存さるべき理由があるから、保存されたのである。略して言ふならば、米國の『地理』がその血を保存したのである。もつと直截に言ふならば、米國の廣漠たる天地は、米國民をして、十九世紀に至るまで『邊境者』として生活せしめたのである。——わたくしは、このことを、も少し説明するであらう。

米國の社會史は、大略して、これを四つの時期にわけることが出來る。第一期は、メーフラワー號に乘じたる『巡禮者(ピルグリム)』たちが、第一の鋤を新世界の處女地に打ちこんだ、一六二〇年から國祖ワシントンに率ひられた革命軍が、米國の十三星旗を高く揚げた一七八八年までの百六十八年間。第二期は、第一期大統領が就任したる一七八八年より、ブキヤナン執政末年、一八六一年に至る七十三年間。第三期は、リンカーンが白亞館の主人公となりたる一八六一年より、一九一三年タフト大統領の終期にいたる五十二年。第五期が、一九一三年、ウヰルソン大統領就任より今日にいたる世界大戰前後の十二年である。そして、米國は、その長き四百年の歴史において、絶えず『邊境生活』を營んだ。かれ等が、事實において、邊境生活を脱したのは大戰後である。いや、大戰後の今日と雖も、なほ生々たる邊境生活者の精神をもつて、その一進展としての、資本主義的帝國主義を發揮してゐるのである。

最初の冒險者たちが、はじめて新世界に上陸したとき、それが大陸であるか一つの島嶼であるか、それは疑問の雲にとざゝれた神秘であつた。ほど經て、若し西へ西へと、夜に日をつい

で、荒野を旅し河流を渉つて行くならば、その曠野のあなたには、いま一つの大洋があるといふことを、傳說の如くに信ぜさせられた。それほど米國の大地は廣大であつた。いや、いまでも廣大である。紐育の街に木枯が訪れて、兩側に斷崖のやうに立ちならぶスカイ・スクレーパアの谷間を、身を切るやうな寒風が、氷流のやうに吹き捲るころになると、東部の人達は、外套の襟を立てながら、『日向の南部(サンニー・サウス)』の大競馬や、『黃金色の西部(ゴールデン・ウエスト)』の蜜柑(オレンヂ)の色を、遠い夢の國の物語のやうに憧れる。たとへ急行列車で行けば、僅か四日の旅路でも、歐洲よりも遠い淨土のやうに思はれる。それほど米國の大地は廣がつてゐる。從つて、一七〇〇年において、東部十三州の邊境生活者たりし米國民は、一八〇〇年においては、ミシシッピー流域の邊境生活者でなくてはならなかつたのである。この廣漠たる大野を征服しつくすのに、――その『邊境(フロンティア)』を、太平洋まで押しつめるために、――米國民は四百年かゝつた。いや、現在においても、世界のワイルドな民族と稱せられる米國人でさへが、特に『荒い(ワイルド)』加州(カリフオルニア)と言ふほどに、太平洋岸の住民は、邊境生活者の氣分を多量に持つてゐる。

『かくの如く、米國の發展なるものは、單に一個の直線に沿つて進展したものではなく、絕えず邊境線が進展するにつれて、再び原始狀態に復歸し、そしてその地域に新らしい發展を示したのである。米國の社會的發展は、邊境に從つて、絕えず、繰りかへしては、始めからやり出したのである。この不斷の再誕生が、この米國生活の流動性が、この新機會ある西方への膨張が、この原始社會の單純性に絕えず接觸してゐたことが、米國精神の本質的勢力をなすものである。』

この、ハアヴアドのタアナー教授の言こそ、まことに、米國を知るものと言はねばならぬ。一六二〇年、一隊の『巡禮者』が、プリマスに上陸して、實際に消え行くメーフラワー號に、別れを惜みつゝ、『夕の祈』を捧げて以來、『新世界』は、邊境生活者の故鄕となつた。十年後の一六三〇年には、『淸教徒(ピューリタン)』が、大擧して、マサチユセット州に移住し來り、現在米國の基礎を開いた。かれ等は快漢クロムウエルの同志である。故國の宗教迫害に反抗して、その理想の實現地を、新世界に求め來つたものである。安易を欲せず、逸樂を望まず。たゞ、刻苦猛進、高遠の理想を實現せんとて、努力するの徒である。米國民の前驅をなすものは、淸教徒であると言はれるほど、かれ等は優良なる開拓者であつた。米國の發展を說くものは、かならず、『現在

の米國はピューリタンの米國ではないからな」と、嘆ずるほどに重要視されてゐる。「もし清教徒の迫害が、さらに十二年長かつたなら、英國の富の四分の一は、ニウ・イングランドに運び去られたであらう」（ハニール）ほど、清教徒は米國の開拓に貢献した。

一方、南のかたヴァージニアには、多くの冒險者と、投機者と、浮浪人とが、はては遠島流刑の囚人が、續々と渡つて來た。かれ等は、ニウ・イングランドの商業的なるに對して、農業的開拓を試みた。曇り勝ちなる英國の島から、太陽の光の豐なる南國に移り住んだかれ等は、小唄を口ずさみながら、土に親んだ。そして煙草の葉を乾かしながら、邊境生活を享樂したのである。「雲影を見ぬ青空や、肌心地よき風が、苦蟲を潰した英國人の脈管に、熱い人情の血をたぎらした」のである。

そのほか、十七世紀の後半には、オランダ人が、ハドソン河畔に殖民し、スウェーデン人がデラウエア河畔を開拓した。本國に鐵火の洗禮をうけたる佛國のユーグノーも、血系正しき獨逸のパエテイストも、剛健なる意志の權化といはれたるスコッチ・アイリッシュも、相携へて米國に渡り來つた。これ等の諸移民が、現代米國の祖父である。

これ等の移住者の手によつて、新世界は拓かれた。雜草の繁みがとり拂はれたあとに、小麥畑があらはれた。インディアンの出沒してゐた林の影に、殖民地風の小屋が立つた。土にまみれた手に聖書を讀み、駒鳥の囀を聞きつゝ鋤を深く土に入れた。かくして、「邊境」は、新なる春を迎ふるごとに、西へ西へと擴まつた。かれ等の筋肉は隆起し、兒女の顏は日に焦げた。そして土を耕やし、土に親しみ、土を征服するかれ等の生活が、かれ等の性格を、「邊境生活者」の性格にまで陶冶した。

八

しかし、一七八八年、米國の獨立に至るまで、かれ等の貴い額に流した汗は、すべて東部十三州の土に注がれたのである。百六十八年の歳月を經て、かれ等はなほアレゲニー連山を超ゆることができなかつた。米國の邊境が、急激に進展したのは、第二期に入つてからである。

獨立戰爭の前後から、ボツ〳〵、アレゲニー連山を超えるものができた。かれ等を、バックウッヅマンとよぶ。「バックウッヅマンの衣服は」とルーズヴェルトはいふ。「大部分、敵インディアンから借りたものである」かれ等は、毛皮の鳥打あるひは革の帽子をかむり、鹿皮の靴をうがち、ゆるい薄いズボンでなければ、單に毛皮の脚絆とインディアンの半ズボンを着てゐた。その當

に身につけたのは、緣をとつた手織または荒皮の獵用シャツで、米國でかつて着られた、最も顯るしい民族的衣服であつた。それは寛やかな、膝までもとゞくほどの襯衣で、これを巾廣い帶で腰のあたりに締めくゝり、それに斧や骨刀をぶらさげてゐた。』見るからに、『邊境生活者』らしい風體ではないか。

『その武器は、長い小孔燧發銃で、無格好な釣合のとれぬものであつたが、ひどく正確であつた。それは頗る重く、立てると丈高い人の顎までもとゞいた。……利ぎ磨き、よく中心のとれた、長柄輕頭のバックウッヅ斧が、また、小銃にも劣らぬほど、この西方の征服の得物であつた。この二つこそ、米國バックウッヅマンの民族的武器で、一たびこれを用ふるや、何者も敵はなかつた。』米國人は、アレゲニー連山を超えたとき、かくして再び原始生活から發足したのである。

『バックウッヅマンの生活は、一つの長い鬪爭であつた。森林は代材せねばならず、旱氣と積雪と、溢水と、豪雨と、山火事と、その他あらゆる曠野生活の危險に、當面しなければならなかつた。牛蠅や蚊や、毒蟲が、炎熱の幾週間を苦惱の生活となした。』これ等の困難を冒してこそ、『邊境』は年毎に西へ西へと動いて行つたのである。そしてこの『邊境生活者』の血が、現代にまで傳はつてゐるのである。

かれ等の兒女も、同様の生活に鍛練されて來たのである。『小供が十二歳になると、小銃をあてがはれて、歩哨に立たされる。そして、市所が襲はれはせぬか、覗き穴の前に立つてゐなければならなかつたのである。』邊境生活が、米國人の心身にまで喰ひ入つたのに、なんの不思議があらう。そして、米國の女學生が、ロッキー山の岩の上で、逆立ちをしたといつて異なるお轉婆と、冷笑するばかりもできまい。

九

これ等の邊境生活によつて、米國の邊境線は、しだいに西へと動いていつた。一たびアレゲニーを超ゆれば、ミシシッピーとその支流の流域である。かれ等は、森を小楯に市所を定め、汗馬に鞭つて、開墾地を漁つてあるく。新なる開拓生活がはじまる。日が東から出て西に入る毎に、荒野は沃土に化して行く。その邊境線は、加速度でもあるかの如くに、西へ西へと移つて行くのである。

それと同時に、或はそれに一歩を進めて、米國の法律上の領土權も、すなはち米國の國境線も、西へ西へと動いていつた。革命時代における征服と、一七八三年の條約によつて、アレゲニー以西ミシシッピー以東の地は、米國の領土となつた。そして

その領域は、十三州の二倍を超えた。一八〇三年には、いはゆるルイジアナを、佛蘭西から買ひ取つた。それは、現在のルイジアナ州はもとより、中部北西部の、現在十州を劃する大地域である。一八一九年には、北西條約によつて、フロリダが米領になつた。一八四五年には、テキサスを併合し、翌一八四六年には、英國との條約によつて、オレゴンの地が併せられた。そして最後に、一八四八年、ウタ、ネヴアダ、カリフオルニア、それにアリゾナ、ニウメキシコの一部が、メキシコから割譲された。

もとより、事實上の邊境線は、法律上の國境線と、同一の速度をもつて、同一に動いていつたのではない。或るときは、邊境線が先に進んだ。また或るときは、國境線だけが、一氣に西進した。しかし、大體において、國境線の動くにつれて、事實上の邊境も、西に動かざるを得ない。そして、『邊境』が西に進展するにつれて、新なる原始生活がはじまり、その『不斷の再誕生』によつて、米國社會の『邊境生活』的傳統は、色濃く遺傳性を增進したのである。これが現代の米國人の、なほ野武士の風格を保有する原因である。

この勢でもつて、第二期の末に至るまで、米國の社會は進行していつた。すなはち、殖民政策を知らず、國家鬪爭を解せざる米國人は、たゞ『土』と取つくんで、生と死の戰を戰つたのである。土から生れて、土を擴げ、土の上に死んだ。祖父のなしたことを父が繼ぎ、父の遺産を子が承けた。かくして、南北戰爭の直前には、南部一帶に棉花畑ができ、西部と北西部には小麥が實つた。そこに南北戰爭が起つて、米國の社會に一轉期をつくつたのである。

一〇

南北戰爭は、奴隷解放の戰であると、一般に信ぜられてゐる。世界戰爭が、獨逸の軍國主義を倒すための戰であつた、といふ程の意味で、それは奴隷解放の戰であつた。なるほど、軍國主義の獨逸が敗かされたと同じやうに、奴隷は解放された。しかし、奴隷解放の恩人といはれてゐる大統領リンカーンすら、最後まで、奴隷解放の目的のために、戰爭をしたのではなかつたと、かれの演説のうちに明らかに言つてゐる。それは、もつと複雜な原因から起つたのである。

『邊境生活者』が、米國の邊境を、西へ西へと擴めつゝありしころ、米國の内部には、社會的變革が、除々として起つた。すなはち、南部の諸州には、奴隷を所有する大地主ができた。これに對して、北部の諸州には、製造工業と商業に從事する、新

な資本家が起りつゝあつた。この二つの勢力は、互に相對峙するのみならず、その利害政策において、相反目するものであつた。すなはち、南部の大地主は、農産物の價格が高くて、生活必需品の安からんことを望む點で、自由貿易論者であつた。しかるに北部の新資本家は、幼稚なる新産業を保護するを要する點で、保護貿易論者であつた。南北戰爭とは、この、新資本家と大地主との、經濟的戰爭であつた、

新資本家と大地主との爭は、南北戰爭以前からあつた。一八六一年の關税政策や、一八六二年の土地自由法や、一八六四年の勞働契約法は、みなこの鬪爭の政治的表出である。すなはち、この際、キヤスティング・ヴォートを有する西部の自由農民（邊境生活者）が、東北部の新資本家側について、東北部の實業家が、關税の引上げを得たに對し、交換條件として、西部の自由農民は、土地を自由に獲得する權利と、勞働者を自由に招來する特權とを得たのである。

南部の大地主は、はじめから、敗北の運命をもつてゐた。膨湃として起り來れる産業革命の勢は運命的な力でもつて、人力の反抗を否定するからである。東部と西部との握手ができたとき、南部の大地主は、たとへ南北戰爭を戰はずとも、敗北すべきものであつた。リー將軍の勇ましい戰物語は、いまに語り傳へられてをり、その爽たる姿は、ニウオルリンスの十字街に、南國の日を浴びて立つてゐるけれども、北部の兵力が南部を蹂躙したときに、米國の社會的變革はすでに決定してゐたのである。

二

南北戰爭を一轉期として、米國は、農業國から商工業國に變轉した。猛烈な勢で諸方に煙突がたつた。あそこからこゝと、都市が發達しはじめた。石炭が堀り出され、鐵が鍛冶され、鐵路が縱横に通じ、銀行と會社とに、人の出入がはげしくなつた。夕の氣笛とともに、新らしい『勞働者』が、工場の門から送り出されるやうになつた。米國は商工業國に轉化しはじめたのである。

米國が、農業國から、商工業國に轉化するとともに、新なる移民が、歐洲から輸入されはじめた。それは十九世紀後半からのことである。

この新移民の急先鋒をつとめたのは、一八四六年の飢饉に追はれた、愛蘭の下等移民である。かれ等は、鋤と聖書のかはりに、安酒の徳利をさげて、その貧困にも拘らず、笑ひ興じつゝ上陸した。かれ等は、愛蘭人の乞食に打まじつて、逃れうるほどのものは、よく／＼の苦痛奴だ」といはれるほどの、生來の陽

[illegible]家である。鐵道、運河などの下級勞働、下女下男、給仕人などは、この愛蘭人がつとめた。

それから獨逸人が來た。それは一八四八年の二月革命當時、自由主義に憧れて渡來したものと、一八七〇及び八〇年代、黑パンと馬鈴薯を常食とする百姓が、白パンと牛肉を慕つて來たものと二種類ある。しかし、いづれも、工場に入れば熟練勞働者となり、會社に入れば、得意の科學的經營能力を發揮した。米國の農業に、經濟的農業を輸入したのも、またかれ等である。

それから、スカンヂナヴィア人が來た。猶太人が來た。前者が農業、酪農場、木材工場、坑山などに入つて、幾分か『邊境生活』に親しむに對して、後者は、一旦農場に入れるものは殆んど全部失敗して、都市内の行商人となり、その長ずる商業的能力に依つて、次第に資本主義社會の大動脈をつかむに至つた。

かくの如くに、米國が、農業國から商工業國に一變するとともに、多數の移民が米國に流入し、ために、建國以來の『邊境生活者』の血液は、しだいに稀薄となされる傾向があつた。しかし、それがために、米國の『邊境生活』が中止されたわけではない。なるほど、一八六四年でもつて、米國の國境は、太平洋の怒濤にぶつつかつた。しかし、それは、法律上の國境である。『邊境』は、國内いたるところに殘されてゐる。一八四八年、カリフオルニアに、金山が發見されたといふ報が、一たび東方に傳はるや、多くの冒險者が鶴嘴をかついで、洪水のやうに押しよせた。そこに直ちに新なる『原始生活』がはじまり、新なる『邊境線』とが劃される。十九世紀が終るまで、米國はまだ未開發土であつた。多くの處女地が、『邊境線』の迫り來るのを待つてゐた。いや、いまでも待つてゐる。筆者は、アリゾナの曠野に沈む赤い夕日を車窓に眺めながら、あの小山のあたりには、いまでも、鍔廣の帽子をかむつたカウボーイが、早馬に鞭つて往復するのを見ると聞いたとき、『米國はまだ邊境生活をつづけてゐる』との感に堪えなかつたのである。

二

『米國は、神の造り給ひし、世界の大坩堝だ。歐洲のあらゆる人種を、この大坩堝のなかに投げ入れ給ひ、これを融和し混交し一の新なる人種米國人を、創り出し給ふのだ』と、詩人ツアングウイルは歌ふ。しからば、いかにして米國は、世界の『坩堝』となつたか。なにゆゑ、この『坩堝』に入りたるものは、融けて混つて新なる『米國人』として創り出されるのか。それは

りも不思議なのは、かゝる『大坩堝』にてありながら、なにゆゑ現下の米國は、その『米國化』運動に熱中し、『移民問題』をやかましく、騒ぎ立てるのであるか。

この疑問に對する、わたくしの解答は、いたつて簡單である。米國が世界の『坩堝』となつたのは、それが『邊境生活』を送つたからである。故國歐洲に全く見ざるその『邊境生活』が、その『原始生活』の『不斷の再誕生』が、かれ等を『米國人』にまで創り上げたのである。その烈しい『土』との格闘が、かれ等の地位と性格と境遇と人種とを無差別に、一つの人型にまでたゝきあげたのである。しかしこの邊境生活といふ『坩堝』は、邊境線が太平洋でせきとめられるとともに、處女地の面積が減小するとともに、次第に『たぎり』の力を弱めて來た。坩堝はいまでもたぎつてゐる。しかし火はまさに消えんとし、渦は小さくなつた。かくてこそ移民問題が起るのである。すなはち『移民問題』とは、邊境生活に心膽を練り來れる野武士の末が、この味を知らざる新來者を、異端者として排斥することである。『米國化』とは、『邊境生活者化』といふことである。

前にも述べたとほり、初期の移民のうちでも、英人もあれば、蘭人もある。西人、瑞典人、佛人、獨逸人、スコッチ・アイリッシュなど、米國を建設したる歐洲人は、種々の雜種であつた。人種が異るに從つて、異る宗教と、異る傳統と、異る性格と、異る文化を背景として來たのである。これが、ともかくも、一つの『米國人』にまでたゝきあげられたのは、まつたく『邊境生活』のおかげである。『同じ釜の飯を食つた同志』といふことがあるが、かれ等はそれ以上に、同じ生活を苦み、同じ生活を樂んで來たのである。その間に、同じやうな氣分が生じ、その間に親しみの心が起つて、『米國人』といふ意識を生じたのは、まことに自然の成功である。

『荒野に於ける艱難なる生活狀態で、一時代は經過した。これ等の多數雜多なる人種の代表者が、一つの民族にまで融け合はされ、次の時代の小供たちが、互に區別し難いまでになつたのは、これがためである。第一回の大陸議會が開かれるずつと前に、バックウヅマン達は、その血統の如何によらず、言語と思想と性格を一つにする、米國人となつてゐたのである。その父やその祖父が、その前に住んでゐた土地を、しつかりと捉へながら。』と、ルーズヴェルトは言つてゐる。

一三

いはゆる『百パーセントの純米人』といふのは、これ等第一期移民の子孫のことである。すなはち、邊境生活の坩堝が、盛

んにたぎつてゐたころの移民の子孫である。その血脈は正しく現在にまで傳へられてゐる。なぜなら、かれ等の祖先が、邊境生活を送つたのは、太古の物語ではない。「かれ等（邊境生活者）は、現在働らき盛りの男女にとつて、その曾祖父母、または祖父、祖母である。オハイオ河の流域には、その傳説がまだ生々と殘つてゐる。その表出こそ違ふが、それは、アレゲニーより太平洋に至るまで、殆んどあらゆる村々の間に、脈々と感ずることができる。今日においても、それは西部に一つの熱度を殘した。西部の人々には、その話しや活動が、とても東部や南部には見られぬほどの、若々しい新鮮さがある。』（ギ・エマーソン）

　これが第一期の移民の傳統である。第二期の移民に至つては、前にも述べたる如くに、米國が、農業國より商工業國へ、進展しつゝあるときに、米國に流れ入つたるものである。從つて、邊境生活の感化は、第一期の移民ほど、強烈でなかつたのは止むを得ない。その性情が、「百パーセントの純米人』と、多少異なるところがあるのも、止むを得ないことである。しかし、強烈ではなくとも、感化力はまだ殘つてゐた。それに第一期移民を通じての、反射的感化もあつた。このころには、まだ移民問題は、それほどの重大問題として、考へられてはゐなかつた。それよりも、新らしき工場へ、いかにして勞働軍を招びよせるかゞ、重大な問題であつた。

　それに、第二期の移民も、年を經るに從つて、しだいにその地位を向上してきた。純粹の不練勞働者として、米國に流れついた愛蘭の窮民さへ、いまでは、女教師の過半を占めてゐる。尤も、獨逸人は無政府主義と社會主義の輸入者であるといつて、批難攻撃が猛烈であつたこともあり、愛蘭人は、現に紊亂罪の親玉である。しかし、これを第三期の移民に比すれば、雲泥の差があるのである。いはゆる『移民問題』が喧しくなつたのは、第三期の移民時代に入つてからである。「俺等あ、仕事は大嫌ひだ。しかし金は、友達が稼いでくれるから、ちつとも不自由はしねえや』と揚言する南伊太利人。「米國人は、婦人を優遇しつゝ、人口次第に減少し、スラヴ人は、その妻を虐待しつゝ、人口益々繁榮する』と、嘆ぜしめたるそのスラヴ人、そのほか、芬蘭人、洪牙利人、葡萄牙人、希臘人、土耳古人など、いはゆる『南歐移民』が、洪水の如くに流れこんだ、二十世紀に入つてからのことである。すでに、邊境生活の坩堝の火は、まさに消えんとしつゝある。そして米國は、商工業國になつてゐる。そのとき、たゞ一の勞働器具として、輸入されたる移民が、移民問題』を捲き起したのである。

移民問題とは、邊境生活者が、非邊境生活者を同化しえず、その社會的害惡に驚嘆して、唱へ出したる社會問題である。

一四

移民問題の根本には、この生活と傳統に基く偏見が存するとともに、他方、人種的爭鬪の色彩を、見のがすわけにはゆくまい。

歐洲における人種を、三大別するならば、まづ英國と、佛蘭西の北半、獨逸の北半、スカンヂナヴイアに蟠居する、いはゆる『ノルテイツク』民族。第二は、露西亞、南獨、墺太利、匈牙利、瑞西、北伊、南佛に住へる、いはゆる『アルパイン』民族。第三は、小亞細亞より希臘、南伊、西班牙、葡萄牙、阿弗利加などを住居とする、いはゆる『メデイテラニアン』民族。この三大民族である。そしてこの三大民族は、人種が異るに從つて、その特徴と性情とを異にする。

米國への第一期の移民は、主としてノルデイツクであつた。かれ等が、互ひに、その生國と性情とを異にしながら、よく融和し來つたのは、邊境生活の陶冶にもよるが、またこの人種的近似にもよるのである。これに反して、第二期の移民は主として、アルパイン民族であつた。而して、第三期の移民は、メデイテラニアン民族を中心とする。移民問題が起るわけである。

その上に、事實においても、第三期の移民は、大たいにおいて、その素質もあまり上等ではなかつた。かれ等は、多く、經濟的移民であつた。『移民』といふよりも、むしろ『出稼人』であつた。たとへば、その代表的中心勢力たる『南伊人』を見るに、歸國者の數が、入國者の數の、三分の一に及ぶといふ狀態である。加ふるに、かれ等は、殆んどすべて、自由勞働者として入國する。その職業は、技術を要せざる、力仕事である。『米國の鐵道は、伊太利人これを造り、愛蘭人これを動かし、猶太人これを所有す』といはれてゐるのは、全くこの故である。大都市に入つて見て驚くのは、靴直し、パン屋、床屋、門付け、鋏磨屋、はては、バナナや蜜柑を商ふ露店商人など、ほとんどこれ愛蘭人である。その上、かれ等は怠慢である。泥棒をする、强盜をする。殺人をする。『米國の犯罪には、必らず伊太利人の血が混つてゐる』と言はれる位である。そして、尤も困つたことは、支那人よりも、同化し難いことである。紐育では、支那人街とならんで、伊太利人街が、不潔の問屋である。シカゴでは、社會問題とは、伊太利人問題であると、いはれてゐる。

かくの如く、移民問題とは、一面においては、人種問題であ

る。少くとも、米國人の眼には、人種問題として映ずる。邊境生活者の子孫たるノルデイツクが、非邊境生活者たるメデイテラニアンを、『非米國人』として排斥することである。坩堝の火の消えたるいま、『同化』といふことは不可能である。そこで、移民排斥、移民制限。——それが米國の苦肉の策である。

一五

一種の社會運動として、ク・クルックス・クランを観るとき、そこに現代米國の中心があるではないか、とさへ考へられる。クランが、サイモンズの手によつて、アトランタに起されたのは、一九一五年十月十六日、十年まへのことである。しかし、それが、社會運動として發足したのは、エドワード・ヤングが、その執行委員長として就任した、一九二〇年からである。この五年間において、このケー・ケー・ケーは、會員數百萬、その勢全カソリックに當るとさへ言はれてゐる。社會運動として、かくの如き、長足の進歩を見せたものは、ほかに一つもない。

ケー・ケー・ケーは、その當初において、殺人私刑の脅怖的、秘密結社として、世に知られた。日本においては、現在もまだ、さう考へられてゐる。事實さうであつた。あの白裝飾が、見るからに、人を脅迫する。これに挑戰したるニウーヨーク・ウオールドは、一九二〇年十月より、一九二一年十月まで、一年の間に、クランの犯せる犯罪は、殺人四、四脚切斷一、強酸火傷一、笞刑四十一、タール・エンド・フエザース（常習の私刑）二十七、誘拐五、個人脅迫四十三、ポスターにより町村を脅迫すること十四、覆面にて脅迫的示威運動を行ふこと十六に及ぶと傳へてゐる。

しかしながら、ク・クルックス・クランは、その會員數が增加し、社會的勢力が盛んになるに從つて、かゝる脅迫的秘密結社の色彩を、次第に洗ひ清めた。これを政治運動として見るに、市長や、判事、はては上下院議員、知事などの選擧に、公然と三K團候補として、現はれるものが生じた。或るものは成功し、或るものは敗れた。しかし市町村の自治團體に、クランの勢力が、根深く入りこんだことは、爭れぬ事實である。わたくしは、デンヴア市において、市長はもとより、巡査、使丁の末にいたるまで、クラン團員ならざるなし、といふ話をきいた。ケー・ケー・ケーは、すでに有力なる社會運動となつた。

然らば、ケー・ケー・ケーとは何であるか。これ『百パーセント米人』を標榜する『邊境生活者』の團體である。すなはち、クラン團員たるべきものは、『米國生れの、白人、新教徒』でなくてはならぬ、といふのである。言葉をかへれば、第一期移民

の子孫である。これに、蘇、英、獨、蘭、瑞、那、佛などの、第二期移民が入る。そして、かれ等は、昂然として、カソリツクと猶太人とに挑戰する。

　ケー・ケー・ケーは考へる。――米國は、われ等の祖先たる新教徒が、開拓したる土地である。われ等の祖父は、苦しい幾百年の邊境生活によつて、この米國の『土』を開發した。米國の土には、われ等の祖父の、血と汗とがにじみこんでゐる。米國はわれ等の米國である。人口にしても、われ等新教徒は、全人口の半以上を占めてゐる。しかるに、米國を動す實際勢力はなにか。權力はすべてウオール・ストリートに集まる。これを支配する資本は、カソリツクにあらざれば、猶太人ではないか。その中堅は、ロツクフエラーの所有するスタンダード石油會社と、モルガンの代表する銀行團とが、掌握してゐるのである。米國ぢうのデパートメント・ストアで、猶太人の息のかゝらぬものは、唯一つしかない。學界においても、政治界においても、法曹界においても、同樣のことがいはれる。而して、米國人の元祖たる、而して米國の所有者たる、新教徒は如何。かれ等に甘い汁を吸はれつゝ、營々として、經濟上最も割のわるい農業に從事してゐる。そしてかれ等の驅使に甘んじてるのである。われ等はこゝに、團結して立つて、社會的實勢力を、本來の米國人の手に、奪ひかへさねばならぬ――と。

　社會運動としてのケー・ケー・ケーについては、いづれ稿を更めて、讀者に見ゆる機會があるであらう。たゞ三ケー團が、米化運動の最も露骨なる選手として、いまや消え去らんとする『坩堝』の火を、かきたてつゝあるものなることは、この際注意を要する點である。

一六

　排日問題に關する考察も、これを他日に讓らねばならぬ。しかしこれも、殘念ながら、非邊境者排斥の、一表出であることは、いふまでもない。もとより日本の移民を、伊太利移民と同一列におくわけではない。その代りに日本は、太平洋を隔てたる隣強である。米國ほど、『土地』に對して敏感なものはない。かれ等は、邊境生活者の常として、『土』には人しれぬ愛着をもつてゐる。この祖先の紀念物が、他人のしかも隣強の蹂躙にまかせられることは、堪えられぬ苦痛である。排日問題の裏には、たしかに、日本が强國であるといふ事實と、この奇しき『土』に對する愛着の心が、蟠つてゐるものと考へられる。

　結末を急ぎ過ぎるかも知れない。しかし、要するに、現代の米國人なるものは、「米國化」の問題に、心を惱ましつゝある結

神病患者であるとしか考へられない。それは、邊境生活者の、か消え去らんとする『坩堝』の、火をかきまぜる悲哀である。火が燃えつくか、燃えつかぬか。それが問題である。

米國は、一方において、この人種問題に悩まされつゝあるとともに、世界の大戰は、米國を、一躍して、世界の成金國たらしめた。ウオール街に積み上げた、百億のピラミツトは、その資本的『邊境線』を、さらに西方へ、（或ひは東方へ）移動せしめうるの可能性を與へた。それは、もはや、大地との格闘ではない。しかし、かれ等の心臓には、邊境生活者の血が流れてゐる。その血が、『ウエストワード・ホー！』と叫ぶ。その侵略が、野武士の如くに、奔放に、粗野に、無作法に、盲目的に、且つは實行的に、自由なのは、性情止むに止まれぬところである。英國の如くに、殖民地を經營しやうといふのではない。獨逸の如くに、國境的攻防戰に腐心するのでもない。それは、隆々たる筋肉で、土に鍬を入るゝバツクウツヅマンの帝國主義である。

これが、太平洋の隣邦、米國の現狀である。少くとも、わたくしは、米國を一巡りして、さう考へた。（完）

不景氣を最極點まで徹底せしめよ

法學博士　堀江歸一

不景氣は最極點か

大正九年三月の恐慌以來、我國の經濟社會に襲來した不景氣が今日に至つて、依然其趣きを更めず、不景氣の狀態の益々濃厚と爲り、其影響の愈々深刻と爲ることは、吾人の經驗する所である。景氣が何時に至つて、恢復するかと云ふことも、隨分古い問題であるが、實際に景氣の恢復せざること、今日の如くである以上は、此問題は何時までも未解決の儘に殘されざるを得ない。或は不景氣が其最極點まで、市井に行はれる言葉を以つて、之を云へば、其ドン底まで行き着いたならば、軈て景氣

の恢復を期待するを得るでありとするのも、一ツの考へ方には相違ない。今日の經濟學に於て、承認される經濟的循環期學說の教へる所から云つても、不景氣の最極點に達した後に來るものは、景氣恢復の曙光でなければならないのであるから、右の如くに考へることは、學說上に於ても、支持されるのである。唯現實の問題は我國今日の不景氣が其最極點とする所に推詰められて居るかどうかと云ふ一事である。

普通の道理なり、經濟的循環期の學說なりから考へると、不景氣と云ふ一の現象が永く經濟社會の趨勢を支配して、渝らさるが如きは、許されさる所である。我國現時の不景氣は大正九年三月に始まつたのであるから、本年本月に至るまで、恰も滿五年に達せんとして居る。滿五年の久しきに亘つて、經濟社會が不景氣の現象に支配されゝば、爲めに國民生活を疲憊し、困殺せしめることは、當然の道理としなければならないのであるが、其れにしても私は我國今日の經濟社會を以つて、不景氣の最極點に陷つて居るものとは考へない、不景氣は廣く社會に行き渡つたとか、其程度も亦強く爲つたと云ふもの丶、尙ほ經濟社會の狀勢を觀測すると、或る方面には不景氣を促す勢力の頗る強きもの丶あると同時に、他の方面には之を緩和し、遮斷する勢力も亦相當に動いて居つて、爲めに不景氣の最極點に達することを妨げて居るものと認められるのである。

貿易上から見た不景氣

貿易上の關係から見れば、我國の經濟社會が大たる壓迫を蒙り、不景氣の狀態に推詰められて居る事實の蔽ふ可からざるものがある。蓋し大正八年以來入超と爲つた我國貿易の趨勢は年を重ねて毫も更まらざるのみならず、却つて入超の增加を致し、殊に大正十二年度に於ては五億三千九百三十一萬三千圓、大正十三年度に於ては、六億四千六百十五萬七千圓の多きを數へ、一方に貿易關係以外の方面に於ける我國の受取勘定は歐洲戰時に於ける好況時代に比較して、著しき遜色を呈し、最近一兩年間に於ける受取勘定の純額は一億數千萬圓に止まるとすれば、實際の入超額と此一億數千萬圓との差額は、我國の決濟せざる可からざる對外債務であつて、其れだけ我國の有する正貨に減少を來すのが當然である。

國際貸借の關係が一國に逆と爲り、斯くて生ずる債務を決濟する爲めに、其國から外國に向つて、正貨が流出するに至つたならば、其國に於ては、必ず不景氣の現象を生じ、又之を濃厚ならしめるのである。蓋し今日如何なる國の貨幣制度に於ても、通貨並に信用の基礎と爲るものは、金貨に外ならないので

あるから、其金貨が外國に流通すれば、必ず通貨の減少と信用の收縮を惹起し、金利歩合の騰貴、貸出資本の減少有價證券市價の低落等幾多の方面に亘つて、經濟社會に不利の事相を惹起し、不景氣の現象を醸成する。而して今日の我國に於ける如く、貿易の逆勢が數年に亘つて繼續し、然も貿易外の受取勘定は僅少であつて、之を決濟するを得ないとすれば、不景氣の狀況が其最極點に達しても、別に不思議はないのである。

不景氣の徹底せざる事實

然るに實際問題として之を考へると我國の不景氣に對しては其徹底を妨げる幾多の事實がある。不景氣であれば通貨の收縮するのが當然であるのに日本銀行の銀行券發行高に就て見れば

大正十三年十二月末	一、六六二、三三五、三三六円
前　年同月末	一、七〇三、五九六、五三二

であつて、僅々四千一百二十八萬一千二百八十六圓の減少を告げて居るに過ぎない、而して信用に於ける伸縮を見る爲めに、全國交換所組合及び、代理交換銀行の諸勘定を擧げると、

	預金	金銀在高	
大正十三年十二月末	五、一三四、〇三二千円	三六三、八四千円	一〇九
前　年同月末	四、九六八、九九九	三五三、三九〇	一〇五

であつて、信用の膨脹の著しきを認める。

斯の如く通貨と信用との膨脹依然たる以上は物價の低落しないのは當然であつて、日本銀行の調査に係る指數に就て見ると、

大正十三年十二月中	一八二、四五
前　年同月中	二八、四四

であつて一年間に些少とは云ひながら若干の騰貴を示して居る。

不景氣の徹底を妨げる所以

以上の諸數字に就て考へると、我國に於ては、不景氣と稱されながら、又國際貸借の逆勢に依つて、內國の經濟社會に壓迫を感じながら、通貨は減少せず、信用も收縮せず、物價も低落せず、盡く不景氣事相を裏切つてゐる。如斯は要するに不景氣の現象の社會到る所に及ばず、其徹底を缺くの證據であると云はなければならない。然らば何故に斯く不景氣が數年の久しきに及びながら、尙ほ其徹底を缺いて居るのであらうか。私は其原因として、我國の正貨政策と財政策とを擧げるに躊躇しない。之を個條書にして見れば

第一、外國に正貨を置いて、對外支拂を付け、如何に對外支拂が加重しても、國內の正貨準備に取付を生ぜさらしめ、

第二、在外正貨に減少を來せば、政府自ら外債を發行し

り、政府管轄下に在る銀行や會社をして外國に債券を賣出させたりして、在外正貨を補充し、

第三、金輸出の禁止は之を繼續して、國内の金貨に對して取付の起ることを防止し、

第四、斯くて銀行券の自働的に收縮する道を絶ち、諸銀行をして之に安んじて、信用を膨脹せしめ、

第五、財政は飽くまで之を放漫にし、整理と稱しながら、經費に著しき縮小を加へるに至らない。

諸點は即ち其れに當るのである。經濟社會が不景氣であれば、之に伴うだけ、財政が緊縮されてこそ、不景氣が徹底する次第であるのに、我國に於ては、經濟上の景氣不景氣に拘はらず、財政は膨脹して、其極まる所を知らない。斯くては財政上に於て、物資や、勤勞の需要されるもの甚だ多く、物價は騰貴すれば、賃銀も上進し、是等の關係は盡く不景氣時代の事相に逆行し、不景氣の徹底を妨げることゝ爲つて居るのである。

故に我國の經濟社會に不景氣を徹底し、不景氣をして其最極點に上らしめようとすれば、正貨政策並に財政策を更新するとを以て其捷徑とするのである。即ち金の輸出は之を解禁し、正貨は或る程度まで之を外國に流出するに任せ、正貨の減少する如く通貨を縮小し、通貨縮小の結果、市中諸銀行をして其信用を收縮せしめる一方に、財政上に於ては、從來の積極政策から、消政策に一轉し、經費に一大緊縮を加へる。斯る政策にして適應なく、決行されたならば、不景氣は必ず其最極點に達し、最極點に達した結果として、軈て恢復の機運が其處から開かれるである。

荒療治に對する恐怖

然しながら右の如きは經濟社會に對する外科的療法であり、荒療治である。政府に餘程の決心がなければ、敢行されることを望むを得ない。荒療治の行はれる間に、物價下落の爲めに、生産者問屋殊に多量の物資を所藏する者が意外の損失を蒙つたり、彼等に資金を融通する銀行が貸付金の回收難に陷つたり、資金の融通が梗塞して、物質の投資を促したりしたならば、經濟社會に如何なる破綻を生ずるであらうか、抑も亦今日以上に不景氣の勢を甚だしからしめたならば、國民生活を舉げて、危殆ならしめる恐れなきを得ないであらうか。是等の恐怖は政府を驅つて、不景氣時代に處する經濟財政上の政策をして、常に曖昧のものたらしめる。不景氣なるが如く、不景氣ならざるが如く、不景氣が數年間繼續して、倘ほ其最極點に達しないと云ふが如きは、要するに不景氣の徹底を妨げる政策の時々行はれて、已まざる結果である。

景氣恢復の道程如何

如何にして不景氣の狀態から逸脫して、好景氣時代を迎へるを得るであらうか。經濟的循環期の學說から云へば、不景氣の最極點に達しなければ、景氣恢復の時代に達しないのであり、隨つて不景氣の最極點に至ることを妨げられて居る我國は何時迄も景氣恢復を迎へる能はざる道理と爲る。唯玆に一の望みを囑されるのは、外國經濟社會の情勢であつて、殊に我國輸出貿易の大宗たる生糸の需要地たる米國の景氣が恢復して、生絲が往年の如き高價格を以つて、多量に輸出される一方に、世界經濟界の繁昌に伴ひ、我國の海運業が活躍して、運賃の收入を增加し、國際貸借に有利なる狀態が展開されるに至つたならば、不景氣は其最極點に達せずして、一掃され、景氣の恢復を期待し得るかも知れない。斯の如く爲れば、我國に於ては、不景氣は遂に徹底せずして、他に逸し去るのであつて、彼の英米兩國が千九百十九年以後に於て行はれた財政大緊縮に依つて、不景氣の如きは、遂に之を蒙らずして、終るを得るのである。然しながら外國の景氣恢復なるものが果して上記の如き有利なる作用を我國に及ぼすであらうか。人造絹絲の改良幷に發達が我國の生絲貿易に如何なる程度の打擊を加へるであらうか。我國の海運業者が戰時幷に戰爭直後の好景氣時代に於て、目前の利益に眩惑して、將來の計畫を顧慮せず、優秀船建造の如き重大問題を閑却して今日に至つたことが今後の海運業活躍に如何なる影響を及ぼすであらうか、共に考へ可き問題である。更に今米國と共に、我國輸出品の販路たる支那の市場の如き、外國借款が成立して、其借入に屬する資金が廣く撒布されて、始めて活氣を生じ、諸外國の物資に對する需要に增進を來すことを常とする一方に、歐米諸國の對支借款が殆ど停頓の狀に居ることを考へたならば、我國の輸出市場として、殊に我國の好景氣を刺戟する一助として、支那の市場に望みを繫ぐことも亦不可能であるやに考へられる。

斯の如く種々の方面から考へを進めて行くと、我國の經濟社會も不景氣が徹底して、其最極點に達した後に、始めて景氣恢復の緒に就くと云ふ普通の原則に支配されるのであつて、不景氣の徹底を回避しつゝ、尙ほ能く景氣の恢復を期すると云ふが如きは、實際に不可能事に屬すると云ふ結論に達するのではあるまいか。果して然らば從來の如く不景氣の徹底を回避する政策の行はれるのは、寧ろ經濟社會を誤るものであつて、不景氣は不景氣らしく、何處までも赤裸々に働かせて、早く其最極點に上らしめるのを得策とする道理が見出されるのである。

日露新協約によつて展開された新局面

日露基本協約と其齎らす可き利益

法學博士　米田實

一、

昨年二月芳澤公使及び勞農露國代表カラハン氏との非公式會見があり、五月以來公式交渉を開始し、その後屡決裂を告げ危機を唱へられて居た日露交渉は、一月二十日の會議に於て急轉直下、落着を告げた。是れ露國側が突如油田問題についてその利權五割を日本に讓歩するに同意し、又石炭地域に於てドウエ炭坑を含む封鎖區域二割の讓渡にも同意した爲めであつた。而して二十一日午前二時といふに日露基本協約、及びAB兩議定書、並びに附帶聲明書を含む日露協定は首尾よく調印を見たのであつた。

是時に當つて回顧すると日露復交交渉は可なり久しきに亘つたものであつた。即ち大正十年八月より翌年四月にかけて大連會議開かれ、その失敗に歸せる後を承けて大正十一年九月より同月末にかけ長春會議が開かれた。次で其翌年一月後藤子のヨッフエ氏東京呼寄せとなり、同子の斡旋により同年六月より七月に亘り東京會議は開かれたが、是亦成功するに至らなかつた。然かも此等の經驗を準備として行はれたのが此度の芳澤カラハン兩全權の北京會議であつたのである。斯く長き交渉の歴史に顧み、又た交渉の題目內容、交渉のやり振などその變遷を想ふ時、吾々は無限の感慨を催すと共に、亞細亞に於て隣接國たる兩國が遂に復交を見たることを慶賀するものである。而し

て斯の如き成績を收めたるについては、予は芳澤駐支公使の粘着力強く頗る堅忍である長所が、多大の貢獻を爲せることを認めない譯には行かない。固より芳澤公使は機智縱橫の士でもなく、又裁斷流るゝが如き頭腦明晰なる人物でもない、孰れかといへば氏は寧ろ智慧の廻り方が遲い方で、併しながらその人物が頗る堅實で且つ萬難に會して屈せず撓まさる所の根と鈍とを兼ねたことは甚だ失禮の申分ではあるが、今回の會議を成功せしむるに與つて力あつたことを拒むを得無い。恐らくは露國側の代表者も芳澤公使の此『根』には相當の敬意を表しなければならなかつたであらう。併しながら今回の日露交涉成立の功を擧げて芳澤公使一人にのみ歸せんとするは當らない。相手方たるカラハン氏に於ても亦衷心この交涉の成立を希望して居り、特に最近此の希望を切實ならしめねばならぬ事情が露國側に發生せることも、見逝すべからざる事實と言はねばならぬ。思ふにヨッフエ氏の歐羅巴歸來後、從來外務次官たりしカラハン氏が極東に派遣せられたことについては、二個の使命があつた、即ち其一は支那との國交恢復であり其二は日本との國交恢復であつた。支那との國交恢復は昨年五月成立を見、殘るは我日本との復交交涉である。之を成功せしむると否とは蓋しカラハン氏自身としても、その將來の運命に關する所であつた、由來勞農政府は交涉の成功不成功によつて、その當事者の地位[illegible]を極めて雜作もなく變更するからである。殊に日露關係はヨッフエ氏によつて大體の基礎を作られて居ることでもあり、旁々今回は必ずその成功を期せねばならぬ事情にあつた、尤も氏も久しく強硬の態度を持したには違ひ無い、然かも是れ已むを得ない所であつた。蓋し日露間の最難問題は利權問題であつて、その讓渡については我日本側は彼の尼港事件の賠償なりとの見解を持して居た、この觀念は我官民の頭腦から離れなかつた。假令表面の形式が如何になるとも、實質的には尼港事件に對する賠償だと云ふ觀念が充ちて居た、然るに露國側では之に反し尼港事件を殆ど眼中に置かなかつた。即ち彼等より云へば尼港事件も惡いが、殆ど之と相似たる不人道的行動が日本軍によつて、屢西伯利に行はれたので、是等を相殺し得ると考へ、又たこの尼港事件の發生が日本軍警備區域に屬せしことを指摘し、この意味に於て露西亞側の責任極めて輕しと見て居たのである、彼の露國全權が尼港事件に對し日本に陳謝の意を表するに至つたなども、これヨッフエ氏が東京滯在中日本に於て尼港事件を頗る重大視せられて居る實狀に顧み、陳謝のみは國交成功の法策として已むを得ずと看取し、本國に報告せる結果に外ならなかつた。從つて斯くの如く尼港事件を輕視して居る露人から言ふ

と同事件賠償の意味に於ける利權讓渡などは全然論外と思つて居たのである。加ふるに現在露國々內には依然として國權論强く、然かも今日過激派は七十萬人の少數を以て一億三千萬の大人口を支配しつゝあるので、多數民論の滿足を買ふにあらずんば政權の維持も又困難である。そこで彼等も近來國權論に重きを置くことにかはつて來た、その現はれの一として露西亞、羅馬尼間のベッサラビヤ紛爭問題の如きそれである。形勢斯の如くなる以上、彼等が北樺太利權讓與問題に對して、一應相當强硬態度に出てたるもの、又た國內國權派に對する內政策として當然なるを看取するに難からぬのである。然らば則ち今回會議の最後に及び急にカラハン氏が讓步の態度に出でたのは何故であつたかと言ふに、一は昨年十月英國總選擧に於ける勞働黨の失敗、統一黨の勝利に續き十一月保守黨內閣實現し、爲めに同年八月成立の英露條約の破棄を見たためである。即ち之が爲め露國は國際的地位を薄弱ならしめ、自國民の前に過激派政府の地盤をも幾分脆弱ならしめたのであるから、この際東洋の雄邦日本と復交を策することは、幾分弱まりかけ衰へかけつゝある聲價を取戾す手段として、最も良好なるものゝ一であつたこと疑ひが無い、更らに、他の一と言ふのは過激派部內に近頃分裂の形勢あるので、現在政府を支配しつゝある階級が自派に對する人民の信用を贏ち得る爲めにもその外交的成功を必要なりと考ふるに至つた點である。それは何乎と云ふと、一昨年秋來トロツキーを中心とする一部が、ソロ〳〵とレニン。リーコフ。ジノヴイエフ。カメネツフ。スターリン等の專制的遣り口に不平を唱へ、漸く非難の聲を高めつゝあつた。從來過激派中にあつては不平非難は絕對に禁物とされてあつたがそれにも拘らず、不平者は此信條を破壞しつゝあつた。而して此間トロツキーの所謂社會革命の教訓と題する論文著述の發表を見るに及んで、一層物議を釀するに至つたのである。過激派政府に於ても從來トロツキーは久しく同國陸軍の中心として、功勞極めて顯著なるを考へ之が排斥に躊躇して居たのであるが、遂に政治の大方針に動かされて、最近彼を軍隊より引放し、孤立せしむるを今日の急務と考へ、今や之を高加索に流竄し陸軍統率權は之を他の手に移したのである。然もトロツキーには相當の部下もあり、その境遇に同情し味方する人物も亦必ずしも少ないとは云へない。從つて之で過激派內の內訌終熄すとも思はれない。されば政府に立ち政權の中心人物たるリーコフ以下は、此際何等か外交的成功により自己の聲望を高め勢力增加に努めんと焦慮しつゝあつたこと、掩ふべからざる事實である。而して斯の如き內政上の事情も又た日露交涉の衝に當るカラハン氏を刺戟し、急

に之を讓歩せしめ契如協約を成立せしむるに至つたことも、亦た想像に難からざる所である。

併しながら事情何れにありとするも日露復興は遂に成立した。吾人は一九一八年（大正七年）春まで良好なる關係にありし面積八百萬方哩の大友國と、今茲に再び從前の親交を温むるに至つたに就ては、是れ誠に大正十四年劈頭に於ける愉悦の一と云はなければならぬのである。

二、

然らば此の日露條約の結果兩國に及ぼす影響如何、世間では之につき我日本の受くる利益頗る大なるを說かんとするもの多いが、吾人は同時に露西亞側が受くる利益決して尠少ならざることを知らねばならぬ、その第一は、日本の承認に依つて露國の國際的地位がそれ丈け向上し、又た露西亞は此新發展をその國際的活動に利用し得る立場にあることであらう。蓋し、露國は大正九年エスニア、リボニヤの承認を得、その秋に於て芬蘭の承認を受け、翌年波蘭、トルコ、ペルシヤに承認せられ、爾來獨逸、伊太利、佛國、英國その他の承認を得、今日何等彼と關係を有せざる國は僅かに米國羅馬尼等數國を數へるのみとなつたのである。併し昨年末英國の態度變更したのと、並びに佛のエリオ內閣が昨年十月承認を與へたものの、爾後佛國國內における露國側の宣傳問題やら、ミルラン、ポアンカレー等守舊的勢力の擡頭やらで、佛露の親近行惱んで居る折柄、否な、兩三年前までは極めて親善なる關係にあつた、土耳其までも最近疏隔し來つた折柄日露復交の成立を見たのは勞農政府にとつて、價値頗る大であり、且つ之を外交上に利用し得る機會も極めて大なることを思はねばならぬ、即ち日露交涉成立後露國外務委員長チチェリン氏が之を以て單に復交たるに止らず日露提携若しくは日露支提携を含む如く宣傳的に且誇張的に言明せることなども、少なくとも以上の點を反映せるものと觀る可きではあるまい、乎就中我日本側に取りては多少迷惑に感ぜられないでもないが、露國側に於ては日露の接近を基礎とし、之を利用して歐羅巴米國等に對し一の威嚇を爲し得る便宜な境遇に立てることは否認するを得ない所である。即ち露國は之を英國及佛國の牽制、その反露的態度の沮止に利用することもできれば、又米國の神經を刺戟し之をして親露主義に向はしむることもできる。殊に英米佛人の頭に久しく一の危險なる可能性として描かれたるものは、日露獨支の聯合である。既に過去にて現はれた日露獨同盟說の如きも、歐米人疑懼の反映である。斯の如き背景あり（此背景が實際上何程の價値ありや否やは別問題として）

斯くの如き心理を有する歐米諸國に對し、露西亞が日露復交を利用し得る便宜の地位にあるは疑ひなき所と云はねばならぬ。

次はベツサラビヤ問題である。今回の日露協約は兩締約國が相手國の主權領土權を侵害若くは脅威するが如き條約密約を、第三者との間に現實に締契し居らざることを相互に聲明すと公言した。即ち日本側から云へば露西亞の領土權を危くするが如き條約を、他の國との間に有つて居らぬことを明言したのである。之は主としては露人に誤解せられて居た日佛密約說の否認等をも意味するが、予は之が矢張りベツサラビア問題に關係あることを思ふものである。否な予は我日本として今少しく明確な約束を露國側に與へて居ると信ずべき理由があると思ふ。是れ豈目下羅馬尼とベツサラビア領有權を爭つて居る露西亞に取りて頗る有利な一事ではあるまい乎。のみならず、之に依つて國內民衆に對する現過激派政府の地盤と立場を强からしむる材料の一ではあるまい乎。抑もベツサラビヤは、露西亞ォデツサ市の西方黑海に沿へる面積一萬七千方哩人口二百萬の地域であり、從來露西亞領土の一であつた。唯だその人口統計を見ると羅馬尼人四割七分六厘を占めて第一位に居り、露西亞人は二割七分八厘を數へて第二位に居り、猶太人一割一分八厘、勃牙利人五分三厘、獨逸人三分一厘、トルコ人二分九厘と云ふ順序になつてゐる。そこで羅馬尼は民族主義上、又た伯林條約以前自領たりし歷史的關係上、之が領有を志して種々策動を行ひ、遂に大正七年（一九一八年）三月ベツサラビヤを自國に併合せしむるの決定を爲したのである。云ふまでもなく決定の基礎は民族主義に基くものであつて、ベツサラビヤ住民は羅馬尼人多しと云ふ根據に立脚せるものであつた。然るに露西亞はこれを承認しないのである。而して久しく紛糾に紛糾を重ね昨年ウインナ會議を開いて、露羅兩國間に交渉を行つた。即ち羅馬尼は戰爭中露西亞側に移された羅國の金貨に對する主張を拋棄する代償として、露國にベツサラビヤ併合を承認せしめんと主張したけれども、露國は承諾し無い。露西亞側の主張は如何と言ふと、ベツサラビヤが歷史的に露西亞の領土であつたこと、同地の人心は決して羅馬尼との併合を希望し居らざることを說いて、宜しく民族自決の意味に於て人民投票に附し、その所屬を決定せんことを主張して居る。同時に、羅馬尼は此人民投票說を拒絕し紛糾は繼續されて居るが、唯此間に於て羅馬尼が一の根據として握つて居る所のものは、一九二〇年巴里聯合國最高會議に於て、羅馬尼のベツサラビヤ併合承認の決議を爲せることである。而してこの巴里決定は我日本でも略採用せざるを得ぬ義理に相成つて居るが、今回の日露條約に於て日本が大體羅馬尼の

ペッサラビヤ併合を支持せざるの意を露西亞に通じた一事は、是れ豈同國をして同問題に關して有利の地歩を確保せしめたものであるまい乎。

次は日本は自國内で現過激派政府顛覆の陰謀を爲す團體に對し、之を禁遏若くは放逐するの義務を負ふこととなつた、這は露西亞側に取り頗る有利なる約束と云はなければならぬ。（即ち日露條約に於ては兩締約國は自己の領域内に於ける、相手國の政府を潜稱する團體若くはその代理者の政治的活動を許さゞることに同意すると約束してゐる）。顧ると日本は久しく西伯利に於て反過激派を後援した、即ちコルチヤック。セミヨノフその他を支持しつゝあつたのは誰も知る所であり、同系統の面々が此處に少からず潜入し得ることも疑ひない。若し日本を根據として是等の團體が活動し、西伯利に叛亂内亂を企つることゝならば、露西亞に取りて不利益なるは論ずるまでもない。今やその機會が條約の規定に於て絕滅することゝなつただけでも過激派政治が極東西伯利方面に於て、比較的安泰になつたと認めても宜い、尤も本規定は露西亞にのみ有利だといふ譯ではない、露西亞側でも日本の政治に反對する陰謀團體の活動を取締る義務を負ふたのである。例へば朝鮮の獨立を圖らんとする團體等の西伯利を根據とせるものなど是れである、既に露西亞が是等の朝鮮人團體を禁遏する行動を執つたと新聞に報道せられてゐるなど、此規定の「先き奔つた」反響の一つではあるまい乎。

以上に擧げたものは露西亞に取り有利な點に相違ないが、併しそれ等以上露西亞に取り有利なりとす可きものは、本條約の結果國内開發の大いに進捗すべき機會の作られたことであらねばならぬ。何となれば同國は面積廣大なるに對して人口極めて少なく、富源豐富にして眞に惠まれたる國土であるが、然も現狀のまゝに放任されては容易に開發さるべくもない、孰れ外國の援助に俟たねばならぬからである、蓋し五年に亘れる世界大戰の結果同國の各種生産機關及び設備は破壞された。這は獨り露西亞のみのことでは無く他の國に於ても屢々認める現象であるが、殊に戰爭中にして革命の勃發に會し、國内紛亂の巷と化し、生産的經濟機關は益々滅茶々々にされて了つた。今日之を恢復せんとせば到底國内の力のみでは不可能である、一日も早く外國資本を招致すると共に、生産業の發達に必要なる機械類を輸入しなければならぬ。獨り資本と機械のみならず專門的知識をも要する、而して極東西伯利方面に於て此點の欠乏とその要求の切なるものがあるのである。此點は故レニンの如き又は現外務委員長チチエリンの如き、皆齊しく承認するに吝かならざる所であつた、何となればレニンは大正十年三月莫斯科に

開かれた露國共産黨第十回大會に於て演說し「我が破壞せられたる工業の恢復は吾人のみの力を以てしては駄目である、速かに海外より機械及技術的援助を輸入し來るにあらざれば經濟的改造は不可能である」と述べてゐる、外務委員長チチェリン亦同年七月に於て「露國今日內政外政々策はその中心とする所一に國內生產の發達にあり」と聲明し「國內生產の發達の爲めに吾々は外交に向つて大いに努力しなければならぬ」とて海外の力を輸入することの必要なる所以を力說した。而して歐露にありては歐羅巴諸國の力は容易に輸入し得るであらうが、極東にありて露西亞に力を貸與し得る國は果して何れであらうか、恐らく我日本であらう、これを外にしては米國がある。併し米露關係は未だ恢復せず、日本先づ力を西伯利に注ぐことゝなつた、この點に於て露西亞の希望に副ふ機會の實現したことは識者を俟たずして明かなる所である。これ恐らく露西亞が今回の協約によつて受くる重大なる利益として最後に擧ぐべきものではあるまい乎。

三、

然らば我日本は如何なる利益をこれより得るであらうか乎、吾々は先づ劈頭に一寸極めて平凡な議論を繰返さなければならぬ。平凡な議論とは何乎、即ち我日本は領土狹小にして人口多く、一平方哩四百人を算する有樣で、米國が一方哩三十六人を數へ濠洲が同じく一人十分の八、西伯利が同じく二人を算するに對して甚しき逕庭がある。斯の如くにして我日本は生活益困難であり、國內不平の聲充滿せる現狀である、これが救濟策としては海外に移民を送るのが一案ではあるが、それより一層重大なるは多數人口の支持策として國內に於ける工業を隆盛にすることである。而して工業を隆盛ならしむるには原料品を必要とするが日本國內には原料品がない。茲に於て支那若しくは西伯利大陸に求むるを急務とすると言ふ議論がそれである、斯の如き議論は吾人屢主張し、世人亦常に說く所であつて、今更ら繰返すの煩に堪へないが、併し平凡なる議論と雖も眞理は飽くまで眞理である。果して之が眞理なりとすれば今回日露條約によつて面積五百萬方哩に近く未だ開拓せられざる無盡藏の西伯利の富源が、日本の爲めに開發せられたることは、我國に取つては極めて重大なる寶庫の開放でなくて何であらう。否なそれのみに止まらず觀方によつては今回復交の結果は、獨り十二州を含む俗に云ふ西伯利だけに局限せず、歐露をも合した八百十萬方哩を目的地となし得ることを忘れてはならぬ。假りに西伯利だけとしても彼の世界の富國と稱せらるゝ米國に對し十對十六

の比率に在る此廣き面積を有する大地が我邦人の前に展開されたことは決して輕視すべからざる問題であつて、巧みに之を利用するに於ては、吾々が長く難問題視せる案件は、玆に解決の端緒を開くに至るは疑ふ餘地なき所である。併し大體論はこの位にしておき、更に進んで條約の規定を檢し二三の物資問題につき具體的に研究せば如何であるか、その第一は言ふ迄も無く樺太に於ける石油石炭問題であらう。

今回の日露條約によれば露西亞は條約議定書に於て、日本全權の覺書に載せた北サガレンの各油田地域の五割開拓權を日本に許與し、右油田區域を劃定するため各油田を碁盤形方形地區に分割し各方形地域五割を以て日本の利權區域とすることを約束せるのみならず、樺太東海岸に於て約一千平方露里の地域に亘り、日本政府の指定する官業團に開拓權を附與し、開拓後の發見產油地はその面積の五割を我に許與することを約し、開拓租借地期限は四十年乃至五十年たることをも定めたのである。

この石油利權の許與は我國に取つて最も重視しなければならない所である。何となれば日本は石油產額に於て最も不振の國であつて、年產額僅かに百六十萬石見當である、曾て戰爭當時は一年二百六十萬石を產したることあるも斯の如きは例外である、此の產額と今日世界に於ける石油產額とを比較する時は漸く百分ノ一にしか達して居ない、現在世界の石油產額は十億樽に上り、其中の七割三分は米國に於て產出し、一割五分はメキシコに於て產出してゐる、即ち米國並に其勢力範圍最も優勢を示すの狀勢だが、日本になると僅かにその中の一千萬樽を產するに過ぎない。之では今日自國內の需要額をも充すこと能はず年々約五百萬樽を海外より輸入する有樣である、然もその輸入しつつある相手國はどこか、米國若くはボルネオ等ではないか、即ち太平洋に於ける日本の競爭國たる米國のスタンダード會社等の厄介になつて居るでは無い乎、這は日本として極めて忍び難き點であると云はなければならぬ。殊に此の石油は海軍に取り最も重大なる需要物である、從來船舶は石炭を燃料とし航行してゐたのであるが、大正元年丁抹汽船ジーリアンデア號が石油を燃料として歐羅巴を出發し、印度に至り歐羅巴に歸航し、然も途中一回も積込む必要がなかつたので、石油と度々積込むを要する石炭との比較は之によつて最もよく世間に知られたのであつた、そこで船舶は石油を用ふるを有利と斷ぜられ、就中戰爭に從ふ軍艦に於て最も石油を重視するに至つた。然も我石油產出狀態や右の如くである、是れ何たる慘憺の現狀であらう乎、この場合石油產地として最も有望なる北樺太に於て、今回露西亞より約五割の利權を得たことは、日本石油政策の將來に取つ

て、一大福音と云はなければならない。尤も北樺太の石油産額は今日未だ非常に豐富なりとは云へない。同事業は主として北辰會の手によつて經營されて居る。北辰會は未だ北樺太油田が日本軍隊に占領せられざる時代に於て、露國會社スタヘイエフ名義を借り既に採油に從事し、我軍隊占領後は一層活躍を續けてゐたものである。その油田の面積はオハよりガタムニーに至る約一萬三千英町であつて油田、は約八箇ある、即ちオハ。ヒリツン。エハビ。ヌトー。チャイオ。ヌイオ。ウイグレック。カンタングリー等が重なるもので、目下の日本從業員は夏期四百人冬期八十人位である。而してこの八箇の油田は未だ悉く産出すると云ふ譯ではない。從つて現在の出油狀態は未だ十分ならず、一日の産出三百石餘に過ぎない。然しながら問題は現在の事業ではない將來の事業である、從來學者その他の調査により樺太が石油の豐富とせられある以上、今後開拓の途宜しきを得るに於ては、必らず我石油政策の解決に大なる貢獻を爲すであらうと思ふ。

北辰會の油田問題に就ては尚種々の研究施設を要する點がある、例へば北辰會と露西亞會社スタヘイエフとの關係の如きそれであるが、這は要するに末節であつて樺太油田が有望なる以上、我石油政策としては今回の條約規定を歡迎しなければならぬ。殊に吾々が石油問題に關聯し更らに今回の條約を喜ぶ所以は對米關係に存するのである。米國は今日世界の石油界に於ける王者である、今より約四年以前の形勢に於ては、世界石油産額は約七億樽であつた、その當時米國は既に四億六千萬樽を出し、毅然として世界石油産額の第一位に居たが、然も尚ほ國內需要は極めて大なるものがある、自動車のみにても約一千萬臺を有し、之に應ずる石油は年額約一億五千萬樽に達する。世界に於ける石油消費人頭割を見るに、一年一人十四ガロンであるが、米國は實に二百二十ガロンを數へ他國の十六倍に上つて居り、その需要數量は五億二千萬樽を唱へ、到底國內産出を以て充すること能はず、右不足分は之を隣國メキシコより補給せしめて居た、メキシコの石油事業は米國諸會社の經營であり、年産額一億二千萬樽に達するので、自國の不足分六千萬樽を補給し殘餘は世界に輸出してゐたのである。ところが其後世界石油産出は增加し一九二三年の統計によれば、世界の石油産額は十億一千四百四十一萬樽となつたが、その中米國の産額は實に七億三千五百萬樽を占め隣國メキシコは一億五千萬樽の多きに達し、依然として石油界を支配するの實情にある。然れども目下斯の如く景氣の極めて盛なる米國石油界に取り一の悲觀原因を作らしむるものがある、それは米國地質學者の國內石油資源の

報告であつて、彼等は其調査の結果米國にして現在の率を以て石油を採取して行くに於ては、向ふ二十ケ年にして涸れ盡すべしと言明せることで爾來米國石油業者等は大いに驚き、世界到る處に石油を求むるの策に出で、今やメソポタミアに於ても英國と石油を爭ひ、ペルシヤに於てもシンクレア會社スタンダード會社等漸く侵入し來り、而して樺太に對しても石油採取の計畫を始めたのであつた。米國シンクレア會社が樺太石油に手を染めた最初は、チタ政府のユーリンより得たる石油利權契約を第一とし、次で大正十一年末極東政府が勞農政府と合併すると共に、勞農政府より得たる北樺太石油採取利權契約が第二である。シンクレア會社と勞農政府との契約如何と見るに、樺太に於て約一千平方露里を利權區域とし、その期限を三十六ケ年とし、同會社をして油田を開發せしむることにしたのである。尤も之には條件が附されてゐる、即ちシンクレア會社より約二億五千萬弗の借款を露西亞政府に許すること、並に米國政府の露西亞承認等が根本條件の一であつた。この利權契約は一旦成立したけれども爾後そのまゝとなつてゐた、ところが前共和黨大統領ハーディング執政の内務卿たりしフオール氏は、シンクレア會社と聯絡を取り、同會社のために露西亞に赴き、大正十二年春恰もヨツフエ川上の交渉が東京に開かれた時代に於て、シンクレア會社の權利を確實にする運動をモスコーで行つたものであつた。若し今回の日露條約にして成立せずこれに先つて米國先づ露西亞を承認し、而してシンクレア會社にして樺太に手を出すこととでもなつて居たならば、我國は北樺太の石油利權を失つたのみで無く、更に一層重大なる影響として米國の重要なる事業的地盤を北樺太に作らしめたければならなかつたのである。樺太の面積は合計五千方哩、その南方二千三百方哩は日本領土にして、北方二千六百方哩は露領である、斯く狹き島嶼を南北に兩分して居るのさへ不自然であるのに、然もその北半に於て米國の重要なる事業的根城を作らしむることは、米國の外交が金權と密接なる所謂弗外交なるに照しさなくとも難問題蝟集せる日米關係に於て、如何なる難局を發生せしむるかは想像し得らるゝ所である。然るに今回の條約は大體に於て有望なる地帶の五割を我日本に附したのであつて、先づ米人の樺太に於ける事業策に大打撃を與へ、同時に五千方哩の狹き島嶼中で我領土と相接せる北樺太に於て、米國の地盤扶植を阻止せしめたるものと見なければならぬ。此點に於て大きく日米國交平和のために良好なる影響を生ぜしことは論を俟たぬ所であらう。尤もこれは我政府及び事業家の同條約規定の運用如何に關することで、全然米國の北樺太事業界侵入の機會を絶滅せしめたもの

とは云へないが、先づ大體に於てこの傾向を作つたものと見る可きであらう。

次ぎに吾々が別に有利と思ふ所のものは何か、樺太に於てヴセス石炭産地を含む一帶の石炭採掘權を、我に與ふる旨、日露條約附属議定書に示されたることである。即ち北樺太の特定地域に於て日本政府指定の官業團に石炭採掘權を許與し、右特定地域内に於てドウエ炭坑を含有することを承認すると共に、特定地域以外に於ても石炭採掘權を外國人に許與する場合には、日本人は機會均等權を有することが明言せられた。北樺太の石炭産出に關しては未だ石油程有望であるかどうか問題であるが、既に我三菱等が石炭採掘に從事せることは世間周知の事實であつて、茲に之を繰返す必要はないと思ふ。而してドウエ炭坑に就ては芳澤カラハンの交渉頗る面倒であつた、何となれば露西亞は國内に石炭を有すること多しと雖も、未だ開發せられず從つてその産出も十分ならざる結果、これが讓與については石油程容易に行はんとはしなかつた。露西亞は石油に於て有名なるバクー油田を有し、現に盛んに石油を外國に輸出しつゝある有様である。今日露西亞の對外輸出品は主として木材、石油、穀類等であることは世間の知る所である。斯の如くにして石油に淡泊なりしカラハン氏も、石炭に對しては案外強硬であつたが、然も最後の交渉に臨み遂にドウエ炭抗を讓歩せることは、周圍の事情之を援けたかも知れぬが、やはり芳澤公使の交渉良しきを得たる結果であつて、石炭採掘が今後何程の成績を收めるかは明言し難いが、少くとも日本の利益の一に數ふるには何人も異論を挾まぬ所であらう。

以上は單に樺太だけの問題について述べたのであるが、吾々は尚樺太以外に於て寧ろそれ以上に重要なる生産的立場、物資供給の立場より、重要視すべき問題は現西伯利本土でなければならぬことを知る。西伯利本土には森林がある、森林に就ては日本事業家も、從來幾分手を染め、殊には王子、富士製紙を始め樺太興業、福島武市木材等諸會社より成立する製紙團の活動したこともあつたが、これは其後事業蹉跌に會した。今依然として事業を繼續しつゝあるは、大倉組、東拓、秋田木材、沿海州木材等であるが、今回日露條約成立を機會とし是等の事業家即ち大倉組、秋田木材、東拓、樺太興業、日露興業、沿海洲林業、富士製紙等の代表者は、今や一致團結し日露林業組合を組織しつゝありとは、世上に傳へらるゝ所である。今までは無條約であつたり彼等の事業には何等適確の根據を有しなかつたが、今回の日露條約は露國領土内に於ける森林の開拓權を、日本國民若くは團體に對して附與することを約束して居るので、これ

も努力如何によつては相當の成績を收め得ると思ふ。啻にそればかりではない、日本に最も缺乏せる鐵の如きも、將來之を露西亞に仰ぎ得べきではあるまい乎。今日日本の鐵年產額は百萬噸内外に過ぎず、それも外國より輸入し來つたる原料を基として行はるゝもので、これでは單に平時の工業發達を望み得られざるのみならず、一朝有事の際には手も足も出ないであらう、現代工業及び戰爭の如き場合に最も必要なるは鐵と石炭である。獨逸が彼の世界大戰を行ひ得たのも亦平時に於て大なる工業上の發達を見たのも、國內に於ける年額二千八百萬噸の鑛鐵を有せるが爲めであつたことは何人も知る所である。吾人は今回の日露條約によつて將來鐵其他の原料を、我日本と衝突すべき狀態に立つて居ない友邦露西亞の、ウラル山その他の方面より之を得る機會を造つたのを喜ばねばならぬのである、併し更らに考へねばならぬのはウラルなどの遠方で無く、東部西伯利亞にも鐵石炭を有すること是れである。唯現在では交通機關發達せず、事業家の活動無き爲め、その產出を見ないのに過ぎぬ、例へば交通機關不完全なるが爲め彼に鐵鑛あり之を取るとしても、運輸の費用を要して採算引合はざる結果、遂に放棄せねばならぬ。併し長き將來に於ては決して斯の如き狀態が繼續せらる可きではない。必ず漸次發達し來るに相違なからう。彼の今日世界に富源第一を誇る米國と雖も、最初より今日の如く盛んに鐵石炭を產出した譯ではない。最初は運輸に比較的費用少いので割の善い金の採取が行はれた、其間交通機關發達し輸送費も極めて僅少となるに至つて、他の重く價値少なき鐵石炭が出ることゝなつた。世人は今日、西伯利に產出するものは金であると云ふ、是は金が運輸の費用少なく、交通不便なる所にて採取するも割合良き爲めに外ならない。今後交通機關の發達に伴ひ他の重くして價値廉なる物質の產出され來るは、自然の道程であらねばならぬ。從つて我國人は相當に決意し、適當なる計畫を進めて、西伯利の鑛物採取に雄躍するの策を定むるのが大切ではあるまい乎。

次に吾人の注目すべきは漁業問題に於ける協約成立の利益極めて顯著なることであらう、今茲に詳述する遑はないが、現在日本の海外輸出品の重もなるものには水產物が數へられる、而して此水產物の半分が露西亞海岸に於て捕獲せられつゝあることは何人も記憶する所であらう。現に大正十二年に於ける鮭鱒鯡等の採獲高を見るも三十八萬五千石に達し、鮮鯡は百五十萬石を數へてゐる、これに從事せる漁夫船員は一萬八千人を算し、これに關聯して函館富山新潟を中心とせる幾多人民の生活が保障され居ることも忘れてはならぬ。而して此重大なる漁業

に就て、日露協約の成功せる點は、ポーツマウス條約を有効として彼に承認せしめたことと是れである。云ふまでもなく露西亞は革命を理由とし、又た事情の變更を理由とし、更らに聯合國の出兵を以て戰爭と視、戰爭は條約を消滅せしむと言ふ國際法理を根據とし、露國外國間の條約不承認を主張して居る、之は勞農政府の根本方針の一であつて、日露の交渉に於ても同一態度を執り、カラハン氏は飽くまで舊條約否認の主張を固持して居た。同氏は舊條約は否認するが、唯その代りに露國は舊條約に依らずして日本漁業權その他を讓らんと主張したのであつた。蓋し露西亞としては日本との舊條約の或物を有効にする時は、他國に對する場合、先例視せられんことを憂ひたのであつた。ところが日本側としては飽くまで漁業權を條約權の上に置かんことを求め、露西亞が自己の發意として日本に漁業權を許與すると云ふ如き形式と爲さず、日露戰爭即ち日本が多數國民の血を流して獲得せる權利＝戰爭成功の結果として得たる漁業權を、彼のポーツマウス條約そのまゝに有効にせんと希望したのであつた、ところが遂にカラハンは之を容れたのである。

即ち明治三十八年ポーツマウス條約第十一條に於て露西亞の「日本海オコツク海及びベーリング海に瀕る露西亞國領土の沿岸に於ける漁業權を日本國臣民に許與せんが爲め日本國と協定を爲すべきことを約す」と云ふのがあり、之を本として協定せられ來つた露西亞沿海に於ける日本人の漁業權は、日露戰爭の結果得たものゝ一として今後依然有効に繼續さるゝのである、此ポーツマウス條約上の基礎の存續は日本が漁業權を主張する上に於て、頗る有利な點であると思ふ、殊に最近日露國交斷絶中にありては、日本人漁業は各種の點に於て壓迫を被つて居たのであつた、即ち漁獲の制限、製造に就ての制限、漁業料の引上げ、出漁船查證票を現場に於て行ふことゝ爲せるが如き、種々なる不便利は日本人に課せられて居たが、是等の問題も條約成立の結果我漁業權が、確實に條約の基礎に於て主張せられ得る狀態となれるについて、やはり有利に處置せられ行くであらう。而して將來日本人漁業が、之を機會として旺盛となれば我國の利益する所も亦決して尠少ではなからうと思ふ。

之に次ては日露貿易である、日露國交恢復せる以上、今後日本より露國に輸出する生糸類メリヤス類、藥品醫療機械その他雜貨の增加は疑ひないと共に、露西亞側より日本に輸入する木材魚類寶石類穀物石油毛皮類等も自然增加することゝ思ふ。併し吾々はこの日露貿易については急激にそれが大なる活躍を見るとは思つてはならぬ、何となれば、露西亞は依然として貧弱であり、殊に革命以後經濟不振の狀態にあつて、その購買力の

恢復も十分でない、勿論今後日本その他の援助によつて西伯利方面の事業發達し其方面の購買力そのものも加はることゝなるであらうが、それは恐らくは漸進的たらざるを得ぬであらう。從つて今直ちに貿易進行上に重大なる結果を收むるものと速斷しては、或は失望せざるを得ないであらう。併し先づ大體より觀てその進歩に遲速ありとするも時日の經過と共に發達すべきは疑ひが無い。以上は今回の日露條約に於て我日本の受くる利益の重なるものであるが、最後に吾々が根底的に考へたいことは我人口の出口として露領亞細亞の決して閑却すべからざることである。それは何故であるかと云ふと露領亞細亞は未開地で將來採取し得べき無盡藏の富源があるが然も其人口は一方哩二人に過ぎない、そこで常に人口問題に惱まされつゝある日本としては、その人口の出口の一を此方面にも求む可きではあるまい乎、人は露西亞の風土を云々するが、白人系露人も少からず居住せる西伯利に、黄色人たる日本人の移住され得ない理由がない。米國の例に見るも今日こそ愉快なる生活を爲し得る國土となつて居るが、本來その多くの部分は冬は非常に寒く夏は頗る暑い、是等是初の移民は餓死し又は凍死した位であつた、然るに今や物質上の開發緒となれる結果人爲設備進み爲めに生活は漸く愉快に導かれたのである、西伯利とて亦然り、先づ無盡藏の富源から來る發達を豫想し、或期間に於ける大苦心、忍耐大努力を覺悟して移住するに於ては、我人口の出口として或程度に於ける好候補地の一でないとは云はれない。而して此點に於ける日露協約の「入國、旅行居住の完全なる權利」と「生命財産保護」の約とは、矢張り歡迎を値ゐする規定と言はねばならない。

四、

併し乍ら、吾人は又た條約成立で、すべてが終つたので無く、猶ほ幾多の難關あることを覺悟しなければならぬ、蓋し我等の前には、今度の基本協約以後、更らに各種の細目協定と言ふ事業が殘つて居る、是れ第一の難關である、又た協定が成立した後も、此等協定を圓滑に運用して、眞の成績を收めると言ふことも、相手國が共産主義と資本主義の中間に彷徨し、頗る厄介な境遇に在るのに照して、一大難點である、之れ第二の難關である、殊に露西亞は他國と異り條約成立後は、その修正を企てた如き實例が少くない、例へば伊露條約の如きそれである。又條約締結後之が履行に不忠實であつた例も少くない。波蘭國に結んだ條約なども其の例である、我國は今後斯の如き實例を有する露西亞との間に、關係を持續するには、相當の苦

心を要するだらう、然らば則ち此間を圓滑に處せんとするには如何にせば宜いか。吾人は日本人が條約權のみを主張して自からの利益のみを考へ、他方に利益を分たざるが如き態度を取れば、一切の問題は忽ち難問題と化し來るべきこと呶々するまでもない。之に反して私人經營の會社が私人經營會社に對すると同じく、相互に利益を分つの態度を本にしてやると、兩者の協力は容易となり、所謂國法問題も、細目協定問題若くは國際運用問題なども、易々として解決さるるであらう。吾人は此度の協約の運用につきて特に此點に邦人の注意を乞ひ度いと思ふ。次に吾人の考慮しなければならぬことは所謂宣傳問題である。此問題については多く云ふことを有つて居るが、長きに失する嫌があるまで差控ゆるとして、兎に角露西亞は今回の條約に於て宣傳禁止の約束をした。即ち兩國は互に宣傳せざるのみならず、兩國政府に關係ある箇人若くは政府援助の團體等をして、宣傳せしめざることを約した。之は英露條約以上のもので、然も英露條約の經驗により更に一歩を進めたるものと云つてよい。思ふに彼のチチエリン以下外交機關にあるものは、その共產主義實現の爲め先づ露國に於ける現在の政治機關維持を第一目的とし、之が爲めにも各國との關係を良好にしその援助を得る必要を痛感するので、便宜的政策として對外宣傳を第二位に置き當分閑却しなければならぬことを主張して居るのであるが、此協約の規定も出來得たのであるが、同時に露國の他の部に於ては依然として海外宣傳の最も重要なりと信ずるジノウイエフ以下の分子存在を忘れてはならぬ、而して又た我國に於ても日露親交に反對する守舊的分子尠からず、這は日露の接近を危險視し、何かの機會に日露の隔離を見んことを祈つて居る、此双方に於ける事情こそは將來宣傳問題に關聯して難關を生じ、延いて日露の關係に累し易いことをも想像するに難からざる所である。今後兩國の爲政者並に國民はこの問題を巧妙に適當に處理し行くことを考へざるに於ては、折角成立した協約も或は何等の實果を結ばずして、敗壞の運に落ちるかも知れない。是れ識者の猛省を要する所であらう。

日露新協約に依つて展開さるゝ各種の新局面

芦田均

　日露國交恢復の問題も思へば久い波瀾曲折を重ねたものである。大正十年八月に大連會議が開かれてから本年一月廿日に北京で日露條約の成立するまで約三ケ年半の日子を費し、大連、長春、東京及北京で前後四回の會議を開いた。これにチェノア會議と海牙の專門家會議を加へると日露兩國の委員は總計六回の會議に顏合せをした計算である。これ丈けの會議を重ねる間に世界の政局も變化し、ソヴェート の外交政策も轉換し、日本の對ソヴェート觀念も推移した。今回の北京條約の成立もこれ等の形勢の變遷が生んだ果實であることは疑をいれない。世間は往々にして此の點を看過して、本年成立した條約ならば、長春會議でも、東京の豫備交渉でも圓滑に進行し得なかつた筈はない、不成立に終つたのは政府當局の罪であると云ふ。それは然し全然環境を無視した論であつて、私の首肯し得ない處である。

一、ソヴェート外交の展開

　私は先づロシアの外交が過去二ケ年間に著しい變化を示してゐることを指摘し度い。從來ソヴェート の内部には社會共産制の即行に付いて軟硬の二派あることは既に隱れなき事實である。今日迄六ケ年間のソヴェート の外交は兎角この兩政策の間を彷徨してゐた。

　實際政策に重を措く者は露國の工業の進歩により國民的存立を等閑にし、革命の成果を維持しつゝ、歐洲諸國と通商を旺にして速に露國を常軌の狀態に引戻すことを主張した。此等の主張者は露國の經濟的疲弊と、この疲弊が國民の多數をソヴェート反對に陷れる危險あること、並にロシアの工業が復興しない限

り、外國資本の輸入を容易にすることが出來ない事實を指摘して居る。共產主義の理論に固執する者はこの實際論に反對して社會共產制の實現に最も重を措き、露國を共產的產業組合のまゝに維持して資本主義の諸國と闘ふことを主張して來た。

然し世界革命が豫期の如く成功せず露國の經濟狀態が戰時共產主義の結果益々危急を告げ、農民の反抗と飢饉とがソヴェートの存立を危くせんとする狀況を見てソヴェート內の實際政策論は次第に勢力を占め、政府も遂に其狀態を一變するの止むを得ないことになつた。レーニンはこの大勢を指導した第一人者であつた。

一九二一年の春季に於ける共產黨大會以來ソヴェート政府は所謂新經濟政策を採用した。それは或意味に於て個人企業心に對する社會共產意識の降伏であり、農民に對する都市勞働者の讓步であり、ソヴェートの外國資本に對する妥協であつた。レーニンは之を國家資本主義への促進と云つたが孰れも生存の必要から出た行爲であつたことは云ふ迄もない。

同年三月卅日の命令は農民及勞働者に對して物々交換並に商買を許し、小工業の民營を認め、外國資本の流入を誘ふ爲めに利權政策を認容した。一九二一年以降のソヴェートの外交政策は戰時共產主義の廢止に伴ふ當然の新局面であつた。

同年十一月にソヴェート政府は英、米、佛、日の諸國に對して戰前の露國債務を原則として承認する條件の下に聯合各國はソヴェートと一般平和を締結し、露國の經濟復興に必要な資金を貸與せんことを求めた。これは露國が列强の協調に加入することを決心した最初の號笛である。

利權政策はソヴェートの外交政策に於ても最も主要な一部分を爲すものである。露國は戰前に於ても資本の缺乏を痛切に感じてゐた國であつたが、戰爭と內亂による數ケ年の破壞は經濟復興の資金を要すること一層急なるものがあつた。ヘーグ會議に於てロシヤ代表者は露國の經濟再興の爲めに要する資金を差當り卅二億金留と云つたが、この金額を以て果して充分であるかどうかは疑問とせられた程である。

外資誘入の爲めにする利權附與の政策はラデックの主張に負ふ處が多い。第一回の國民最高經濟會議にラデックは一の決議案を提出して『ロシアの貿易は今後數ケ年間輸入超過を繼續すべきを以て吾國に必要な物資を輸入するには借款の方法に依る外なく、借款により外資を得るには我より利權を許與するにある』と云つてゐる。

ついで一九一八年十一月廿三日に初めて「外國資本特許附與令」なるものが公布せられた。これは一九二〇年下半期に入つ

て國内の經濟狀况が惡化した爲め、外國資本の流入を一層要求するに至つた狀況を反映するものである。

外國資本の誘導を是認する政策が諸外國との通商貿易を奬勵する政策と同時に採用せられたのは夙にラデックの豫見した如く、露國に於て海外より購入することを必要とする製造品（農具、藥品、交通材料、被服等）の支拂に充當すべき手形を得ることを第一の急務としたからである。一九二〇年十二月にソヴェート政府が諸外國に送つた無線の通告は明かに此事實を物語つてゐる。其通牒に云ふ、

戰前露國は必要の技術材料の約六割を海外より輸入した。現在に於ても露國は同數量の貨物を必要とするのであるが、之が支拂に充つべき金塊及び物資は不充分であるから、廣く海外の資本家に露國の資源を開發する利權を許與し之に依つて支拂に充つべき物資を輸出する意嚮である。

同年十二月トロツキーはモスコーの鐵道從業者大會に於て、「利權は對外貿易の一の變形である」と述べた。

斯の如く利權政策は外國資本の誘導及び資源の開發に際して資本家の具備する技術及機關組織を利用し、個人企業の精神に依つて生産を增加する方法に用ひられたのである。

歐米の先進國と交通を遮斷せられた露國は海外資本と技術とを利用しなければ、露國の經濟生活を復舊するに長年月を要するの不利あることを悟つた。これはソヴェート政府が資本主義に對して申込んだ大なる妥協である。

チェノア會議に對するソヴェート政府の態度は大體に於て露國の新經濟政策時代の外交を代表するものであつて、爾來今日まで一貫して此政策を維持してゐるやうに見へる。

露國がチェノア會議に期待した第一はソヴェート政府の正式承認であつて、第二は資金の融通を受けることであつた。この二個の條件の下に前政府の債務を繼承し、共產制度と矛盾せざる形式に於て沒收した外國人の財產を返還しようといふのが其の主張であつた。

諸列强はチェノア會議以前にカンヌ會議に於てロシアに對する政策を決定した。それはソヴェートが外國に對する舊債務を承認し、個人の沒收財產を返還し、且つ契約の自由を尊重することを條件として正式の承認を與へるといふことであつた。

露國の主張はチェノア及びヘーグの兩會議に於て列國から拒絕せられたが、一九二三年に入つてからは英、佛、兩國共に大體之に同意を與へてソヴェート政府を承認した。政府を承認した後ソヴェートとの間の懸案を解決することが寧ろ交渉の進行を圓滿ならしめるものと考へたのである。昨年八月に一旦調印せら

れて、其後廢棄せられた英露條約は英國がロシヤに借欵を與へることを條件として露國が舊債務を認め、個人財產の償還に同意して居る。此間の變遷は明かに露西亞の外交が革命的外交主義より實際政策に移り來つたことを示すものである。

二、實際化した日本の對露政策

日露戰爭以降の兩國の關係は恰もサドワ戰後の獨墺兩國の如く數年を出でずし互に提携親善の有利なことを悟るやうになつた。第一次第二次の日露協商は更に大正四年に至つて同盟條約を結ぶ程の親善な關係に進んで來た。

然るに一九一七年十一月にソヴェート政府が權力を執り翌年三月ブレスト・リトウスクの平和條約に依つて獨墺と露國との單獨平和が成立するに至つて聯合國とソヴェート政府、ソヴェートと白軍との抗爭は次第に激烈となつた。ロシアの各地に獨立の政府が成立し秩序は全く紊れると共に當時シベリアに收容してあつた獨墺の俘虜三十餘萬人はボリシエビキの勢力と共に東漸して來るとの報道も傳はつた。

於是、日本政府は英佛米諸國の勸誘に依り、當時浦鹽へ向け輸送中であつたチェツク軍隊の輸送援助と、浦鹽に貯積せられた武器の獨墺の手に入るのを防ぐ爲めに大正七年八月からシベリアに出兵を斷行した。出兵の目的は世界大戰の終了とチェツク軍のシベリア退出とに依つて一應完了したのであるが當時ソヴェートの東方政策が奈邊にあるかゞ全く不明であり、シベリアの政情も渾沌を極めて居たので日本政府は出兵當初の目的達成と同時に兵を撤するに躊躇した。大正九年三月末日日本政府は聲明して「日本領土に隣接する地方の政情が平穩に歸し日本在留民の生命身體が保護せられ、交通が自由になり、滿鮮に對する危害がなくなれば直ぐにシベリアより撤兵する」と云つた。

然るに此狀況に大正九年の五月に入つて更に變化した。それはニコライエウスクに於ける事變により日本の輿論が尠からず激昂した爲め、政府はこの事件解決の保障としてサガレン北部を占領した。

一方シベリア本土に於てはモスコー政府の政令次第に確認せられる狀況にあつた爲め大正十一年ワシントン會議の終了と共にシベリア撤兵の議を決定し、八月二十六日より十月末に至り全く沿海縣より撤兵を完了した。然し日露兩國の關係は永く斷交の形に放任して置くには餘りに多くの懸案を控えて居た。世界列强の中で直接にロシアと領土の接してゐるのは日本許りである。從つて日露兩國ともに國交の恢復に特殊の利害を感じてゐた。

シベリア出兵以降今日まで日本輿論のロシアに對する態度は凡そ之を三期に區分することが出來る。ボリシエビキの執權から翌大正七年の秋の一般休戰に至るまでは獨墺兩國勢力とボリシエビキとの平和成立に鑑み、赤軍を以て敵軍と同一に見做すことが唯一の安全防衛の方法あつた。

一般休戰が成立して獨墺に對する攻防の關係を考慮する必要の消滅して後は、日本はロシア政情の不安から生ずる滿鮮の危害を防厭し、シベリア在留民の生命身體を保護すること、換言すれば、平和的利益を擁護するとの消極的自衛の態度が、日本の擇び得べき唯一のイッシューであつた。

ソヴェート の政權が次第に基礎を固め、其外交政策も亦戰時共産主義の時代より新經濟政策の時代に入つて緩和せられて以來日本の對露政策は茲に初めてソヴェート露國との常軌の關係を恢復する方針に向つた。この轉換期は長春會議から東京會議に至る期間、即ち大正十一年の秋から翌十二年の春に亘る間である。

日本とロシアとの間に解決を要する問題は可なり多方面に亘つてゐた。赤化宣傳防止の問題は云ふまでもないとして其外にも尼港事件及サガレン問題の解決、通商上の利益保護、並に漁業權の存續、債務の確認等の諸件であつた。

大連及長春の兩會議に於ては日本はソヴェート政府を正式に承認する決心をもつて居なかつたやうに見へる。承認問題が話頭に上つたのは大正十二年の東京會議以降である。

大連會議に於て日本はロシアの極東の軍事施設を撤廢することを要求したが、長春會議以降は此要求を提起せず、又サガレン北部の買收は東京會議に於て一應討議に上つたに拘らず、北京に於ては石油坑區の五割の利權を得て滿足するとになつた。ロシアに對する債權の償還、漁業條約の改訂問題を他日の會議に讓ることゝしたのも名目を固執せずして實際上の解決を期した萬全の方策であつた。日本が露國と會商の度を重ねるに從つて次第にソヴェート政治家の心事を理解し、名をすてゝ實をとる政策に傾いたことは輿論も政府も共にその聰明の名を辱めないものと云つて差支ない。日本政府が徒らに名目に固執せずよく全般の時局を正視して穩健着實なる實際政策に出たことは北京條約成立の一大原因である。

三、列强と新協約

英國の對露政策は昨年一月の勞働黨執權と共に一轉し、十一月に保守黨の組閣に依つて再轉した。ボールドウイン内閣の對露政策はチェノア會議前後のロイド・ジョージの政策に遡つた

もつである。

勞働黨のマクドーナルドは『ロシアの革命は專制と抑壓と流血の殘痕をとゞめてゐることは事實であるが、之が爲めに外國政府がソヴェートを敵視すべき理由を見ない』と云つて勞働黨政府は『其實際的見地より、現實の世相に直面して』去年二月にモスコー政府を承認した。承認と同時に英國政府は革命前に於ける兩國間の條約を自働的に復活することを述べ、更に兩國の間に懸案として殘つてゐる債權債務を決濟することと並に宣傳を謹むことを以て恆久の友好關係樹立に欠く可らざるものとし可成速に全權を有する代理大使を交換して豫備協定を定めようといふ申入をした。

英露協定は昨年四月以來五ケ月に近い會議を重ねて八月八日に十八ケ條に亘る一般條約を締結する運になつた。然しこの條約案は直ちに保守黨と自由黨の一致の反對に逢ひ、勞働黨内閣倒潰の因を爲したものであつた。

勞働黨内閣に代つた保守黨政府は内閣に立つと程なく英露條約の批准を拒絕する旨をモスコーに通告した。現在英露兩國の間には依然として一九二一年三月の通商協定が存在してゐるには相違ないが昨秋十月の總選擧に英國人の頭に深く刻み込まれた反露的感情は却つて兩國の關係をヂエノア會議以前の陰鬱な空氣の内へ閉ぢ籠めたように思はれる。

米國はソヴェート政府との修交を希望する最後の强國である。それはソヴェート政府が少數寡頭政治であつて、武力專制に依つて國民を制御し、一面外債を破棄し、私有財産を沒收し、世界革命と社會共産を宣傳するに餘念がないとの事實に基き、根本に於て在來の自由思想を蹂躙し、社會組織を破壞するといふ理由からである。勿論ボラー、フランス等の上院政治家やシンクレアー一派の利權資本家はロシア承認に贊成して之が運動に努めた事はあつたけれども、ヒユース氏を初め多數の政客は今尙ほソヴェート反對の態度を固持して動かない。

米國の態度が斯くソヴェートに對して强硬であるのは必ずしも心理的原因からのみ來てゐるものではない。米國の識者が之を意識すると否とに論なく、それは米國の地理的並に經濟的理由に影響せられてゐることは論のない點である。米國はロシアより何の期待する處もない。ソヴェートの向背は米國の外政に多くの痛痒を與へない耳ならずロシアより買とるべき多數の物資がある譯でもなく、米國の商品販路として左程多くを望み得る場所でもない。

現在の列强の間に於て凡そ米國程平靜にロシア問題を考慮し得る國は恐らく他に見出し得ないであらう。

咋年六月ポアンカレ退いてエリオが内閣を組織して以來、佛國政府はポアンカレの自力宗をすてゝ、廣い意味に於ける協調政策を執つたように見える。それはクレマンソーの如く英佛協調の埒の内を廻轉するに止らず、同時に伯林ともモスコーとも一味相貫の情趣あるが如き態度であつた。親露論者ジャン・エルベットを操觚界より引拔いて之をモスコー駐在の大使に任命したのは佛國の友情を表示する爲めに外ならなかつた。然し昨年末からソヴェートの使臣クラッシンとの間に交換せられた談話に依ると佛國政府が最も重を措く舊債務の支拂問題は決して佛國人を滿足せしめるものでなかつた。之が爲めに折角期待せられた露佛の國交恢復はたとへ名義上佛國の承認は與へられたにしても、決して當初の期待の如くしかく容易でないことが明白になつた。歐洲の勢力均衡に焦心する佛國が失望の念を禁じ得なかつたのは當然のことである。

これ丈けの事實を頭に置いて、英米佛三國の輿論が日露新協約を迎へた態度を見る時は吾々は一層彼等の論評を意味深く理解することが出來るように思ふ。

アングロサクソン民族の優越權は歴史あつて以來曾て今日以上に高調に達した事はない。英米の兩國が相率ゐてソヴェートにオストラシズムを喰はしてゐる此際に、從來常に英米と歩調を合すべきものと記錄に記された日本が英米の外交政策から獨立して日露條約を結んだといふ事實は華府倫敦の有識者に少くも憤懣の情を與へなかつたにしても奇異の感を與へたのは必ずしも驚く可きことではない。

ボラー、ヘイラム・ジョンソンの兩政治家は北京條約を以て日露の通商同盟と稱すべきもので、米國の利益に反するものであると云つたと傳へられてゐる。

フィラデルフィヤ・パブリック・レッヂャーは可なり長文の論說を掲げて、而も念入りに痛くもない日本の腹を探つてゐる感がある。曰く、

日露條約は支那に於ける提携を約し、進んでは第三國を相手とする提携を約した條項を含んでゐて（註曰、これは明白にレッヂャー紙の誤聞である）從つて之を日露同盟の端緒と見て大過ないであらう。蓋し英國との同盟を失つた日本が轉じてロシアに同盟を求めるのは其傳統政策に合致する所である。此結果ロシアは今後支那方面に於て其勢力を振ひ、日本の後援を得て米國の勢力と拮抗する事となるであらう。換言すれば露國の出現は華府條約に依つて形成せられた極東の勢力均衡を破り其平和を脅すべき勢力となるものである。斯の如きは米國に取り深甚の利害關係ある現實の事實であつて、米

國たるものは適當なる對策を講ずべきである。一

從來ソヴェート政府の承認を主張した多くの米國新聞は更に一層强く此機會に米國承認の促進を論じたけれども、承認早尙に左擔するものは、日露條約の成立が毫も米國の政策を動かすに足りないことを論じて、日露間の協定は純然たる經濟的取極めであると述べてゐる新聞も少くない。

英國の新聞は平生の愼重な態度を失はずにつとめて新協約に對する評論をされた。然しこの條約の成立の機會に日本との和親の恢復を意味深いものとして取扱つたチチェリン外相等の意見が極めて重要視せられ、日本が露國支那等との提携を策してゐるかの如き疑念を抱かしめたことは止むを得ない事であつた

巴里に於ては一月廿八日に首相エリオが下院に演說して太平洋岸に潜在する國際的禍根に論及し、西歐聯盟の必要を述べたと傳へられたが言辭頗る漠然として眞意を捕捉することが出來なかつた（二日一日の東朝）。然し北京の新協定が日支露の三國に獨逸を加へた一大連衡であるかの如き疑惑を與へた形跡は否定し得ないやうである。

英米佛三國の新聞紙が日露條約に對して不安の色を示したことは一部分露西亞新聞の不權衡な誇張に依ることも明白であるが、日本に於ても德富蘇峰先生が國民新聞の論壇に暗示せられた如く新協約を以てアングロサクソンに對するスラーヴとアジアの同盟であるかの如く論じた人々の說が彼地に反映したことも與つて力あるであらう。

ロシアの邊境にあつて常にソヴェートの威壓を感じてゐる波蘭、羅馬尼の諸國は北京條約成立の報を受取つて雷鳴の如くに驚いたのも無理ではない。ロシアの西境にある諸國は原則としてロシアの勢力のドラング・ナツハ・オステンを掣肘してゐることは日露戰爭以前から同一である。從つて日露相爭ふことはロシアの邊境諸國に取つて一の避雷針であるとも感じられたであらう。故に日本が露西亞に求める處は專ら經濟的交友關係であつて、其間に毫も政治的意味を含まないと如何に念入りに說明しても、此等の諸國が北京條約の成立を祝福する如きことは所詮期待し得ないことと明白である。

四、ロシアは新協約を何と見る。

去年一月レーニンが死んで以來、世界の多數の人が豫期したソヴェート崩壞乃至內訌の豫想を裏切つてモスコー政府の西歐に對する威望は却つて次第に高められた感があつた。

共產黨の長老にして內外に信望の厚いレーニンを失ひ、一方には幹部內訌の餘波が黨員の動搖を來してゐる其際にソヴェー

ト政府は英國と伊國とから無條件で政府承認の通告を受けた。この刹那に於ける承認の通告は百萬の援兵を得たよりも彼等の勇氣を作振したに相違ない。

然るに勞働黨内閣の失脚は昨年十一月以來再び英露の交情を冷却させ、モスコーに好意を寄せてゐる佛國のエリオさへも組閣當時の熱情を失つて、佛露交渉の前途必ずしも好望でない徴候が顯れてゐる。他方共産黨の内部ではレーニニズムとトロツキーとの論爭益々激成せられトロツキーは職を辭して波瀾一應治つた觀があるけれども田園と都市との抗爭はソヴェートの前途に決して樂觀を許されないものがある。モスコー政府内外多事の秋であると云つても決して間違いあるまい。

この時に當つて北京條約の調印せられたことは何と云つてもソヴェート政府の爲めに一大福音であつた。東京とモスコーとは遠い、ロシア一億五千萬の民衆を率ゐて居ても極東のことは兎角に長鞭馬腹に及ばざる感があつた。大正九年以來ソヴェートが日本との和議の成立に焦慮したのは、これに依つて東方政策に休息日を得たい爲であつた。ロシアの國民的生存はウラル以西であつて、シベリアの林野にあるのではない。西歐との問題に全力を傾注する爲めには多少の犠牲を拂つても東方諸國との關係を安定して置く必要がある。若しモスコーの政治家が北京條約に於て最後の五分間に妥協的態度を示したとすれば其理由は以上の理由の外に求め得られない。

チチエリン其他のソヴェート政治家は日露條約の成立に滿悦して之を歐米の政治家に誇示しようとしてゐる。この態度も亦ロシアの政治家として當然のことである。現在の世界に於てソヴェートに冷然として拮抗し得るものは米國の外にあり得ない、之と步調を合すものは英國保守黨の政府である、從つてソヴェートの眼中には英米の二國あるのみであつて、爾餘の諸國は物の數とも思つて居ない。凡ての政治外交上の出來事を對英米のアングルから觀察しようと云ふのは寧ろ極めて自然なる心理的傾向と云ふべきである。

然し近く日露兩國の間に細目協定が成立し亞細亞問題の解決に一段落を見た曉にはロシアは必ず歐洲問題に新局面を打開しようと努力するに相違ない。それは政治的に必要である許りでなく、又ロシアの經濟復興の見地から見ても外資の流入を焦眉の急務とするからである。

モスコー政府は新協約の成立がロシアの内政の上に良好な影響を與へることを看過しなかつたに相違ない。英露條約の破棄、佛露會議の停頓に依つて再び孤立の寂寞を感じつゝあつたロシアに取つて北京條約の成立は明かにソヴェート政府の威信

を高め得る材料である。

ソヴヰート政府の前途に就ては種々の觀測が行はれて居り、茲に輕々に論斷し得る限りではないが、今日に於てもモスコーの政治家は不斷の努力を以て共產黨の基礎を堅め、民衆の心を收攬する必要に迫られてゐる。此意味から云つて現在のロシアは二個の重大問題に當面してゐる。一は露國共產黨の統制に關する問題であり他はモスコーの獨裁政治に對する農民の反抗である。

共產黨の統制問題は所謂レーニン主義を奉ずる多數幹部派に對し、トロキー以下の四十六人組と稱する少數派が共產黨の制度改革を主張し、現幹部の經濟政策に反對する問題であつて既にレーニンの死亡以前に一九二三年の秋季から表面に現れてゐる。

中央の勞働階級獨裁政治に對し、地方農民の反抗する事實は既に新經濟政策採用以前、一九二〇年から世界に公知の事である。この傾向は新經濟政策の採用により一時緩和せられた姿になつてゐたが、農業經濟狀況の變化と共に更に幾多の不平不滿を生んだことは爭はれない。

幹部多數派とトロツキーとの爭は一九二三年の十月中旬にトロツキー以下の四十六人組が共產黨の中央委員會に對し連署した通告書を提起したことに初まる。トロツキー一派はこの書面に於て共產黨內の制度改造を主張し、露國內の經濟問題に就ては現幹部の實際政策に對し痛烈な非難を浴せかけ現幹部は斯の如くして黨の墓穴を掘りつゝありと彈糾した。

共產黨の制度改革問題は黨の元老に對する少壯派の抗爭である。レーニンの政治方針は嚴密な中央集權的統一主義に依つて嚴密な規律を維持し、獨裁政治の基礎を固めんとしたものであつて、從つて政府の要部、黨の諸機關には自己の信任する腹心を据えて結束を堅うした。トロツキーは之を非難してソヴェートの選擧制度は事實上形式に止まり、重要の機關はレーニンの任命によつて其任務を振り當てたものであるから共當然の結果は新陳代謝の遮斷、幹部專橫の弊を生じたと云つた。

かういふ主張の下に彼等はロシア共產黨を以てプロレタリア獨裁といふ言葉と同一體のものと見做し、無產階級の獨裁といふ團體の基礎を無視しない限り黨內の各自の政策に對する意見の相違により自由に集團を作りこれを中心として言論、選擧の自由を認めようといふのである。これはレーニンズムの絕對的統一主義に反する民主的思想であつてトロツキーズムと稱せらるゝ主張である。

經濟政策に就ても幹部に確乎たる方針の立つてゐない爲めに

新經濟政策の運用を誤まり、國營事業は不統一となり、物價は騰貴し、製作品と穀價との開ますく大となり二重に農民の生活を脅かす有樣となつた。其傍に所謂ネツプマンと稱する成金を生じ、共産黨員の内にも事業の經營に從事する者の贅澤を助長し、腐敗と犯罪とは黨内に侵潤し、一般農民の信任を失ふ結果となつた。これがトロツキーの非難の要點である。

トロツキーと主張を一にする者はラデツク、ピヤタコフ、プレオブラジエンスキー、スミルノフ等の顔觸であり、幹部派と稱せらるゝ者はクレムリンの五巨頭と云はるゝカーメネフ、ジノヴイエフ、スターリン、デルヂンスキー、バハーリン等の多數幹部である。

一九二三年の十二月にはモスコーの共産黨政務委員會及總會で、勞働民主々義の方策に對する討議が開かれたがトロツキー一派は無論慘敗した。然しトロツキー自身はジノヴイエフとの妥協によつて其地位を保つことが出來た。一九二四年の一月には更に經濟問題に關する對議が始まり、これ又少數を以てトロツキー派の敗北に歸した。

昨年十一月に至りトロツキーは「十月革命の教訓」と稱する論文を發表して又もやジノヴイエフ、カーメネフ等のレーニン直參派の態度を攻撃し此等直參派の革命成功に對する功勳と威信とを傷けた。

トロツキー一派は、現在のロシア共産黨なるものは十一月革命の前後に於てメンシヴイキやエス・エル（社會革命黨）から轉轄し、又は新に共産黨に加入したものの多數から成立してゐる。現にロシア共産黨なる名稱も革命以後につけた黨名である。斯の如く新規な歴史と新分子とを以て成立した共産黨が久しく古い黨規に囚はれ、極端な中央の專制に依つて多數黨員の意思を無視しようといふのは無法である。その結果は黨員の意氣を沈滯せしめ、黨の統一を薄弱ならしめる虞がある、故に須く黨員の言論を自由にし、選擧をして其意義を全らかしめなければならないと主張するのである。

幹部派の主張に依ればロシア共産黨はレーニンの創設にかゝるボリシエヒキ派であつて、後に其傘下に集つた者は當然黨規を承認して入黨したものである。從つて黨則に意議を挿むことを認め得ない、現在の黨規と黨律はレーニンの偉大なる教訓であるから之に變更を加へんとする者はレーニン主義に對する修正派であつて反ソヴエート的思想であるといつてゐる。

於是トロツキーの「十月革命の教訓」なる論文に對して中央委員會を始め各地の共産黨團體が舉つて非難の決議をした。曰くトロツキーの行動は一九二四年春季の共産黨大會の決議を無

視し、當時の内訌問題を再燃するものである。曰くこの論議はレーニズムの修正であつて民衆に對し、革命の歴史を誤解せしめ共産黨の團結を弱くするものであると。

かくて本年一月の共産黨幹部會はトロツキー反對の決議を爲し、トロツキーも其職に留り得ないで辭表を提出したまゝ孤影悄然としてクリミアに向つた。

この兩派の爭は一應トロツキー派の敗北によつて決濟せられたのであるが、然しソヴェートの統制の形式が今日のまゝ維持さるゝ限り、農民と都市勞働者との利害の調節が何等かの方法で行はれない限り、ロシア人口の八割を占める農民は遂にソヴェートの政令を喜ばず或は之に反抗する時期が來ないとも限らない。

農民階級とソヴェートとの間隔は土地の分配問題に於ても、政權の分配に就ても、又その經濟政策の上に於ても表れて來てゐる。現に今日の露西亞には、土地を離れた農民が出來てきた。ロシヤ農村の民衆主義(デモクラシー)の中心となるべき農民が減少して村には富裕な農民(これはソヴェートの土地社會化の恩澤をうけて豐かになつた連中である)が幅を利かす、この狀況は十一月十四日のカリーニン(ソヴェートの大統領)の演說に依つても窺ふことが出來る。

ソヴェートに於ける農民の政治熱は次第に勃興して、各地に於ては政治運動に干與する者が增加した。殊に昔の大地主に比すべき階級の人々は腕一本で成り上つたエラ者である。從つてどんな人からも帝政の支持者として非難せられる虞はない。この人々のことをロシアではクーラックと呼んでゐるが、クーラックを抑へつける爲にはソヴェート政府も多大の苦心をしてゐる。

多數の農民が現在のソヴェート制度に滿足してゐないことも事實であつて昨秋の地方ソヴェートの選擧に於ては共産黨の當選率が減少してゐる。村のソヴェートでは廿二萬五千二百〇六名の代表委員の內僅に二萬五千六百十五名の共産黨員總數の十一パーセント餘りを含んでゐるに過ぎない。それでも尙農民はソヴェートの選擧干涉に不滿を訴へたから、モスコー政府は本年二月に入つて選擧のやり直しを命令し、同時に選擧取締の公正を命じてゐる狀況である。これはソヴェートの前途が農民を相手に戰ふことを思切つて、次第にむしろ之に迎合する政策を執ることを示してゐるものである。ジノヴイエフが云つたように吾々には賢明な獨裁政治が必要である。この獨裁政治は多數農民の支持するものでなくてはならないといふ思想である。

この敗戰はソヴェートの土地政策及物價政策が農民の不滿を

かつたことを物語る、素よりソヴェートは新經濟政策以來穀物の徴發を行つてはゐないが、今以て穀物輸出の爲めに、並に軍隊と官業勞働者の補給の爲に穀物を買入れてゐる。そして其代價は極めて低廉であつて最近には最高の價格を小麥一プードに就て八四、四哥、大麥一プード五七哥と定めた。これは市場に比べて三割安である。この代價の制定の爲めに買上の麥は一向集らない。昨年は一億一千七百萬プードを買上げる豫定であつたが實際は五千三百萬プードしか集らなかつた。

都市と田園との均衡は又破れて來て農民は都市の爲めにエキスプロイトせられてゐるものと思つてゐる。即ち穀價と一般物價との開が依然として大きいことを意味するのである。從つて農民の不平を滿足する爲めには改めて土地の分配を公平にし、工業を起して物價政策を徹底的に行はなければならない。さうでない限りソヴェートに對する農村の離反は止むを得ざる傾向であると思はれる。

此等の幾多の難問を控えたソヴェート政府が內に於ては極力政權の基礎を固め、外に向つては貿易政策と利權政策とを以て國內工業の爲めに外國の資金を誘入する政策を執ることは極めて了解し易き處である。而してこの政治的爭鬪はいつかはプロレタリア獨裁の制度から多數農民の利益を代表する多數者支配の政治に移るべきことを豫測せざるを得ない。この內政上の傾向はソヴェート將來の外交にも多大の影響を及ぼすこと云ふを俟たない處である。

五、「世界安定」と新協約

ソヴェートの前途は誠に多事多難である。年若きロシア革命の果實を波風の荒いデモクラシーの試練にかける日に果してロシアの統一が今日の如く維持せられ得るや否やも問題である。ロシアの經濟組織を少くも世界戰爭以前の程度に恢復することも玆數ケ年の日子を以てしては到底困難であらう。さり乍ら歐洲より極東に擴る一億五千萬のロシア民族の一國は政治的にも經濟的にも之を閑却することが出來ない許りでなくロシアを除外しては歐洲の均衡政策も經濟復興も所詮空理空論である。獨り歐洲の均衡のみならず太平洋並に極東の勢力均衡にロシアを除外することは、爆彈を抱いて火に面する如きものである。

曩に英國の勞働黨政府が無條件でソヴェート政府を承認したのはラムゼー・マクドーナルド君のステーツマンシップであつた。モスコー政府は必ずやこの信任に對して年來固執した利己政策を放棄するであらうとは英國政府の一縷の希望であつたけれども、ソヴェートは遂にこの期待を裏切つて之に酬ゆるに共產

主義を出發點とする理論と、社會革命の宣傳とを以てした。世界の無産階級を團結して國際間に爭鬪なく、國內に階級の差別なき恒久平和の時代を實現しようとの理想が、果して當代に於て實現し得るや否やに就ては暫く議論を避ける。唯ソヴェート政治家が眞に亞細亞並に極東の民福保持に思念を惱ますならば亞細亞民族にかすに休息の時間を以てし、差當り平和の環境の内に其經濟生活の基礎を安からしめることに思を致さなければならない。此の場合に赤化宣傳の第三インターナショナルをして依然他國の內政に干渉せしめるならば、之が爲めに亞細亞民族は永く混亂と爭鬪の生活を續けなければならない。

世界は既に四年五ヶ月の大戰爭と幾多の內亂革命を經て身心ともに疲れてゐる。此上更に大戰爭を繰返す如きことあらば人類四千年の文化は大打擊を受けること必然である。今日世界の何れの國もソヴェート倒壞を策してゐない如く、ロシアも亦他の資本主義國家に對する革命使嗾を謹まなければならない。世界の經濟生活と精神生活の安定の爲めには全世界が其努力を合せて此目的の貫徹に盡力してゐるのが最近の國際協調の精神である。ソヴェート露國が歐洲協調又は太平洋協調の仲間に加入するのは此意味から見ても吾々の衷心より慶賀する處である。從つてソヴェート政治家が今更英露條約の轍を踏む如き誤を再びせざらむことを希望せざるを得ない。

北京條約に附帶して細目協定が成立する場合には日本とロシアとの經濟的協同の關は一層堅く且つ深くなることであらう。シベリアに於ける經濟資源の開發、シベリア鐵道の開放による日本と西歐との接近、それに極東に於ける平和樹立が日露兩國民に與へる精神的慰安は確かに華府條約の成立にも劣らない國際的事件である。素より日露兩國が大正四年の同盟條約を再び腦裏に描く如きことは起り來るべしとも思へない。世界は既に此時代から一大轉換を行つてゐる。然し若しフリードの云つた如く軍國主義とは自力に倚りてのみ國を防衞する孤立的國家が、孤立の自覺より生ずる一種の心理狀態であるとの說明が眞實に近いものであるならば、日露兩國の如く互に相隣接する國家が速に常軌の國交を恢復することは兩國相互の爲のみならず世界平和の爲めに幸福であること明白である。今日、英米等の諸國が北京條約の將來に注目して支那及び太平洋に對する新局面を開くものとしてゐるのは此點から見て全く意義のないことではない。現在ロシア問題の解決に苦慮する政治家は第一に世界安定の見地よりロシア問題を考察すべきものであり、そして北京條約の調印は之に到達する第一著步として先づ祝福せらるべきものである。其他の地方的利害の如きは細目協定の成立を

候つて之を批評しても決して遲くはない。

日露提携の經濟的意味

高橋龜吉

一

日露の國交が再び回復したと云ふことは、如何なる影響を日本經濟の上に投げるものであらうか。この點に關する世論の流れを見ると、その注意は專ら、日露の經濟關係は今後どうなるかと云ふことのみに注がれてゐるもの丶如くである。いかにも、日露の經濟關係が今後どうなるかと云ふことは、誰しも先づ知らんと欲する所である。しかし乍ら、日本經濟の現狀から云つて、此際、日露提携の意味する最も重大なる眞の經濟的影響を嗅ぎ出さんとする者は、その注意を單に日露直接の經濟關係にのみ限るべきでなく、その間接に齎らさるべき我が經濟の位地の變化に至大の考慮を拂ふべきである。之を他の言葉に砕いて云へば、日露が提手した結果、兩國直接の經濟關係は今後どうなるかと云ふことは無論われ／＼の注目せねばならない點であるが、しかしそれ以上此際日露の提携が日本の經濟にとつて重大意味を有する點は、日露提携の結果、露國以外の第三國と日本との經濟的關係が如何に變化するであらうかと云ふことである。云ふ迄もなく、すべては日露の今後のやり方如何に懸るものであるが、しかし乍らそれに對する日本の政策を樹てるに方つても、先づ、我が國民は以上の二つに對する意味をよく摑んで、その政策の目標を定めることが大切である。

二

先づ、日露兩國間直接の經濟關係について見るに、國交が回復したからと云つて急に我が對露輸出が注目に値する程の額に達するであらうとは考へられない。購買力の極度に疲弊してゐる

いまの露國に之を期待することは無理であるからだ。現にこのことは英露、獨露等の貿易の實際について見るもさうである。況んや、日本の對露輸出は專ら極東露西亞に限られるわけであるが、その極東露西亞を形成する沿海州、黒龍州、沿黒龍州、沿貝加爾州、後貝加爾州の五州はその面積は日本の略二倍に相當するにも拘らず、その人口は僅かに百八十餘萬人を算するに過ぎない土地である。之れに我が品物を賣込まうとヤツキになるのがそもそも根本的に間違ひである。現に戰前の我が對露貿易を見るも、その輸出額は左表の如く極めて微々たるものであつた。

本邦對露貿易表

	輸出		輸入	
	對亞細亞露國	對歐洲露國	亞細亞露國	歐洲露國
明治四一	四、七一〇、九四八圓	一、〇三三、一三七圓	八六四、一八二圓	一三三、三一三圓
四二	二、五〇三、四七六	一、八二一、二八三	七六三、六一〇	二〇八、〇一五
大正一	三四二、七一六	二、五四〇、七三七	六六九、〇九八	七三、六一九
二	四、二七一、四一三	四、八九七、四三〇	七五〇、四八六	四〇、九四三
五	一七、六九三、四七八	三三、四三一、〇九七	一、七七四、二二六	一、一〇四、[illegible]
九	三三、八六三、五九六	二九、四七五	三、八三一、六八四	三八六、二五四
一〇	一三、七四一、二七九	五〇	六、八六三、二二三	四三七、八三五
一一	一〇、九二四、六五一	一、六五八	一七、九九五、二五四	八七七、三六五
一二	四、五一三、四六三	一三〇	一六、五五三、〇六三	二六一、六二四

元來、シベリヤの如き人口稀薄な併し資源豐富な土地と貿易を進めやうと云ふには、商品を賣込むと云ふことよりも、原料品を買入れると云ふことが中心にならなくては駄目である。所が、由來日本のシベリヤに對する態度は輸入と云ふことよりも輸出と云ふことに主力が注がれて來た。例へば前表によつて見ても、輸出よりも輸入の方が常に少からず小額であるが如きは即ちその證左である。斯樣な貿易狀態に於て、日露の經濟關係を促進せんとするは、宛も木に緣つて魚を求むるの難事である。若しも日露の國交回復を利用して、日露の經濟關係を最も有利に促進せんとするならば、日本は先づ、賣らう賣らうと云ふことに囚はれた小商人根性をすてゝ、資源に豐富なシベリヤから、その必要とする原料を極力買入れると云ふことに、その經濟政策の中心目標を樹てねばならぬ。

三

所で、日露の貿易關係が由來以上の如き不合理の狀態を示したと云ふことは、偶然に出來たことでは無論なくて、それ相當の原因があつたことに違ひない。私の考へる所によれば、その最も大きな原因は次の二つであつたと思ふ。

一、露國が日本の侵略主義を警戒してこれ迄日本人にシベリ

ヤの資源を解放しなかつたこと。

二、日本の經濟事情も歐洲戰前に於ては今日の如く痛切に原料の不足を感じてゐなかつたこと。

日本の經濟が農業國としての階段に在る間は、等しく農業國のシベリヤから輸入せんとするものが左程無かつたであらうと云ふことに誰しも疑問はない。しかし乍ら、歐洲戰前の日本と戰後の日本とでは、原料の點に於て、驚くべき位地の變化を來たしてゐる。試に一二の例を擧げんに、戰前に於ては日本は銅や石炭や木材の輸出國であつたが、いまやそれ等の輸入國である。斯様のわけで原料の輸入と云ふことは、戰前の日本人には余りピンと響かなかつたものが今や痛切に之を感ずるに至つてゐる。加ふるに、歐洲戰中戰後に於て、世界は自國の利益のために原料の輸出制限を勝手にやつて、原料供給の保證なき各國の神經をウンと尖らすに至つた。日本の朝野に「資源の欠乏」と云ふ嘆聲が叫ばれ始めて、軍國主義者の間に資源の獲得熱が勃興するに至つたのは大體に斯様な背景を持つて生れたものである。實に、夫の十億圓の巨額を浪費したシベリヤ出征はさうした野心の具體化に外ならなかつた。戰爭の眞の目的を知らんとするものは常にその平和條約を見るがよい。最近の日露條約の中心問題は實に日本の利權獲得ではなかつたか。現に、その條約の内容なりとて新聞の報ずる所によると、已得の漁業權を保證し、北樺太に於て、油田、炭坑其他の特定利權を讓渡し、且つ一般的に「サヴエート政府は兩締約國に於ける經濟關係の增進を希望し、露國領土内に於ける鑛物、森林及其他の資源の開拓權を許與す」と規定してゐる。之によつて、日本當局者の頭に、如何に強く、原料の獲得と云ふことが刻まれてゐたかが明かに伺ひ得る。之を他の言葉に翻譯せば、いまや日本の經濟事情は、シベリヤの資源を開發して之を買入れることを中心とする經濟政策を必要とする時代に這入つてゐるわけだ。しかも露國又現在に於ては自らシベリヤを開發する力なく、適當な開拓者を求めてゐる事情に在る。この限り、日露の經濟關係は、之を經濟的に見れば嫌でも應でも革命的に增進せられねばならない位地に在る。

四

なる程、以上によつて、從來日露の經濟關係の促進を阻んでゐた前記（二）の原因は除かれたが、未だ、前記せる（一）の方の原因即ち露國が日本の侵略主義を警戒してシベリヤの資源を解放せぬと云ふ障害は除かれてゐない。恐らく、今日のソヴエート露國にしても、若し、日本に領土侵略の野心あり、又

は經濟的帝國主義の野望ありと見る限り、容易に露國領土内の資源の開拓を日本人の手に委ねないであらう。折角、如何に條約上で資源の開拓を約束した所で、この約束を何處迄現實に發展せしむるか又は之を空文に終らしむるか否かは、懸つて今後の兩國の努力に對たねばならない。いかにも北樺太に於ては已に或る種の利權が現實に約束せられてゐる。しかし、約半歳は氷に閉されて事業の不可能な北樺太の地に大なる期待を持つは間違であつて、眞に日露を經濟的に結付けるだけの資源の開發は之を今後の日露の理解に俟たねばならぬシベリヤの曠野に求めねばならない。

斯樣のわけであるから、日露の國交回復によつて、眞に、日本の經濟が云ふに足る好影響を受け得るためには、日本は、之れ迄支那や其他の諸國から毛嫌されてゐる所の、帝國主義的野心を此際一掃する必要がある。丸腰になつて、單なる經濟的關係に於て、シベリヤの資庫を彼我のために開くと云ふ大方針を定めることがすべての前提である。而して若し此際日本にして、その帝國主義的野心なきことを眞に世界に知らしめ得るなら單にシベリヤのみでなく、世界の未開國の資源は喜んで日本人に提供せられるに至るであらう。その曉に於てのみ、日本のいまの經濟的貧困、原料の不足、人口の過剩等の難問題は解決の第一歩を踏み出し得るのだ。

五

以上は專ら、日露直接の經濟關係のみについて見たのであるが、しかし、此際、われ／＼が最も注目すべき點は、已述の如く、日露の國交回復が、間接に如何なる影響を日本經濟の國際的位地に及すかと云ふ點である。この點を考ふるに方つて、先づ調べておかねばならないことは、露國は日露の提携に何ものを求めてゐるかと云ふ點である。

思ふに、露國がその社會主義國家を完成するためには、必ずや先づ歐洲に第二、第三の社會主義國家を出現せしめねばならぬ。資本主義國家に圍繞せられて露國一國のみで社會主義國家を完成せんとする如きは不可能だとの理解は、今やボルシエビイスト一般の抱懷する所であるからだ。所で、歐洲にこの社會主義革命を促進する最有効の方法は、歐洲の資本主義が依つて以て今日樹つてゐる所の殖民地の搾取を絶つことである。砕いて云へば、今日、歐洲の諸國が彼れの如き贅澤な生活を營みつゝあるわけは、東洋其他の殖民地から甘い汁を吸取つてゐるからであつて、その本國だけの經濟では、到底あの贅澤な生活は出來ないのだ。であるから若し一度び歐洲がその殖民地の搾取

を絶たるゝに至れば歐洲は生活程度を一般的に低下せねばならない。若しさうした事情來らんか、資本主義經濟に對する民衆のこれ迄の信頼は玆に破綻して、社會主義經濟に新たな希望を繫ぐに至るわけである。蓋し、如何なる社會制度にても、その國民の生活を高め得る限りその制度は決して破綻しないが、しかしその制度が國民の生活を低下するに至ると、よりよい生活を求めて新たな制度が發達すると云ふことは歷史が事實によつて敎へてゐる所であるからだ。

そこで、露國は世界の帝國主義の破壞を以て彼れの世界的革命に到る有力な方法であると考へてゐる。現に、露國は支那に於て、列國の帝國主義の破壞に多大の力を費やしてゐる事實が看取される。例へば、二月二日發の大阪朝日の特電は左の如き事實を傳へてゐる。

「駐支米國公使シユールマン氏は一月二十日英米協會の集會席上で、……近來支那に於て不平等條約廢棄の運動が盛んなのはカラハン大使が反帝國主義を唱へ支那人民に革命實行を鼓吹指導するに關係が深い、との意味を述べたに對し、カラハン氏はその翌日支那思想團體で催されたレニン紀念祭に於て、この責任を予に歸したのは光榮の至りであるが、實は支那國民の自覺によるものである。露國は華府會議の容言の約束に反し、事實上の條約により支那國民と公正平等を實現し、支那主權を尊重し、帝國主義反對の模範を示したものである。……」

併し乍ら、露國は自らの斯樣な政策が自國一國のみでは成功し難いことを知つてゐる。だからと云つて、その相手を帝國主義の親玉である英米佛等に求めることは無論出來ない。しかして、それ以外に於て、露國の政策の協同者となり得るものは歐洲に於ては獨逸、極東に於ては日本である。之れと手を採ることが出來れば、歐米の帝國主義を破り得ると考へられる理由が豐かにあるからである。現に、日露交涉成立の報傳はるや列國の示した意見はこの私の考を裏書するものである。例へば「露國各新聞は一齊に日露條約成立を熱心に歡迎する論文をかゝげ……國際政局の現狀が遂に日本をして帝國主義を放棄して支那及勞農露國との親善を獲得せしめたと論じ」（モスクワ一月廿二日發「電通」）又東京日々の北京特電（廿二日）は日露成立直後に於ける北京外交界の意見なりとて「東洋に於て日露支三國が大使を交換し、互に親交關係を樹立することは支那に利害多き英米にとつては非常な脅威を與へ、英國の如きは之を轉機として對日對支外交の立て直しをやらねばならぬ必要に逢着したと云はれてゐる……」と報じ、又、東京日々の倫敦特電がデーリー・テレグラフの記事なりとて「日本の如きボルシエヴイズ

ムに強硬に反對である國が假令經濟上重大な利益を得るにしても、歐洲各國の何れよりも進んで露國と協定を遂げるに努めたことは意外である。日本の科學の進歩と工業發達とは、シベリヤの自然の富源と相俟つて甚だ有力のものとなり、日露の政治的協調を以て之を援助するときは、極東殊に支那に於ける列國勢力の均衡に容易ならぬ結果を及すであらう。日露外交の基礎が斯く確立すれば支那は領土其他に對する外、外國利權を速かに撤回することを要求するであらう。また米國は太平洋上に於ける商業上の利害關係から日露に對し漸次親善なる態度をとらねばなるまい。」と傳へてゐるが如き即ちそれである。

六

露國が日本を斯樣に見、列國が日本を斯樣に解するについては其所に深い理由があるからである。と申すわけは、元來、日本の之れ迄の外交は、日英同盟を基礎とし、萬事英國の極東政策の番犬として働き、その報酬として、滿洲の一角に猫額大の利權を保證せられて來たものである。所が、歐洲戰爭の結果、世界の勢力の重心は英國を去つて米國に移り、英國は米國の歡心を購ふために日英同盟を破棄するの止むを得ざるに至り、玆に日本從來の外交は根本的に行詰るに至つた。何となれば、一方に最早英國の支持を期待し得ず、又假令英國が一片の御つき合ひに日本を支持した所で、之を以て新勢力たる米國に抗することが出來なくなつた。然るに米國は、一歩も二歩も後れて東洋に勢力を張らんとするのであるから、謂所列國の已得權を先づ破る必要がある。それには抵抗力の最も弱い處から始めるが最も賢策であることは改めて云ふ迄もないことで、遂にその名譽ある槍玉に擧つたのが、支那に於ける日本の已得權である。歐洲戰末以來、日本の對外已得權が、事毎に米國の反對に會してオジャンになつたわけは玆に在る。之を他の言葉で云へば日本は外交的に孤立の地位に捨てられたのだ。

然るに、顧みて日本の經濟的位地を見るに、已述の如く、内地の資源は漸く欠乏し、且つその産業は販路を外國に求むる以外に今後一歩も發展する余地はない。之れ謂ふ所の日本の經濟的行詰である。所で、日本はこの經濟的行詰を打開する爲めには、一方には外國から自由にしかも安價に（尠くとも、外國より高からぬ値段にて）原料を買入れる機會均等の保證を必要とすると共に、他方にはその製品を自由競爭で販賣し得る販路の開放を必要としてゐる。しかし乍ら日本のこの要求は支那、印度、南洋諸島、濠洲等に對し英國其の他の白人國が種々なる特殊の政治權力を樹立して、自國以外のものに對して差別的待遇を與

へてゐる限り、永久に滿たされる時はない。さうである限り、日本の經濟的行詰は國際的に打開せられる望は永久にない。——國内的に打開する途は尙ほ殘されてゐるが——茲に於て、いま日本に殘されてゐる國際政策は、少くとも東洋の被壓迫民族（歐米の植民地）を開放して、歐米の帝國主義の搾取から免かれしめ、斯くすることによつて、原料の供給、製品の販賣、資源の開發等について平等の待遇を所期する以外にない。しかし、日本一國では無論この政策の遂行は出來ぬ。然るに、いま、日露支の三ケ國は、各々その目的とする處は異るが、しかし、歐洲の帝國主義に反對すると云ふ點に於ては、何れも利害を一にし共に提携して事に當る必要に迫られてゐる。之れ、日本の支配階級の或る方面に於ては、勞農露國を毛蟲の如く忌み嫌つてゐるにも拘らず、その支配階級の權力の下にある政府が、周知の如き長期の交涉を敢て忍んで、日露國交の回復に努力せざるを得なかつた根因の最も主なるものゝ一つである。

七

日露の國交回復の結果　先づ手始めに、何處迄支那に於ける歐米の帝國主義を驅逐し得て、日本の經濟的位置がどれ丈け改善せられるか、又、進んで、其他の東洋諸國より歐米の帝國主義を驅逐することによつて、どれ丈け、日本經濟がいまの不公平待遇から脫し、さうすることによつて何處迄日本現在の經濟的行詰が打開せられるか。それ等の將來は無論今後に於ける日本國民の聰明と覺悟との如何によつて決定せられることであるが、しかし兎に角、いま、日露の國交回復によつてその礎石がおかれたことに間違はない。而して私はいま日露提攜の最も重大なる經濟的意味を日露直接の經濟關係の增進よりも、この歐米の帝國主義の東洋よりの驅逐の裡に見出すものである。國際的に見る限り、日本現在の經濟的行詰は、この方向に進む以外に、打開せられる方法はないと信ずるからである。日露國交回復の報に對する英國の論調が、この點を最も恐れてゐるが如く見へることは、流石に世界最大の帝國主義國だけであつて、事物の眞相をよく洞察し得るの明があるものと感心せざるを得ない。

日露の國交恢復を悦ぶ

法學博士　林　毅陸

今回芳澤、カラハン兩氏の調印せし日露基本條約及び議定書は、吾々の大いに滿足を以て迎ふる處である。細目に就ては今後改めて協定を要するもの殘つて居るけれども、兎も角大體の要綱に就て協定の成立を見たことは、國家のために慶賀に堪えない。基本條約並びに議定書等の内容に立入つて今茲に說明する必要はない。既にそれは世人の、新聞報道に依つて知る處であらうと思ふ。嚴密に研究するならば、無論批評の餘地あるべく、不滿足とすべき部分もあるであらうけれども、先づ〳〵彼の程度の處まで我主張を容れしめて、首尾よく調印となつたことは大なる成功とも稱すべく折衝當局者就中芳澤公使の勞は多とすべきである。

さて斯く日露條約の愈々成立したるに就いては、外交上如何なる新局面開かれ來るべきや。是れが今茲に提出せられたる問題である。第一に極東國際政局の安定に資すること多大であるといふことは云ふまでもないと思ふ。千九百十八年以來約七年間日露は國交斷絕の姿に在り、殊に西伯利出兵以來は甚だ憂慮すべき關係となり、人皆日露國交の速に恢復せられんことを希望して居た。其希望が今愈々實現せられ、長い間のアブノルマルの狀態が茲にノルマルに恢復することになり、極東方面の國際政情をして不安疑惧の中より脫出することを得せしめた。彼の尼港事件に伴ふての北サガレン占領に、我國に於て何等領土的野心を抱いて居たのではないけれども、猶之れが爲めに種々の誤解を惹起し、一抹の暗雲を漂はしめて居たのである。今此の尼港事件に就いて、露西亞は其の責任を認めて、深厚なる遺憾の意を表することゝなり、同時に我國も保障占領の撤退を約し此暗雲を拂ひ去つたことは眞に喜ぶべきことである。日本が實際に何等の領土的野心を有して居なかつたといふことは、愈茲に證明せられたのである。北サガレンに於て油田及び炭坑等に關し、若干の利權を得たのではあるが、それは要するに尼港事件以來の各種の損害に對する辨償を意味するものであつて、何

人も異議を挾み得る筈はない。露西亞は依然の大國たると同時に、亞細亞の大國である。此露西亞と日本とが融和を缺くといふことは、交渉の上にも種々なる影響を及ぼし、一般東亞の形勢をして安定を缺かしむる所以であつた。既に日露條約成立した以上は、無用の不安疑惧等は自然に消滅し、其影響甚だ喜ぶべきものがあるであらうと思はれる。

日露條約成りたればとて、兩國の經濟關係が俄かに大活氣を呈すべしとは思はれない。露國は種々殊特の事情を有して居る。之れと取引を開くとするも急速に好成績を舉げ得べきや否やは疑問である。一ツは今後の細目規定の如何んにも依ることである。さりながら兎も角彼のポーツマス條約の有効は承認せられ、漁業協約、其他に關し日本人の既得權は承認せられ、彼我の往來も自由となり、私有權も認められ、出來得る限りの最惠國民待遇も約せられ、露國領土内に於ける鑛物、森林、其他の資源開拓權をも許與せらるゝことゝなりたる以上、兩國の經濟關係に相當の新發展を見るに至るべきは勿論である。此點に就いては、民間實業家の奮發に待つこと最も大であると思ふ。國交恢復をやかましく政府に求めながら、恢復の利用活用に徹たらざるは、實業家として恥べきことである。而して日露經濟關係の大に密となることは、更に廣き意味に於ての兩國關係改善の基礎を造るものたることも、疑ふ迄もない。

次に日露條約成立の一影響として、米國に於ける露國承認の傾向を助長するに相違ない。今日大國中に於て米國丈けが未だ露國政府を承認してゐない。米國には既に露國承認論が勢力を占しつゝある。元老院の外交委員長ボーラー氏の如きは其急先なりと云はれてゐる。今日本に於て愈々露西亞を承認した以上は、米國に於ける承認論を益々盛ならしめることゝ思はれる。又英國は承認後に於て條約を結ぶことゝなり、昨年八月八日マクドナルド勞働内閣の手に依り、一般條約及び通商條約を露西亞と締結したのであるけれども、同内閣の瓦解と共に其條約は破棄せられ形勢の變化を來たしたるは人の知る處である。併し此英國も日露條約成立の爲に少からず刺激を受くるに相違ない。今の保守黨内閣存續中は何とも明言し難きも、兎に角相當の條件に依つて纏りをつける方に、次第に傾かさるを得ない筈である。昨年八月の英露條約案は債務問題並に私人損害賠償問題に關し、露西亞に於て讓歩したる代りに、英國は露西亞に對して借款の保障を約した。然るに此露西亞に金を貸すといふことが反對の焦點となり、條約の破棄を見る迄に至つたのである。日露條約は借款の條項を含んで居ない。日露條約の形に於てゞあるならば、英露の間にも協定成立し得べきことゝ思はれる。更に

角今回の日露條約は英米政治家の參考資料となり、此等二國と露西亞との關係を改めしめる上に於て、大に裨益する所あるであらう。斯くの如くして露國が完全に國際家族團の仲間に復歸するといふことも、餘り遠くはあるまい。それよりして露西亞が愈條約を尊び、國際通義を重んじ、何れの國とも、誠意ある交際を爲すことゝならば、更に國際聯盟の一員に加へらるゝに至るべきことも、亦必然の數であらねばならぬ。之れは世界全般の政情を改善せしめる上に於て大に望ましきことである。

更に日露條約成立に伴ふて日支露提携又は日露獨提携等の說が外國方面より傳へられてゐる。之は少々早まつた臆測であると考へる。勿論東洋の安定を確乎ならしめるためには、日支露の間に提携の成ることを得策とする。又日露獨提携して國際に立つといふことも、場合に依つては面白い考案である。只今日の場合に於て、輕卒に臆測を廻らし、種々の說を立てることは如何であらうか。尤も今回日露間に作られたる議定書Aの第四條に、「兩締盟國は相手國の主權、領土權、又は國民の安寧を侵害若しくは脅威する如き條約、軍事同盟、又は秘密條約を第三者との間に現實に締結し居らざることを相互に聲明す」と規定してあるといはれて居る。現在に於て斯かる種類の條約、又は同盟等を締結し居らざることを斯く互に聲明することは、今後に於ても斯かる條約を作る意志なきことを間接に證明するものである。單に現在に於て、相手方に危險を及ぼすべき條約の存在せざることを聲明するも、國交上に價値あること相違なきも、それは同時に今後も斯かる條約を作る意志なきことを間接に示すものとして、特殊の味ふべきものを有するのである。右の第四條は今後に於ける日露關係に更に一歩を進めしめ得べき要素を含むものと私は解釋したい、即ち右の如き餘地と望みとはないではないけれども、それは將來の問題である。今は只纔かに國交が恢復せられたに過ぎない。今後兩國關係の實際の狀況如何、暫くの間は大なる注意を以て其成行を見る必要がある。例へば北京に於て作られたる條約並に議定書に基いて、今後更に細目の協定を爲す場合、露西亞は如何程迄我に對して誠意を示すべきや、又日露條約中には危險なる宣傳及び運動の禁止を相互に約して居るが、之れ又實行の狀況如何。此等の實際の成績に依つて、露國の誠意の程度も立證せらるゝことゝなるのである。それらを見ざる限り、日露關係が更に一歩を進めて所謂提携とも稱すべき程度にまでのラッブローシュマンを實現し得べきや否や斷言は出來ないのである。故に今日に於て早くも日露提携等の言を爲すは輕卒である。況んや日露獨提携云々の如きは猶更の事である。

日露は舊帝政時代に於て幾度も協商を重ね、非常に親密なる關係を作つて居た。現在の露西亞政府との關係も、少くも同程度にまで進めたきことは吾人の希望である。それは兩國の爲めに有利であり、又東亞一圓の平和の爲めに有利である。然しながら恢復後の日露國交の實狀如何を待たずして輕卒の言を爲すことは、吾人の與する能はざる所である。露西亞の側より見れば、英米を牽制するの手段として、日支露提携又は日露獨提携等の風評の傳はることは、寧ろ其歡迎する所であらう。米國の承認を促すため、又英國をして條約成立を求めしむるため、種々の宣傳は爲されることであらう。只我々日本人としては此間多少注意する所あるを要するのである。

乍併今日世界の國際政局を大觀するに、英米が優勢の地位に在ることは明かなる事實である。時としてはアングロサキソンの跋扈云々の聲をも聞くのである。最近の大戰のために最も有利の地位に進みたるは實に英米に外ならない。而して世界の勢力は其方に傾き過ぎるの形跡がある。英米は必しも好んで其勢力を濫用せんとするのではあるまい。併し他の側より見れば往々にして跋扈の批難を招くべきこともあるやうである。而して斯く世界の勢力がアングロサキソン民族の一方に偏することになれば、之れと均衡をとるべく他の勢力團の出現を必要となすに至るは、物理の原則上避け難きことである。其事は今日外國に於ても、多くの人々の胸中に往來しつゝあることゝ思はれる。さればこそ直ちに日露獨提携等の說ともなり來るのである。故に今後、英米の態度如何んに依つては、斯かる傾向を激成するに至るかも知れない。日本としては成るべく英米と親交を厚くし、彼等と協調を圖りつゝ國際に立たんことを努めつゝある。併し敢て英米に屈從するの義務なきは勿論である。假りにアングロサキソンの勢力に對し、之れと對立して世界勢力の均衡を計るべき他の勢力團出現するに至るとするならば、日本は其間に立ち自己の利益並びに大局上の考慮に基いて、自由の進退を爲すべきは云ふまでもない。只日露國交恢復纔かに成りたる今日の場合に於て、餘りに早まりたる輕卒の論を愼しむべしと云ふだけのことである。

日露新協約私觀

文學博士　三宅雪嶺

日露協定の成立するまで多くの手數が掛り、北京のみでも豫備會議を合せて七十八回に上り、其の前に樣々の事があり、双方ともに代表者が寢台で話し、餘り例の無い狀態であつた。早く片着ければ片着かぬでなかつたらうが、互に調子が分らぬ所があり、準備に年數を要したと看做してよい。日本も露國も世界の舞台に立つて居つても、一般に英米獨佛の國民ほどに注意を外交に拂はず、何も急ぐに及ばぬと思ふ所がある。然し日露戰役後、兩國ともに接近の必要を感じ、遂に同盟同樣の協約を結び、意外にも革命で無效に歸した。日本では革命に驚き、手の着けられぬ者とし、露國では革命に乘じ、廣く世界をも動かさうとし、互に交渉すべき餘地なかつたが、漸く年數を經、一方で餘り恐しい者でないとし、一方で餘計な爭ひせぬがよいとし、互に歩み寄るやうになり來り、話し合つて見れば、何れにも尤もの次第がある。考へて見れば幾年も分れて居つたのが可笑しい位になる。前に同盟同樣にまで接近し、一方で政府が變革しただけで喧嘩分れし、それで畢竟何をする積りか。何時まで睨み合つて居らうとするか。損する者はお互である。日本も十幾億圓を棒に振り、金高でも少いとせぬ。もつと有用に使つたならばと考へる時は、既に後の祭になつて居り、經驗の費用として諦めねばなるまい。如何に眼が利いたと稱するものが近視眼の甚だしいかを示して居る。日本では露國より離れ、獨逸が恃みにならず、英米に押え付けらるゝ儘に、名狀なき孤立に陷り、餘り安閑として居れぬのを悟り初めた。誰れ云ふとなく露國と交通を絕つて居つてはならぬとし、交渉の開けるのを望み、當局者も引き摺られる形になつた。北京で協定が成立したのは一種の新例が開かれた譯であつて、兎も角も四年越しの話しが纏り、ほつと一息ついた樣子がある。未だからとは決定せず、今後も何等かの行き惱みあらうが、多少の希望が開けかゝつて居る。

手數が掛つただけ將來に見通しが付かず、何から手を着け、

畢竟如何にたるべきかが明白を缺く。差し當つて北樺太の利權及び露領沿海の漁業に手が着くべきである。北樺太の石油石炭等既に條約で約束し、普通人に特別の關係が無い。國防にいくらかの便宜ありと云へば云へぬでない。漁業は北海道、北陸道に少らぬ關係があり、將發次第隨分發展するに足る。其の以外は西伯利に入込んでの事であつて、此處は勞農政府の權力の及ぶだけ問題が複雜になり、小さな問題は一人一個の儲けより、大きな問題は、天然の資源を開發し、日露は勿論世界に利益を分つに及ぶ。個人として如何に利益を得るか、資本なくて事が捗ばず、さりとて資本が制限せられ、需要供給のみで押して行く譯に行かぬ。莫大な原料ありても、政府の直營または認可組合の經營であつて、所有主を相手にすると逆ふ。事實上に樣々な事があり、呼吸を覺えれば案外無雜作に行くかも知れぬけれど、尋常の商業と異なるを察せねばならぬ。利益がありながら、割合に多く吐出すを餘儀なくされ、無駄骨折りを喫ずるやうな事もあらう。

然し特別の法律で特別の事があつても、落着く先は定まつて居り、正當の勞力で無駄骨折りになる事はないと認めて差支ない。一時損失あつても、辛棒しさへすれば無駄になりはしない。豫め期待したところで利益がなく、期待しないところに利益が湧き出すやうな事もあらう。嘗て世界を振盪する勢があつた西伯利亞鐵道は、滿洲に出入する位で餘り世界に効用を表はして居らぬ。浦鹽からか大連からか、又は其の他からか、一方は太平洋を横切り、一方は印度に通じ航路の大發展を遂げるに至らぬとも限らぬ。現に蘇聯を持ちあぐんで居る勞農制の結構次第で、運命が岐れるであらう。日露戰役前、佛國資を中心にして極東帝國を建設する計劃があり、それが戰事に破れ、帝制の缺陷を暴露したけれど、政治上の意義なく、產業發展の爲めに佛國資が一大部分となるかも知れず、日本でもこれに着眼せずに居れぬ。差當つて見るべき事ないとて、捨てゝ置くのは後悔の種を貽すに止まる。

然し發展するか何うかゞ分らず、發展しない所に力を注いでも仕方ないと云ひ、又實にそれで損する事があり、既に巨額の金を捨てたが、何としても間違ひないのは、資源の開發である。資源の調査が行き屆かず、何邊から貴金屬が發掘せられるかも量り難く、其の希望が當てにならず空恃みとしても、既に明々白々、一點の疑を容れない所には、材木の豐富なのがある。世界戰役勃發の年、諾威の探險家ナンセンが西伯利を將來の土地と呼んだゞけの事があり、將來の發展の計るべからざるものがある。南樺太に内地人が十二萬人移り、其の大部分は材木をパ

ルプにするが爲めである。それでも如何に材木で利益あるかを知り得られる。森林即ちタイガアを利用するは容易な事でなく、交通機關の開けた後の事であつても、力を用ひさへすれば大なる利益を得べきに定まつて居る。自ら利益を得る事が出來ず、多く他に搾取せられ、無駄骨折りに終るといふけれど、元と人間に利益な事をして、其の儘損失に終るは、よく／＼の場合であつて、大體上人間の利益を增すものが、それ相應の利益を得るとして誤らない。

いよ／＼西伯利から利益を得るまで、いろ／＼困難を經ねばなるまいが、埋沒した富を開發し得る事疑を容れない。北氷洋に面し、廣大なる沼地は殆ど年中氷結し、人力を以て如何ともすることが出來ず、たしかに無用の土地であるけれど、之れに續いて無限の森林があり、有用と無用と錯綜する所、將來の人の運試しに備はつて居る。昔羅馬帝國の盛んな頃、誰が北海沿岸に文明を見るを豫期したか。ゲルマニアは蠻族の巣窟であり、ラインやエルベや空しく北に流れた。然し後に北海が歐大陸の運命を制するに至つた。從來の亞細亞史は南亞細亞の歷史であり、北亞細亞を措いて問はず、蠻流の大河が滾々として北を指して居る。南亞細亞に文明が起り、歐洲を經、米洲に移り、廻り廻つて亞細亞に歸り、新たに文明の利器を以つて北亞細亞を開發すべき順序になつて居る。其の開けた曉は、ヒマラヤが大なるアルプス、西藏が大なる瑞西と認められるのである。世界史は其處へ向ひつゝある。北亞細亞は世界の人の開發するを待つけれど、日本と露國とが直接關係がある。支那は地が廣くて之を處置するに急がしい。日本は地狹く人多く、率先して北亞細亞を開くべき事になつて居る。他國の資源を開拓したとて、徒らに他國の爲めを計るに過ぎないと云ふが、何時でも現在の國境が存續するか。現在のみの事を計つては、將來に萎縮するを免かれない。歷史上に盛衰興亡が常でない。遠き將來を考へるのみでは溝に落ちる恐があるけれど、足許のみを見て居つては、頭を電信柱に打つたりする。此の邊で眼を見開くがよからう。

日露の提携を支那にまで及ぼせ

安部磯雄

日露條約の成立は日本人全體として大に喜ぶべき事柄であると思ふ。其意味は第一に、世界中の國と國とが人間同志の交際の如く親密なる交際をすることは夫れ自身好い事で批難すべき點はなく、それが出來るならば何人も喜ぶべき事でなければならない。殊に自分に近い者が一層親密なのが人情だとするならば、地理的に見て日本は支那や露西亞と一番接近して居るのであつて、其最も接近して居る國が互に睨み合つて居るといふ狀態は不自然でもあり、不利益でもある。斯くの如き狀態に在つた日露間に此度條約が成立したことは喜ぶべき理由の一である。次に人種的關係に於て、日本と支那とは其使用する文字も殆んど同一である同人種に屬して居るのであるから、日支が親密なる關係を持つことは當然であるが、露西亞も亦人種上餘程日本に近い關係を持つて居るのである。露西亞人は純粹の意味に於て西洋人とは云へない。悉しい人種的研究は暫く措いて、露西亞人は東洋人と西洋人の混血兒である、少くとも亞細亞人の血が多く混つて居るといふことは一般の說のやうである。斯くの如き立場から考へても日露は政治的にも、社會的にも、將又經濟的にも親密なる關係を持つ因緣があるといふも差支がないのであつて、其日露が此度の條約の成立に依つて再び國交を恢復し得たことは其喜ぶべき理由の二である。併し日露條約は成立したが、それを以て今俄かに安心することは出來ない。日露は形式的に交際は始まつたが、單にそれ丈けで滿足しないで、出來るならば斯ういふ交際を永く續けて行き、又それを一層親密ならしめることに努力しなければならぬ。之れを個人間の交際に見ても、交際をするまでには出來る丈け向ふの相手を研究することが必要なのは、世には友達として立派な人間もあり、好ましくない人間もあるからである。乍然一旦友達と定めた以上は飽く迄も徹底的に友誼を繼續する考がなければならぬ。日露の關係に就いても、私は其點に於て多少の心配がないではない。と云ふのは我國の一部の人の露國に對する心理に就

いて私は小疑を抱くのである。極端に云ふならば、我々は露國に對して眞に友人を待遇するやうな眞心を持つて居るかどうかといふことが懸念なのである。實際國と國との交際に於て、互に疑を持つたり、恐怖の念を抱いたりすることは決して好ましいことではない。然るに露西亞に對して我國の一部の人は、表面では交際するやうになつたが、心では少からぬ疑と恐れとを抱いて居るのではないかと思ふ。何となく露西亞といふ國は心の許せない、薄氣味の惡い國だといふ者がそれらの人々の間に大分ありはしないか。此度の條約に就いて見ても、我々がすぐ氣がつくことは我國は北樺太に於て種々利權を得て居ることである。日本はそれに代る物を露國に與へては居ないが、露國は日本に石油採堀權とか、漁業に關する利權等を許して居るのである。之れは勿論尼港虐殺事件の賠償の意味に於て日本が夫れ等を得たのであると誰も了解する點であらうが、併し斯ういふことがあるがために日本人の多數の頭に第一番に浮ぶことは、日露條約に依つて日本は經濟的に利益を得られるといふことである。更に亦露國は西伯利と云ふ廣大なる土地を持つて居るから、斯ういふ國と交際を結んで置けば、追々其處にある森林なども得られやうし、又は植民なども出來はしないかと云ふ者から、一口に云へば露西亞は薄氣味の惡い國ではあるが附合つて居れば損はないから辛棒して表面丈けでも交りを結んで置くのが得策であるといふ風に思つて居る人があるやうであるが、若し果してさうであるならば私は一層それを悲む者である。個人間に於ける信用を缺いた交際が滿足に行かない如く、國家に於ても其間に信用がなかつたならば其國は成立することが出來ない。我日本人は個人的交際に於ては比較的に信用を重んずるが、國の關係に對しては非常に責任觀念が薄くなるやうである。夫れは獨り露國に對して丈けではない。最も密接なる關係に在る支那に對してさへも我々は支那の義務を盡して居ないのである。と云ふのは我々は支那に對しては疑も恐れも抱かないが、其代りに之れを輕蔑する態度を執つて居るのである。之れは優越の地位に在る者が自己より劣れる者に對する態度であつて其處に隣人に對する信義といふものがない。斯くの如き態度を持續することは結局最も親かるべき隣人からも背かれて遂に孤立の狀態に陷入るより外はないのであるが、誰にも向う三軒兩隣と云ふのであつて、近隣の交際に態度を誤まることは一の大なる不幸と云はなければならない。日本は今世界中の國に憎まれて居る形であるが、せめて支那と露西亞とからだけは憎まれぬやうな態度を意識的に執ることが必要であると思ふ。そこで、露西亞に對する私共の態度を改めて行くには、先づ露國の

美點を見ることが一番必要である。人と交際する時には先方の弱點よりも美點を見る心が有りさへすれば交際は成立つ。然し其意味は露國が缺點だらけで、強ひて其中から美點を探し求めるといふのではない。實際露國には美點があるのであるから我國民はそれを認めなければならないと云ふのである。單に或意味に於て恐ろしい處や、油斷の出來ない點があるといふ故を以て露國の美點の全部を見逃すといふことは輕率である。如何なる國にも缺點や弱點はあるのであるが、其一方に於て又美點や長所もあるのであつて、それを互に認め合ふといふことが國際間に於て、又國際上に於ても必要なことなのである。又露西亞人は人としても生れつき親切な國民であると思ふ。國家としてはロマノフ朝下にありし露國は世界中に恐怖された國であつて、嘗て日本は其最も脅威を感じたものであつた。其當時の文章などを見ると露西亞を北方の鷲に喩へた言葉があるが、而も其時に於てすら露西亞人は親切な、立派な品性を有つた國民であつたのである。尤も世界中を旅行すると何處の國に於ても其處の人々は皆親切であることは旅行者の感ずる處であるが、其證據には英國に居た人は英國贔屓となり、佛蘭西に居た者は佛蘭西贔屓となり、斯くの如くして獨逸贔屓あり、米國贔屓ある所以であるが、それは皆其國に居る間に其國人と交際をして親切な點に好感を持つた結果に外ならない。故に外國人の親切に珍らしいことではないが、外國人も亦日本に來れば其大多數の人間が皆親切であることを感ずるに相違ない。然るに露西亞人は特に其性質に於て美點があるのであつて、誰もが露西亞人と交際をして見て、其うぶな、ひねくれて居ない、善良な性質を感ぜずには居られないのである。私自身の經驗に依つても、嘗て獨逸に居た時に先方から進んで交際を求めて來た露西亞人も知つて居るし、輕井澤で露西亞人の小供なども見たが、其等の人間には如何にもうぶな、人なつこい、善良な性質が表はれて居た。さう感じさせるのには露西亞人は日本人と人種的關係が近いといふことも手傳つて居るであらうが、それは又露西亞人が生れながらに持つ美點にも依るのである。個人的に考へる場合には、露西亞人には其性質の中に恐ろしい處や、薄氣味の悪い點を見出すことが出來ない。更に露西亞人には敬服しなければならない他の美點がある。一體に露西亞人は日本人などゝ比較して見ても其教育程度は一般に非常に低く、從つて政治的訓練などに於てもそれを缺いて居る國民である。帝政時代に於ても自治體は存在して居たが、何分にも專制政治下に在る國民として、其方面に於て別段に特長を示すことが出來なかつた。乍併露西亞人は又非常に團結心の強い國民であつて、大勢の人間

が一緒に仕事をするといふことには比較的多くの經驗を持つて居る。其證據には露西亞人は消費組合の仕事に成功して居る事實がある。元來消費組合は英國が本場であつて、其仕事は今日非常な勢を以て發達しつゝあるが、それは英國の勞働階級に於ける最も成功せる運動の一であり、今では會員三四百萬に達し、人口の四分の一乃至四分の二位は消費組合の仕事に從事して居るのである。次に消費組合の發達せるは露西亞であつて、消費組合の運動は歐洲戰爭以前から盛んになり、其狀態は戰時中に於ても變ることなく、引續いて今日に及んで居る。之れに反して我國に於ては消費組合の必要なことは認められて居るが、元來自治的な仕事に不得意であつて、市町村の政治すら巧く行つて居ない國であるから斯ういふ團體的運動はいつも成功して居ない。露西亞人が其敎育程度の低いにも拘らず、消費組合の運動に見事に成功したのは我々の羨む處である。若し眞に露西亞人を恐れるならば、單に露西亞が薄氣味が惡いといふ意味に於て恐れるのではなく、斯くの如き團體的運動に成功する露西亞の團結心を恐れるのでなくてはならない。此露西亞人は今所謂勞農政府を作つて世界に比類なき實驗を試みつゝある。兎に角世界廣しと雖も共産主義を國家の力で實行して居る國は他に其例を見ることが出來ないのであつて、其共産主義の善惡は玆では別問題としても、只それを今日曲りなりにも實行して居る國民として、さういふ力を有つて居る露西亞人には敬服しなければならない。若し物理學や化學に就いて大なる研究を爲し遂げ、科學界に貢獻をする人があれば何人も其人の仕事に對して感謝を惜む者はないであらう。爆烈彈の發明は軍事などに應用されて、其恐るべき破壞力を示す點に於て、發明者は陰惨なる發明を爲せる者として攻擊されるかも知れないが、世界は又或意味に於て其爆烈彈の有つ威力に負ふ所もあるのであつて、又一の大發明たることを失はないのである。現在露西亞が所謂社會學、政治學の上に於て大なる實驗と研究に從事しつゝある共産主義は、學問上からは多くの人々に依つて論ぜられ、一部の人からは社會組織の理想とせられて居るが、其共産主義の善惡、又其實驗の成功すると否とは別問題としても、此社會科學の實驗は自然科學の實驗と同じく偉大なる性質を持つて居るものである。若し露西亞人の實驗が美事に成功して、勞農政府の治下に於て國民全體が眞に幸福な生活を營むことが出來るやうな曉には、世界各國は初めて政治上、經濟上、夫れ〳〵或程度に於て露國の實驗の結果を參考として採用することにならぬとも限らない。

今日我國に於て最も危險視され、恐れられて居るものは其共産

主義である。日本が露國と條約を結ぶことは一般の希望ではあつたが、今日迄條約の成立が遲延したに就いては、其原因の一として、確かに此共產主義の問題があつたのである。即ち露國と親密な交際を結ぶことに反對はないが、露國と接近することが軈て共產主義の思想に接近することであつたのが我國にとつては恐ろしかつたのである。何故に我國に於て共產主義がそれ程恐れられたかといふと、元來共產主義は其思想夫れ自身が日本の國體と相容れないといふ、要するに國體論の立場から恐れられて居たのである。從來とても社會主義、共產主義、無政府主義等の思想は雜誌や書物に依つて我國に紹介されて居たが、それに對して日本政府は比較的に寬大であつたにも拘はらず、勞農政府の共產主義に對して殊更に恐怖する所以は、書物や雜誌から來る思想は單に智識階級の間に流布されるに過ぎないが、露國の共產主義は獨り露國がそれを實行する丈けに止まらず、總ゆる方法に依つてそれを世界中の隅々に宣傳することを目的とするものであるが故に、斯くて我國の智識階級以外の總ゆる階級に此種の思想が傳播されることは、遂に日本國民の思想に動搖を來し、我國體に反する種々なる事件を惹起する原因となることを杞憂したがためである。此度治安維持法が議會に提出されるに就いては、其眞僞は知らないが、共產主義の精神を世界中に宣傳することを目的とする第三インターナショナルに依つて、我國民の思想が動搖せしめられることを恐れて、豫防的に立案されたものであると云はれて居る。私は茲で治安維持法を論ずる必要はないが、此度の日露條約に於ては、露國は決して彼等の主義を我國に宣傳しないことを條約中に約束して居るのであるから、それに依つて我國人の共產に關する心配は確かに取り除かれて居る譯である。最近露國大使と佛蘭西政府との間に、露國は共主義を宣傳しないことを約束して居るが、實際は宣傳されて居る證據があると日本の新聞に書いてあつたが、その事實に就いては知らないが、假りに勞農政府が約束を守らないとしたところで、今日の我國の警察制度に於ては、其宣傳を差止めることは決して困難でない筈である。一昨年我國に起つた共產黨事件の如く、我國に於て秘密結社が成立することは今日の警察制度から云つて信ぜられない處である。我國では確かに露國の宣傳を食ひ止めることが可能であるが故に今此方面に於ける心配をしないが、假令手を變へ品を變へて勞農政府が主義の宣傳を止めないにしても、我國はそれに對しても少し寬大な態度をとることが出來ないものだらうか。換言すれば飽く迄も我國は露國を信じることに依つて、露國に對して抱いて居る薄氣味の惡い、若くは油斷のならない感じを取り去る

ことが出來ないものであらうか。相手が義務を守らなくとも自己は信義を以て相手に對するといふ態度を持つことは必要である。斯くの如き態度をとる以上は、露國の共産主義に對しても自ら廣い度量を持つて之れに對することが反つて賢明なる策である。共産主義が全く我國體と相容れない性質のものであるならば、其時は全力を盡して其宣傳を防止する必要があるが、問題は寧ろ其點に在るのである。共産主義は共和政治の下でなくては果して實行が可能でないか、又は君主政治の下ではそれを行ふことが不可能であるかといふことは茲では第一に先決問題である。取越苦勞をすれば共産主義に限らず何んでも我國體と相容れないと云ふことになる。基督教が我國に明治維新後入つて來た時に、我國人は德川時代に於ける基督教が天草騷動を惹起さしめた聯想からそれを迫害し、明治初年頃から二十年頃までの間は、其當時の學者で基督教は我國體に反すると眞面目に考へる者もあつて、學者と信者の間に激烈な議論が取交された。基督教の同胞主義を押進めれば結局神が人間の頭であり、其下に於て總ゆる人間は平等であるといふことに歸結するが、此思想が當時の學者から國體と相容れぬものとして心配されたのであるが、今日基督教は我國體に對して少しも脅威とはなつて居ないのである。又基督教の後に入つて來たデモクラシーの思想にしても、これが稍々もすれば共和政治の下に於て行はれるものであるといふ誤解から、一部の人の間にはデモクラシーは我國體と兩立しないといふ立場から反對論が唱へられたが、實は今日デモクラシーの最も發達して居る國は共和國たる米國ではなくして、君主國である英國に於てそれが絶頂に達して居ると云はれて居るのである。此立場から考へれば、共産主義の思想は我國體と相容れぬと云ふのは一個の獨斷であるかも知れない。廣い意味に於て、又極めて合理的の意味に於て考へれば、共産主義の主張は君主國に於ても實行され得る可能性があると思ふ。若し共産主義が我國體と相容れぬといふ點が明瞭に指摘されたならば、我々は其時には其部分丈けを拒絶すればいゝ。共産主義の主張は一個の完全體であつて、それは不可分であると見る者もあるが、然らば其一部分が惡いことは全體を採用することを妨げる結果となるが、これは單に坊主が憎いといふ理由を以て袈裟まで憎むのと同一の論理であつて、大なる主義主張は幾多の部分を包含するものであるから、或程度迄其部分を取入れることは必ずしも有害であるとは云へない。早い話が、社會主義の主張を全部採り入れることに反對する人はあつても、我國に於て從來社會主義の主張の或部分が惡いものでないとして實行されて居ることは認めなければならぬ事實である。譬へ

ば日本の中央政府は自力で種々の事業を營んで居るが、鐵道の如きも其一の例であり、將來は電氣事業、更に進んでは土地國有といふ點にまで國家の經營が及ぶであらうが、それだからとて直ちに政府が社會主義の實行者であるといふことは出來ないのであつて、此事は單に我國も實は社會主義の主張の如き一部分を採用して居ると云ふに過ぎない。斯くの如くして又共產主義を見るならば、今日に於ては未だ露國に於ても此主義の採用が成功するか否か不明であるが、若し其實行が成功した曉には、共產主義の主張にも好い點があることの證據となるのであるから、其時には其主張の好い點を取入れる丈けの寛大な度量がなければならない。我國民が總て此心持になれば、徒に露國を危險視することもなくなり、反つて彼の尊敬すべき所以を知つて、其長所を我國に採用することになるであらう。之を要するに露西亞と提携することは結局我國の利益に外ならないのである。

更に我々の希望を述べるならば、我々が斯くの如くして寛大なる心を以て露西亞を友邦とする以上は、此二國が提携して大事な支那問題を解決するやうに努力することが必要である。日露が提携して隣國支那の內憂外患を救濟することは兩國の使命である。現在の支那は恰も十四以上の狼のために肉に食入られて居る大象の如きものであつて、歐米の十箇國以上が支那の內地に資本を投じて直接仕事をしたり、富源開拓の名の下に利權を獲得すべく其肉に食入つて居る。支那の救濟とは此支那の不幸を救濟することであつて、支那から各國の野心を放棄せしめることを意味するのであるが、それを云ひ出すのには近所の者が好い。日露兩國は其適任者である。其時には日本も全然野心を棄てゝかゝらねばならぬこと勿論であるが、露西亞は其場合の好い仲間である。露西亞の共產主義は搾取をしないから、他の國のやうに支那の肉に食入つて利益を得やうとする考へは持たない。此日露兩國が世界に提議し、各國に勸告することに依つて、今日獨力で製造工業をさへ營む力のない隣國支那をして自主獨立の方向に導くやうに努力することが最も望ましいことである。此意味に於て我々は亦日露條約の成立を喜ぶと同時に、今後我國が露國と一層親密なる交際を持續することを切望して止まない。

日露復交に對する直覺觀

水野廣德

大連長春東京北京と持廻つた五年越しの日露交渉も漸く成立し、新協約の締結に依つて七年振りに日露の國交が回復された。嘗ては白青赤だんだら染のツアールの國旗の飜へりたる霞ケ關の一角に、鎚と鎌とを染め抜きたる勞農赤旗の掲げらるゝも最早や遠くはあるまい。隣邦との國交回復は何としても目出度く悦ばしきことである。曾て我國には帝國日本と勞農露國とは同じ地球の上に兩存を許さずとか、ヨッフェ氏の滯京を以て帝都の神聖を汚すなど〻騒いた連中もあつた。今回ヨッフェ氏が駐日大使として來京し、交親國使節として宮中に出入するに至る時、彼等はどんな顔して何と言ふであらう。

一九一八年故レニンの率ゐる共産黨の革命が成功して人類歴史の新紀元とも稱すべき勞農露國が建設せられ、勇猛果斷に有ゆる舊制度と舊組織とを破壞し、同時に世界に對して舊債廢棄と舊條約破棄とを聲明するや、列國は露國の背信を怒り勞農政府を以て暴民兇徒の恐怖政治と罵り、國交を斷絶すると共に或は武力討伐を以て、或は經濟封鎖に依つて勞農政府の撲滅を試み、我國に於ても亦西比利亞出兵の如き愚擧が演ぜられた。同時に共産主義を恐れ忌む資本主義國家は、單に、口に最大の努力を以て勞農露國に對する讒誣中傷罵詈誹謗を逞しうしたるが爲め、實情に迂き愚直なる國民は此の宣傳に誤まられ、勞農政治、共産主義を以て人民の生血を吸ふ悪魔の如く盲信するに至つた。我國に於ける相當の識者ですら今尚ほ露國の婦人國有を信ぜる者すらあるを見ても、如何に我國民が勞農露國を誤解せるかを知るに足りる。日露國交回復の實效と實績を擧ぐる爲めには、我國民は先づ露國に對する此の誤まれる見解と觀察とを改めねばならぬ。政府が如何に國交の親善を説くも、國民間に正しき諒解が無ければ國交の圓滑は到底期することは出來ない。

我が當局者の或者は日露新協約の成立を以て、我が主張に對する露國の譲歩に依るものと稱し、自恭自贊的に其の成功を吹

聴して居る様である。我等は幾度か斷絶破裂を傳へられたる難交渉をば兎も角も解決して協約の締結を了したる當事者の忍耐努力を多とするに吝なるものでない。同時に又現代の國際事情の下に於て正義外交なるものが動もすれば宋襄の仁に過ぎざることをも知つて居る。併しながら理否の如何に拘はらず無理强ゐに相手國を讓歩せしむることのみを以て成功とする力の外交を快しとせざるものである。道義的且つ合理的なる協調互讓こそ、圓滿なる國交を傳統すべき眞の成功せる外交であると信ずる。今回締結せられたる日露新協約なるものが、露國の讓歩に依れるか、或は双方の互讓に依れるかは、大連會議以來に於ける交渉の經過を見れば一目瞭然である。西比利亞撤兵期の聲明をすら峻拒したる大連長春會議や、尼港事件謝罪文の字句の爭に交渉期の過半を費やしたる東京會議等に於ける我が主張を顧みれば、新協約が双方の互讓に依れるは明らかである。寧ろ日本の方がより多くの互讓を爲して居ると思ふ。併しながら我等は日本の讓歩を以て決して我國の名譽を傷つけ、我國の利益を損したるものとは思はない。道義的且つ合理的なる讓歩は却つて相手國に對する我國の寛裕と友誼とを示し、兩國將來の國交を緊密ならしむる利益の大なるものあるを信ずる。然るに故意に露國の讓歩を高唱して自己の成功を誇らんとする當局者の態や、或は斯く言はざれば滿足せざる國民の姿を憐まざるを得ない。事實を無視して「相手國讓歩に依り」と言ふことゝ、事實其まゝ「双方の互讓に依り」と云ふことゝ、何れが正しく、何れが男々しく、而して又何れが大國民的態度であるであらうか。

我等は最早や遡つて日露交渉の經過に就きて語るを好まない。唯双方の協調互讓に依つて多年斷絶したる接壤隣邦との國交が新に回復せられ、兩國民が互に温き手を握り合ふに至りたることを兩國の利益と兩國民の幸福との爲めに祝福する。既に新交が結はれたる以上は力めて舊怨を忘れねばならぬ。日露協約は未だ批准を經ぬとは云へ、兩國の全權に依つて署名せられたる公約である。國交の回復は最早や既定の事實である。然るに今尚ほ我帝國議會に於て尼港事件に關する質問を操り返へし、漸く忘れんとする國家の反露感情を呼び起す如き者あるは誠に遺憾の至りである。我等は國民の悲憤を唆るゝ如き九段坂上の尼港殉難碑すらも無用物と爲すものである。我に殉難記念碑あり　彼に虐殺紀念碑の立てらるゝ時、たとひ百の協約結はるゝとも兩國民の握る手は永久に冷めたからざるを得ない」

○

勞農政府生れてより既に七年、世界の大國中今日尚ほ未だ露國を承認せざるものは獨り米國のみである。而かも米國も亦遠からざる將來に於て露國と復交の交渉を開始せんとするの氣運が動きつゝある。。勞農露國の基礎は今や漸く鞏固にして、共産政治は必ずしもマルクス一派の空想にあらざることを事實の上に示しつゝある。併し現在に於て露國と確實なる協約を締結せる國は獨逸を除くの外唯我日本あるのみである。そこに日露新協約の大なる意義があると信ずる。

今同締結せられたる日露協約に依つて展開せらるべき新局面は、之を種々なる方面より觀察研究せねばならぬ。併し大體に於て政治、經濟、社會、軍事の四方面に分つことが出來るであらう。先づ政治上に於ける新局面の最も重大なる點は日本の國際的地位に重きを加へたることである。日英同盟廢棄以來殆んど四面楚歌裡に孤立の觀ありたる我國は、露國との復交に依つて新に强大なる友邦を得た。露國は之に依つて國際信用を高め、日本は之に依つて國際地位を强めることが出來た。現在日本は政治の制度に於て、社會の組織に於て、資本主義國とは云へ、國としては世界の無産國である。共産主義の露國とは政治の形式に於ては異るも、國家の實質に於ては相似たるものがある。此の點に於て日露兩國民の提携融和は決して困難ではあるまい。

日露協約は從來の所謂英米追從外交の範域を脱し、我國の自主的外交に一新紀元を劃したるものと云ふべきである。日露協約は神經過敏なる歐米の言論界に一大衝動を與へたるものゝ如く、協約成立の報一たび傳へらるゝや、或は之を以て日露支三國協商の前提と評し、或は日露獨支四國聯盟の出現をさへ論じたものもある。兎に角東洋に於ける國際政局の一大轉化と云ふ點に於て一致して居る。三國協商や四國聯携の可否と能否とは別とし、斯かる評論の起ることが既に日本の國際地位を重要ならしめたる證據である。

（二）

次に經濟方面に至つては新協約の成果は一に西比利亞に對する我が資本の運用如何に屬する。元來人口稀薄にして文化低き西比利亞に對する我貨物の輸出は比較的少額にして年額一千二三百萬圓に過ぎない、殊に國交斷絶中と雖も西比利亞住民の必需品は種々の手段に依つて輸送せられ居たるが爲め、國交回復に依つて直に著しく增加することはあるまい。故に日露復交に依つて我國の受くる經濟上の利益は專ら鑛山森林等の開發權の取得である。我國民が露國との復交を要望したる所以も多くは

此の點に存する。由來國家として日本の最大弱點は物質の缺乏である。日本が世界の競走裡に生きる爲めには萬難を排して物資の獲得に努めねばならぬ。西比利亞の雪の下には無盡の資源が埋められて居ると云ふことである。新協約に依り露國は之が開發を日本人に許した。我が國民は徒に逡巡躊躇せる間に折角の獲物を後の鳥に浚はれぬ樣注意が肝要である。

○

日露復交が我國の社會或は思想界に如何なる影響を及ぼすかは是亦興味ある問題である。從來我國の貴族富豪官僚其他の保守主義者が露國との交渉を悅ばず、動もすれば之を妨げんとする傾のありたるは、共產主義の侵入を恐れたるが爲めである。元來共產主義無政府主義を始め各種の社會主義なるものは、其の科學的原理こそ西洋人に依つて究明せられたりとは云へ、其の實在的思想は社會組織の缺陷に伴つて必然に發生する自然の產物である。法の威力と劍の暴力とを以てすれば或は一時的には抑へ得るとするも、社會の缺陷の埋められざる限り根本的に滅ぼすとは出來ない。國交の斷絕に依つて思想の侵入を妨止せんとするは、税關に依て風の通過を禁ぜんとすると同一の愚である。露國と斷交するも國內に共產主義の起る理由あれば起り、露國と交際するも理由なければ起らない。寧ろ國交を回復し新協約に見る如く相互の宣傳を禁止することが遙かに賢明の策である。唯併し從來勞農露國を以て惡魔の國の如く誣謗したる或方面に於ては、今回の復交に依り國民に對する信用と面目とを失するであらう。用意周到の彼等は既に第二の惡魔國を製造して國民の氣を外に轉せんと力めつゝある。若し夫れ勞農露國にして平和と平等の建國の精神に背かず、正義を尊び信義を守らば共產主義に對する信用は益高まり、國民は最早や之を嫌惡危險視せざるのみならず寧ろ賞贊するに至るかも知れない。是れ社會改造を促す一大刺戟である。

○

日露新協約中には軍事に關する何等の規定はない。唯議定書Aの第四條に

兩締約國は相手國の主權、領土權、又は國民の安全を侵害若しくは脅威する如き條約、軍事同盟又は秘密條約を第三者との間に現實に締結し居らざることを相互に聲明す

とあるのみである。此の條項が過日英國議會に於て「國際聯盟と日露協約の關係」に對する質問となり、羅馬尼亞がベッサラビヤ問題に關して日本に抗議したる點である。要するに日

露新協約に於ては兩國間に何等軍事的協定は存在して居ない。併し新協約が直接或は間接に日本の軍事上に及ぼす影響は決して鮮少でないと信ずる。

日清戰爭後より日露戰爭に至る迄の日本の軍備の目標は海陸共に露國であつた。日露戰爭に於て露國海軍全滅の爲め我が海軍の目標は太平洋方面に轉したるも、陸軍は露國の復讐戰に備ふる爲め依然として露國を目標とした。然るに歐洲戰爭に依り侵略的なる帝政露國は覆滅して非侵略主義の勞農露國建設せられ、今や我が陸軍は殆んど其の目標を失ふに至つたのである。サウエート社會主義共和國聯合なる現在露國が其の建國の精神に於ても、又其の政治の基本に於ても、平和と平等とを主義とせるとは建國以來の政策に徴して明らかである。勞農露國は曾に他國家他民族に對して侵略に出でざるのみならず。帝政時代に侵略せられたる諸小國諸民族に對し民族自決の主旨に依り獨立の自由をさへ與へてゐる。リトウィヤ、アストニアなどが即ちそれである。我國の樺太占領や、羅馬尼のベッサラビヤ聯合に對してすらも、勞農露國は武力解決の途に出でない。

元來共産主義と侵略主義とは根本に於て相容れぬものである。他國が正當なる露國の權利を侵害せざる限り、勞農露國は他國に對して決して武力侵略を企つるものでない。露國が武力侵略を行ふに至る時は是れ自ら共産主義を拋棄したる時である。露國が今日尚ほ數十萬(八十萬或は百萬とも稱せらる)の常備軍を有するは、勞農共産を悅ばざる資本主義の侵略と、歐亞の大半に跨る廣大なる領土の治安維持に備へんが爲めである。加之露國の設備並に工業能力は外國と戰爭を開始するに適しない。特に國家の基礎尚ほ未だ鞏固ならざる今日、猥りに戰爭を開始することは反動革命派の乘ずる處となり勞農政府の自殺である。左れば勞農露國はその主義よりするも、實情よりするも、日本に對して侵略戰を挑む如きは萬々有り得べからざる處である。之を以て日本は最早や露國の復讐戰に對して恐るゝ必要はない。殊に日露の國交回復は徐々露國に對する我が武力警戒を弛めるとが出來る。我等は軍事的見地に於て平和主義なる勞農露國の永續を希望し、侵略的なる反動露國の復興を恐るゝものである。

露國以外の國に對し日本は今日大陸軍を備ふる必要を認めない。日露の復交こそは我陸軍の大休養日である。我陸軍は曾に五萬の兵數を減じ、今回更に四個師團を減少することに決し大に緊縮を加へたるも、尚ほ整理の余地があると信ずる。露國と友誼の保たるゝ限り歐洲軍が西伯利亞鐵道を利用して東洋に現はるゝ如きことは絶對に起り得まい。日露復交の此機會に於て我國は出來得る限り不急不要の軍費を節約し、西伯利亞方面に

於ける經濟的發展に力むるにあらざれば我國力の伸張は永久に期することは出來ぬであらう。

日露協約に依り我國の得たる軍事上直接の利益は樺太油田權の獲得である。今回得たる油田の眞價に就きては未だ何等公表されて居ない。或は極めて有望なりとも云ひ、或は豫想程では無いとも傳へられて居る。何れにしても此問題に對する我政府の努力より推して相當の價値はあるものと想像せられる。石油産額の極めて貧弱なる我國に取つては單に軍事上のみならず、工業上交通上に於ても大なる利益と言はねばならぬ。元來石油燃料の缺乏は我海軍に取りて致命的大弱點であつた。若し一部に傳へらるゝ如く樺太産油に依つて石油燃料の獨立を得るとせば、是れ躄が歩き出したと同樣の幸福で、尼港七百の犧牲は惜しむに足らぬであらう。

日露開交の經濟的、外交的、思想的意義

杉森孝次郎

一

日露間の關係が、主としては、日本と接壤露との間たる關係であるべきことは、國民によつて明視される必要がある。兩國間に接壤關係あるが故に、それ故にこそ、過去に於ては日露戰爭さへも戰はれたのであつた。またそれ故にこそ、日露戰爭以前にも、例へば明治初年に於ける樺太と千島との所屬關係協定の如き努力が、わが國から見ては多少不成績（なぜかといふにその僅年前に日本は樺太全島を買ひ受ける機會と可能を持たぬでもなかつたらしい）ながらも、拂はれたのであつた。

今回の基本協定も、それの第一意義は、日本とシベリアとの關係を實質的に社會化することに存せねばならん。實質的にとは經濟的にだ。

シベリアといつてもそれは非常に廣い。それが地理的に歐露

に近いほど日本との關係は薄く、それが地理的に日本に近いほど日本との關係は厚い。

原料的獨立の可能は、獨立國家の複數存在と國際平和とが必要である限り、各國の具備すべき一要件でなくてはならん。斯くして、日本からいふならば、支那とシベリアの原料を日本が或程度に享用しうる關係を、日本は、支那及びロシアとの間に造る必要がある。

原料的獨立の可能なき國民的勞働力、技術力、科學力、經營力、資本力、及び政治力その他は、國民的無力を意味しうる。その國民は、國際的に手も足もでなく、或ひは干乾しにさへもされうる弱點を持つ國民だからだ。

けれども、武力的侵略主義またはいはゆる帝國主義は、もはや、道德的善惡正邪の見地からしての否定を待つまでもなく、功利的成敗利鈍の見地からしてすでに明白に、すくなくとも日露支三國間の關係の如き場合が注意される限りに於ては、否定される。世界が二つに割れて爭覇戰を戰ふかたちに於ては、それは將來の一可能であるかも知れん。しかし、現在の一國が他の一國にむかつて試みる武力的侵略主義などは決して成功しない。

ここに於てか、日本の對支、對露の方法としては、自國の原料的獨立の可能を現實にするためには、支那及びロシヤとの友交關係を基調とするほかない。また現在の日本としては、自國を原料的獨立國化するためには、支那及びロシヤとの或深い友交關係を造るほかに方法は絕對にない。即ち、支那及びロシヤの原料を或程度に享用しうる自由を持つほかに、公認された自由としての權利を持つほかに、關係國際的に制度化されたそれを持つほかに、日本の原料的獨立國化は不可能だ。

歐露及びその近域の露領へは、日本からよりも遙かに近い海運が、西歐及び米國から開けてゐるといふことだけでも、日本の對露的注意の焦點はシベリア殊に極東シベリアに存せねばならんといふ判斷を理由づける資格がある。物資運搬の方法として、汽車便は船便にかなはない。隨つてシベリア鐵道は歐露直通の航路には敵しない。

大それた申しぶんに響くかも知れんが、日本としては、ロシヤにむかつて、ロシヤと協力して先づ極東シベリアの自然資源を開發し、利用する自由を、ロシヤから賛同して貰ふほかはない。

原料は自然物だ。それを腐らすことが人道的にも社會的にも愚であり惡であることはたしかだ。露領シベリアの原料が日本人を益するに終はつても、日本人の加工を經て多少世界を益

する結果を持つても、それは露國民の悦びうることであらねばならん。

讀めない國語の本を所有する人が、それを讀んで多少とも自他を益しうる隣人にそれを貸與することが、かれの善または大を意味しうると似た關係がそこにはある。

二

日露友交は、殊にこれに支を加へた鼎足形に於ては、米、英方面からの專制を制限する効力をも持ちうる。日英同盟の廢棄は、生ま樹の截斷ではなく、枯木の自然的朽敗であつた。遠交近攻は新時代の國際必要にそむく。新時代の國際必要は、接壤複數國の經濟的及び政治的團結を一大內容とするものだからだ。日英同盟の朽廢と、米及び英自治領の日本移民排斥とは、日本は支那及び亞露と締盟すべきだといふ大義の胎動にほかならない。

曾てジエノア會議が流產に終はつた結果、ロシアは西方に失望して日本へ向かつた。これが長春會議の一事情であつた。そのジエノア會議は、ロシアを含めたかたちの歐洲合衆國への一企試を多少とも意味したものであつた。英が再び保守黨の執政下に立つた昨今、露が再び親交の手を東方に伸べて來たことは露としては自然の行動だ。

しかし、歐露の國際的運命が今後どうあるかは、ここではしばらく問題とせずに置く。ただ、歐露スラヴ族が、英、佛、伊、獨、米等から、深く毛嫌ひされてゐることは事實だ。これは戰前からのあらたまらない事實だ。スラヴ族とアングロサクソン、チユートン、ラチン諸族とは肌が合はない。後者から見た前者はキメがあら過ぎる。產業に於て技術に缺け、政治に於て行政に缺け、品性に於て常識に缺けてゐる。蠻野、未開、無責任、放縱、粗傲、これらがかれらの鼻につく。しかも、そのスラヴロシアの人口と領土と地球を包む雄覇的本能とは恐ろしい。斯くの如くにして、西歐及び米は容易にロシアに許さない。一時的利害の打算にもとづくほか、そこに親交の發達する見込は、すくなくとも當分、ない。

大連會議の當時、日本政府は、接壤露を目的とすると同時に、專ら接壤露を相手として交涉した。經濟的に接壤露を目的としたことは自然でもあり、不賢明でなくもあつたが、政治的に專ら接壤露を相手として交涉したことは、粗大なる愚であつた。當時といへども、極東露は、政治的には歐露の一延長にほかならなかつたからだ。

接壤露は　政治的には今日といへども歐露の一延長にほかならない。それ故に、この關係が實在であるあひだ、隨つてこの

關係に對する適當の認識と評價が必要であるあひだ　日本とロシヤとは　即ち全露としての、またはそれの政治的首腦としての歐露とは、極度に相爭ふ可能（日露役は過去に於けるその一例であつた）をも持つ代はりに、出來るだけ　また大膽に相和する可能をも持つ。いまはこの可能に機會を與ふべき時だ。そして、相爭も、實に相和に終はるべき　またそれを目的とする意義あるものであることは、日露戰後、たとひ不充分ながらも日露間に政治的及び文化的交通が新たに機會を得たといふ過去の一事によつても例示される通りだ。

日露支は、國際的にはいづれもわかい。國際的青年または少年日露支が、接壤三國として一大新團結を構成することは、世界の他の部分に對する一大刺戟たりうる。その刺戟のうちには、世界の他の部分もそれぞれに接壤諸國間の聯邦形成にむかつて多少新鮮に興味づけられるといふ性質の要素もありうる。

土地の私有と世襲が、或ひは世襲的私有が、國內的社會組織に於てのみならず、國際的社會組織に於ても次第に否定されて行く進化的必然がある。領土の意味が、たとひ國家は複數に保存されながらも、段々と人間的、社會的、文化的必要に征服されて行く必要と必然がある。この基礎的傾向が、日露支を經濟的及びその他の實質的形式に於て綜合したり、世界の他の部分をもさうしたりして行く現像をそれからそれへと新らたに呈しつゝ進む。

國家主義は　現代に於て、一つの大きな習性であり、衝動であり、必要である。これを殺すことは出來ない。しかしこれをそのまゝのかたちに於て保存することも出來ない。前者は不可能であり、後者は有害だ。國民主義よりも一層綜合的な目的を構想して、國民主義の全部を、その目的を達するための一部方法位に昇格させることが現代の一必要だ。日露支團結は、日本から考へれば無論だが、支那から考へても、またロシヤから考へてさへも　その各自の國民主義の綜合化的精粹化的保存方法としての意義を持つてゐる。

日支露の接壤團が獨に延長することの價値は無論だが可能も考へられないではない。しかし、その場合には、獨佛間の國境的意義を改進するだけの友意と責任を、日支露としては敢取するやうでなくては構想が小さ過ぎて見苦しくもあるが、それは成功しまい。世界救濟の底意なしでは、部分的救濟策は行きづまる。それは餘りに明確に利己であり、專制であり、排他であるからだ。無論日本は、日露支團を目的とする際にも、米英の專制に備ふるだけでなく、米英との綜合的幸福にむかつて誠意を大膽に持たねば、これもまた見苦しいだけでなく、自己破壞

に終はる。結局、人類は一社會を共有し、共營する目的にむかつて邁進することが最も賢い。

三

交際二國が政治的、經濟的、教育的社會組織の原則に於て餘りに甚だしく相隔たつてゐたり、相そむいてゐるあひだ、その二國間の交際は隨つて不徹底たらざるをえない。しかし、原則の原則に於て一致を缺くことは、合理的にはありえない。

日露兩國の場合について考へるに、原則の適用は多少兩國各自的たらざるをえない。しかし原則意識に於てはそこには唯一があつて複數はあるべからざるものであるから、日本についていふ限り、日本としては、先づ自分の力の原則をば充分に良心に滿足の行く本質的公價あるものにして持つための努力をすこしでも吝しまないやうにしたい。事情が許す限り、お互ひに自他のために、現に自分が持つ原則を自他共通の最善として、確信し、主張しうるやうでなくては、その原則がそれだけの價値あるものでなくては、安心していい筈がない。自己進善の意志と努力を要件として他の進善を助ける。ここの關係は、個人的交友間の場合と同樣の方法に依賴するものであることが最も自然だ。

しかし、國交公開の結果、すくなくとも日本からいうて、眞實の現實と眞實を知る機會が大いに增進することは、いろいろの意味に於て悦ばしい。ねがはくば、お互ひに深く相知られて、他を容しうるやうな現實と眞實を出來るだけ豐富に持つやうにしたい。

四

最近の日露關係に關聯して想起される個人の內に後藤氏、芳澤氏等があることは顯著だ。私は、公果を待ちえなかつた、しかしながら特別の識力と氣力をそれに關して示した中野正剛氏を、他の多少の個人的及び團人的事實と共に、遺失することが出來ない。もしそれ最近の日露關係に關する社會環境的事實一般は、最も重大ではあるが、いまはそのすべてを默解して置くにとゞめる。



曲亭馬琴についての夜話

眞山青果

この頃ある雜誌を讀んだ。そのなかに「中學生と江戸文藝」と題して、成城中學の教諭多田義延といふ人が、中學四年級の生徒百五十二名に課題して、かれ等は江戸時代の文藝についていかなる智識をもつか、またその時代の作品を如何に眺めていかに考へてゐるかを試驗するために、生徒等の答案を統計分類して、かなり親切に報告してあつた。そして、その課題といふは、（一）淨瑠璃とはどんなものですか。淨瑠璃を聞いた事がありますか。淨瑠璃を聞いて面白いと思ふか。（二）狂歌とはどんなものですか、その作例。（三）曲亭馬琴。伽羅先代萩。假名手本忠臣藏。蜀山人。近松門左衞門。（四）明治以前の文藝品で面白いと思つたものは。以上の四問題であつた。わたしはその報告を讀んで、自分の本業とする專攻課目の上に多大の利益を得たことを執筆者に感謝しなければならない。しかしこゝではその諸多の問題に觸れることをしない。小文の主題とする曲亭馬琴に對する答案だけをこゝに列記して見やう。

「小說の大家。」と答へた生徒が四名。「有名なる近代の小說家。」と答へたものが二名。「明治以前の有名なる小說家。」と答へた者が三名。「幕末の小說家。」としたものが二名。「德川時代の小說家。」とした者が四名ある。これなどは、甚だ漠然ながらも、先づ然うも云へやう。「元祿時代の小說家」とせる二名。「明治初年の滑稽文學者。」「明治の著作家中に錚々たる者。」と答へた三名。「維新の頃八大傳を著して近頃死す。」等の答へは、時代を書

誤してゐるとともに、われ〳〵が半生を送つて來た明治と云ふ年代が、今の中學生の目からはいかに遠く遙かに眺められて居るかと云ふことを氣づかせられる。又、「川柳の歌人。」と答へた二名。「昔の俳句の名人。」「歌で名高い人。」と答へた三名。「昔の詞の大家なり。」「國文學者で機智に富んだ人。」「滑稽者」「淨瑠璃作者として知らる。」「畫家として有名な人。」「本名を近松門左衛門と云ひ德川中頃の狂言脚本家（外に近松と混同せる者四人ありと云ふ。）」——等の答もある。又「落語の大家。」とした者三名。「講談師の名前。」——と答へたものもあるが、これは、寄席のびらなどに寶井馬琴とかいふ少し名の知れた落語家があるために、それを見覺えたのだらうと、報告者は解註してゐる。外に不明の答案が三十名、全く知らずと答へた生徒が二十人あるといふ。そしてその殘りの學生九十七名だけは、兎も角も曲亭馬琴の名を、その著作里見八犬傳の名にむすびつけて記憶してゐたやうに見える。「八犬傳を書いた人。」と答へたのが五十一人、「里見八犬傳の著者で有名な學者。」としたものが二人ある。「八犬傳弓張月などを出し瀧澤馬琴といふのが本名。」「里見發見傳を表はした文豪。」「發見傳竹取物語の著者。」「里見發見傳著者、小石川清水谷に墓あり。」——などが各一名。

わたしはこの報告を讀んだ時に、たゞちに思ひうかべたのは、嘗て何年か前に讀んだアストン氏の馬琴評論であつた。其架を探して日本文學史のその條下を見ると、ある。併し、只一言豫言したきことは、この後、日本人は、全く支那思想を脫却したる曉には——日本人は今や、年一年之れを脫却しつゝあり——馬琴の描きし男女の性格の不自然なるを認むること、今日我等（歐洲人）の認むるが如くなるべし。其曉には、馬琴の小說は、かのセルヷアンテス以前、大に西洋に流行せし騎士物語の如く、篋底に束ねられて、其國民思想發達の經路の參考となるばかりに至らん。」と、ある。わたしはこの警語をふと思ひ出したのである。たゞ思ひ出しただけであつて、好いとも惡いとも云ふのではない。

明治時代に飜刻された八犬傳や弓張月の各種活版本をあつめて、その奥附の年月版數を調べてもわかることだが、馬琴の著作ほど讀者に盛衰の時代があつて、冷熱の時期をくゞつて來たものはなからう。それは馬琴評論者のかならずいふことだが、僅に五十年に足らない明治年間だけでも、かれの作品は三度埋沒されて三度復活したと云はれてゐる。最初は明治初年の極端なる歐化心醉時代に葬られ、二度目は明治十八九年頃の泰西文明の咀嚼時代に、坪内博士の小說神髓などに驅逐せられ、

日清日露戰爭の間、日本人自らの謂ゆる國運發展時代にあたつて第三回目の忘却をうけてゐる。そして明治大帝の御世の末期明治四十三四年頃に、孔子熱尊徳熱赤穗義士熱などとともにや、馬琴熱擡頭の機運を見たやうであつて（そのことについては、鷗外博士が嘗て論じてゐる、）書肆金港堂などはかなり多大な資本をかけて、完全なる翻刻本をつくつて巨利を博さうと企てたけれども、同書の賣り出される頃にはもう世間の馬琴熱もさめてゐて、印刷本は空しく倉庫に積み重ねられてしまつたと云ふ話も聞いた。

大正に入つて、この度中學生等の答案は、少くとも馬琴に對して、第四回目の忘却期に陷つてゐることを證據だてゝゐるのだらうが、しかしわたしはそれで好いと思ふ。眠りとすればこの四回目の眠りは、深く、濃く、やすらかに、或は永久に覺める時のない睡眠であつても一向さしつかへないと思ふ。斯う云ふのは、われ／＼の文明の上から、または國民の思想など云ふ大局の觀察點から云ふのではない。馬琴と云ふ人、それ自身の上から云ふのだ。八十二年の長い苦しい人生に、喘ぎ、苦しみ、疲れて、いま淸水谷深光寺の塋域にしづかに眠つてゐる馬琴その人のために考へて、わたしは然う云ふのである。かの翁ほど、他人にゆり動かさるゝことを嫌ふた人はない。かの老人ほど、しづかに投げ出される孤獨なる自分を探し求めてゐた人はない――

もう十年にもなるだらう。わたしは彼の生涯の歷史に興味をもつて、彼の日記や告白によつて少しく研究の步を進めたことがあつた。然し讀むほどかれの人物や性格に厭はしさを覺えて、寧ろある時には彼の言行に激しい憤怒をさへ覺えて、中途にして研究を抛つてしまつたことがある。と云つて、自分が十年來こゝろざしてゐる研究課目から見ても、いづれ一度は彼の生涯の內面的傳記に觸れなくてはならない順序なのだから、始終氣をつけて彼の日記を抄錄したり、彼に關する坊間の古寫本などをあさり求めてはゐた。それでゐて、全面的に諒解といふ人物を、わたしの心のうちに描き出し、組立てゝ見るのが、何か不快な厭はしいものに對面しなければならぬやうな氣がして、妙に躊躇されてゐたのである。これはわたしの病的な性格のひとつであらう。自分の性質の偏狹を始終病みながらも、古人の書簡や日記を讀んで、その人の心の狹隘さを見せつけられる時には、何んとも云はれぬ憤りを感じる。自分がいつも經濟の拙さに苦しみながらも、他人のあまりに細かく行屆いた節儉ぶりを見ると、筍の根のつぶ／＼を見た時のやうな一種の顫慄

が皮膚をはしるのが、明かに感じられる。臆病にしておどく人の顔色を讀みながら、しかも小さく固くなつて、少しでも他人の侵入をうけまいとしてゐる人を傳記の上に見出した時には、小兒等が土にうごめく青蟲を見付けて、蹈み潰さずにゐられなくなるやうな、生理的ないらだゝしさをわたしは覺える。おのれ自身に就いて、餘り多く語るものを憎む。おのれより外を考へ得られない者を惡む。――斯う云ふ病的なわたしの性格は、何處から來てゐるのか、それは考へるべきことであらう。考へなければならぬことであらう。しかしわたしはそれを考へやうとは思はぬ。這はこれ、一己分内のことゝして、一生この扉は啓けたくないやうにさへ思ふ時がある。

わたしはこれまで、馬琴みづからの口から自分を語る言葉を聞くと、何日もすぐ如上の惡い性癖にうち勝たれて、研究心を萎縮させられるのが常であつた。そのため意識的にも無意識的にも、彼について深く究むることを避けて來た。狭くまはつて人の言葉で云へば、「其れよりも、我執が強くて、人情負けせず、憚るべきであつて慕ふべきでなく、遠くより望むべきであつて近づいて狎るべきでない。」人物として彼を批評してゐる尊嶺居士のやゝ好意ある批評にも、五十嵐教授の如く、「思ふに馬琴は子として愛らしからず、父として尊からず、夫として親まれず……いかに偉くとも、馬琴のやうな人物を、親にも、子にも、兄にも、弟にも、主人にも、家來にも、友達にも持ちたくないと思ふ。彼は風變りな人間の標本として面白い人物で、温かに交際すべき人物ではない。」と、遠慮會釋もなく、大膽に、放言を逞しうしてゐるのを讀んでも、格別苦にもならなかつたし、不都合とも思はず過して來たのである。

然う、六月の下旬だらう、暑い日の午後だつた。清見陸郎君がひよつくり訪ねて來られて、いま或雜誌のために老年の馬琴を讀ものとして書いてゐるが、かれの嫁お路に對する感情を流露したやうな恰好な記事は見當らないかと云ふ質問をうけた。しかし當時わたしには別にこれと云ふ資料もなかつたので、却つて清見君から同君の馬琴觀察や芥川龍之介氏の馬琴について書いた小説の硬概などを聞いて、却つてわたしの方が益を得たことが多かつた次第である。そしてその時ふと清見君に向つて、彼の婦人觀の一つの例として、彼とその女弟子と稱せられてゐる只野眞葛女との交渉の顚末などを、仙臺の方に殘つてゐる傳説のまゝ話してゐるうちに、わたしは切りに眞葛女について知りたくなつて、清見君が靴の紐を結んで歸る間も心に待ちかねて、いきなり獨考論や兎園小説を引張り出して來て、書齋の青疊の上に仰臥して仕事も忘れて讀み耽つた。そしてかなり長篇

なる獨考論を一氣に讀み終つた頃には、子供等はもう裏表の庭に打水を終つて、樹木の葉末をすべり落ちる水滴の音が、ポトリ〳〵と土に音してゐた。わたしはその時ほつとして、全く涙を拭ひたいやうな氣持になつて、蒼白くたそがれゆく青葉の庭を深く見詰めてゐた。獨考論や兎園小說の眞葛の媼を讀んでゐるうちにわたしはいつか、當の眞葛女のことは忘れて、ものあつて引かれるやうなしめやかなる心になつて、馬琴といふ一箇不幸なる老翁の後姿を凝視してゐるのに氣がついたのである。その時の感情の通りを云へば、わたしは人の心の底まで迫つて來る人間の僞りなき姿を見せられて、思はず肩のあたりに冷かさを覺えるやうな氣にさへなつた。

わたしはその日から、一切他の仕事は手につかなくなつた。燕石十種や溫知叢書、百家說林などのめづらしくもない流布本から初めて、彼の書簡集や日記雜錄や評論傳說など、圖書館や知人の書架までを獵つて、七八の暑い二月をほとんど寢食を忘れて、彼について讀み通した。そしてそれと同時に、わたしは、彼の翁に對する見方が十年前の私とまるで違つてゐることを知つたのである。十年前の拔萃帖を引き出して檢査すると、例へば彼の性癖などについても、彼の倨傲とか彼の鄙吝とか彼の剛腹とかこぐち書きして、引例に書き拔いてあつた諸多の事實が、一つ〳〵その觀察を誤つたことに氣がついたばかりではない、その一つ〳〵が反對に彼の翁の人間としての弱さ、正しさ、美しさを說明する反對の例證にひかるべきを發見したのであつた。讀めば讀むほど、しみ〳〵と心に迫つて來る親しみを感じて、正しく生きんとして苦しみ惱んだ弱き平凡人の姿が、まざ〳〵と眼前に開展されるやうに思つた。同時にわたしは、私事ながら自分自身に對するよろこびをも感ぜずにゐられなかつた。斯うまで際立つて違つた觀察がわたしの心に來たのは、竹筒の觀音びらきが偶然ひらけるやうに、一氣に、心の扉がひらけたのではなく、十年の間に默然として眺めて來た人生に對する澁のやうな感想が、鏽のやうな感情が、次第に自分の心に蓄積してゐて、それが彼に對する今日のわたくしに導いたのであらうと思ふ、云へば寂しいうら悲しいよろこびなのである。わたしは初めて、馬琴翁を理解し得る歲になつてゐたのだ。

秋は日に〳〵すがれてゆく。わたしは、他人の庭園ながら自由をゆるされてゐる三畝の庭の、綠陰深庭の土を歩み廻りながら、毎日々々、やゝ百日近くもこの翁の平凡な姿と共に暮した。そして夕方になると青葉の下に竹椅を据へて、この翁の長い〳〵堅苦の生涯について考へさせられた。わたしは今、その心

株を讀者とともに味ひたいと思つて、こゝにこの筆をとる氣になつた。無論それはわたし一人の感慨に過ぎないことで、他人に強ゆることではないのだが、しかしかの翁ほど自分を正しく正直に人に理解されんことを欲して、息苦しいほど執拗に自己を告白した人はないのに、その懺悔の言葉が却つて反對に彼の眞面目から人々の心を遠ざけ、傷ましいほどの誤解に偏曲者の心證を導いたといふことは、彼のためにもわたしのためにも、たまらなく寂しく心憂いことに思はれる。と云つてもわたしは決して、讀者の前に獨語はしたくない。やがてわれ〳〵と同じ道をトボ〳〵と歩んでゐるやうな、この孤獨にして薄倖なる老翁の寂しいうしろ姿を、わたしは手を貸して讀者の前に徐かに送れ出せばそれでよいのである。どう見られやうと、その時はもう他人の心なのだ。

序ながら云ふ。わたしのこの小文は、すべてみな老人自身の告白――彼の浩瀚なる日記の一部と、驚くべき精細なる彼の書簡の現存するもの及び彼の自叙傳的記錄と――に據つたもので、わたくしの心をもつて書かれたる他人の說話には一切耳を傾けないことにした。手元の原稿には極めて微細なる一句一行にもその出所の確實を證明すべき脚註を加へてあつたが、今は印刷の煩雜をさけるために、日記及書簡文に據るものは大半それを刪除することにした。

夜話その第一

文政十年六月三日。彼の上顎にたゞ一枚の齒が落ちた時の記事に、「予三十二歲の頃より、年々齒を脫落す。今茲六十一歲にして、齒みななくなりぬ。おもふに幼少より老に至るまで、日々甘味を嗜み」とあるから、彼の甘味ずきは明かであらう。日記の買物にも砂糖が多く、月に平均して三四斤、時に六七斤も消費してゐるのは、質素を第一とする彼の家庭としてはなはだ目に立つ。もつとも悴宗伯も無類の甘味ずきで、病中は粥に白砂糖をかけて食してゐるほどだから、彼一人の嗜好のみではないかも知れぬ。隨つて餅類の需用も多く、壬申歲暮（文化九年）の搗餅の注文は、四人家族に八斗三升と記入されてゐる。そのほか隨時に糝粉、寒曝し粉、白餅などを求めてそれを汁粉餅、鹿の子、ふたゝび餅、小豆團子などに手製して賞味してゐる。親類や出版書肆からの手みやげも、餅菓子や甘味の類が多く見える。

馬琴は煙草は少し嗜んだけれど、酒ぎらひの人として世間に知られてゐる。彼が放浪生活につかれて蔦屋の番頭に住み込む

時（彼、二十五歳）の京傳の紹介の言葉に、「酒は飲まず、手を書き、文字も讀め作氣もあり。併し實體と慥に請合申されぬ。」と蜘蛛の糸卷にあるから、無論酒客とは思はれない。然し全然の生下戸であつたか何うかは疑ふべき餘地がある。勝沸西遊記の序に、「義理とふんどしかゝぬにはましなるべしと、一杯きつけのこなから酒、せう〳〵醉つてぐあんの如し。」とあり、俊寛僧都島物語の序文に、「靜夜坐二蕉窓下一。新茶一碗、美酒一盞。」などあるのも、例の騒客氣取りばかりとは思はれないのに、彼に親交ある關忠藏や屋代輪池の家に彼を正客として招かれる場合に、大抵酒が出てゐる。日記に、「神明前和泉屋市兵衛方へ罷越候處、酒出され及二長坐一。」などの記事も散見するし、彼が妻お百と爭論して悔恨してゐる翌日の記事に、「狂醉の餘此の如し。」とあるを見ても、時に二三杯の盃は手にとつたのではないかと思ふ。付いて思ひ合せるのは、彼の買物のうちには、鎌倉がし豐島屋の味醂酒の記載がかなり多い。大抵三升の味醂を三四十日の間に使用してゐる。これは甘味ずきの馬琴が、業務につかれた氣ばらしに、時々嘗めるやうにしてゐた料ではなからうか。——後に、文政七年十一月の耽奇會の記を讀むと、その月の席主西原梭江が來客へのもてなしとて、京都の酒樓雨がへると云ふ家の酒器を出して酒を出した。屋代弘賢がその奇器を愛玩して、「弘賢は蛇ならねども上方の、雨がへるにに腹をやしなふ。」と詠んだのに和して、馬琴が、「雨がへるのむくちなはにつらなれど、われ下戸なればすこしなめくじ。」と云つてゐるのを見た。

魚類には鮎が第一の好物らしい。年々その季節には諸方から送られてゐる記載がある。また土用中は泥鰌汁の記事が多い。自宅の池に浮き上つた鯉を濃漿にして食し、お百にいやがられてゐる日記などを見ると、馬琴は一體に河魚ずきなのかも知れない。彼の嗜好をよく知つてゐる筈の入魂者からの贈物を日記で調べると、さより、ひらめ、魴鮄、鯵、きすなどの如き淡白なる魚類が多く、また野菜には筍や初茸、伊勢の糸わかめなどを愛してゐるから、腥膩なる食品はあまり好まなかつたと見える。嘗て蓑庭翁の直話に、瀧澤の家では他から鰻魚の切手など貰つても、家にては食せずに大抵は金に換へたやうですと聞いたのみでなく、日記にもそれらしい記事が一箇所あるが、これは必ずしも吝嗇のためとばかりは云はれない。雲丹や鹽辛類は好まなかつたらしく、國土産などに送られても直ぐ他の家への贈品にふり向けてゐる。何れにしても食物には甚だ質素な生活であつて、馬琴の家の初鰹は四月の二十日ほどゝぎすの啼く頃、しかもそれが片身買ひであつたことは、日記抄にて管見

翁に揶揄されてゐる通りであらう。

始終下女に逃げられて、手不足のためもあらうが、瀧澤家では食事客をはなはだ臆劫がつてゐる。なるべく病人にかこつけて饗膳を出さぬことにしてゐるが、婿の清右衛門とか馬琴の妹どもなどには、折々「かけあいの夕飯」などを出して、それは必ず日記に記入して置く。餘儀のがれがたき場合には、近所の蕎麥などをとつて客に饗應してゐる。馬琴はかなり大食の方で（悴の宗伯も大食で、病中にも常人の三人前を食した旨が篠斎への手紙に見えてゐる）それに運動不足で胃腸をそこねてゐたので、時々碾割の麥飯を用ゐてゐた。

世帯の好い馬琴だから、漬物にはかなりやかましい用意ががあつた。梅干は毎年三斗四升づゝ漬けこみ、澤庵は年に三百本以上づゝ漬けてゐる。「澤庵漬三樽、内壹番當座食六十本、ぬか三升鹽入鹽一升八合。二番百本、ぬか五升鹽四升。三番ぬか三升鹽六升五合。右三樽おみちお百兩人にて漬畢。殘り四十本はぬかみそに入。」と日記にあるのは、一々漬物にも馬琴が差圖してゐたのだらう。ふだん働きぎらいのお百が、漬物にはいつも娘に先立つて襷がけになる模樣が見え、漬物の蓋あけ時にはかならず方々に配つてゐるから、お百は俗に云ふ漬物自慢の老婆であつたのだらう。そのほか茄子、胡瓜、蕪の當坐づけも相應多かつた。

この日記にある澤庵漬の大根の出所については一騒動を起してゐるのだが、彼の性格を知るために見のがしがたい記事だからそれは後に云ふとして、こゝには序に、彼の家の買物について少し記して置く。何事にも習慣をまもつて、新例をつくることを厭ふ癖のある彼は、買物にも一定の店を定めて置いて、例へ不便でも遠路でも、決してその以外の店からは品物を買入れなかつた。從つて神田にうつつても四谷に引越しても、不自由を忍んで飯田町時代からの商人から買つてゐた。味りん醤油は鎌倉河岸のとしまや、味噌は品川の大角久四郎、足袋は二見屋（後にはとしま屋とある）、筆は村田宗清（晩年には伊勢の友人に賴んで龍瓜筆といふを用ゐてゐる）と極つてゐる。飯田町の商人では紙類を中屋、強飯餅類を中村屋、砂糖や藥種は中坂の小松屋（小松屋百延、三右衛門と稱す。元飯田町の藥店なり。此人落し咄の上手にて、聞き上手といひしはなしの小冊、大きに行はれたり、と假名世説にある）などときまつてゐて、多くは帳面買であつた。薪炭だけは越中島に出入商人があつても、時の相場を聞き合せて、本郷のさゝやに賴んだり地主の杉浦の世話で、川越ものゝ格安なのを買つたりしてゐた。果物類は麹町十三丁目に住む婿のいせや久右衛門（三女ゆふの夫）がせり

呉服の小賣をしてゐたので、時にはそれからも買ふけれど、少し譯つた買物の時には、必ず馬琴自身が馬を乘り出して、大丸の見世まで出掛けてゐる。墓參の外にはほとんど外出しない馬琴だが、この大丸の買物だけは、不思議に面倒がらずに、痛い腰を引きながら悦んで出て行く樣子が見えるのは、縞がらの見立や流行の撰擇に小兒らしい自慢があつたのでもあらう。

商人は長年の取引、帳面買ひの信用あるのだが、馬琴の几帳面な性質として盆暮の二度の節季に、奇麗に帳面を洗らはないと氣がすまなかつたと見える。大晦日の夜になつても掛とりに來ない商人のある時には、夜更けて宗伯を使したり、或は自身に杖にすがつて出て、一々支拂をしてまはらなければ、新歳を迎ふる氣にはなれなかつた。疲れて遲く家に歸つて來て、日記に、「買かゝり諸拂等皆拂遣し畢る。家内一統恙なく、安全に新年を迎ふ。可ㇾ歡、可ㇾ賀。」と書き終つて、その一年の最後の日を送るのが、彼にとつては無上の幸福らしく感じられるのであつた。

「晝時前、下そうぢのもの納茄子二百五十本持參。尤も納物之節は晝食被ㇾ下候樣、地主より被㆓申越㆒候由申ㇾ之。然る處、茄子三百納め可ㇾ申處、五十不足いたし候義いかがと、おみちを以尋ねさせ候へば、一人に付五十づゝのつもりに付、二百五十納候よし申ㇾ之。此方人數小兒共に七人に候間、是迄六人のつもりに干大根納め來り候。大根は三百本納候事承知に候哉と尋ねさせ候處、大根も二百五十本納め候つもり心得罷在候。十五歲以下は人數に入れ不ㇾ申よし申ㇾ之。左候へば是迄より大根五十本不足に成候。茄子は是迄納候事も無之、此度新規の義に付、迷惑に致し候はゞ納るに不ㇾ及、持歸り候樣申付させ候處、大根の義三百本納可ㇾ申、茄子も折角持參仕候間、百五十受取くれ候樣申ㇾ之、外々と同樣の數に納め候はゞ格別、百五十に不足いたし候てはいよ〳〵受取がたく候間、持かへり候樣申付、不ㇾ殘かへし遣し畢。」

これは前の澤庵漬と同じ年、天保二年七月十八日の日記の一節である。つい近年まで其習慣があつたが、近郷の農夫等が市内の汚物をくみ取る謝禮として、餅米または野菜類を、その家の人數に應じて納むる慣例があつた。馬琴の家に前年まで出入してゐた農夫に何か不都合があつたゝめ、この年の三月二十日に練馬村の伊左衛門なる者と新たに契約したことは同日の日記にもある。去年までの農夫とは大根三百本だけの約定であつたが、今年からはその上に茄子を家族一人につき五十個づゝ添

へることに契約してゐる。そして伊左衛門は自身の都合から、隣家の百姓平五郎を代人として、その契約を履行させることに話をきめたのである。

當時馬琴の家族は、馬琴夫妻に宗伯夫婦、下女一人、孫の太郎が四歳、その妹のつぎが二歳、以上の七人であつた。馬琴の幼兒二人をもつて大人一人の計算にあてゝ、これまでも干大根を三百本づゝ納めさせて來たのだが、新しい汲取人は世間一般の慣例にしたがつて、十五歳以下は人數に入れなかつたのである。そこに爭點があるのである。日記はなほ續く。

「右下そうぢのもの、是迄之もの懈怠にて、且納大根も不足に候間、去寅（天保元年）十二月中、地主杉浦清太郎繼母取はからひ、下そうぢ取かへ候つもり、此度申付候そうぢ者は、干大根の外夏に至り、茄子一人前五十づゝ納可ㇾ申よし申ㇾ之。此時人數六人と申談じ候て、別に存寄も無ㇾ之候はゞ、隣家常貞三軒組合、ねりま伊左衛門と申ものに申付度よし被ㇾ申候間、任ニ其意ニ當春よりそうぢ引かへ、右伊左衛門にとらせ候。然る處、右伊左衛門義一ツ橋外明地前武家そうぢ取候に付、此方三軒の下そうぢは代りのもの差出し候よし、當三月中參り、其段聞候く。一體最初此方にてかけ合に不ㇾ及、杉浦繼母取計一存を以取極候故、かやう間違出來候。此度納茄子五十不足いたし、二百五十受取候へば、冬に至り大根も五十不足に納候事故、此度の茄子は不請取ニ、冬に至り干大根三百本納候様、今日おみちを以かけ合せ、とり極め候事ぬ。右節何候毎に少々づつの野菜持參いたし來り候處、當月は其義も無之、當月茄子納候故減じ候事と被ㇾ察候。これ等の義は聊之品故、一向申も不ㇾ用、いさゝか貪り候様些部分之所存無ㇾ之故、かくの如し。杉浦繼母次第の事にて、自分勝手宜き樣にのみ被ㇾ致候哉、かくの如き間違出來候。茄子不ニ請取ニ付、書飯たべさせ候にも不ㇾ及、已來ともこの心得あるべし迚、忘に備ん爲め巨細にしるしおくのみ。」

馬琴忿懣の狀は目に見るやうである。二三日來の大風雨に降りこめられて、氣が苛立つてゐたゝめもあらうが、彼にしては主張すべき事を主張したのに過ぎない。

かゝる例は彼の日記の隨所に見えて、かれとしては珍らしからぬ記事なのだが、世間多くの馬琴評論者は、これ等の事實を以つてただちに彼の性格の吝嗇、偏執、利己を指摘だてるやうに云ふけれど、それは果して彼を深く觀察した人の言としてうなづくことが出來るであらうか。わたしはそれを怪しむ。表面の問題はなるほど五十本の干大根に過ぎない。然し馬琴のかくまで憤り歎いてゐるのは、果してその大根だけの問題なのでもら

うか・わたしはそれを怪しむ。

　馬琴にはふるきものを撫でさすり、いつくしみ愛するといふ心が、ほとんど病的とも見えるほどに强かつた。それはたゞに物に限らない。むなしき名でも、言葉でも、慣例でも、行事でも、傳說でも、約束でも、ふるき時間をとうしてそのものが步み來たといふことが、彼をして無制限の愛情を覺えさせたやうに見える。そのふるさが自分の所有と結びつく時に、その感情が一層はげしく顯れた。彼はその母がその實家から持つて來たと云ふ一箇の木樽を、その製作の年代が享保ごろであるといふばかりに、さま〲に修繕して子孫に保存しやうとして居る。彼はその家に何慶作（？）として傳られて來た木像の佛體を、人に見せてその傳說を破られはせぬかといふ疑懼から、秘佛として家の外へ出すことを許さなかつた。彼が自分に不必要な書籍であるに拘らず、古稀本と聞けば金を惜まず買求めて、或は自から謄寫して、表紙を繕ひ、糸を綴ぢて、さながら農夫が小錢を吝むやうに愛惜してゐるのも、即ちこの古きを撫でる心のあらはれに過ぎない。試に彼の「吾佛の記」一部をひもといて見ても、彼は到底知り得べくもない祖先の系圖や傳來をきわむるために、いかに永年の間心を痛め氣を竭してゐるか、そしてそのとりとめもなき傳說の一つにも、涙含ましいほどの歡びとそ

して悲しみをもつて、それをいたはり愛してゐるさまが、明かにうかゞはれる。それ等を單に彼等の祖先崇拜とか家名宣揚とか云ふ單純なる源因に歸結しやうとする人があらば、それは太だ馬琴を知らざる者と云ひたい。

　道の、いにしへの人に違ふなからんとする心は、やがて又おのれをもつていにしへを子孫につくらんとする態度ともなつて顯はれてゐる。彼は火事に對する時の子孫の態度をさだめるために八人抄を自記し、盆棚の飾りかた草市の買物までを媳お路に記さしめて後に殘し、家に傳はりて自分が踏み來つた足跡は、たとへ些末な茶だち鹽だちの慣例までも、長く子孫に傳へやうとして苦しんで來たのである。物を云へば僅かに五十本の干大根に過ぎないけれど、そのために年々の家例を破り、昨年に違ふたる今年を迎ふることは、彼にはいかにしても忍びがたい憤りであつた。その心持は、新規の約束なればと云つて、今年の茄子百五十を捨てゝ顧みず　ひたすら昨年の約束を他人に破られまいと固執して居る無計算の態度からも窺ひ見られる。「いさゝか貪り候樣成儀有之所存無之。」と彼が特記してゐるこゝろもそこにあると云へやう

　また前の日記のうちに、馬琴はこの葛籐事を遺憾として、罪を地主杉浦の老母が最初の契約に迂濶であつたことを繰返して

述べてゐるが、これまた彼を知るうへに見のがすことが出來ない點である。馬琴は一册の本を他人へ返すのにも、かならず受取を乞はせた。使のものがうつかり忘れて歸れば、折返してその受取證のために使を走らせた。下女を雇入れるのにたとへそれが懇意の口入宿の周旋であつても、請狀の印判はかならず伜宗伯か婿の清右衛門を保證人の家におもむかせて、爪印にしろそれを目前に捺させて、年齡、本籍、宗旨までを嚴重に記入させた。もし婿に差支ある時は、町役番太の者を使に賴んで、後に苦情のないやうに用心してゐた。これらも單に彼の性質の緻密さ周到さとばかり解釋しては間違ふ。彼の弱い臆病な心は、後々の爭論を極端に懼れてゐた（彼が人と爭ひ得ぬこゝろは、後に話す機會がある）その論爭の端緒を未前にふせぐために、彼はいつも屑々としてつとめてゐた。彼は見すく\缺小判をうけとつて損失しながらも、九匁の麝香が八匁五ふんしかなくても、初めに檢めずに品物を受取つた時には自分の過失として、「不埒也」。「彼仁この心あるや。」などゝ日記に餘憤をもらしつゝも仕方なく諦めてゐる。

引續いて、彼と出入商人とのもう一つの葛藤を見て置きたい。戊子日記（文政十一年。彼、六十二歲）七月の長崎屋與平左衛門との小せりあひである。

長崎屋は鍛冶橋外の藥種屋で、瀧澤家の藥種に關する人參、麝香、沈香などの高價藥は、年來この店から買入れてゐたが、大店の習慣で小賣を面倒がるのか、それとも馬琴一家の吟味づよいためか、使ひ番頭などゝ悶着を起したことも二三度ある。この頃もとどけて來た麝香の品質を檢めるために、宗伯が調合所に持つて入らうとすると、番頭は高價な品だから手放すことはならぬと云つたとかで、宗伯は怒つて品物を突返してしまつた。

「一夕方、長崎屋與平左衛門、掛取に來る。端銀そけ候樣申談じさせ候處、不ト引出にて端銀つけ出しに致候。此方へ一應かけ合にも不ゝ及、不埒の取斗に付、今日端不殘請取印形消させ歸る。取次お百也これ亦行とゞかず、遺憾限りなし。」

（七月十四日）

端銀はどれだけか知れない。いづれ些細なものだらう。常なら負からぬ山を一應ことはつて催づらね諦めるのだらうが、その日は盆の節季日で、平左衛門も氣が急いでゐたかも知れぬ。さつさと帳元をつけ出し、受取印を捺して金を請求して來た。馬琴は商人として、その無要措な態度を嫌つたのである。こゝでも些細な金錢が表面の問題になつてゐるが、彼に殺ら觀しめ

る目をもつてこの記事を讀む人は、端銀よりも平左衛門よりも寧ろその老妻お百に對する憤怒を見のがさないだらうと思ふ。

お百は日頃から、馬琴のあまりに細かな儉約にあきたらなかつた。四文八文の小錢勘定にまで口喧ましく、煮物の鍋の蓋まであけて見るやうな吝嗇ぶりに病んでゐた。町家そだちの放縱のない、輕はずみな、そして華美な大名生活の奥向などを見て來た彼女には、もとより良人が極端に儉素生活をこひねがふ心の底に秘められてゐる、身を蝕むやうな悔恨の涙と恐れとがあつたことなどを汲みとることは出來なかつた。鄙吝そのものが良人の性癖であるやうに考へてゐた。

この長崎やの場合のお百にもその心があつたらう。承知のうへに買つて、今更端銀をかれこれ云ふ馬琴を、さもしく賤しくも見えたであらう。長崎やへの口上の取次も馬琴の思ふ通りにはとゞかなかつたらう。推測を逞ふすれば、「それんばかり銀はどつちだつて好からう。」とか、「きまりが惡くて、そんな取次は出來ない。」とか云ふ言葉が、お百の口から出たのでもあらう。馬琴にはそれが口惜しかつたのだ。自分のこの悲しい苦しい心づかひが、妻にさへ汲みとられずにたゞ一日の吝嗇のやうに解されることが、身が顫えるやうに口惜しかつたのだ。

全體馬琴は他人にものを掛けふことの出來ない人であつた。少しむずかしい談判には必ず家族のものを出して、自分は書齋の奥に深くかくれながら、目を光らしてその結果を待つてゐた。そして、お百では心持がとゞかず、宗伯ではいつも喧嘩わかれになるので、込入つた掛合事の取次は大抵娘お路の役になつてゐた。お路は娘の遠慮と從順さから、どんな取次にくい口上でも、ハキハキと無酌なく馬琴が云ふ通りに他人へ傳へた。そして馬琴が自身出て行つて話す時には、どんな事でも大抵口が破れたやうに見える。彼にはものを程よく整へると云ふはたらきは、全然なかつた。

一夕長崎や平左エ門手代、半兵衛と申す者來る。右は昨日、主人平左エ門、不束法之儀申候て恐入候。藥種代御わたし被下候樣申上之。予對面。此方へ不申談、少々の端銀つけ出しにいたし、帳面へ印候事者付之云々、不埒の旨申聞之、右帳面認直し明日平左エ門可致持參候。右候はゞ代金可遣旨申聞、通帳遣之。（七月十五日）

一薄暮、長崎や平左エ門手代高蔵と申者、平左エ門手がみ持參、段々詫び候につき、藥種代金不殘掛遣はす。上認可申旨申候へ共、不及◇◇◇◇◇申聞、不埒わたし遣す。（七月十六日）

馬琴の日記を讀むと、士分以上の者は大抵誰殿何某殿と書き、町人商人には必ず、「遣之」とか、「申付畢る」とか書いてゐる。武家に對する態度は大抵不平ながら泣寢入りになるが、商人に對する時には嚴然として一歩も假借してゐない。これは臆病者の下に强い例とも見られ、時代の階級思想の影響——一層適切に云へば、かれ馬琴の商人に對する感想のあらはれとすべきであらう。彼はその著作のなかでも、日常生活に於ても、商人は廉恥心のなきもの、利を趁ふて義を棄つる者、無智朦昧なる者として、極端に侮蔑してゐる。「商人の無作法、すべてかくの如し。」とか、「商人なれば是非に及ばず。」とか云ふ語氣は、その日記の處々に見えてゐる。

夜話その第二

「家居廣しとにはあらねど、爽に住なして客間あり、居間あり、書屋あり、くりやあり。室を限る事八ッ、さうじふすまを初め、調度すべて備はらぬはなし。植込のさまはたいやしからず、花は落葉の見苦しとて、常盤の色を多くうゑたれば、風の調いとゆかしく、池の漣金鱗をうかべてまばゆし。且には高き山を築き、稲荷の社を勸請せるは、鬼門の鎭めとかや。庭もせに生ひ敷ける芝生の塵もすゑじと掃らひ清めたるなど、心地よしともよし、あはれ、いかならむあて人來まさんとも、耻かしからぬさまなり。」

列傳體小說史の著者は、馬琴の明神下の住宅を斯う描いてゐるが、これはしかしはなはだ文飾に過ぎてゐると思ふ。又、孫つぎ女の記憶なりとて、家屋の見取圖なども添へてあるが、日記その他に照合して精しく調べると、符合しない點が多い。七歳にてこの家に離れたつぎ女に、六十年前の記憶を求めてゐるのだから、これは寧ろ間違つてゐる方が自然であらう。

地坪が僅か八十坪のうちに、二十坪足らずの家屋があり、さゝやかながらも外に茄子畠菜園などに地を割かれてゐるから、庭と云つてもその廣さは察しられる。さゞなみ金鱗をうかべて眩ゆしとある池は、改過筆記に、「前歳に盆地を穿りて、魚を養はゞやと思ひつゝ、南のかたに長サ二丈四五尺、わたり一丈餘なる小池を穿たせしに、夏日炎天に水の涸れんことを惘れて深サ一丈と定めてこれを堀らしにき——然れども池の水多く登らねば、坐敷に在ては水を見がたく、さながら蓋なき窖めきたれば、思ふにも似ず興さめて、いかで埋めばやと思ひながら、土を取ること容易からねば得果さず。」とあるのが、それなのだ。

篁村翁などもつぎ女の間違をついで、庭には常緑の喬木亭々たりしさまに書いてゐるが、事實はそれほどではないらしい。「予は素より樹木を愛る癖あれば、九月の頃より植木屋を傭ふて、多く樹を栽しめ——繡毬草を伏し植させし事しば〳〵——是より年毎に植木屋をして樹を植かえ、枝葉を透させなどする事、一歳も間斷なかりき。」と馬琴自からも云つてゐるし、日記にも出入の植木屋治左エ門とその弟金次（駒込常坂の者）とが、時々作業にやとはれてゐるから、庭の手入などもかなりにゆきとゞいてゐたには相違ひない。樹木も常盤木は松數本、檜二本、珊瑚樹、大槇、山茶花などのほか餘り所見はないが、しかし地坪の割合に果實の樹の多かつたには驚かれる。日記からひろつても、「近年花も不レ咲木故、不レ及二顧著一」と馬琴にのろはれてゐる杏を初め、大中小の梨の木、柿、柘榴（朝鮮ざくろと、普通種と二種）梅數本（庭の正面に唐梅、その他紅梅、豐後梅）、始終蟲がついて宗伯を苦しめてゐる林檎二三本などほとんど果實の種類をつくしてゐる。桃の木は兄羅文の死後瀧澤家には不吉の木として憎まれてゐるが、北庭の葡萄はかなりの大木と見えて、年々四百三四十房をみのらして、それを須田町の池田屋に賣はらつた代金が、壹分二朱、壹分と二百四十八文などゝ年々記載されて家の經濟を助けてゐる。垣にはなた豆、大ふくべ、へちまなど植えてその生熟をたのしんでゐるさまは、西鶴の永代藏なる「世界の借家大將」の藤市を思はせられて、思はず微笑を禁じ得ない。

觀賞の花卉としては秋海棠、あさがほ、ばらん、合歡の花、百日紅、こゞめざくら、ぐらゐが僅に注意されるけれど、贅澤ずきの彼にしては藥草その他の有用植物は、その狹い庭の地積をあまさず栽培されたことゝ思ふ。日記にも花さふらん、まいくわい、丁字花、あした草、つはぶき、鬼人草などの名が見え、後の蜀山人文寶の話に、「明神下の曲亭の庭は、小藥園の趣あり。主人多く動植物の名を知る爲のみにあらじ。」とあるのもうなづかれる。馬琴はそれらの藥草小草をはなはだ愛惜して、創作につかれた時には自身に草もむしり、霜さきには宗伯に指揮して、一々にその葉を繩に卷かせたり蓆を掩はせたりして、丹念に樹木の面倒を見てゐる。

馬琴は不安動搖の放浪生活をのがれて、やゝ落つきのある境涯に入りてから、世を終るまでに三度その居をうつしてゐる。謂ゆる飯田町の本宅、或は婿宅（彼が二十七歳にして會田氏に入夫してより彼の五十八歳まで。三十一箇年）と明神下の家（彼が宗伯と同居せる文政七年より孫の太郎のために四谷に家

を購へし七十歳まで、十三箇年）と、四谷信濃坂の家（彼の臨終まで十二年）とが、即ちそれである。この倦きはてるまでに長々しい勞苦の五十五年間が、彼の職業的文壇人としての年代とほゞ一致してゐるのみでなく、その三度のわたましは彼の境遇のうへにもまたその心理生活のうへにも、かなり劃時期的のものであつたことは注意しなければなるまい。

婿入りした飯田氏は下駄屋を渡世にしたといふから、無論表家の町家であつたらう。金魚傳にある賣薬の廣告には、「飯田町中坂下南側四方の向。瀧澤氏。」とある。四方といふは、あの邊に有名な味噌屋の屋號と聞いてゐる。貧しくとも、さむらひ氣性を失はれない馬琴は、「職おほきなかにも人の土足にかける品。」を商ふ賤しさを耻ぢて裏家を修繕してそこに引移り、賣薬のかたはら手習の師匠などして生活の資を得たと云はれるけれど、その年代は自分にはまだ調べがつかない。たゞ越後の鈴木牧之に與ふる書簡などによつて、ほゞ享和二三年頃、彼が終生の大旅行たる關西漫遊の後あたりと察しられるのみである。

この裏家と云ふも新築ではないらしく、至つて手狹な住居であつた。「其上只今住居致居候本宅、十六ケ年已前に立かへ候處、二階には四十箇餘の藏書を積おき、下屋にも是迄別宅の心がまひに、追々諸道具をたくはへ、十坪にたらぬ建物のうち、いやが上に物多くつみおき候故か、土臺めり込柱かたぶき、隣子の立つけ合不レ申、その上一軒はなれ家故、大風の節はゆりうごき、そのまゝにさしおき難く候につき、根つぎ可レ致と存じ、兩三年前大工よりつもりとり候處、廿八兩かゝり候よしに付、だん〳〵見合せ、今年まで傾き候まゝ住なし候へ共、養子引とり候に付ては、少々とり繕ひ遣し不レ申ばなるまいと存候。」とその書簡にあるので、大體のさまがうかがはれる。宗伯に妻妾と末娘のおきくをつけて神田に別居してから六七年間、馬琴は屋敷さがりの長女と二人、下女も置かずに不自由な生活をこの家につゞけてゐたのである。「娘事は八ケ年立花家奥泰公勤め、去暮（文化十四年）下宿致させ候處、此節俄にまゝたきになりさがり候仕合に御座候。乍去近所小がひものには、さすがに味噌こし提げては出かね、夜分のみ買物に出申候。或は長屋うちの子供をやとひ、とゝのへ物いたし候故、おのづからなる不自由多く、娘小川などに罷越候節、使有之案内を乞れ候へば、拙者二階より走り下り、取次いたし候事しば〳〵也。されば倅は手遂に罷成り、掛川その外とも彼に彼が所用あれば我等が役には立ち不レ申、障子は破れてもやぶれ候まゝにて、張かへ候ものなければ夜寒もひとしほになり。猶のひたへほどなる前庭の草木等に對しへけする事もなければ、苦樂を忘ふことも稀也。」とも書

いてゐる。なほその創作に從事する書齋のさまを云へば、「別而昨今は近年不レ覺殘暑にて、凌かね申候。毎日朝の內くもり、晝前より晴申候。手前住居市中手狹に付、拙者は年中二階住ひにて、南をうけ申候。膝元まで日さし入れ、夕方は又西日すぢかへに窓よりうしろの方をてらし候。夜は瓦のいきれ曉方までさめ不申候。誠にから風呂に入り候こゝち仕候。御遠察可レ被レ下候。」とある。草双紙、曲亭一風京傳張の開卷に、彼の書齋に京傳と對坐して著作の趣向を話しあふ圖に描かれたる光景は、けだし畫工がかなり修飾を加へたものと思はれるが、ほゞ當時のありさまを髣髴させてゐると云つてよからう。彼は實にこの書齋のうちに終日蟄居して、年々數種の合卷草双紙讀本ほか、玄同放言を書き、吾佛の記を書き、燕石雜誌を書き、椿說弓張月を完結し、朝夷巡島記を書き、畢生の大篇南總里見八犬傳を第五輯までを製作出版したのである。(以上、大正拾參年十一月上旬稿。以下は翌年二月上旬稿を續く)

文政七年五月。馬琴はその家職たる家主役を長女さきの聟に讓りて、二代目清右衛門興利と名乘らせ、自らは剃髮して名を笠翁(後に篁民と云ふ)と改め、同時に飯田町の家を去つて、神田明神下の悴宗伯の家に同居した。(彼、五十八歲)養子は本名吉田清六、伊勢國白塚村の出生で、長谷川町の呉服屋伊勢屋に奉公して居た者である。「寬政五年癸丑秋七月下旬(彼、會田家に入夫せる時)より俗務につかれしを、事のわづらはしき折には、いく度か棄て去らばやと思ひつゝ、さすがに妻子どものほだしとなりて得果さずして三十二年を經たり。かくて今茲夏卯月に至りて、尙させる功はなけれども身を退く事を得たり。」と、彼はほつとしてその雜記に述懷してゐるやうに、彼は町役人の賤職を恥ぢて、人に向つては、「常の產なき時は浮浪遊民たるをおそれて、町役人となれり。但し勤めにつかず、餘人をもつてその役にかはらしむ。祖先をはづかしむる事を思ひて、行狀をつゝしむのみ。所レ云子ずくみなるもの也。」などゝ苦しき辯解をなしつゝも、始終隱退の心が切であつたのだ。階級意識のつよい系圖自慢の彼には、例へそれが生活のためとは云へ、僅かの月俸につながれて市井雜事に驅走する町人仲間に身を伍することは、氣の毒なほど彼の自尊心を傷けるものであつた。

この二代目清右衛門は三度目の養子であつた。養子運の惡い馬琴は、この四五年の間に二人の養子に逃げられてゐる。そしてその二人に本職として貸本屋を營ませるための資本金や、養子披露やのために五十幾兩と云ふ金を損亡して、つくづくとその不運を慨いてゐたのだ。もつとも養子と云つても、長女お

さきはまだ柳川侯に奥づとめ中だつたので、結婚のはこびには到らなかつたやう」である。そして最初の離緣の源因は、養子が營業の資本中に時の禁忌にふるゝ書籍や春畫の類を加へて、ひそかに得意まはりしてゐたのが嚴格なる馬琴の目に觸れて、彼の憤怒を招いだのだが、二度目の養子離緣は、彼が越後の女人に與へる手紙のうちに、「二度目の養子は大酒放蕩にて、かし本かしに出ては得意をまはらず、中宿に醉ふして日をくらし、或は四谷新宿なる遊女通ひに居つゞけして、兩三日づゝかへり不申、追々本もうるやらかしうしなふやら、埒もなくなり行、始終見屆けがたく候に付、離緣いたし候。」と云つてゐる。彼の性格から云へば、双方とも立派に離緣の理由があつたのである。それにも拘らず、彼は同じ手紙につゞけて、「もはや今度は三度目の養子也、世間にては拙者が餘り物がたき故、養子が居つかぬと申候よし、それ故に今以養子無ㇾ之候歟。如ㇾ此懲り果候故、とても斯くても同居にては、わかき者はうるさく思ふべし、いづれにても家相續いたし候へば事足れり、此度は明わたし同樣にいたし、地主の目見え斷役申付られ候はゞ、拙者は直に退隱いたし候て、身上の事に構ひ不ㇾ申候積りにいたし。」と云つてやゝ自己の性癖に悔恨の情をもらし、幾らか寛大にゆるやかなる目をもつて次の時代を見やうとしてゐるところに、諦めと云ふよりは彼の心の悩みがあつたのである。彼は掌中の寶玉として、最も完全に、圓滿に、善く、正しく、彼の理想の典型児とし育てあげやうとして二十幾年を苦しみ苦んで來た獨り息子の宗伯が次第に彼の期待に裏切つてゆくのを見て、彼に耐へがたき失望と悔悟とに、その心を嚙まれてゐるのであつた。宗伯のことは後に云ふべきであるが、彼の書簡や日記を精密に檢討する人は、この頃からそろ／＼と、彼が宗伯に對して失望と不滿の感情を洩してゐることに心づくであらう。

「文政元年。琴嶺二十一歲。方技師に上達す。此秋父の命によりて、神田明神下なる武家の借地に卜居しぬるに及びて、母と季妹とを携へて八月二十一日に移徙したり。初め八九歲より醫を學ぶを以て琴嶺と號す、便ち是れ雅名なり こゝに至りて更に守忍庵と號す、其身生來羸弱にて折々病氣なりければ、或號堪忍の心なるべし。父と別居したりしより、をさ／＼節儉を旨としてよく勉めたりければ、齡は二十七の後輩ながら、醫業漸々に行はる。親の喜び知るべし。」馬琴が子孫の爲めに宗伯の行狀をしるした後の路の記には、斯うある。然し實際宗伯の醫術にてそれほど上達してゐたとは思はれない。彼家の日記をもつて見れば、むしろ馬琴は彼の醫業を信用せず、[illegible]

るやうに思はれる。しかし自分の町人生活を極度の恥辱とならし、瀧澤家の家名發揚を終生の念願としてゐた馬琴は、たゞ斯兒ひとりの榮達に望みをかけて、これまでも涙を催されるほどの辛勞と焦燥をつゞけて來た。初めは儒學者としての宗伯を士人の間に見んとしたが生來の虛弱のために失敗し、次に畫家として世に立てんとして成らず、最後に、「醫は學術と時運とによりて官醫にもなるべく侍醫にもなりのぼるものなり。」とて、高名の醫師を選んで宗伯を就いて學ばせ、とにかく一箇の醫者として宗伯を開業させるまでには、彼は一方ならぬ犧牲と勞苦とをはらつてゐる。友人等に向つても、「悴宗伯篤實と申すのみにて、文雅の才は一向無之ものに候。當年廿二歲にて、療治可なりにいたし候へども云々」と卑下しながらも、なほ、「たゞ市中にて無疵にそだてあげ申候。手段いろ〳〵也。無益の事故略申候。」と、ひそかに自讃するほどの周到なる注意を宗伯の教育にはらつて來たのである。彼の老友中村佛庵が古屏風を購ひ求めて、それに元吉原の記を考證せよと切望されても、「予はこのはたとせあまりこなた、よしやむかしのこと也とも遊女冶郎のうへなどは、あなぐり糺す事をたしなます。」とて、あながちに拒まふとしてゐるのも、また多年集め貯へた元祿享保の好色本を、「士人の家に見るべき書ならず。」とて惜氣もなく殘らず賣りはらつたのも、斷じて三味線を家庭に入れなかつたのも、當時の時代から遊民視せらるゝ戲作者生活を極端に耻ぢて、曲亭様馬琴様と書狀の名宛に書かれてさへ、忿懣やるかたなく數尺にあまる反駁文を人に書送つてゐるのも、他にも理由はあらうが、いかに宗伯の薰陶に細心であつたかゞ窺ひ知られる。

宗伯の明神下の家といふのは、「昌平橋外、神田明神石坂下、同朋町東新道、西丸御書院番橋本喜八郎殿地內、琴嶺瀧澤宗伯。地坪四十坪ほど借用、建家は十六坪ほど有之、本宅よりはよほど手廣に御座候。無益の事ながら序に書つけ申候、予前門通用ゆゑ、見附は相應に御座候。」と云ふのがそれで、馬琴の孫つぎ女の話によれば、俗に鼠屋横町とも呼び、今の末廣町に屬し、明神の女坂を下りて左へ二三町曲つての角屋敷であつたと云つてゐる。もと町醫者なにがしが住居で、家は三年以前の新築であるが、前住者が不如意のまゝに住みあらして、壁は荒壁のまゝ、玄關に敷石もなく、そのうへ家の東方三分一を壁にしきつて、刀研師某といふ博徒の住宅になつてゐたのである。それを馬琴は周旋料とも二十一兩一分にて買入れ、大工棟木屋の諸職人を入れて造作し、振舞入用ともに二十四五兩を費し「都合五十金に近き物入。」して、愛兒のために新宅を經營したのであつた。

もつとも馬琴坂刻の計畫では、この年の收入「玄同放言巡島記八犬傳の稿作料、半分は年中の小遣にいたし、半分は悴に遣し可ㇾ申存、凡十四五金にて別宅いたさせ候心づもりの處、」いろ〳〵事情があつて、以上の失費を來たすやうになつたのである。名聞ぎらひな馬琴は其當時からこれを悔恨して、さまで親交もなき友人に斯う書き送つて居る。「すべて外物を飾り、見分を取り繕ひ候事は、拙者素より嫌ひにて、よくもわろくもありのまゝにて世を經候へ共、悴などは若輩の義にて、傳き寺は門からといふ諺の如く、ちと見聞をかざらねば家業に損ありて、已むを得ず右の趣に致遣し候。全體江戸はしば〳〵火災も有ㇾ之、見とめたる緣もなくて當時は親見つぎにて過行候へば、かくまでにせずとも申すみ候へ共、只今遣し不申候ては、彼がはたらきにて中々出來不申、それを持通し得ずば、彼の不才の致す處、火災をおそれては江戸の住居なりがたし、なんでも人のする程どの事はしておたすも親の慈悲かと存候。決して驕りよりなすわざにはあらず。此處御賢察可ㇾ被ㇾ下候。」と云ふて、彼が宗伯のために斯くまで焦慮し盡瘁するのは、決して與愛の私情におぼれるのではなく、この兒によつて零落せる瀧澤の家名を揚げ、先祖の祀りをつがしむる苦心にほかならぬ旨を、馬琴は身を狹め耻ぢ入るやうにして、文通のみにてまだ對面したこともない遠方の友人に、繰返し〳〵書き送つてゐる。

話は外にそれたが、馬琴が飯田町の家を清右衛門に讓つて、靜かに晩年の老を養ふところで移り住んだのはこの家なのである。もつともその前年には宗伯と老妻お百が共に必死の大病にかゝつて、別居の不自由を感じたためもあらうが、彼のこの頃の感想には、世の煩忙をさけて靜かに隱遁の餘生を送らうとする希望がはなはだ深かつた。寛政二年の秋、山東京傳の門に遊んで戲作者の群に入つてから三十四五年、特に近年八犬傳や巡島記の著作によつて、嶄然たる文壇の喬木として世間に頭をなせばなすほど、ものあつて影がさすやうに、その虛名を恥ちること、人生に對する空虛を感ずることが深くなつて、生活のために隔離として苦しみ苦しんで來た過去の自分自身を、しみ〳〵といたわり悲しむやうな心になつてゐた。「とかく江戸は渡世に追れ、その道のものといへども浮華の方に引れ、しづかに學ぶもの稀也。これにつけても晩生などは[illegible]隱遁の志ふかく、一日も閑雅におくり度ねがひつ罷在候。」とか、「名を賣るものゝ悲しさには、[illegible]にほどなるはかなきにあらず、苦しきものは世わたりの一すぢ也。したえるゝ身こそつらけれ山ざくら。咲ずばいかで人のとふべき。とかは十年あまりのむかし渡世の[illegible]

ひろめ候ゆゑ、罪就後悔多く候。」とか云ふ感慨は、この頃の彼の自記のいたるところに呟かれてゐる。彼がなるべく世間のための著作から遠ざからうとして、蘐莚の傚「玄同放言」の如き考證研究に新生面をひらかんとしたのも、儒學より次第に佛教に耳を傾けるやうになつたのも、又、あれほど交友を厭ふてゐた彼が、「是迄二十年ばかり閉居いたし、貴賤となく人には交り不申候處、つく〲考候へば、もはや半生ヲ過候而悴は多病也、ちと人間に出候も一ツの保養と存じ。」といふ軽いこゝろになつて、屋代輪池、山崎美成、關其寧、西原梭江などの雅友の間に立ち交つて、例へ一時にもせよ、耽奇會や兎園會を結んで好古風流の韻事に優遊するやうな餘裕ができたのも、みな前に述べた感慨のあらはれに過ぎない。

列傳體小說史の著者は、この數年間の馬琴を盛運時代として、「日のまさかり」にたとへてゐる。わたしは恐らく彼の惱ましい苦悶の生涯のうちで、この前後ほど彼の心が朗びやかに靜穏に、しづかに人を眺めしづかに自分を眺めた時はなかつたらうと思ふ。それにはやはり、彼の一家の生活がやうやくにして安定の時期に入りつゝあつたことを思はずにゐられない。京傳歿後の文壇盛譽はほとんど彼一人にあつまつて、その著作の收入も次第に多かつたばかりでなく、その四年前の文政三年の秋には、若輩の宗伯は松前老侯（章作亦道廣）の眷顧をうけて、三人扶持の小祿ながら、とにかく一分の待遇をうけてゐる。それは無論宗伯の醫術のためと云ふよりも、文學愛好者の老侯は父の馬琴を扶助する目的にほかならなかつたのだが、馬琴にしてはこゝに初めて一生の念願たる瀧澤家再興の端緒を得たとともに、大名醫者の隠居としてやうやくに町人階級から遁れ得たよろこびがあつたのである。傳記によれば、彼がやゝ邊幅をかざり初めて、熨斗目の紬衣などを製したのもこの時からだと云はれるし、五十一、二より一層行狀をつゝしみ過ちのなき生涯に入つたと自ら記してゐるのも、彼はその兒のために恥なきの父にならうとして、かなり苦心した模樣が見える。彼の著作が一層偏狹に道學的に傾いて行つたのも、やはりそのためと思はれる。彼が門齋筋のいましめあるにも拘らず、宗伯の鄰隣りの醫師の家を買ひ求めて、書庫ともに三間の書齋を造作したり、庭園をひろげて樹木を植ゑ、泉水を穿つて魚など放つたのもみなこの時なのである。そしてこのよろこびの餘りにわれを忘れたいさゝかの奢侈が、彼の終生の悔恨としていかばかり彼を苦しめ彼の心を惱んだかは、後に云ふ機會もあらうけれど、一篇の「吾佛雜記」として自記に殘されてゐる。引續く家族の大病も、家庭

の不和も、宗伯の難病も、その死も、すべてがこの時の私情に溺れて、謙抑を忘れ倹素を忘れた天譴として、殆んど卒讀に耐へぬほどの激しさをもつて自らを責め自ら苦しんでゐる。そしてそれほどにまで奢侈を恥ぢ悲しんでゐる明神下の家と云つても、後の東隣りの買入をあはせて、借地が僅かに八十坪、建坪は二十坪に足らぬ家なのである。八犬傳八輯の序に、「平居文を綴る處を著作堂となし、其次の小書齋を名づけて、蓑齋となし、國史舊錄、奇文諸雜書を繙く時、彫窩と號す。」などゝ誇稱してゐるが、日記によつて見ると大抵四疊半三疊の小間に過ぎない。全體にて八室、疊數も三十疊に過ぎなかつたらしい。綿密な馬琴のことゆゑ、始終造作などに手を入れて、淸らかにこゝちよくは住みなしてゐるやうだが、決して彼が自責するほどの住宅とも思はれない。

最後の家は四谷信濃坂の家である。强健なる彼の健康もやうやく衰へて、天保四年八九月の頃から右眼の視力を全く失ひ（彼、六十七歳）翌年の夏ははげしい癖病に苦しむばかりか、松前老侯が卒して宗伯に對する待遇も次第に冷かになり、翌けて天保六年の五月八日には、難病つづきの宗伯は馬琴に先立つて世を去つた。宗伯が死ねば云ふまでもなく松前家の扶持は全然望まれなくなるのである。馬琴は宗伯歿後の家族の狀態を次のやうに伊勢松坂の親友殿村篠齋に報じて居る「かねて覺悟の事ながら、今更當惑いたし候。命の長短は天命に候へばおしみも不レ致候へ共、老後如レ此不幸にて後の事いかゞ可レ致候哉。嫡孫太郎八歳に御座候。次は女子にて六歳（つぎ女）、これは四歳春、長女（さき、飯田町にあり）方に子ども無レ之候故養女に遣し候。その次も女子（さち女）にて三歳になり候。媳婦は三十歳にて壯年の事故、始終之事無二覺束一候。且媳婦兩親、心術氷炭のけじめ有レ之、一向に不レ合候故、悴も生前この事をのみ歎息いたし候き。いかで嫡孫をとり立候半とは存候へ共、予が餘年たのもしからず、悴年中病身といへども、頼になり候事多かりしに、今は頼け候もの一人も無レ之候。老婆は予が齡と三四歳の姉にて、七十二歳に候が、兩三年來以の外に老衰いたし、且癇症にて一向に用立不申候處、此節の悲愁にて又一しほおとろへ候。悴が喪事は婿共打より世話いたし候へども、萬事の差配は皆予が指揮により候事ゆえ、殆つかれ果候」馬琴は斯う大息して、當面の哀傷よりは、さしせまる生活の問題に困惑してゐる。彼が六十九歳の時なのだ。

元來馬琴は宗伯の不治の症を察して、その死後の生活について始終不安の念にかられてゐた。或時は、悴事去春中より去年

一ヶ年引籠罷在候。寒に入り別して不快、下部の腫氣まし或は暴瀉いたし、痰咳並に喘息つよく度々危殆に及び候へ共、又もち直し申候。別人に候へば一トたまりもあるまじく候へども、それが持前のやうに成候故、凌ぎ候事に可ㇾ有ㇾ之と愚意の老醫も被ㇾ申候。只廢人同樣に御座候。愚父存命の間はこの身はさらなり、妻子どもをやしない候へども、ゆくすゑはいかゞ致候哉、心もとなき事ながら、苦勞にいたし候ても詮なき事故、天命に任せ候。」と搔口說いて見たり、また或時は、「老年ニ及び一人の悴如ㇾ此に御座候へば、苦にいたし候へば限りもなき事ニ候へ共、苦にしたればとて詮なき事、何事も天命に任せ候より外は無之候。かく諦居り候へばうしろやすく候へども、さすが七情のいれ者たる人身候へば、折々胸痛の事も多く御座候。（中略）大部の小說を作り初め候頃、末々迄は考ずに書おこし候へ共、しかれども始終はかやう〳〵と大づもりのくゝりをつけぬ事はなし、しかるにわが生涯の小說は、この末いかやうの筋になりて及二團圓一候哉。實にはかりがたく奉存候。先夜老妻に不斗此儀申出し候故、此處に書くはえ申候。」と強いて悲しき諧謔に苦痛をまぎらかさうとしてゐる。その不安な大團圓が、餘りに遠く、餘りに傷ましく、人生にも著作にも疲れきつた彼のうへに見舞ふて來たのである。

彼は「寢ぬ夜のいく夜。」を思ひ惱んだ末に、やうやう決心して愛孫太郎のために、四谷信濃坂に鐵砲組同心の株つきに、廢屋同樣の古屋敷を百五十兩にて購ひ求めることにしたが、たゞその金を調達するには住みなれた明神下の家を賣り拂つたゞけでは足りない。と云つて借金ぎらひな彼は、富有な親友等に非へて合力を請ふことも屑しとしなかつた。策つきて思案のはてに、「博徒の花會にも似たり、」「風流の賊にちかし」とまで多年罵り卑んで來た書畫會を柳橋の萬八に開いて、七十幾兩（？）かの金を手にすることが出來た。書畫會の盛況は彼が林宇太夫に與ふる書簡にも詳しいから、こゝには云はないが、たゞその用意として二百五十枚の扇紙、千餘本の扇面に揮毫を書き、自らそれを携へて知人名士の門を叩いて、腰を低めて來會を賴んで歩くさまか、自らも俗腸になり世間に媚びてと嘲つてゐるだけに餘計痛々しく思はれる。十數年來絕交同樣にして、賤しめ嫌ふて來た京山の家までを請ふて、その書翰のなかに、「家兄儀死去の時、馬琴へも知らせやりしに、寺へばかり悴宗伯を名代にして自身不ㇾ來。（中略）しかるに馬琴書畫會をなす時、家兄亡後始めて來り、自筆の扇一本持參したるは、いかなる心ぜや。（中略）舊友なればすてておかれずと、命の後ながら日錄もちてかの下谷（明神下の家）を尋ねしに、うりすゑといふ

札を見て、行きし先まで尋ぬべきにもあらねば歸りぬ。」と憤らせてゐる。

移り住んだ四谷の家は、「此度うつり住み候新宅は四谷信濃坂と申し、永井信濃守殿の下やしきの裏手、青山六道の辻に近き邊上。」で、俗に南千日谷とも呼び、御家人小旗本などの住む寂しき屋敷町であつた。「十二月二十七日二十八日は殊に大雪にて、拙宅邊はいまだ消果ず、道のぬかり以の外にて、門前往復の人々困じ候樣子に候。（中略）梅はやうやう二三輪いぢけ候て開き候。下町より十四五日もおそく御坐候也。」と二月十一日出の伊勢への書狀に認めてあるほどで、山の手嫌ひの馬琴には如何にわびしく心憂き新居であつたか、「人の行衞は心にも任せぬものにて、思ひがけなき所に餘命を送り候仕合に候。」とかこち慨かせてゐる。家も前住者が四十年も住み荒したあらば家で、壁も荒壁で寒氣がはげしく、書齋とてもなかつた。それに天氣の日にも薄暗い茅葺で、視力の衰へた馬琴には雨天などには到底著作も出來なかつた。「依レ之舊冬より今以、日々坐敷の椽頰へ坐敷の障子を建させ、机を直し、椽頰に小蒲團を布せ、終日椽頰にて辨用いたし候ゆゑあと先つかへ、椽頰の透間より寒風を吹き上げ、脚いたみ膝ひえ、たへかね候を忍び〳〵筆をとり候。しかゐを世の看官は煩燥に足をさし入れ、仰臥しつゝよみ見て、よいのわるいのといはるゝ也。果報の厚薄世にかゝる事多かり、吾のみならず世路艱難大息の外無レ之候。」と晩年の不幸を悲しみつゝも、見えぬ目を疲らせて八犬傳の完結を急いで、毎日〳〵精根をつくしてゐた。

その年の太郎は、大柄な兒だがやつと九歳であつた。御家人の株式は買ひ得ても到底當番の出仕は出來ない。已むを得ず太郎が番入する迄の代人として、媳お路の遠縁にあたる中藤吉亟なる者を田舍から呼寄せ、一時ながら瀧澤の性を名乘らせ次郎と改名して、俸祿をうけつないでゐた。その頃はお百は廢人同樣にて、下女もなく、一家の世話は媳お路一人の辛勞であつた。遠路のことゆゑ次郎の早出勤の日などには、當人を前夜の暮れぬ前に寢に就かせて、お路は終夜煮燒の世話をした。「老拙は臥床に入ながら眠らず候。拙宅邊は夜分遠寺の鐘の聞えぬ所にて、近邊に飼鷄も無レ之候故に、時を知ること甚かたし。不寢して考へざれば遲刻しやすき故に、ねむらで明し候也。」とて、馬琴は過ぎ去りし神田の家をなつかしみ、また亡き宗伯のことを思ひ、稚き孫の將來を考へては、人生轉變の限りなきを慨いてゐた。

夜話その第三

馬琴の日常生活は、正確そのものと云ひたいほど、規則正しかつた。十何年にわたる彼の詳密な日記が證明してゐるやうに、その一日〳〵の行事にすこしの歪みもなければひずみもなく、ほとんど判に刷つたやうな几帳面な生活が倦むことなくつゞけられてゐる。これは一に方正にして規律をこのむ彼の性格のあらはれでもあるが、瀧澤家代々の嚴格にして形式的なる庭訓の結果でもあつた。馬琴は機に仰臥して讀書する習慣があつた。また時にはあぐらも組んだ。馬琴はいつも恪勤にして規矩を失はざりし質兒羅文の生涯を思ふて、身の惰弱不檢束を耻ぢてゐる。そして「自らふかく思ひさだめたる」うへに決定せる規律には、たとへ如何なる小事にもせよ、これを破りあなどる事をせまじとして、始終つとめてゐた。彼は友人に向つて、「不佞は生得放蕩多欲のもの也。只學問の力をかりて無理にかたくなり候哉。この故に事毎に偏僻也。もしわれら聖賢の敎をしらずば、惡道へもすゝみかねまじく候。」と云つてゐるのも、强いて窮屈なる規律をつくつて、その準繩のうちに自分を束縛しやうとした原因の一つかも知れない。

朝は夏冬とも大抵六ツ時から五ツ時（午前六時より八時）の間に起きた。洗面後先づ恭しく家廟を拜して、それから椽端に出て、「仰向きて額を撫で、耳を引き、齒をたゝき、胸を擦り腕をさすり腰をさすり而して腰に手を當てゝヂツト何かを見つめたりと云ふ。今いふ深呼吸法などの類か。」と篁村翁は云つてゐるのは、後に或る人から、これは水戸烈公の自慢の運動法で、藩士立原杏所などから馬琴が傳授をうけたのだらうとの話も聞いた。それが終つて質素なる食事。それから客間の椽際に坐つてゆつくり茶を喫する。そのうちには、大抵書齋の掃除がすむのでその方へうつる。そして午前中にかならず前日の日記を記入して、それから著作の筆をとる。しかしその頃には大抵判下書きの筆耕者が前日の原稿を書きあげて來てゐるので、その校正に目を通さなければならない。時には宗伯などにも校合を命ずることもあるが、多くは自分でやらなければ氣がすまなかつた。綿密周到な彼の性質としては、例へ一字の誤字俗字でもそのまゝには置けない。一々字引に照合して字劃を正してゐる。もつとも當時の見巧者（批評家）連はよく誤字脱字のこまかな穿鑿して、作者を無學者扱ひにする者が多かつたので餘計躍起となつてあなを拾はれまいとしたのかも知れない。その上に出版者からは淨稿の校正、摺上り、埋木、彫直しの校正が三校ー

校、甚しい場合には五六回の校合をなす時もあつた。それでもなほ出版本に誤謬が時々あるので、馬琴は諸方の知人に誤字脱字の注意を頼んでゐる。そのため出版者はいつも馬琴の校正難に苦しんで、是非なく出版を斷念した者もあつたと云ふ。日記を見ても、著作のための勞苦よりも、馬琴は校正のために、多くの精力をつくして、絶えず書肆の不德義と印刷職人等の不忠實とを罵つてゐる。

「さて新板物の校合と申すものは甚うるさきものにて、工手間人の知らぬ日を費し申候、素人作はこの校合別して等閑なれども、幸にして讀めぬといふ本はなし、不侫の作はいかゞのことにや、とかくに彫崩され候樣に存候、そのカケ、ケツ等ひとつ／＼に朱を入れ、わくの上へ書拔遣し候ても、十のものは三つ四つほり直り不申、又二番校合にて右の如くいたし候へば、七つのものやうやく五つ許りになり申候、三番四番とだん／＼直し候內、板を版すりかたへもち歩行、又板木師方へ遣し、往來たびかさなり候うち、新規のカケ出來、或はさし木にて直し候處はもろく候故、少しさわりてもかけ候故、二ばん四ばんと直し候內、最初十のもの七つは直り候へども、又新規のカケ二つ三つ出來、或は二ばんにて直り候處も、三番直しの節見ればさし木をおしつぶし、又一つ二つカケ候て有る處もあり、わが作を毎日二三べんづゝよみかへし候故、果てはあき／＼といたし、その本うり出し候比は、ふり向てみるもいやになり申候、此校合のくるしみは新に作り候よりほねをれ候へ共、見物は一向しらぬこと也、著者は自己一人の手にていたし候故しやすし、はや板下かゝせ候ても他の手にかけ候故、誤字落字多く、氣にいらぬことのみ也、それより又板木師の手にかゝり、又彫刻後の直しは、一つの點にてもひとつ／＼に入木さし木をする事故、なほりかぬるも尤なり、それを直させふ／＼とするうち、根くらべにてつかれ果、且わが作はよめ過候故、誤字も落字も見はづして、わが書きたるごとくによむ事多し、人の作はちよつと見てもあやまりを見つけ候へども、わが作は見つからぬものに候。」

馬琴の原稿は謂ゆるぶッつけ書きで、草案もなければ淨書もしない。讀本は一頁十一行で、一行は大抵四十一二字詰になつてゐる。今現存してゐる稿本を見ると、例の癖でねばしたやうな俗つぽい文字で、版下かとも思はれるほど丁寧に劃を正しく書いてある。たまに紙を貼りつけて文字を訂正したところはあるが、書入れ頭註などの痕跡は至つて見えない。一冊の枚數が三十枚前後、五六卷をもつて一輯としてゐるが、結局の細部は勿論、[illegible]まで一心に考

案して、すこしの自由をも畫家に與へてゐない。三馬や種彥とちがつて、ほとんど畫才のない馬琴には一丁の挿繪をまとめるにも可也の苦心であつたらしく、「畫前さし畫のみ壹丁稿」之、細書也」など云ふ日記がよく見える。それと細かな振假名もかなりの骨折りであつたらしく十丁のつけ假名だけに終日を費してゐる。

何事にも感興をいやしめてゐる馬琴は、著作にもやはり同じ態度で、終日書齋に籠居して、矻々として倦むところなく筆をとつてゐた。そして一日の分量は種類にもよるが、讀本は五十六七歲頃には四五枚、多い時で六枚など云ふ日もあつたが、六十以後は次第に筆が鈍つて、二枚、一枚半、多い日で四枚以上に出なかつた。先づ書下し(ふり假名なきを云ふ)一日二枚平均と見て、今の普通新聞小說の一回分にあたる。どちらかと云へば遲筆の方であらう。それに比較すると合卷ものゝ方は心も樂に筆がすゝんだらしく、文政六年頃の手紙には、「尾陋の事ながら渡世の上ヲ申候へば、よみ本はなか〳〵引合不ㇾ申、合卷の草紙の方、保養にはなり不ㇾ申候へども壽命に障り候事もなく、その上潤筆のわり合よろしく候故、已來はよみ本をやめて合卷のみ致し候半と存候。」など云つてゐたが、例へ生活のためと云つても、婦女子の娛樂のためにのみの創作には耐へがたかつたと見えて、同じ人に與ふる十年後(天保三年)の手紙には、「合卷は實にいやに候間、當年は著聞集のあとのみにて、其外は休みにいたし度候得共。」など呟いてゐる。彼は小說の著作を賤業のやうにいやしんで、八犬傳の序文などに屢々と、戲作に生活するは書物を買はんがためなどゝ云つてゐるが、その實の著作には細心の注意をはらつて、全身の精力を傾倒してゐたと云つてよい。孫女の話によれば、著作の机に向ふ時には、嚴然として別人のやうに目が鋭くなり、妻のお百をも書齋に入ることをゆるさず、家內の足音をもつゝしましめたほどであつたと云ふ。八犬傳執筆中はよく衂血を出して、濡手拭で頭を冷しながら、「おれはこれで死ぬ、これで死ぬ。」と、よく家人に云つてゐたと云ふ中根香亭氏の談話も思ひ合はせられる。

全體强健な體質の人であつたが、寒暑ともに甚だ弱い方で、極暑の間十日ぐらいは每年仕事を休息してゐた。その他の日は、ほとんど一日も執筆を廢することなく、始終書齋に籠居してゐた。たゞ流石に新篇の書出しには氣も沈着かず筆も澁ぶると見えて、そんな時には寢轉んで支那小說を讀んで趣向を練つたり、遠國にゐる友人達に二丈三丈にもあまる長文の手紙を書いたり、時には庭に出て草をむしつたりして、氣を紛らしてゐた。風雨の日などもとかく心が鎭まらぬと見えて、雜書の抄錄など

に時間をつひやしてゐた。今、彼の書齋生活のありさまを知るために、彼の書簡の一節を引照することゝしやう。

「扨右俗事の世話に氣がちり候て、大に著述の邪魔になり、八犬傳第三編八月七日にとりかゝり候へども、かねては凡三十日に書をはり可申心づもりの處、何分にも事多くて出來不申日々四五枚づゝ草し候を、板元より日々に書候ほどの下書を奪ひ去り、晝夜をわかず板下書を板元の二階へよびよせ候て書せ申候、拙者はぶつゝけ書にて、別に草稿ひかへ等不仕候處、毎日認め候分を板元へ遣し候故前のとこを忘れ候ても、見合せ候もの無之板下書と根ンくらべなれども、手を明けさせ不申樣に出精いたし、やうやく九月廿九日に全五冊、百三十九丁繪より序文惣目錄まで書をはり、その已前より毎日したゝめ候板下の校合いたし候へば、一冊の下書半分はいまだ認不申候內、前之處半分ははや板木師の手にわたり、ほり立居申候き、同月九日に板下も不殘書をはり申候 然處八月中旬より巡島記追々彫刻出來、大阪より校合に差下し候へども、何分八犬傳著述にいとま無之候故打捨おき、右八犬傳書をはり、直に巡島記の校合にとりかかり候處、甚だあくほりにて、半丁のうちカケ並にほり損じほりおとし等五六十ケ處づゝ有之處多く、校合に數日を入れかね候仕合故おのづから日數かゝり是又十月十二日十月廿一日兩度に、早便を以て大阪板元へ差下し申候處何又八犬傳一の卷彫刻出來、玄同放言三冊彫刻不殘出來、この校合も此節日々のさいそくを受け候へ共、何分にもかた付不申、外に七月より賴まれ申候繪本千本さくらのかき入、細字十七丁、並に富士艾の引札、本紫染物の引札京都むさしの茶漬の額石板のやうなもの、だん／＼延引に及び打捨置がたく、千本さくらかき入、もぐさ並に紫染物の引札、八犬傳一の卷校合、玄同放言一の上の校合等、とりどりいたしかへ候處、當月廿二日二見屋忠兵衞殿より、御書入の一封屆來り、使の口上に、飛脚ちんはこちらより出し候間、先便の御返事早々被遣べしと被申越候、嗚呼是何といふ事ぞや、飛脚ちんがをしいとて返書延引に及ぶべき事にはあらぬを、げにあまりに返書延引に及び候故、二見屋どのもちと腹だちの氣味にて如此事申こされしなるべし、此方の事務ばかりも知らぬ人の事なれば、かくいはるゝも道理なり。」

以上は文政元年十月二十八日。越後の鈴木牧之に與へた書簡のうちにある。この年は稀らしく著述の分量もすくなく、比較的閑散の筈なのであるが、丁度この年の八月から宗伯別居のことがあり、明神下の家の買入れから造作普請などに氣をとられて、自分の作は一片ごゝろ」にたつてゐたのである。其上に二

見屋忠兵衛云々とあるのは、この二見屋は牧之の江戸店同様の家で、馬琴との往復音信は始終この店を經由して、双方につたへられてゐたのだが、卅日ごとに再三催促しても八月中の牧之の書簡に馬琴の返書がないので、使の者が何氣なく、飛脚ちん云々と口をすべらしたのであらう。馬琴は例の氣性からそれを心外に思つて、返書のおくれた理由を新宅買入の事情から書き起して、その値段の交渉談判のさま、諸道具の買入れ、大工左官の働きぶり、宗伯の事、その妹のこと、又家作買入金の調達ぶりまで、順序を追ふて精密に書きしるした上に、前掲の著作繁忙のありさまに書きつゞけて、二見屋の丁稚が一言洩らした飛脚賃云々の失言に抗辨してゐるのである。その辨解の文言だけでも、恐らくこの雜誌の八九頁の分量を費してゐるが、これなども多くの評論者には彼の執拗我執の例證にされて、さも爭ひ好き理屈ずきの老翁として見られてゐるやうであるが、わたしは決して然うは思はない。彼の正しきを求める弱い性格は、煩雜をいとはずにこの言譯をせずにゐられぬほどに、遠國の友人のさげすみを恐れたのであらう。彼のものをつきつめずにゐられぬ性質は、書けば書くほど對者の意嚮が不安になつて、辨解の筆を擱くことが出來なくなるやうに見える。それは後章の彼の手紙について云ふ時に、改めて書き加へることにしやう。

訪問客ぎらひな馬琴は、ほとんど病的に來客を厭ふて、突然の訪問者は勿論のこと、例へ知人の縁故の者でも、改めて紹介狀を持參しなければ、決して對面しなかつた。日記にも毎日無禮な訪問者を怒つて、「多くは吾を見まくする者、兩國邊なる勾欄戯場を見て、故郷へ還るの日話柄になさまく欲するが如し。」など憤つてゐるが、それは必ずしも「見物人」に限つたことではない。大名旗本などの地位ある者が、禮をつくして訪問し又は招聘しても、彼は甚だそれを迷惑がつて、なるべくそれを避けてゐる。彼の三友の一人として世に知らるゝ讃岐高松藩の江戸詰家老木村默老との交際なども、四十年近き心友として互にゆるしてゐる間柄なるにも拘らず、面會は生涯にたゞ一度であつて、あとは文通のみであつたといふ驚くべき事實からも知られる通り、すぐ近所の友人屋代輪池や關忠藏との往復も、何年に一度と云ふ對面であつた。世間はこれ等の事實から、彼を倨傲尊大にして、自らを恃む者のやうにその當時から指彈してゐるけれど、わたしは然うは見ない。彼の日記を仔細に檢閲した人は、彼は性格として甚しく多辯の人を憎んでゐるのに氣がつくだらう。娘お路の兩親、殊に母親が馬琴に忌まれたのはその江戸人らしき饒舌であつた。その他、「無用の長談」とか、「役に

立たぬ世間話」とか云つて、雜談を非常に嫌惡してゐるのは、彼自身が訥辯にして坐談の興味がなかつたのではなからうか。髀沸西遊記の序に、「ちかごろおとし話といふもの丶流行して、その業にとみたる者あげてかぞへがたし、予が如きはくちびる重く、口才つたなければ、人のはなしを聞いておかしと思ひしも、人に語ること能はず。」と云つてゐるなど、辯口の人とは思はれない。特に當時の世態が著しく嚴肅味を缺いて、みな安價なる遊戲氣分にひたされ、洒落をよろこび機智を弄して、戯作者など云へば一種幇間かたぎの浮世人世間師として迎へられてゐた時代にあつては、無用の交際なるもの丶如何に彼を苦しめたかゞ察しられる。彼の日記を見るのに、瀧澤家の訪問客にして彼の書齋まで通されてゐるのは多く出版書肆の主人で、和泉屋市郎兵衛など云ふ輕卒者の、「役にも立たぬ世間話」までを、馬琴は迷惑しながら神妙に應對してゐる。かれらの利益のみにかかりて、作家に對する態度の無禮にわたる時など、彼は時々癇癪をおこして詰責しながら、彼仁は短氣者なれば怒つたかも知れぬなど、ひそかに後悔してゐるところに、馬琴の渡世第一とする信條も窺はれる。愛兒宗伯に對する出版業者の凌辱などでも、彼はむしろ家族をなだめて穩便にはからつてゐる。

運動ぎらひ外出ぎらひの彼は、閑暇さへあれば終日書齋にありて讀書を娯みとした。五十前後までは毎夜寢床に入つてからも書冊を手からはなさず、耽讀曉に徹することが毎夜のやうで、そのため極度の神經衰弱にかゝつたゆゑ、醫者の忠告に隨ひ、其後は毎夜就眠時と定めた四ツ時（午後十時）前後をもつて、書卷を抛つやうに規則してゐる。讀書の範圍は、彼の職業上の必要から支那小說や和漢の史書を第一の愛讀書としてゐるが、その醫學癖は本草學や診療學にも多くの興味をもつて、支那醫學や日本の古方學にも研究を怠らず、始終愛讀してゐたやうである。また彼の儒教尊崇時代にはかなりに深く聖經の學に沒頭してゐるやうだし、佛教道教の書も一通り讀んでゐる。六十にして思想上に一轉機を劃してからは、易學方位に多大の趣味をもつて、その大著述をなすために舶來の支那書籍を讀破してゐる。その他本居宣長や平田篤胤のやうな新學說にも共鳴して、相應に讀んでゐるやうだし、またケンフヰルの日本紀行や環海異聞、當時の翻譯書なども大抵偶目一過してゐる。彼は自ら書淫と稱してゐる位で、珍稀の書と聞けばその種類を問はずに買ひあつめ借りあつめて、寢食を廢して讀み耽つてゐた。晩年に歩行不自由になつてからは、一層その癖が甚しくなり、讀物ぎらひな家族に氣がねをしながら、「うりて錢になり候物は書物にましたるものなし、[illegible]

にもと存候て貯候へ共、媳婦杯は草ざうしも嫌ひ候故、いつもにが〳〵敷顔いたし候もきのどくに候間。」などゝ強いてまぎらして、始終讀書の快樂を趁ふてゐた。

讀書の外に、ほとんと彼の課業の一つであつたのは、自家賣藥の製劑であつた。風俗金魚傳の奥附に、その廣告が出てゐるから記載して置かう。

一家傳神女湯　ふじんちのみち諸病の妙藥。一包代百銅。

近來藥種高直といへども、諸やくしゆをえらみて、功のうをたがはざらしむ。あへて利の爲にのみせざればゑ。

一精製奇應丸　大包代二朱。中包代一匁五分。小包五分。

やくしゆをえらみ、せい方をつまびらかにし、ぶんりやう家傳の加げんをもつてす。この故にその功恰神のごとし。

一熊膽黑丸子　くまのい汁を以丸す。多くのりをまじへず。一包代五分。

一婦人つき蟲の妙藥　一包六十四銅、半包三十二銅。

製藥本舗　神田明神下、同朋町東よこ町。瀧澤氏。

弘所　元飯田町中坂下南側、四方の向。たき澤氏。

取次所　兩國よこ山町二丁目。大坂や半藏。

取次所は大坂にもあつて、書肆河内屋を賴んで販賣してゐた。馬琴の文名が高くなるほど、賣藥も可也に賣れて、その收入は瀧澤家にとつておろそかにはならぬものであつた。日記によれば飯田町一軒の一月の賣上金が、壹分二朱と三貫五百二十四文、壹分二朱と三貫六百四十文、壹分二朱と三貫四十　文などゝあつて、そのうち婿に手數料を幾分かつゝ引いて、その殘りは宗伯の家計費になつてゐる。大坂からも「大坂今河吉より、神女湯五十、奇應丸大包貳、中包廿、小包五十、熊膽五十枚注文來る。」など隨所に見えてゐるし、時には武家屋敷よりわざ〳〵使をよこして、三兩の五兩のといふ賣上げもあつた。篁村翁の話によれば、それ等の大口の購買者は大抵馬琴の愛讀者で、大名家奥向の女中だちが銘々の買入れを一纏めにして、わざ〳〵彼の家に買ひに來たのだと云ふ。馬琴は賣藥の收入は全部宗伯の所得にして、彼とは經濟を別にしてゐた。隨つて製劑の勞力は宗伯夫妻の負擔としてゐたが、宗伯が大病以來は手が廻はりかねるところから、已を得ず馬琴も著作の机をはなれて、初めは「宗伯、病中不得已おさ也。」など嘆きながら製藥の手傳ひをしてゐたけれど、後には馬琴の課業同樣になつて、

盲目の後も媳のお路を相手に藥まろめにかゝつてゐた。

賣藥の賣上げ高を記した序に、こゝに瀧澤家の收入の概略を調べて置く。その收入の主なるものは、家賃、家主役給料、賣藥代、揮毫料、原稿料及び宗伯の松前家からうくる扶持米等であつた。會田家はもと中坂下の表屋に下駄屋をしてゐて、後にその裏屋に引込んだのだから、表屋はそのまゝ貸屋にして上家賃を月々收得してゐたらしい。「六月分八百屋上家ちん、南鐐三片持來。」など日記に出てゐるから、月に壹分二朱の家賃であつたらしい。篁村翁は日記抄に、深光寺の僧侶の記憶を信じて、馬琴は京橋邊に家作を有してゐたやうに云つてゐるが、恐らくこの八百屋の間違ひであらう。京橋にはその地主が住んでゐたので、それを混同したのだらうと思ふ。

家主の給料は、飯田町に十五間々口をあづかつて、馬琴は年に二十兩の俸給をうけてゐた。然し自分は事務をとらずに代人を立てゝゐたのだから、全部瀧澤家の收入にはならない。また婿の清右衛門に跡職を讓つてからは、馬琴夫婦の小使錢として、年に五兩づゝそのうちから送らせて、それを明神下の家の地代金にあてゝ置いた。外に家主役には掃除金（肥料代）とか節句錢とか名づける雜收入があつて、清右衛門からその都度馬琴のところに送つてゐるけれど、それは格別の額とも思はれない。宗伯が松前家からうけた俸給は三人扶持と云ふから、これはやつと一家の飯米ぐらゐのもので、その他時々の手當金はあつても、それは大抵知れたものであつた。雜收入としては、彼の揮毫潤筆料などもある。彼は自宅にては一切揮毫のもとめに應ぜず、大坂は河内屋太助、江戸は鍋町のかしわや半兵衛を取扱店として、扇面短册額ものなどそれぞれに揮毫料を定めて愛好者の需めに應じてゐた。その注文も可也に日記に見えてゐるけれど、收入高の委しいところはまだ調べがつかない。

やはり何んと云つても、瀧澤家の收入の大部分は彼の著作の作料であつたらう。當時の文壇生活者の眞相を知るために、わたしは當時の謂ゆる原稿料について、目下調査してゐる。幸ひ或人の厚意によつて、それに關する重要なる資料を借入れる約束になつてゐるから、詳細なることはその研究後に發表することにするけれど、その頃の原稿料とて今日或人々が云ふほどに貧しいものではなかつた。馬琴の初期の作品は讀本合卷草紙ともに一篇五册にて、普通五兩ぐらゐを相場としたらしいが、中期以後は次第に增額して行つて、八犬傳の如きは一輯六冊にて二十四兩の收入があつたことは明かである。（藤井博士は一輯二十五兩と發表してゐる）その外に、出版書肆からは新版の配

儀として一分の謝金、また盆暮その他の祝儀金、また出版大當りの時には肴代として壹兩二分とか二兩とかを包金にして來てゐるやうだ。もとより今日の文壇人の收入に比較すれば甚だ僅少なものだけれど、當時の收入としては然う割の惡い職業ではなかつたやうに思はれる。

わたしは馬琴翁の日常生活からして、先づその外面的輪廓を描き、それから次第に彼の思想や性格やの内面生活に觸れて行かうとして、やゝ冗慢なる記述をつゞけて來た。これより彼の家族の人々を調べ、彼の交友關係を探り、當時の文壇や社會狀態を見て、その上再び彼の翁の性格性癖から、彼の生涯の眞面目に研究の歩をすゝめやうとしたのだが、中途感冒にかゝつて、一先づこゝで擱筆するのやむなきに立ち到つた。讀者諸彦ならびに編輯記者に對して、まことに相濟まぬことではあるが、續篇は一二ケ月後の本誌に發表することにして、深く寛恕を待つ次第である。

(十四年二月七日)

百姓一揆物語

小野武夫

はしがき

上なる爲政者に仁德の心懸があり、下なる庶民の間に悅服の情が流れて居れば、國家は常に安泰、社會は萬里同風の喜びを樂むのであるけれども、其の然らざる場合には、世を擧げて騷亂の巷と化するに至るは古今を通じて渝らない。

庶民が時の富者や上司に對して破壞運動を起したことは、上古以來史上に先例乏しくないが、其の最著しい社會現象となつて一世を驚かすに至つたのは、足利時代の所謂土一揆又は草一揆の勃發したる以後のことである、足利氏の末期に至り、世は所謂群雄割據の時代となつたが、當時庶民が鋒起して政府に借金の棒引を強要し、又は酒屋質屋に闖入して、帳簿を破棄し、富

豪の邸宅を打破したる等社會の不秩序によつて、當時既に足利將軍家が末路に近きつゝありしを示したるは爭はれない。後ち世は愈々戰國時代となり、幸に織豐二氏の偉大なる軍功により天下は平靜に歸したが、德川氏が代つて開幕したる後に至りては、或は各藩の苛斂誅求が原因となり、又は官吏の非行專横に百姓が激怒し、又は其地の社會に於ける富の分配に不平を起して所在に一揆暴動を企つるに至つたのである。斯くて歴史は繰り返すと云ふ理法の下に起つた同じ百姓一揆でも、足利時代の一揆と德川時代の一揆とは、其間に若干の相違がある。足利時代の土一揆は社會的色彩を頗る濃厚に具へて居つたけれども、德川時代の百姓一揆は政治的意味に加ふるに若干社會的意味の加はりたるものであつたのである。私が本篇に述べんとする處は、多分に此の政治的原因に加ふるに、社會的事情に基いて起つた處の德川時代の百姓一揆を綜合的に觀察せんとするに在る。

社會階級を士農工商の四大層に積み上げ、其中、武士を以て治者とし、農工商を以て庶民とし、此の庶民は上層の武士を給養すべく法定せられたるものが即ち德川氏の打ち立てたる封建制度の社會的特色であつたのである。斯くて武士は法と劍との威嚇によりて庶民から絞れる丈けは絞り取り得る權能が認められて居たけれども、其の搾取せられる庶民——百姓——として

も、人間たることに於て十分遇はれなかつたから、上層よりの抑壓に堪へ得なくなれば、遂に彼等は堪忍袋を切らして逃亡逃散するか、又は身を犧牲に供し、妻子の安否をも顧ずして、反抗せざるを得なかつたのである。村に止りて戰ふか、又は密かに村を逃散するかは、極苦に惱まされたる百姓の取るべき道であつた。仍て幕府も列藩も斯る百姓の逃亡を防ぐ爲めには精細なる法度を設けて彼等を土地に結び附け、強制的に耕作せしめんとしたのであるが、此の束縛に堪へ切れずして爆裂したものが即ち一揆である。然るに治者たる武門階級は庶民の一揆に備ふる爲めには豫め強訴徒黨に關する嚴重なる法制を以て臨んだから、一たび百姓にして強訴を企て、又は暴動を起したものあれば、悉く此嚴刑に觸れて悲慘極る最後を遂ぐるに至つたのである。

明治維新の成りたるに就ては種々なる原因を擧げ得るであらうが、其の原因中には上司への反抗運動の表徴たる百姓一揆をも數へて可なりと思ふ。今日の一般史家又は經濟史家が維新史の筆を採るに際し、百姓一揆を其の功勞に數ふるものゝ尠きを遺憾とする。斯く云ふ私は、啻に日本農民史の研究に從つて居る一學徒の立場からばかりでなく、我等百姓の祖先が封建制度の餘弊に堪へ得ずして彼が如く義に勇み戰ふたる其の雄々しい

義魂に感銘し、隱れたる地下の志士を讃へたいとの思慕心からである。

本篇の起稿に際しては、叙述は平易ならんことに力めたけれども、材料の取扱に就ては成るべく學問的に精確ならんことを期した積りである、今本篇の論考に使用したる根本資料を左に、

一、淺川騷動見聞錄（寬政十年、岩代國）
一、松木長藏傳（承應年中、若狹國）
一、多田加助傳（貞享年中、信濃國）
一、丹後百姓一揆（文政年間）
一、房州萬石騷動實錄（正德年間）
一、郡內騷動（天保年間、甲斐國）
一、武左衞門翁傳（寬政五年、伊豫國）
一、夢の松風（天保年間、陸奧の國）
一、天明三年太田在町騷動記（石見國、安濃郡）
一、天保二年諸郡百姓騷動日記（周防國）
一、民權操志（佐倉宗吾外五氏傳）
一、伊豫百姓一揆（德川諸時代）
一、阿波百姓動亂錄（安永、安政年間）
一、阿波記錄（天保年間）、
一、天保義民錄（近江國）
一、日吉村誌（伊豫東宇和郡日吉村）
一、鳥麓奇談（延寶五年、羽後國）以上

第一　百姓一揆の原因に關する考察

百姓一揆の起りたる原因として舉ぐべきものは種々あるであらうが、或場合には政治上の原因によりて起り、或場合には經濟上の原因によりて勃發せしこともある。又同じ政治上の原因の中でも幕府や藩の財政施法に原因して起り來ることもあれば、政治の局に當る官吏の私曲橫暴に原因して起り來りしこともある。而して財政上の原因としては租稅の過重に起因する場合が最も多く、稀には藩の行ふたる獨占事業に對する不平も原因を成したやうである。次に經濟的原因によりて起りたる一揆の多くは其地方に於ける食糧が不足して人民糊口の途を失ふた爲め群民の蜂起せる場合と、食糧其物は土地に藏せられてあつても、價格の暴騰せるため之が買入に困却して騷動を起せる場合との兩原因があるやうに思ふ。而して實際上の米不足による一揆は交通不便なる偏僻の地に起り、價格暴騰による一揆は主として町場附近に起る場合が多かつたやうである。

勿論政治的原因に基く百姓一揆でも、其源を質せば、經濟的

原因による一揆であり、又外見では經濟的原因に基く一揆でも、其が根本の原因を質せば、幕府又は藩廳の行ふたる政治の仕方の妥當ならざるによる場合があるであらふ。故に其の政治的原因たりと云ひ、又は經濟的原因たりと云ふも、事實は相倚り相助けて一揆暴動の原因を成して居るのである。唯政治的原因に基く百姓一揆では、時の政府又は役人を標的として襲撃が行はれ、經濟的原因に基く暴動では村や町の富豪又は物持連中を相手として掠奪又は燒打の行はれたことを以て、兩者間の著しい異點とせねばならぬ。

- 百姓一揆
  - 政治的原因（政治一揆）
    - 一　財政上の原因
      - 租稅の過重に因る一揆
      - 獨占事業に對する一揆
    - 二　役人の非行に對する一揆
      - 藩（幕）吏に對する一揆
      - 村役人に對する一揆
    - 三　其他の政治的原因による一揆
  - 經濟的原因（社會一揆）
    - 一　食糧不足に對する一揆
    - 二　物價騰貴に對する一揆

（其一）　政治的原因による一揆

(1)　租稅の過重に對する不平の一揆

古來、朝廷や、領主の財政收入の源泉が農業であつたことは云ふ迄も無いが、徳川時代に至つても、幕府や各藩の財政上の收入は依然として農業に在つたのである。尤も農業以外にも或は冥加金とか運上とか稱して商工業者から收納した稅目も無いでは無かつたが、其收納の額は甚だ微々たるものであつた。故に幕府や列藩は其領內の農民より上納する貢物を以て行政費を支辨して行かなければならなかつたから、何れも管下の農業を獎興して租稅の負擔力を增進せしめんことに努めた。即ち夫の新田開發であるとか、治水事業であるとか、特用作物の移入獎勵であるとかは財政收入を目的とする積極的農業政策であり、又夫の地力均分を目的とする土地割換制度の如きは、消極的增收政策に屬するものである。

幕府や藩廳が如何に積極消極兩政策を行ふても、由來農業生產力には限りがあるから、其負擔能力は無限に增進し得らるもので無い、其結果として、當時の上司は、一方に於ては農民の負擔力を增進する政策を採ると共に、稅の徵收をも可なり嚴重に行ふたのである。然かも其れが農民の負擔し得られる間は彼等は封建の抑壓下に我慢したけれども、其れが背負ひ切れなくなれば、强訴又は暴動を起して死物狂に抵抗することを敢てしたのである。蓋し思ふに、徳川幕府の世となつてから、外に對しては鎖國政策を採り、國內に對しては事勿れ主義の下

に文藝工術の進歩を促したから、上は武士より一般庶民に至るまで、自ら生活費の增嵩を來さゞるを得なかつたのであるが、此等の生活費は皆當時の生產者階級たる百姓より徵收するの外に途は無かつたのである。故に列藩當局が財政に窮すれば結局は農民の貢税を增徵するか、又は大坂あたりの商人から借金しなければならなかつた。而して百姓に割り掛けたる年貢の收斂が過重に失したる時が即ち一揆騷動の原因となつたのである。限りある農地生產力から限り無き武士階級の生活費を搾取せんとせし處に、一揆勃發の眞原因が伏在する。

文政年間に於ける丹後宮津の百姓一揆の原因は藩廳が七十歳以下七歳迄の人民の人別帳を作り、此專帳に基き銘々より每月貳錢宛の人頭税を課したるに因ると云ふ。

承應年間に於ける若狹の國の强訴事件の原因は百姓より藩に納むべき豆の一包が、從來は四斗入であつたのを、四斗五升入に改めたから、百姓は其負擔に堪え切れないと云ふて强訴の企を起した。

(2) 藩の獨占事業に對する一揆

各藩中には財政收入の一端として專賣事業を行ふて居るものがあつた。即ち仙臺藩に於ける米及び鹽專賣の如き、又岡山藩に於ても鹽專賣を行ひ、伊豫吉田及び大洲領に於ては紙の專賣事業を行ふて居つた。

元來專賣事業は特定の產物を政府が生產者たる人民から買上け、之を再び相當の値段で人民に賣り捌くのであるから、本來から云へば、其間に非違の行はるゝ筈はないのであるが、其制度の立て方如何によつては爲めに生產者の利福を害し、彼等の怨を買ふに至るのである。伊豫の吉田領及び大洲領に於ける紙專賣に伴ふて起りたる一揆の如き即ち其である。

吉田領に於ては寬政の頃、法華津屋と云ふ藩の御用商人があつたが、藩に對しても金融上の功勞があり、一般家中に對しても亦金錢上の勢力が及んで居つたから、常に手厚き待遇を受けて居つた。此の法華津屋は藩命により紙製造を副業とする農家に資本を貸附けて置いて、製紙が出來れば之を買取るのであつた。然るに其の計算の仕方が貸金には非常に高利を取り、製品たる紙の方は普通相場よりも遙に低價に買取つたからして、製造業者等は到底收支相償はす、幾年も經たぬ間に莫大なる負債を生した、仍て苦しまぎれに製品を法華津屋に賣らずして、私かに他方面へ拔賣をするものがあつた、其事が藩に聞へたからして、藩は直に紙座と云ふ役所を設けて密賣を嚴禁し、犯す者を發見すれば悉く其製品を押收して其七

分を發見したる役人の私有とし、殘り三分を紙座へ差出す定めとしたので、遂に百姓の堪忍袋が破れて、强訴一揆の騒ぎとなつたのである。

又伊豫の大洲領も紙の名產地であつたが、「伊豫百姓一揆」の記する處によれは、『大洲半紙の名は天下に知れ渡り、領内の地質が楮の栽培に適し、其製出さるゝ半紙は紙質堅牢無比の名聲あり火事の多い江戸の商賈は全く商業用の張薄には大洲半紙を用ひ、一朝出火の際には之を井戸に投して退散するが、水中に數日を經るも、大洲半紙に限り原形を失せす、墨痕判然として元の如しと云ふ處から、年に江戸に輸送する額は多量に達し、藩内第一の名產であつた、今でこそ楮畠は桑園に化し大洲半紙も僅に諦本に其名殘を留むるのみであるが、當時大洲領内に於ける製紙の業は最盛大で、藩内の領民は之に依て衣食する者も非常の多數であつた。偖ても文化年間の事當時の藩主は賢明に慈に在したが、奸吏横暴を極め、苛斂誅求を恣にし、殊に其多額の豐富な半紙に對しては、最苛酷な手段を講じ、各所に紙改めの役所を設けて製品の全部を收積し、時價の如何に拘らす、安價に指定して悉く之を買收し、藩の手を以て江戸各地に輸出販賣して、此間多大の利益を占め、若し之に違反するものは嚴罰に處することになつたので、農民商賈の困窮は月を追ひ、年を重ぬるに從ひ其極に達し、怨嗟の聲は漸く鼎の如く沸き立つて來た、此時柚の木村の里正に三瀬孫四郎なるものがあつて、天姓怜悧で頗る仁義に富み、衆望を負ふて、藩内の里長を勤めて居たが、此の衆民の困苦狀態を默止するに忍ひす、如何にもして今少しく寛大の施政を仰ぎ、下民を塗炭の苦から救はんと幾度か具さに下情を陳べて請願上書したが、中間に跋扈する官吏に妨けられて一も容れられぬ、孫四郎は寢食を廢し、百方策を講じたが、悉く徒勞に歸し、而も奸吏の横暴は益々甚しく、農民の困苦は益々其の極に達したので、今は最早や之までだ、一命を抛てても飽まで素志を貫くの外なしと堅く決心の臍を固め（中略）、一致團結し時日を期して蓆旗を翻し、奸吏輩を除きて賢明なる藩君に訴へ、仁政に浴せんと謀つた處、各村里正も一も二もなく此擧に同意し、將に事を擧げんとして、萬端の準備を調へ、危機眞に一髮と云ふ時、二頭の早馬は砂煙を蹴上けて大洲城下に乘込んで來た（中略）奸吏等は其注進により驚くこと一方ならず、忽ち捕吏を手配して主謀者四名を召捕つたが、

時は恰も文化十三丙子の年霜月初めの事である云々」

則ち知る、藩廳の施設に係る獨占的專賣事業のために、物品の生產者たる農民が其苦痛に堪えなくなれば、蹶起して徒黨を組み一揆を企つるに至つたのである。尤も吉田領の場合に於ても、大洲領の場合に於ても、專賣事業の關係せる役人の非違を擧げて誅制を企てた樣であるが、然かも何れの場合に於ても紙の專賣なる獨占事業の弊害が、生產者たる百姓を憤怒せしめたことに變りは無い。

(3) 役人の非行に對する一揆

封建制度の特色として上は將軍藩主から、中は家老、下は士卒の輩に至るまで、概ね世襲の官職である處から、容易に失官又は更迭しないのが常であつたから、當時の役人は餘程の失策か又は彈劾でも受けなければ、其職を失ふ如きこと無く、其間多少の賄賂を取つたとか、又は在役中に若干非違の行があつたからとて、直に露見して罷免せしめらるゝとも限らなかつた、又當時の實情として、藩主は參覲交代制度のため不在勝ちであつたから、其留守を預る藩の役人は、世襲の官職を恃んで動もすれは「鬼の居らぬ留守に洗濯」をも仕兼ねましきものが無いではなかつた。例へは、藩の實際上の年貢收入は平年何萬何千石と極つて居るのに、藩主の留守中に餘計の徵收をし、之を着服すると云ふ役人もあつたのであるが、此等の非行が必ずしも常に藩主の耳に入つて計かるゝものとは限られて居ない、何故なれば、當時は通信機關も不備であるし、又上下の隔りが余り甚しいので、某々官吏の非行を私かに其上役に注進して矯正せしむるが如き途は全く開かれてなく、若し上司に民意を上聞せしとせば、村役人の手を經て順序正しく申出てなければならなかつたのであるが、順序を踏んで上申したる民意が常に上司に達するの機を失ふたのは云ふ迄も無い、故に藩主と百姓との中間に介在する官吏の非行を訐いて上聞に達するには、此の中間の役人――人民に直面して非行を逐けつゝある役人――を拔きにして、直に上局に訴訟せねばならぬ、是が即ち謂ふ處の强訴である。然るに此强訴は當時官吏の威嚴を犯すものとして嚴禁せられて居つたから、大概は刎ね附けられるのが常であつた、斯くして民意が上司に達しない結果は人民蹶起して騷動を起すに至つたのである。夫の正德年間に於ける房州の萬石騷動の如き、又天保年間に於ける江州の騷動の如き、奸吏の民怨を買ふたる好き事例である。

正德年中、房州北條村附近に於て所謂萬石騷動なるものがあつたが、其原因は領主屋代越中守忠位の時、河井藤左衛門なる役人を派遣して作毛檢見を行はしめた處、

河井は自分の利慾を恣にするため、田地の坪刈を行ふに同行の手代を以てして百姓に手を觸れしめず、且つ坪刈の位置選定の如きも、下作の處を棄てゝ上作の處はかりを選んだ爲め、此の屋代の領地壹萬石の村には其年に至り俄に六千俵の負擔を增すことゝなつた。之ばかりならまだよいが、河井は更に村々の神社佛閣等に在る大樹を無償にて伐採し、且つ當時一般に免除されてあつた酒屋糀屋の運上金をも徵收したので、百姓は堪え切れなくなり、遂に身命を賭して直接江戸の奉行所へ强訴を企てた。

江州地方に於ける天保十三年度の百姓一揆の原因は當時の檢地役人たりし市野茂三郎が、或は檢地に際して間竿の六尺を五尺八寸に縮めて田積を打出し、又村内に宿泊しては佳肴芳醇を漁つて、其代價は村の費用を以て支辨せしめ、賄賂を贈りたる村に對しては檢地の作業を寬大にするけれども、何等の心附けをしない村に對しては頗る嚴重にするばかりで無く、種々なる難題を持ちかけたと云ふことである。「天保義民傳」に曰く『一日、市野は入湯して糠袋を命したり、然るに村役人は他の器物は殘る所もなく調へ置きたるも、糠袋迄は氣附かず、其用意なければ、村役人等は其の命令に狼狽し、庄屋三崎佐太郎の老母に謀りたり、然るに老母は徐に起て簞笥の引出しより一の糠袋を取り出して曰く、糠袋の御用もあらんと、豫而拵へ置きたれば、之を持參致されよと差出せるを村役人は受取り見るに、絹にて製したる袋の中に貳朱金を盛りたるものなれば、大に驚き、今度の御奉行樣は公儀の御公役樣なれば、商樣な物を持參致したれば、賄物を贈る不屆者と叱られ、石原代官所に召出され、入牢抑附けらるゝも測られずと、躊躇すれば老母は曰く、左程の心配なれば、卿等は知らぬ分にて、娘になりとも持たせて呈せられよ、若し御叱りもあるなれば、妾其罪を負ふべしと凛として申されければ、村役人も決心して之を市野に呈したり、然るに市野は此の糠袋、否金袋を素知らぬ體にて受取り、其翌日より嚴酷變じて慈愛となり、此村方は斯くすれば利益なり、斯くすれば都合宜しからんと、鬼の如き役人擧て佛の如くになりければ、是より賄賂の行はるゝを悟り云々』とのことであるが、其後百姓等市野の暴戾に憤激して一揆を起し、其旅宿を襲ひ、市野は身を以て間道を辿り逃走したのであるが、一揆衆が市野の荷物を破壞するや、荷物の中から諸所で取り來つた賄賂金、小判、二步判等が澤山顯はれ出て、宛ら金銀

の砂を以て作りたる庭の如くであつたと云ふ。

(4) 村役人に對する一揆

村役人とは庄屋（名主）、組頭及び百姓惣代を指し、此の三つの役人を俗に又地方三役とも云つて居つたのであるが、此の三役中組頭及び百姓惣代は純粹なる百姓側であるから、平常百姓の利益を圖るは云ふ迄も無いが、庄屋に至つては必ずしも左様でない場合があつた、彼等は村落に在住するけれども、一種の特權階級の如き地位を占めて居つたから、其權勢を恃んで時に或は藩に上納すべき年貢の上前を刎ねたり、又は百姓に難題を持ちかゝるものも無いではなかつた。斯る場合に於ても柔順なる百姓であるから、大概のことなら沈默して居たのであるが、其甚しきを見るに到れば、忽ち竹槍蓆旗の叛亂を勃發せしめたのである。

文政九年三月、伊豫の宇和島領高瀬村では庄屋末光某が村内の百姓に對して平生不都合なる所行が多いと云ふので、全村徒黨して反抗したが、野村組の代官出張して、双方の言分を聽き取り、其結果庄屋に非あるを發見し、庄屋末光の役を免して他國に移したと云ふとである。

(5) 其他の政治的原因による一揆

以上述べたる外にも百姓一揆の原因は種々あるであらう、例へば羽前の庄内に於ては藩主が交代するので、其れに不平を抱いて一揆を企でたと云ふが如き例もあるが、此等は皆一括して、其他の政治的原因に基くものとして、茲に細述することを避けて置く。

（其二）　經濟的原因に依る一揆

經濟的原因に基く社會的一揆は、當時食糧の流通が圓滑に行はれなかつたことに主なる原因を求めねばならぬ、思ふに徳川時代に於ける各藩の領民は二重の鎖國裏に置かれてあつたも同然である。即ち幕府は海外諸國に對して鎖國を行ひ居たるに加へて、各藩は更に其の四方の隣藩に對して鎖國政策を行ふて居たから、當時の常態たりし交通運輸の不便と相俟て物貨の流通は常に梗塞せられ勝であつた。尤徳川幕府は參覲交替制度や諸國巡檢制度を以て中央集權の實を行ふて居たには居たけれども其は唯徳川本家の安全と其の永存を期することが目的であつたから、此の制度の効果の及ばない範圍では各藩は皆獨立國の如き觀を呈して居つた、即ち甲藩が饑饉に逢ても、乙藩は敢て之を救助するの義務を感せず、又乙藩に物資の缺乏を來しても、甲藩は之が補充をすることを喜んでしなかつたから、當時物資が缺乏し又は物價が昂騰すれば、勢ひ其地々々の人民は切迫し

たる生活困難から逃れん爲に、一揆暴動をも企つるに至つたのである。斯く觀來れば、同じ百姓一揆の中に在りても、時の政府や、役人に對する不平が募つて人民の蜂起したる場合と、物資の缺乏や物價の昂騰に基く一揆とは、其性質が著しく異るのである、政治的事情に基く百姓一揆に在りては人民に生活困難を招かしめたる原因が時の政府又は役人の非曲にあるとし、之に對して必死の抵抗を試みたのであるけれども、後者の場合に在りては、物資の流通を梗塞する土地の社會の物持連を相手として破壞運動を企つるに至つたのである、故に前者を政治一揆と云ひ得るならば、後者は社會騷動と云ふべきものである。

天保二年、防州山口附近に於て米穀高値になり、白米一升が九千文に騰つたから、土地の人民生活難に堪えずとて、一時に蜂起し、米屋の打毀を行ふたことがあるが、當時一揆軍の散布したる張紙即ち宣傳ビラには、

白米大高値に付、問屋、小米屋衆に相談に參候間、明後二十二日、夜四時より出揃のこと。

とあつたとのことであるから。一揆の目的とする所は米屋を打毀して米の相場を引下くるにあつたのである。

甲州郡内騷動の發因に就ては「郡内騷動」に左の記事がある、曰く『偖も下和田次右衛門、犬目兵助、黒野田の泰順なと評議して、先づ山梨郡熊野堂村奥右衛門方へ、重立ちしもの、内より惣代として遣しける、斯くて兩人のものは夜を日に繼き、急ぎ熊野堂村へ來り、主、奥右衛門に對面して云ふよう、我々は郡内領のもの共にて、黒野田宿より二十二ケ村惣代にて、ちと願の筋あつてまかりたり、願と云ふは、餘の議にあらす、定めて風聞にもお聞あらん、郡内領の内にても、我々共の村方二十二ケ村は極澁僻の所にて、平生迚も米穀少く、殊に當年のことは、古今稀なる饑饉の年柄にて、米穀買入方差し支へ、別して穀留ありて此上は郡内領のもの共は、餓死するより外はなし、然るに當家にては、多分米穀貯へ置かるゝよし、最早買喰いたし盡して、此節に至りては、買入るゝにも價なし、依て二十二ケ村へ米穀なりと、麥なりと貸付給はるへし、尤返濟の議は陽氣柄さへ直る上は急度返濟仕るへし、少しも損耗かけまじと云ふ。

奥右衛門答けるは、一體郡内領にては米穀拂底は素より覺悟にあるべく、畑勝、田少の土地にて、各郡村役人等の勤辨の不行屆なり、黒野田邊より鳥澤邊に田方になるべき所多分あり、是には新規用水發起して、畑田成にな

すなれば、莫大のことなるに、畑かなひものと思ひ、兎角桑を立て、作物をば外のものゝ様に心得、桑をこもること此邊の作物のかいしやくよりも大事にて、夫れと云ふも、蠶を渡世に思ひ、繭を取て絹絲をとり、絹機をり、女の分は是にはかりかゝり居て、常に絹物を着し、紅をしろいをたやさす、けしようけばいにくつたくし、男も之に準して絹商ひ、呉服屋體のもの多し、農業のことは更に辨へす、元は郡內絹と云ふて、丈夫なることを専一として織り出せしが、近來は見體はかり重として、切れることに構はず、其くせ、素より高値なり、横着な心さし、よからんことのあるべきようなし、又三郡にては田畑等分にして、何一品作物に不足なきように耕作第一とす、村役人たるもの、用水六ヶ敷場所にては公儀へ願ひ水配の役人を乞ひ請けて是にかまかす、尤桑楮あれども耕作したる畔にはなし、夫へは茶種或は荏などを植ゆる風なり、雨降り風吹く日には木綿糸をとり、四季の着物類を織なり、女も春事解てより麥草をとり、夫より年內田畑にはかり出て、農業を勉む、朝は未明に起き、夕は暮れて歸る、手足には胼皸（ひびあかぎれ）をきらし、身には繿々のさし物を着し、口に粗食してあますことを心かけ、男も野にばかりころび、夜は藁仕事をする百姓渡世第一となすによつて、斯く饑饉の年柄にも、びくともせず、勿論國の內にも取繼がたく、離散したるものあれども、皆是れ百姓耕作に不精のものなり、此上とても、百姓に精出すよう、村々へ申諭すがようござるなど、口より出ほうだいにぞいましめにけり、兩人もむつとせしが、すべきようなく、心中殘念に思ひ、兩人云ふよう、此度は米の無心に來れり、こなたの講釋きゝには參らず、其口を永くきかられよ、今に思ひ知らさんと、云ひさまに立ち歸りける（郡內騷動）

則ち知る、社會的百姓一揆の原因は物價の高値又は物資の缺乏であるが、此の物價騰貴と物資缺乏を來したる根源は何時も大概農作物の饑饉である、想ふに當時は農業の技術が幼稚であつて、今日の如く作物の品種選定や、害蟲防除の方法が教へられて居なかつたから、一朝旱冷又は浮塵子、害蟲等の襲來を受くれば、作物は直ちに台無しに枯死して凶歉の不幸に面せねばならなかつたのである。斯る凶作年に於て村の物持や町の米屋が所藏米の賣り惜みをすれば、物價は日に月に昂騰するから、一般貧民が糊口に窮して暴動を起すのは自然の成り行きであつたのである。

×　×　×　×　×　×　・×

斯く觀じ來れば、當時の庶民、殊に百姓等は時に或は虎狼の如き領主や奸吏の秕政を排する爲めに必死の抗爭を餘儀なくせられ、又饑饉凶歉に際しては、其日の糊口を得るに道無ふして、死物狂に村の富豪や町の物持と鬪はざるを得なかつたのである。

第二　百姓一揆の勃發と進展の方式

(イ)準備行動としての徒黨强訴　上司から百姓の頭上に或は租稅の過重に於て、又は無法の檢地に於て、又は不法獨占事業の實施に於て、背負ひ切れぬ程の負擔と痛事が降り懸つて來れば、當時殆んと農奴の如き待遇を受けて居た百姓も、最後の堪忍袋の緒を切らして胸中に貯ふる欝憤を上司に吐露せさるを得なかつた、蓋し當時の農民は嚴重なる法度に律せられて、上司に訴訟することさへも非常の犧牲を拂ふの決心が無ければ行はれ得なかつた、況んや徒黨を組んだり一揆騷動を起したりするに於てをやである。

百姓が塗炭の苦みに堪え切れすして先つ徒黨を組み、此の徒黨を代表して訴訟を企つると云ふのは、當時の世態から見れば、百姓の取り得べき手段としては、已むを得ざる初期の企であつたのであるが、然も此の訴訟たるや初めから聽き容れらるべき見込の無い場合が多かつた、此の如き場合には百姓は强訴を見合はせて直に一揆を起したのである。天保十三年、江州に於ける騷動の如き、文政年間丹後宮津に於ける人頭稅の賦課に對する不平騷動の如き其例である。又最初强訴を企て、之が聽き入れられざるに際して始めて一揆と化したるものもある。貞享年度に於ける信州松本領の騷動の如き是である。以上は主として政治的原因に基く百姓一揆の準備行動に關する考察であるが、若し夫れ社會的原因に基く一揆に在りては最初先づ村の富豪たる物持に物資の供給方を歎願し、其情願の容れられさるに於ては直に暴動を起せしこと、夫の天保年度の甲州騷動の如きものもあれは、最初から暴動を以て打毀しを行ふたる天保年中に於ける防州山口地方の暴動の如きものもある、仍て案ずるに、當時の百姓は嚴酷なる封建治下に於て强訴や一揆を企つれは、必す日ならすして嚴しき法に觸れ、其身は勿論、一家の斷絶に及ふは知れ切つて居たに拘らす、其れをも省みすして暴擧に出てたと云ふことは、生活の支持上、已むに已まれぬ必要に迫られてからのことてある。

(ロ)一揆勃發の準備　乍去、一揆暴動は決して一夜にして計

想し得らるゝもので無い、必ずや其爆發前に於て若干の宣傳又は準備が先たなければならぬ、即ち暴動を擧ぐる前に於て其首領となるへき人物が百方苦心して同志を糾合し、斯くして成りたる人心の收攬が功を收むるに於て始めて暴動を起し得られたのである、寛政年度に於ける岩代の淺川騷動の起る前々夜には

「來る二十四日の晩、八幡館に於て各方へ申談度旨有之候に付、其村名主、銘々よき鉈、鎌、御持參にて御出合可被下候、尤御出無之候はゝ、其村へ不殘火を懸け可申候此旨心得違無之樣可致傳合候已上

寛政十年正月二十二日

」との落文を村々に撒布して、暴動の準備たらしめたとのことであるが、伊豫の吉田領に於ては百姓一揆を起すに先ち、武左衛門なる義民が普通の手段では事の容易に遂け難きを覺り、先づ意思の最鞏固なる多數の同志を糾合するの必要なることに着眼し、家事一切を擧げて妻子に任せ、其身を扮して「桁打」となつた、桁打と云ふのは扇子一本を手にして一軒々々民家を訪ひ、上り口なり又は椽端なりに腰をかけ、先方によりては座にも上りて淨瑠璃を語るのである、語り畢りたる後に始めて時候の挨拶やら、身の糊口に迫れる事情なりを訴へて家人の同情を求め、半錢一椀の合力を受けて僅に其日の生活を續けて居るものを云ふのである。武左衛門は此の「桁打」をやつて、吉田領内の隅から隅まで幾回となく遍歷すること約三ケ年、其間に各村浦の經濟の實況やら、各地の人物性格等をも精細に觀察して結局是房村の善六等廿四人の同志者を得たとの事である。之によつて觀ても、百姓一揆を起すに先ちては、其主謀者に於て相當の苦心と準備を必要とせしことを知り得るであらふ。

(八) 一揆の軍勢　百姓一揆の起るに際しては、其起るべき種子が充分に蒔かれてあるのであるから、其野の一端に烽火が擧れば、暴動は直に燎原の火の勢を以て全野に蔓延するに至るは自然の勢であらふ。又一たび一揆が起れば一揆軍の先頭を勤むる指揮者が其軍を進めて新なる村や町に入れは、直に其村の庄屋又は顏役に强談判をして、一揆勢に加擔するか、加擔しなければ此村を燒き拂ふぞ、加擔するなら今直に米何十俵の炊き出しを行ひ握り飯を拵へよとか、又屈强の若者等は得物を携へて軍勢に加はれと脅迫するから、何れの村も一揆軍の騎虎の勢に敵せずして其軍勢に加盟するに至るから、一揆軍の行く處恰も草の風に靡くが如き有樣である。故に一揆の起りたる當日には其勢力は僅に數十名に過ぎなかつたものでも、二日、三日と過ぐる内に忽ち數百數千、多きは數千人又は數萬人に達する例は尠くない、現に天保十三年十月の江州一揆に際しては野州郡

三上村に集りたる軍勢四萬餘人、三上山麓は凡べて人ならざるなき狀景を呈し、又寶曆四年の久留米騷動では一揆の軍勢が拾數萬人に及んだと傳へられて居る。以て其一斑が知り得られよう。

(ニ) 一揆の武器　郷村の百姓が武器を携ふることを許されなかつたのは、天正十六年、豐臣秀吉の行ふたる刀狩り以後のことであるが、豐臣氏の後を襲ふた德川氏も、其一門を中心とする封建制度の確立を期する爲め、士農工商の四層に積み重ねたる社會制度の下では、百姓に武器を携ふることを許さず、唯一尺八寸以下の護身用の脇差を許さるゝに過ぎなかつた、況んや鐵砲の類に於ておやである、去れば、百姓一揆軍の手輕な武器としては第一が竹槍である、生竹をスポンと切り放ちたる長さ六尺格好の槍は寔に手頃の兵器であつた、其れから鎌、斧、鉈、鳶口等の器具を持出し、中には鍬を携ふるものもあつたと云ふ、飛び道具としては鐵砲や弓は勿論持たれないから、必要に迫れば石を投するより外は無かつた、又一揆軍に倚るべき武器の無いことからして、町家の打毀しを行ふ際、厠から人糞を酌み出し、之を家中の證文類や、衣服其他の貴重品に注きかけたる津輕領内の百姓一揆の如きは、時に取ての思ひ付きであつたであらふ。又一揆軍が其軍旗として蓆旗を立てたと云ふことは何地の暴動に際しても之を聞く處であるが、蓆が百姓に取りて最容易く手に入れることの出來る品であること以外に、古來の百姓一揆の先例に倣ふて、百姓騷動には必ず蓆旗を立てると云ふ、一種不文の慣習のあつたにも由ることであらう。

又打毀しに逢ふたる富豪が金錢の持逃げを防ぐ爲めに、小錢を樽に詰め込み、上から油を注で、手の附け樣の無いようにした實例は淺川騷動に於て之を見た。

(ホ) 一揆と兵糧　如何なる場合に於ても、戰爭に兵糧の必要であるは今更云ふ迄も無いことであるが、由來百姓一揆は、當時の情勢上よりして之を急に突發せしむることが必要である。若し彼是れ用意をしてゐる間に陰謀が發覺すれば其れ迄であるから、一揆の發頭人は何時でも急突に同志を糾合して疾風の勢を以て進擊するのが常である、事情既に斯の如くであるから、一揆軍には今日の所謂兵站部に相當するものゝ無いのは勿論、其日の兵糧に間に合はせるべき大行李や小行李も附隨せぬのであるから、一揆暴動の突發するや、其日から各々兵糧の心配をせねばならぬ、即ち腹が減つては軍が出來ぬから、三度の食事は何處かで隨時に辨せねばならぬのであるが、一揆暴動の食糧は何れの時、何れの場所でも大概は炊き出しの强制と握り飯の徵發であつた、一揆の先鋒は先づ其の先發者を迎つて村の庄屋や

軍立人を强制して小前から白米やら鍋釜やらを徴發し、同時に婦女子を召集して飯を炊かせ、盛んに握り飯を製造せしむるのである、然るに此の握り飯製造と云ふことも、五十人や百人位の軍勢ならば供給上に左程の困難も感じないであらうけれども何千人何萬人と云ふ大勢になれば、到底供給し得らるるものでない、天保年度に於ける近江の百姓一揆に際しては、無數の一揆軍が野州郡三上村に屯集したから、戸數二百有餘に過ぎさる此村は却て此の炊き出しの爲に滅亡するから、一日も早く村を退いて貰ひたいと泣いて其苦痛を訴へたとの事であるが、同時に其村の老弱男女は朝から晩まで握り飯を握らしめられたので、掌の裏が爛れて逃げ出したと云ふ、實に握り飯の製造は茶碗と箸に代ゆる便法であるから、數萬の軍勢に供する熱飯を村の婦女子の掌で握り固めしむることの困難であつたことは、想像するに餘りある。

握り飯に次いで一揆軍の好んで徴發するものは、酒であつた、彼等は酒屋を襲ふて思ふ存分に酒を呑み、遂に醉つぶれて道に倒れ、進撃の出來なかつたものもあるが、酒の勢を藉りて一杯機嫌で行け〳〵と押し進むのであつた、不斷は貧乏で酒も呑めぬ連中のことであるから、無償で酒呑の出來るのを幸に、呑める丈けは呑んで元氣を附けたのである。各地の一揆で酒屋が何時も目標の中に數へられたのは、此の好物を目がけたが爲めである。

（へ）一揆の戰法と主謀者の人物　百姓一揆は云はゞ烏合の衆であるから、彼等の戰鬪法に何等定まつた法則があつたとは勿論思はれないが、唯彼方此方に起つた一揆軍の戰ふたる跡を徴して見れば、其間自ら一定の戰法が行はれて居たように思はれる。即ち政治的原因による百姓一揆に於ては、一揆軍が以て禍根とする時の政府又は役人を攻撃して秕政の發令者たる彼等を殺害するか又は其非を改めしめんとするにあつたけれども、社會的原因に基く一揆に於ては、彼等は唯村や町の物持連中を片端から襲ふたものである。即ち政治的原因による一揆に在ては勃發の當初から既に攻撃の目的物が特定の人と場所とに定まつてゐるけれども、社會的騷動に在りては、當時の社會に於ける富者階級を敵とするものであるから、一揆地域の物持連中は悉く一揆の襲撃を受くることを覺悟せねばならぬ、此點に於て同じ百姓一揆でも其の勃發の動機によりて進展の方向が異るのである。勿論當時に於ては節度の無い一揆軍のことであるから、其が最初の原因如何に拘らず、其中途にして或は社會的暴動が政治的一揆となり、又は政治的暴動が社會一揆に轉したる場合もあつたことであらふ。

一揆軍の指揮者は如何なる人物であつたかと云ふに、當時强訴や一揆を企て、之を實行せしめたものは、智勇辯力兼ね備はつたる天晴の英才であつたのである、一揆終息後捕吏に捕縛せられ、後ち斷罪せらるゝに際しての申渡狀を見ると、一揆强訴の首領は如何にも不倶戴天の悪黨でゞもあるかの樣に思はれるけれども、彼等が當時の社會に於て克くも彼れ程の事を成し得たことを推し考へて見れば、其首領が何れも相當の人物であつて、人心を收攬するに足る何物かを備へて居たのに違はない。例へば丹後の百姓一揆の首謀者たる新兵衛の智謀勇敢及び羽後の一揆の頭取人仁左衛門の忍耐と熱烈なる犧牲心の如き、又信州松本領に於ける多田加助の義勇の如き、何れも當時の社會の人心をして其名を聞きて仁を讃へ、一世の義表として崇仰せしめたるものである。又一揆軍の首謀者と騷動の指揮者とは必ずしも同一人たるものでは無い、甲斐の郡內騷動の場合には其首謀者たる頭取人は常に籠に乘り込んで、一揆軍の前衞を爲したとの事であるが、丹後の宮津では首謀者新兵衛の他に大久保稻荷神社の神主坂根策前と云ふ身長六尺に及ぶ大兵が常に一揆の先頭に立大音を擧げて指揮したので、一揆の軍勢は此の大男の號令する儘に村々町々の打毀しを行ふたとの事である。元來百姓一揆の軍勢は統制に缺けて居る點から云へば誠に烏合の衆に過ぎないのであるが、其れでも其の中に誰か先頭に立つて指揮する勇者がなければならなかつたようである、此等の指揮者には前記の如く、時に或は村の若者の勇敢なるが身を挺して進んだ場合もあり、又は野武士の如き在鄕の浪人が奮闘したる場合もある、其れ故に、一揆戰闘の眞最中に平生顏も見知らない勇者が飛び出して鬪ふのを見て、一揆の連中は天兵の天降りかと信じ、後日に至つて、天狗が跳り込んで一揆を助けたと云ふような話が、今日も尙彼處此處に殘つて居る。

一揆に對する防戰法を見るに、其が社會騷動即ち打毀し一揆であるならば、多勢に少數で、所詮物持連中の敗北に歸することは始めから判り切つたることであるが、政治的原因による百姓一揆の場合であるならば、一揆の敵とするものは武士であるから、彼等は其本來の立前上から充分に奮戰せねばならぬのであるが、實際の場合に徵して見るに、彼等は一揆に對しては、何時も受太刀の地位に立ち、自ら暴徒に向つて逆襲したる例は勘いようである、其代り彼等は種々なる奸策を弄して一揆を解散せしめ、後ち捕吏を使役して首謀者を縛り上ぐることに苦心した、例へば羽後由利郡の百姓騷動では、上司は百姓總代よりの歎願を江戸に於て受納する旨の文書を交付して置きながら、後ち之を無視して嚴法を据え置くことにして百姓の怒を招きた

る如き、又信州の松本領に於ては藩廳は僞りて百姓の歎願を聽許したとの墨附を交附して一揆を離散せしめ、其の後から直ちに捕吏を遣して發頭人を召し捕つて磔刑に處した如きは、武士に二言なしと云ふ道德信條の上から見ても、可なり非議すべき仕業であつた。

(ト)一揆の繼續期間 百姓一揆の軍事的行動は永續すべき可能性がなかつた、其故如何と云ふに、第一に一揆軍其物の特性上より第二には、一揆を壓迫したる時代の勢力の爲に、必ず數日の後には終息せざるを得なかつた、既に前にも述べたるように、彼等は云はゞ烏合の衆であるから其行動に規律が無い、村に入れば村民に炊き出しを强請して握り飯を徵發し、町に入れば酒を吞み、物持の家があれば其處に突入し、又は役人を目蒐けて殺到するのであるから、二日三日と經つ間に、疲勞し盡し、又は酒に泥醉して路傍に横臥するもの さへある有樣であつたので、其間、自然社會の同情も薄いで、最初は脅迫により已むなく加盟したものも、日を經て離散するものが增したのと、又一揆が勃發して數日に達すれば、大概其筋から捕吏が廻つて發頭人の檢擧が始まるから、其時既に疲れ切つたる一揆の加盟者は再び抵抗する勇氣もなく皆雲の如くに散り、霧の如くに消え失するのが常であつた。夫の丹後の百姓一揆が文政五年十月十三日に始まりて同十七日に終り、甲斐の郡内騷動が天保七年八月廿一日に始つて廿九日頃には既に幕府の留役即ち討伐隊が到着した爲め沈靜に歸したと云ふ如き、又江州の一揆が天保十三年十月十四日に始り、十六日に終息せる如き、以て其一斑を知るべきである。

斯の如く百姓一揆は概ね十日を出でずして終息したのであるが、其後に續くものは徒黨關係者に對する公邊の糺罪拷問である。洵に百姓一揆の悲慘なる史話は一揆終了の後に續いて起るのである。一揆勃發に關する史實は陽氣、潑溂たるものがあるけれども、其終末に至ては眞に殘酷と悲慘の狀景を以て充滿されて居る。

第三 百姓一揆の成敗

百姓一揆は多くの場合に於て成功したものであるか、或は失敗に終りたるものであるかと云ふに、其れには二樣の觀察が下され得る。政治的原因による一揆は政治改善を目的とするものであるから、政治さへ改善せらるれば、其目的は達し得たものと云はるゝけれども、社會的騷動に屬する百姓一揆に至ては寧ろ亂暴破壞其事が最初の目的であるから、彼等は富家に放火し、質屋を打毀し、酒屋に闖入しさへすれば、其れで其目的は

既に達せられたるものと云はれ得る。故に後者たる社會騷動の場合に於て當時の藩主が一揆勢の騷動に脅されて米價の低減又は米穀の施給を爲したることありたりとすれば、其は寧ろ藩主より自發的に――一揆の刺戟が勿論動機にはなつたであらうけれども――施設したるものと見るが妥當であらふ。然るに政治改善を目的とする一揆に至ては强訴暴動は寧ろ手段であて、最後の目的は當局の政治方針を改めしめんとするに在るのであるから、此目的が達しらるれば、一揆は成功したものであるとは云はれるし、然らざる場合は失敗に歸したものと云はねばならぬ。之を實際の例に徵して見るに、當時政治改良を眼目として蹶起した多くの一揆や强訴は、概ね其目的を貫徹するを得たけれども、中には領主の頑迷であつたが爲に、農民決死の要請をも最後迄拒絕したる例が無いでは無い。即ち貞享年度に於ける信州松本領の百姓一揆に際しては、領主は一揆の首謀者多田加助外十一名のものを磔刑又は斬罪に處した上に、百姓の要求に對しては更に之を聽き入れず。

一、此度書出候五ケ條の願、新法に申付條も此無之、先代より有來儀共申付に付、一ケ條もさしゆるさず候間、前々の通りにいたすべく候、我等代に色々用捨を加へ、有來候役儀をも免し候處に、此度いたづら者共、付火可仕旨申觸候に恐れ、訴訟に罷出候段不屆に候、重而箇樣の儀候はゞ、其所に庄屋組頭迄せんさの上、急度曲事に申付候事

との觸を出して、舊稅法を以前の通りに固守する旨を宣言したから、農民等が折角血を流して强訴したる要求は何等容れられずに終つた次第である。若し夫れ前述の社會騷動に屬する百姓一揆の成否如何に至ては、騷動の當初に於て藩より救助米を支出して窮民の救助を行ふた例もある。即ち天保四年石見國安濃郡太田町に於ける百姓一揆に際しては、藩主は直に米の小賣値段を下げて賣り出しを行ふた、當時の記錄中に

凡人別八百八拾人
内三百一人 (北村方除)
殘五百八拾貳人
凡人別八百四十七人
内三百五十七人 (北町方除)
殘四百九十人
凡六百十八人
内百八十一人 (南村方除き)
殘四百三十七人
凡九百九十人

内四百十八人　（南町方除）
殘五百七十二人
惣殘り合計貳千八拾壹人
但し此人別下直段米賣渡の分

とある如き是である。想ふに、既に述べたる如く、經濟的原因に基く社會一揆は富豪の打毀や強奪が寧ろ其直接行動の目的であつたのであるが、若し一揆に脅かされて藩主が米價其他の物價の引下を實行したとすれば、其は寧ろ一揆の計劃者に取りては思ひ儲けざる利得であつたかも知れぬ、即ち彼等は暴動により腹癒せをしたる上に、併せて物價引下の利得にも浴したのである、繰り返して云ふ、政治的一揆は政治を矯正して自己の生活に安定を得んとし、社會一揆は其日の生活に窮したる結果、他人の物を破壞し、掠奪するのであるから、同じく一揆とは云ふもの丶、其が勃發の動機によりて其目標とする處に隔りがあるから、一概に成敗を論ずる譯には行かぬ、併し社會騷動の起るや、之が爲め物價は概ね低落し、上司又何等かの方策を以て善後の策を講じたから、政治的原因による一揆と同じように、其功を收め得たと云ふても不可ないのである。唯特に記憶せねばならぬことは、政治的原因に基く一揆は社會的騷動に基くものよりも、常に一層際立ちたる形式を以て成功を告げたるものと言はれ得る、是れ、元來藩主は其領內何千何萬の人民を相手とするものであるから、下民たる百姓をば法度と劍の力で抑へて居たとは云ふもの丶、經濟的被給養者たる點に於ては弱い處が多分にあつたから、一方には強訴暴動の主謀者を嚴罰に處して置いて、後に農民の要求をば概ね之を容れざるを得なかつたのである。

第四　一揆主謀者の人物と吏僚の卑怯

百姓一揆を計劃し又は其事を共にしたる人物に於て最も著しい特徴は、當時社會の下層に埋積せられ居たる土百姓に義勇奉仕の熱誠が漲りたるに反し其門地の高きを誇て居た武士の行動の却て卑劣であつたことである。

天保十三年、江州に於ける百姓一揆の主謀者は土川平兵衛と云ふ元庄屋を勤めたる高齡の硬骨漢であつたが、土川は一揆爆發に先ち一夜月明に乘じて同志の門を叩いて加盟を勸め、今度若し強訴により目的が達せられなければ、即座に暴動を起して初志を貫徹せんことを力說するや、其家の主人は躊躇して決答を澁り、何か他に妙案は無からふかと問ひかけられたるに對し土川は『人生の事何ぞ極らん、只自ら信ずる所の大道を踏むの一策あるのみ、事の成否は是天なり、予の豫め知る處にあら

す、見よ彼等斯く暴威を逞くし、聚斂を勉むるも、未だ曾て大藩の領地に入らざるは何ぞや、彼等其強を怖るゝを以てなり、今我々縛せられて江府に下り、天下の決斷所に於て彼等の奸曲無道なるを逐一に陳辨し、結局刑場の露と消えんことは是れ聊か國家に盡す所なり』と辨し去り、辨し來つて遂に其家の主人を説服し、一揆加盟を約束させたとのことであるが、後數日にして、一揆軍の蜂起するや、自ら白装束に身を固め「諸行無常」と記したる小旗を手に持ち、白髪を振り亂して『我こそは今度の暴動の發頭人であるぞ、諸君は宜しく我に隨ふて來れ』と、大音もて一揆軍を叱咤指揮したる如き、當に三軍の將たる風丰を偲ばしむるものがある。又正德年間に於ける若狹の少年義人松木長藏は天成の辨力と才智を有して居つたが、事敗れて捕吏其家に踏み込むや長藏は恰も其母堂を慰むるが爲に「田村の曲」と云ふ謡を歌つて居たが、母堂は闖入したる捕吏に向ひ『お上樣には如何なるお咎めのあるかは存ぜねど、我子に限りて召し捕はるゝ樣なる惡事は致し居らぬ程に、我子を召し捕ふることだけは恕し玉へ』と語れば、長藏は母を遮りて『我れ召し捕はるゝことに就ては捕はるべき道理あり、今は詮なし靜かに縛に就くべし』とて母を慰め、同時に捕吏に向ひ『我今老母を慰めんとて「田村の曲」を歌つて居たのであるが、今謡を中止するのは老母に孝なる所以で無い、せめて謡ひ終る迄待たれよ』とて再び見臺に打向ひ落ち附き拂つて曲を謡ひ、謡ひ終つて老母に生別を告げ、自ら頭を俯うして從容として縛に就きたりと云ふ如きは、眞に高雅壯烈の限りである。草深き村落の少年の皮下にも一世の義儀となるべき貴き血が流れて居たのである。又信州松本領に於ける一揆の首謀者多田加助が磔刑の宣告を受け、刑場の柱に縛り附けられ、今や丈餘の長槍其身を貫かんとする一刹那、神色自若として群集に向ひ

「百姓衆の難義見るに忍びず、聊か思ひ立ち候事も今は無益となりて候、假令加助此世を去り候とも、五分摺二斗五升は我等百姓の志に候、何時かは加助等の申す所、實事となり候はん」

と叫ぶを、刑吏は憎くい奴と長槍を以て其胸を突き、胴を刺し、鮮血全身に迸るも加助尚ほ苛斂誅求の非を鳴らすこと數回にして、息絶えたと云ふ如き、其臨終の狀景は人をして面を背けしめ、壯烈義烈當に懦夫をして起たしむるものがある。

之に反して當時の武士に至ては奸曲もし農民の膏血を絞らんとするものがあつたばかりでなく、百姓の強訴や徒黨に直面したる役人等は、或は腰を拔かして爲すべき術を知らざるがり、又は詐術を以て強訴せる百姓を解散させたり、徒黨の發頭

人を狩り出したりして、漸く其難局を切り抜くると云ふ風であつた。例へば夫の房州の萬石騷動の際に於て、安房半島の南部壹萬石の百姓の代表者が江戸に押しかけて檢見法の不等なる事や、神社佛閣の材木を濫伐するの非行を陳情せんとするや、當の奸吏たる川井は僞りて百姓の情願は容れるから直に村方に引き取れと一通の覺書を交付して百姓を歸國せしめ、後ち自ら村元に出張して前言を飜し、過日交付したる覺書を取り戾さうとして、百姓の憤怒を買ひたる如き、又伊豫吉田領の一揆首謀者武左衛門を間牒により嗅ぎ出し、後ち捕吏を差し遣して捕縛したのであるが、捕吏は武左衛門の家の裏口から聲色を使ふて、宛も村の友人が所用を帶びて勝手口から主人を呼び出せるかの如き風を裝ふて誘ふた、其れとは露も知らぬ武左衛門はつか〳〵屋外に出ると、其處に潛伏せる捕吏數名どつと押しよせて取り卷き、手足を押へて人里遠き原野へ運び去り思ひの儘に斬殺したる如き、條理と公平を信條とすべき一藩の司法者たる武士の所業としては餘りに卑劣なる仕打であつた

加之、彼等武士は百姓一揆の襲來に逢へば、先づ腰を拔かして周章狼狽し、施すべき術を知らぬと云ふ有樣であつた。是れ、武士の米櫃たる百姓を殺しては彼等が自滅に陷ると云ふ心配も多分にあつたことではあらふが、其他の原因としては太平に馴れたる當時の武士の士氣が減耗して、身を挺して戰ふの勇氣に缺けて居つたことを數へねばならぬ。左ればこそ彼等は常に譎詐と間牒と恫喝と斬頭を以て首謀者を抑へ、漸くにして其難局を押し切ることが出來たのである。斯くして、封建制度の末路が段々近きつゝあつたことは、百姓一揆に對して示せる上司の態度によりても其一端が知り得られたのである。

第五　一揆頭取人の末路と其斷獄

一揆頭取人と其協力者は、暴動や强訴の終局に於て必ず悲慘なる往生を遂げて居る、即ち彼等は直に捕吏に召捕へられて牢獄に投ぜられた儘拷問にかけられ、或は又入牢中の虐待に堪へ兼ねて牢中に悶死し、疲死するものもあつた。詰問の結果罪狀が明かになれば直に死刑に處せられたが、其の刑罰は普通は斬首又は磔の刑に處し、其生首を數日の間衆人の眼に暴したものもあつた。其れ以下の輕罪人は或は所拂として其村から放逐して家財を沒收し、又極めて輕きものは過料に處せらるゝものもあつた。實に何處の百姓一揆に在ても其終末は血涙と陰慘の記錄を以て滿たされて居るのである。伊豫吉田領の一揆頭取人武左衛門は捕吏に誘ひ出されて手足を縛せられ、頭髮を摑まれ、猿轡を嚙ませられた儘宇和島領の下大野村と淸水村との境なる河

井坂の峠に於て寛政五年二月廿二日の曉に三十七歳を以て誠首せられて七日の間梟首せられ、副頭取の善六は終身牢に投げ込まれ其他二十二名のもの何れも流罪に處せられた、又延寶八年に於ける羽後の由利郡の百姓一揆では、其發頭人たる仁左衛門は其年八月廿三日に於て生埋の刑に處せられたが、處刑の日到るや、陰而用意せる一丈餘の深穴に仁左衛門を蹴込み、其上から小石を投げ込みながら山伏をして讀經をせしめつゝ、其表面の土が平になる迄土石を投じて致死せしめたと云ふ、又江州一揆の主謀者土川兵衛外十數人の者が捕吏に捕へられ、百二十有餘日の間鐵窓の下に繫がれ、日を夜に繼いでの拷問に此世ながらの地獄の思を爲し、牢中では入浴は勿論許さず、食物も祿に與へられなかつたので、鞭打と疲勞の爲めに全身完膚なく、肉爛れ首碎け、後此等の人々を江戸の白洲に運ぶ爲め牢屋から荒蓆に入れて運び出すや、今生の別れを告げん爲め、面會に行きたる妻子も其の窶れ方の餘りに甚しい爲めに、何れが父なりや、夫なりや見別けが附かなかつたと云ふ。又甲州の郡内騷動に於ては其發頭人は礫の刑に處せられ、以下の連累者は何れも放逐又は罰金を課せられたが、今當時の罪料言渡文を見ると

久野村無宿
吉五郎
三十二歳

此者儀甲州村々違作にて、衣食差支へ、下和田村次左衛門外壹人頭取徒黨を結び候を幸に存じ、騷ぎに紛れ、金銀をも盜み取るべしと右人數に加はり、頭取に相成り、徒黨の者共指揮いたし、所々人家打こはし、米穀燒棄、衣類引き裂き、諸帳面、證文の類迄燒棄、村々酒食爲差出、恣に呑食いたし、刀脇差衣類等盜取り、其上右脇差を帶し、蒲印を人足に持たせ、押歩行、剩へ川田村にては御代官手附手代共防方にして、出張致候節、寄集候ものへ及差圖、礫を爲打、右場所打破被召捕間敷と存じ、御用と認候提灯を奪取持歩行候始末、不恐公義仕方、實に不屆に付、礫可行者也

五月六日

とある如き、以て當時の罪狀と其刑罰の一斑を知るべきである。丹後宮津の百姓一揆の指揮者坂根筑前が捕吏の來るに先ち巧みに逃げ出し、山野を越えて大阪に落ち延び、其處に其一生を全ふしたるが如きは、當時に在りては寧ろ稀有の例に屬するものであらう。

第六　近世社會史上に於ける一揆の地位

德川氏の統率下に存立したる封建制度は、其の實體、近代中央集權政府に似たものがあつたけれども、尙ほ封建國家たることに於て變りは無かつた、封建制度の社會的特色は武門の力を以て一般庶民を抑へ、庶民の生產によりて武門の生活を支へて行くことである。語を換へて云へば、農耕に從ふ百姓を働かせて武士に貢がせ、武士は此の貢物によつて其の經濟を維持して行つたのであるから、武士階級に取りては農民は經濟生活の原泉であると共に、百姓を富まさず、又怒らせぬ樣に治むることは當時の政治の秘訣であつたのである。

戰國時代を距る五十年ならざる時に德川氏は豐臣氏の後を繼いたのであるが、德川氏の世に至り、其天領たると私領たるとを問はず、農業政策――百姓の納稅負擔力增進政策――をば施したようであるけれども、如何にせん、農業生產力は若干の進步を示しても、當時年を追ふて增進しつゝあつた武士の生活向上に相伴ふことが出來ず、爲めに中央に於ては德川幕府、地方では列藩諸侯共に財用窮乏に陷つたから、藩士の給養も自ら薄少とならざるを得なかつた、此の如き際に於て上司から財物を誅求せらるゝものは取りも直さず庶民たる百姓より外はなかつたのである。然るに、此の百姓と雖、其負擔力には元來限りがあるから、無理に誅求せられる貢稅に對しては所詮應じ切れず、遂に强訴又は暴動によつて生活の難局から免れんとしたのである。

同じ百姓一揆の原因の中に在りても、眞に幕府や藩主の政治方針から出たもので無く、中間に在る官吏の奸惡により農民が誅求を受けたる場合の暴動に就いて考へて見るに、潔直ならざる役人等は巧みに其上局を取り込み、百姓の眼を晦して私服を肥やさんとするものがあつたから、百姓は此の弊害に堪へずして强訴を企て又は一揆を起すに至つたのである。

若し夫れ經濟的原因に基く社會一揆に至ては、其は必ずしも、封建制度の下に於てのみ見るを得べき一揆では無い、食糧不足や物價騰貴に基く暴動は時の如何、場所の何たるを問はず、常に起り得る現象である。然かし、其原因は何れにあるにしても、即ち政治的一揆の場合にしても、社會的一揆の場合にしても、百姓一揆の起つたと云ふ其事自體が既に當時の封建制度の牙城に龜裂を生じ、庶民を制壓する武門の權力の鼎の輕重が問はれた譯である。

前來既に述べたように、百姓一揆は之を經濟的に見れば生產階級であり又給養者である百姓が、上者の被給養者たる武士に對しての挑戰であり、抗命であつたのである。更に社會的に見れば、被治者階級たる武士への反逆であり、裏切りであつたの

である、故に一たび百姓一揆が起れば、其事の善惡は姑く別として、地元の藩主は徳川幕府に對して面目を失ひ、代官又は村役人の失政が原因して一揆の起つた場合に在ては、概ね藩主の赫怒に觸れ、責を引いて失官せざるを得なかつた、蓋し當時の政治良心としては、百姓を怒らせぬように、又潰れぬように治むることが民政即ち地方の要諦だとせられて居つたのであるから、天下の耳目を聳動する如き大暴動が其管下に起れば、其施政の責任者が面目を失ふに至るは當然である、又百姓一揆發頭人の心理狀態の動きも、最初から此の邊に向つて居つたことであらう。

洵に百姓一揆は封建制度の崩れ行く道程に現はれたる一種の社會現象であると共に、此百姓一揆が全國各地に頻發したるが爲に、社會を抑へ居たる武士階級が思つたよりも無力であつたことが判明し、随て武士與みし易しとの考を百姓社會に抱かしむるに到つたのである。即ち百姓一揆の續々起つたことにより封建制度の箍の弛み方が庶民の眼に映ずるに至つたことを暗然の裡に示したのである。徳川幕府は先には由井正雪事件により、後には天草の亂により、宗徒又は浪人による一揆暴動を經驗し、更に後年に至ては大鹽平八郎事件によりて浪人の企てたる社會暴動に直面したのであるが、此間に於て各藩の領主も亦絶えず大小の百姓一揆に惱まされつゝあつたのである。されば由井正雪事件や、天草一揆や、大鹽騒動が徳川幕府を中心とする封建制度に對する大龜裂の徴兆であるならば、所在に勃發したる百姓一揆は既に爛熟し切つたる封建制度の小龜裂であつたとも云ふべきである。

百姓一揆の顛末に關して後人の眼を惹く最も著しい現象は、强訴一揆に當面したる當局官吏が正々堂々と戰ふことを避け、或は詐術を弄して百姓の徒黨を解散せしめ、其後から直に捕吏を派遣して頭取以下の連累者を召捕り盜潰しに處刑して漸く其難局を切り拔けたるに反し、一揆强訴の頭取人は最初から成敗を眼中に置かず生命を賭して民衆の爲に闘はんとの犠牲心が内に燃えて居つたことである。即ち當時の武門階級は下民の强訴や暴動に對しては正々堂々と戰はずに、多くは譎詐と恫喝と嚴刑を以て始末を附けて居るのである。されば、今日遺存せる百姓一揆文書の中から、其筆者の氣持で一揆に餘りに肩を持ち過ぎたる部分を取り去り、單に史實丈けを赤裸々に洗ひ出して見ても、一揆暴動を企てたる百姓の胸中には至誠天に通ずる義魂が跳り、其の家門の高きを誇る武士等の間に却て汚穢卑怯の行爲の多かつたことが看取し得るのである。

徳川幕府の倒れたるに就て は觀察すべき幾多の方面 がある

が、所在に蜂起して世を騒がしたる百姓一揆をも其原因の中に數へて可なりと思ふ、德川時代の末葉に近くに從ひ、幕府や各藩は財政の上に困憊して遂に市府の町人に叩頭しなければならなくなり、又氣鋭逹識の壯年浪士が東西に奔走し、志士を叫合して輿論を强め、以て幕府の統制力を薄弱ならしめたるにもよるであらうけれども、之より先き、各地の百姓等が封建の厭迫に抗命したる一揆暴動の功勞をも其中に數ふべきである。勿論一揆暴動が維新の鴻業に寄與したる道行きは極めて地味でもあり、又其破壞力の作用は朝に起りて夕に消ゆる線香花火の如くではあつたけれども、然かも濟し崩し的に封建制度の土臺を搖かせ其緊縛力を弛緩せしめ、衰弱したる武門階級の正體を世間に暴露せしめたる効果は多大であつた。是に於て乎、今代の史家が明治維新史を草するに際して、其數頁を百姓一揆の歷史の爲めに割くことは、啻に村落の草叢に眠れる名も無き英雄の義魂に對する良き供養であるばかりで無く、日本正史の深さと廣さとを擴張して、人民史たるの色彩を濃厚ならしむる所以である（大尾）

附言　此論文を起稿するに際しては、畏友有元英夫氏より有益なる資料を寄せられたことを特記して、其厚意を感謝する。

幸野楳嶺

―本朝畫人傳の九―

村松梢風

一

楳嶺の生れた家は、京都新町四條南入南四條町といふ處で代々金銀兩替の營業をしてゐた。楳嶺の父は安田四郎兵衛と云つたが、四郎兵衛は元は越前敦賀の藩士幸野氏の出で、後に京都へ來て此の家の養子にはいつて安田氏を冒したのだつた。母も

家から來た人だつた。母方の姓は田中と云つた。楳嶺は其の三男で幼名を角三郎と云つた。後に父の舊姓を冒して、幸野楳嶺と稱したのである。

角三郎は弘化元年三月三日に生れた。成長するに從つて此の子は非常に繪が好きであつた。小兒が繪を好むのは殆んど本能に近い事で異とするに足らぬが、後來畫師となる程の人は其の本能が、必ず通常小兒の遊戲以上に出てゐるのだ。四郎兵衛夫婦は、其の子が餘りに繪を好むので將來を憂慮して遂には繪の遊びを嚴しく禁じてしまつた。前垂れ掛けで暮らせば一生氣樂に世が送られる。何を苦んで我子に繪筆の生活などさせよう——とふた親は思つてゐたのである。併し、幼い角三郎は、繪を描きたくて溜まらない、親から叱られてもなんでも繪が描き度い、が、描かうには紙が無い。親達は今では決して其の子に白紙を持たせないことにしたのだつた。

角三郎は餘程賢い子供だつた。或る日角三郎は母親に向つて、

「お母さん、私は六角堂へお詣りをして來るからお賽錢を下さい」と云つた。

母親は觀音を信仰してゐた。とりわけ六角堂觀音へは物日物日の參詣を怠つてゐなかつた。だから母親は一も二もなく「おゝよしよし」と云つて、一文錢を一つ巾着の中から出して呉れた。角三郎はお賽錢を持つて六角堂へ行つて、手を合せて觀音を拜んだが、お賽錢はなか〲抛らなかつた。何と云つて拜んだのかと云ふと「觀音樣、どうか私が繪かきになれますよう」と云ふのだつた。さうして拜んだばかりでお賽錢は到頭上げずに持つて歸つてしまつた。

翌日も角三郎は

「お母さん、今日も六角堂へお詣りに行くから お賽錢を下さい」と云つた。

母親は喜んで一文出して呉れた。角三郎はきのうと同じやうにお賽錢を儉約して拜んで來た。それから一日も缺かさずお詣りに行つた。母親は大變喜んで、

「角三郎は六角堂へ日參を致します、ほんとに奇特な子供で御座います」と云つて自慢をした。

お賽錢が十八文溜まると、角三郎は紙屋へ行つて駿河半紙を一帖買つて來た。駿河半紙一帖の價が十八文だつた。其の紙を持つて角三郎は奧の方へ隱れて繪を描き始めた。一帖の紙を使ひ盡してしまふと角三郎は又もや六角堂へ日參を始めるのだつた。

角三郎が隱れて繪を描いてゐるのを間も無く母親は發見し

た。が彼女には其の紙の出所が疑問だつたので、
「お前は誰にお爲目を貰つて紙を買つたのか」と問ひ糺して見た。

角三郎は仕方がないので白狀してしまつた。其の時初めて母親も自分の子の熱心に動かされた。小兒の天性の枉げ難いことを悟つた。それ程好きなものなら繪を習はせて遣り度いといふ氣持になつて、夫に向つて實はこれ〱と一伍一什を話して、角三郎を繪の先生に附けて遣つて下さいと賴んだ。父親もそれではといふので、本式に繪の稽古をさせることになつた。それは角三郎が九歲の年であつた。

角三郎は、九歲の其の年から中島來章の門にはいつた。來章は、應擧の長男圓山應瑞の門から出て、當時京都に於ける圓山派の大家だつた。角三郎は熱心に師の處へ通つた。さうして爰に數年經過した。角三郎は師から楳嶺といふ號を貰つた。

併し、本式に畫を學び始めて見ると、楳嶺は不器用だつた。才氣潑剌たる處が少しも現はれて來なかつた。所謂鈍根の方だつた。師の來章は非常に筆達者で、才氣の溢れた畫を描く人だつたので、楳嶺に對しては餘り囑目して吳れなかつた。同門に川端玉章等が居た。玉章は楳嶺とは反對に大變器用で呑み込みがよかつたので、師からも甚だ愛された。

「楳嶺は、あれでは碌な者になれない」などとよく人から陰口を云はれたりした。

それが時には楳嶺自身の耳にはいることもあるので、そんな時は彼も面白くなかつた。自身の才能を悲觀することもあつた。併し彼はそれが爲めに繪筆を捨てようと思つたことは一度もなかつた。

「俺は不器用だけれども、人の二倍も三倍も勉强したら、上手になれるだらう」と彼は考へるのだつた。

たしかに彼は根氣がよかつた。うまずたゆまず研究を續けた。さうして人が氣付かぬ間に何時となく技術が進んでゐた。

其の頃京都に名人と云はれる觀相家があつた。此の人の觀相は外れるといふことがないので評判だつた。楳嶺は或る時其の人相見の處へ出掛けて行つて自分の人相を觀て貰つた。

「私は繪師だが、古來日本で一流の繪師の仲間入りができるでせうか、どうでせう」と楳嶺が尋ねた。

すると觀相家はつぶさに彼の相を觀た後で
「氣の毒だがお前さんは第一流の繪師にはなれない」

と云つた。楳嶺は少し力を落した。が、觀相家は直ぐ後を續けて、

「が、一流の繪かきにはなれる。そしてお前さんが養成する者

の中からは天下第一流の繪かきが出るよ、必ず出るよ、だから弟子を養成しなさい」と云つた。

楳嶺は歸る道々考へた。

「自分が第一流の畫家となれないのは殘念だが、これも天運とあれば仕方がない、俺は子弟を養成して天下第一流の者を造り出して遣らう――」

かういふわけで、門人の養成は彼が若年の時からの志だつた。

楳嶺が十六の年に父の四郎兵衛が歿した。父の歿後は家道が急に振はなくなつた。丁度其の時代は幕末騷亂の際で、京都は人心不安の極にあつて、あらゆる營業が不振に陷つたのであつた。彼の家も非常に財政困難になつて來た。楳嶺は其の中で自分が繪筆を握つて兄の厄介になつてゐるのが氣の毒になつて來た。で、父が死んだ其の年初めて江州へ遊歷を試みた。勿論大して繪も賣れなかつたが、それでも多少の收入を得て戻つて來た。それ以來彼は度び／＼江州へ旅行した。

京都の騷動は年一年と激しくなつた。元治元年六月には長藩の京都襲撃が行はれた。其の戰爭の爲め京都は兵燹に罹つて市街の大半を燒き拂はれてしまつた。楳嶺の家なども燒かれたのだつた。

戰爭は一日で長州が敗北して終つたけれ共、其のあとの京は漠々たる燒野原と化して目も當てられぬ慘狀を呈した。家を燒かれた市民は路頭に迷ふ有樣となつた。楳嶺の家では其の年母が歿した。

楳嶺は兄の苦勞を座視するに忍びないので、度び／＼江州へ旅行した。江州には追ひ／＼知人もふえたので餘程繪が賣れるやうになつた。それに、京都の騷動に引きかへつて山一つ越えた江州は平和だつた。さうして稼ぎ溜めた金が五十兩餘りに上つた。◇嶺は其の五十兩を兄に呈して、家の急を救ふ費用に宛てさせた。

殘りの金が五兩あつた。彼は其の五兩の金で家財道具を買ひ、柳の馬場六角北槌屋町に借家をして獨立した。それは京都の言葉を藉りると宿入りをすると云ふのだつた。慶應二年のことで、楳嶺は廿三歲だつた。

其の頃師の來章は最早七十を越した老體だつた。で畫の依賴を受けても面倒な物だと滅多に自身では筆を採らず、大概は弟子に代作をさせるのだつた。楳嶺もよくそれをやらせられた。代作をする場合には、あらかじめ師匠の意見を聞いた上で自分で構圖を立てゝ持つてつて見せる。すると師匠はそれを見て氣に入らぬ處があると直させる。十分直して貰つた上で描き上げ

るのだつた。初めのうちは丁寧にそれをやつてゐた。處が終ひには來章は楳嶺が下圖を作つて持つて行つても、碌に見もせず「うん、よからう」と云つてしまつた。來章に云はすれば門人の手腕が熟達したから信頼するに足りるといふのだらうが、楳嶺の身になると、最早此の師匠から何等教へられるところが無くなつたのだつた。

二

宿入りをすると間もなくさる人の世話で楳嶺は妻を迎へた。妻は矢張り京都の或る畫家の娘だつた。

生活は極度に困難だつた。明治維新以後、世の中は太平となつたけれ共、今度は文人畫跋扈の爲めに圓山四條其の他の繪は少しも流行らなくなつた。そこで京都の畫家は大概友禪染の下繪に走つたり陶器の繪を描いて内職にしたりして辛うじて生活を支へるといふ有樣だつた。が、楳嶺はそれだけはしなかつた。彼は餓えても職工と伍したくなかつた。

併し、時勢がかうなつて來ては繪師も廢業しなけりやならんかもしれないと楳嶺も考へた。そこで、繪師を廢めたら何にならうかと思案した結果、彼は教員にならうと考へた。「繪を描くことができなければ學問で身を立て度いと思つたのだ。讀書は繪に劣らぬ程好きだつた。そこで彼は神山鳳陽の門に入つて漢學を學んだ。其の頃神山の塾は神糴太一郎が塾頭をしてゐた。

其の頃京都で有名の文人は、谷鐵臣、宮原節庵、信天翁、江馬天香等で、此の四人を四大家と稱した。楳嶺はこれらの人々ともしきりに交際した。其の結果彼は大分漢學や國學の素養を得ることができた。前田暢堂や中西耕石等を訪ふて南畫の法を尋ねたりしたのも其の頃のことだつた。

明治四年七月には師の中島來章が七十六歲を以て物故した。其の翌年楳嶺は鹽川文麟の門に入つて、更に山水の研究を始めた。當時楳嶺は既に京都では有數の青年畫家の中に數へられてゐたので、文麟も彼に對しては粗略に扱はなかつた。

鹽川文麟は岡本豐彦の門人で、四條派中近世の大手であつた。文麟の繪も中年頃迄の作は四條末流の風を帶びて輕佻浮華に陷してゐたが、晩年に至ると、翻然として、悟つて與杏に立ち戻り、殊に山水を得意として、輕妙の裡に壯重の意を含むやうになつた。彼の描く山水は主に京洛の風景だつた。彼は西洋畫の風をも巧みに加味した。

或る時文麟は高尾の紅葉を見物に行つた。すると夕景に至つて少帶の驟雨が來た。折しも夕陽が雨に映つて金色に輝いて美しく見えた。文麟は早速それを繪にした。彼は金泥を用ゐて雨を

畫いた。すると夕陽の心持が現はれて非常に調和がよかつた。同じ手法で青葉の雨を畫く場合には青泥を用ゐたりした。さういふことも當時では他に試みた人は無かつたのだ。

文麟は字は士温、雲章または泉聲斎とも號した。柴田是眞とは同門の出で親交があつた　彼は豪放洒落の人だつた。京都木屋町の佛光寺橋に住んで、晩年木佛老人といふ號を用ゐた。或る年是眞が久し振りで京都へ來て文麟と對面した時、文麟は鴨川のほとりの旗亭に舊友を招待して飲んだが、翠靄の中から朱い塔などが浮き出してゐる東山の風景を眺め乍ら文麟が

「なんと柴田君、君は何時も江戸の自慢ばかりしたものだが、江戸にはかういふ景色はあるまい。此の風景に朝夕親しんで居る我れ〳〵京都人は幸福ではないか」

と云ふと、是眞は言下に

「いや全くそれに違ひない。が併し、かういふ景色を年中見てゐるにしては、京都の繪かきは繪が拙過ぎるなあ」

とやつたので、流石の文麟も二の句が續けなかつたといふ話がある。

文麟は大層酒が好きで、晩年まで花柳の巷に豪遊を試み、よく門下生を連れて祇園の一力樓へ出掛けて、流連數日に亘ることがあつた。それが爲め一力に數百金の借金が出來た。處が一力の主人もさる者で一向催促をしない。或る時一双の六曲屏風を新調して、文麟が遊びに來た時

「先生どうか此の屏風へ私共宅の寶物になる繪を書いて頂き度い」と云つた。

洒落な文麟でも自分が此の家に多額の負債のあることは氣に掛つてゐる。

「宜しい、書きませう、が、是れを畫いたらお前さんとこの借金は棒引きにして貰へるかしらん」

「それは猶更お安い御用です、どうか遣つて頂き度う御座います」

そこで相談が纏つて、文麟は其の屏風を畫いた。それが有名な忠臣藏七段目の一力亭茶屋の圖で、大星由良之助が眼隠しをして藝妓仲居を逐ふてゐる樣を繪にしたのだつた。片方は着色にして、藝妓など洒落の筆致で描いた。片方の繪は、隅の方に障子を少し開けて仲居が逃げ出すところ、其の庭の樹木を水墨で描いた。障子の中は銀色煌々として畫を欺く蠟燭の光り、外は夜であるから墨繪で庭の樹木を描いたので、其の調和が頗るよかつた。此の屏風は一力亭の寶物となつた。年々二月十四日に一力では必ず大石忌を營み、内藏助の遺物を陳列して、僧を招じて供養をする。此の一日は遊客を謝絶して公衆に赤飯と抹

茶の施行をするのである。此の日には其の屏風が第一の名物となつてゐる。併し、元來は、内藏助の遊んだのは祇園の一力ではなかつた。元祿時代の祇園町はまだ水茶屋風の家が多くて上等の花柳界ではなかつた。内藏助の主に遊んだ家は伏見の撞木町の萬屋といふ茶屋で、祇園町の井筒といふ茶屋でも少しは遊んだ。それを淨瑠璃の作者が當り觸りなく祇園町の一力亭といふ名にしたのだ、現今の一力といふ家は淨瑠璃が出來てから後に開店したのだつた。即ち演劇が一力亭を生み出したので、實は大石とは何の緣故も無いのである。

楳嶺が文麟の塾へ通つてゐる頃、同じ畫家の一人の鈴木松年――其の頃は百川と云つてゐた――は盛んに賣り出して其の無類の健筆を以て隆々たる名を馳せてゐた。松年は其の頃智恩院の千疊敷の廣間で千畫會といふものをやつて非常な評判だつた。それは一日に千枚の繪を揮毫するのである。松年は羽二重の鉢卷をして書きなぐつたものだ。何しろ其の評判はゑらかつた。すると楳嶺の處へ家主が遣つて來ての話が矢張り松年のことで、其の後で家主はつく／＼と嘆息するやうな調子で、

「お前さんも偉くなつて下さいよ、松年先生位に偉くなつて吳れると私も鼻が高いがなあ

楳嶺は貧乏でろくに着物も着られなかつた。そこで彼は一策を按じて寒冷紗の支那服をこしらへた。それを着て何處へでも押し廻つた。たしかにそれは異彩を放つだけの効果はあつた。併し細君はそれを喜ばなかつた。そればかりでなく楳嶺の妻は餘りに貧乏なのと、夫の風變りなのに愛相を盡かしてゐる時實家へ逃げて歸つてしまつた。が、仲人が心配して「まあ／＼」と云ふので又戻るには戻つて來た。

楳嶺の最も親しい友人は野村文擧だつた。文擧は文麟の門人だが、後に森寛齋にも師事した。

文擧は、四條大宮の近宇といふ有名な吳服屋の子だつた。其の家が身代を起したのは、文擧の祖父の代だつた。祖父は非常に機敏な人だつた。天保年間水野越前守執政にて國中に奢移禁止令を發布した。其の時町人の縮緬を着ることを禁じたので、俗に縮緬禁止令と云つた。此の禁止令に依つて一番打擊を蒙つたのは江州長濱の縮緬の織元だつた。縮緬は捨値でも買手が無くなつてしまつた。すると、此の時文擧の祖父は何を思つたか長濱へ行つて、持て餘してゐる縮緬を一手に買ひ占めた。そして彼はそれを船に滿載して九州へ持つて行つた。當時、德川幕府の威令は既に九州には及んでゐなかつた。文擧の祖父はそれを知つてゐたのだつた。鹿兒島や熊本へ行くと、果して幕府の法令などは殆んど人が知らない位だつた。文擧の祖父は禁令の

縮緬を高價に賣り拂つて、一擧にして巨萬の富を得たのだつた。かうして近宇は京都第一流の商人となつたが、維新前後に大名に貸倒れが澤山出來たゝめに忽ち其の大身代も潰れてしまつた。併し文擧も子供の時分だけは大名の子のやうに贅澤に育てられたのだつた。

文擧が寛齋に師事したのは文麟の沒後のことで、其の頃はまだ文麟に就いて居て、栱嶺とは極く仲善しだつた。此の二人の交際については秘密の逸話がある。

或る年栱嶺の妻は急に病み付いて若い身そらで死んでしまつた。栱嶺は悲嘆の涙に暮れて當分は仕事も出來なかつた。亡くなつた妻には子はなかつたが、何しろ男手では仕方がないので、下女を雇ひ入れて家事を扱はせてゐた。さうかうするうち、栱嶺の亡き妻に對する思慕の情はまだ薄らがぬけれ共、彼はやがて獨り寢の淋しさを感じて來た。其の時彼の眼に付くものは若い下婢の姿だつた。下婢と差し向ひの生活ではさういふ機會も多かつた。

或る日栱嶺は文擧に向つて、心配らしい顏をして

「實は君にだけ打ち明けて話すことがあるが、相談にのつて呉れるか」と云つた。

「何だか知らないが話して見玉へ、相談に上るから」

栱嶺は極り惡るさうな顏をして「實はこれ〳〵」と云つて下女の問題を話した。

「僕も今となつては後悔してゐるのだが、自分から手を出したのだから今更暇を出すとも云へないんで、誠に困つてゐる、何とかうまい智惠があつたら敎へて貰ひ度い」と栱嶺は汗を流して云つた。

文擧は可笑しいけれ共友人の難義を見捨てゝも居られなかつた。そこで彼は一代の智惠をしぼつて一つの名案を考へ出した。

「まあ僕がうまくやるから安心してゐたまへ」

其の後の事だが、栱嶺が下女と二人で居る處へ夜なかに幽靈が出た。下女は慄へ上つた。幽靈が引つ込んだ後で栱嶺は

「あれは死んだ女房の幽靈だ。女房が怨んでゐると見える、南無阿彌陀佛、々々々々々々」

下婢は益々慄へ上つた。併し、もう出ないだらうと思つてゐるとそれから二三日經つて又出た。其の後でもう一度、都合三度幽靈が出た。流石我慢強い下婢もいよ〳〵慄へ上つてしまつて、其の翌朝になると

「妾は今日限りお暇を頂きます」と云つてサツサと自分で荷物を片付けて行つてしまつた。

其の後へ文學がやつて來た。

「どうだい俺の幽靈は、菊五郎以上だらう。さあ、今日は何處ぞで一杯おごれよ」

それから間も無く楳嶺は二度目の結婚をした。

三

明治九年の事だつた。木戸松菊が土手松の邸で病を養つてゐる處へ、東京から奧原晴湖が見舞ひに來た。晴湖はしばらく京都に滯在して繪をかいてゐた。

晴湖の名聲は夙に一代を壓してゐた。彼女が京都へ來たことは京都中の評判になつてゐた。楳嶺も其の時、晴湖といふ怪物は一體どんな女だらうと、好奇心から會つて見度く思つたが、表面から訪問する氣にはなれなかつた。彼は晴湖の畫に敬意を表してはゐなかつた。すると、楳嶺の後援者である草木某といふ商人があつたが、此の草木が晴湖に畫を依頼し度いと云ふので、楳嶺は草木の番頭に化けて晴湖の旅館を訪問した。晴湖は切り髮で、黄八丈の着物をきて、其の肥滿した體を柱に凭せ掛け乍ら、傲然たる態度で多くの客を引見した。楳嶺は番頭になりすまして首尾よく繪を依頼して歸つた。

明治十年には豐川文麟が沒した。最早生き殘つてゐる老大家は寛齋一人であつた。楳嶺の地位は漸く重きをなして來た。其の頃から彼は門人の養成を志した。一番初めに入門したのは辻宇之助といふ十一歳の少年だつた。楳嶺は此の少年に都路華香といふ名前を附けて遣つた。それに續いて、菊池芳文、竹内栖鳳等が入門した。

柳の馬場六角の其の家を六柳北圃と號した。其處に楳嶺は家塾を開いて幸野氏塾と稱した。門人の數は次第にふえて行つた。

楳嶺は繪畫教育の事業に益々興味をもつてきた。そこで彼は、現在の個人教育では一流に偏して且つ不完全であるから、どうしても繪畫の學校を建てなければ駄目だと考へた。當時京都の少壯畫家中で楳嶺と意見の合ふのは久保田米僊であつた。米僊も最も熱心な學校建設論者だつた。やがて望月玉泉や巨勢小石等も賛成した。楳嶺と米僊が先立ちで各流の老大家を説いて廻つたが、老人達は一向賛成しないばかりか壯士扱ひにして、てんで相手にして呉れなかつた。處が、其の頃の京都府知事は槇村正直であつた。槇村は大層仕事好きで、殊に西洋崇拜者だつたので、最後に直接槇村知事に獻言すると直ぐ様賛成を得て、畫學校設立は一瀉千里の勢で實現された。それは明治十五年だつた。

畫學校が成立して、京都府立畫學校と稱し、御苑内の日光御里坊といふ立派な御殿を學校に宛てることになつた。梅嶺は教頭に任命された。此の時大家達はそれ〴〵學校設立費を寄附することになつたが、何と云つても、一番金の取れるのは田能村直入だつた。直入は學校費に寄附する目的で一枚十五圓の半切を一晩に十枚宛畫くといふ勢で、金千圓を寄附して寄附金の筆頭となつた。

此の時から、京都の繪畫界では「畫學校出仕」といふ一つの資格名目が創まつた。それは大家の門にある者が宿入り（獨立）した時に與へられるもので、事實は出仕するのでも何でもなく空名に過ぎない場合が多かつた。

其の年の九月には、東京で初めて内國繪畫共進會が開かれることになつた。京都からは楳嶺と原在泉の二人が審査官に任命された。

楳嶺は三十三歳だつた。

楳嶺は、審査官として上京することになつたが、其の時彼は別に或る事を人から依頼された。それは京都に村瀬双石といふ畫家があつたが、其の養子を玉田と云つた。双石の歿して後玉田は非常な放蕩者になつて養母を初め人々が殆んど持て餘してゐた。玉田は子供の時から大變我儘に育てられたので、其の時はもう二十五六にもなつてゐたが、世の中の苦勞といふものは何一つ知らない坊チャンだつた。そこで養母や親類の者などが相談をして、玉田を東京へでも出して見よう、そして世間の味をおぼえさせて遣つたなら少しは人間らしくなるかも知れないと考へてゐた折から、今度楳嶺が上京することになつたので、豫て懇意の間柄で、楳嶺に頼んで玉田を東京へ伴れてつて貰はふといふことになつたのだつた。

楳嶺は承知して、玉田を伴れて東京へ立つた。東海道にもまだ汽車は無い時代だつた。長い旅行をして、横濱迄行くと、其處からは汽車があつた。二人は初めて汽車に乘つて新橋へ降りた。

ステーションの前の廣つぱへ出ると楳嶺は玉田に向つて

「さあ村瀬君、私はお宅から君を東京へ伴れて行くことだけを頼まれたので、其の外の事は頼まれてゐないから、此處で別れよう、君は自分獨りで何とでも方法を立てたまへ、金は預つて來た分が是れだけ殘つてゐる」

と云つて財布の中から錢勘定をして一圓幾らばかりあつたのを取り出して、玉田に渡して、

「なんでも人間は苦勞をしなければ一人前にはなれない、君も一度位は人の軒下へ寢る位のことはあるかも知れないが、今の此

の辛さを忘れなかつたら大概の辛抱は出來るだらう、そして傑い繪かきになりたまへ」

さう云つて楳嶺は立ち去りかけたが、又後戻りして

「併し、よく〱困つたら大場學仙を頼つて行くがよい、私から學仙に話して置くから」

と云つて、自分は俥へ乘つて行つてしまつた。楳嶺は人一倍涙もろい性だつた。併し、獅子が兒を谷に落すやうに、玉田を眞人間にして遣る爲めには、甘い言葉や深切は一番毒だと思つたのだ。

玉田は悲憤の涙を流して楳嶺の無情を恨んだ。それが彼の世の中へ出る第一歩だつた。其の後彼は發奮して苦心努力した結果遂に後年の大を成すに至つたのだつた。併し、玉田はよく〱其の時の事が恨めしかつたと見えて後年迄楳嶺に對してよい感情を抱いてゐなかつた。彼は遂に楳嶺の心事を解しなかつたのである。

楳嶺は常盤木倶樂部を宿にして、初めて共進會へ出席した、すると、其の席上で晴湖と顏を合せた。仕方が無いので楳嶺は澄して

「初めまして、私は幸野楳嶺です」と挨拶をした。

「貴君は！」晴湖も其の顏をおぼえてゐたと見えて大變駭いた樣子だつたが、眞逆草木さんの番頭さんではありませんかとも云はれないので、いかにも不思議さうな顏をしてゐた。

共進會以來楳嶺は益々後進者奬勵の必要を痛感したので、京都へ歸つて來るが否や京都青年繪畫會を起したが、十九年九月には東山双林寺の牡丹畑といふ處に京都私立青年繪畫研究會を開設した。さうして青年畫家の團結を圖らせた。楳嶺は此の會の爲めに私財を蕩盡してしまつた。

併し、楳嶺の熱心な運動は、保守主義の一般畫家の好感を得ることは出來なかつた。彼等は楳嶺が青年の間に非常な人氣を博してゐるのを見て不安を感じ出した。彼は他人の門人までも横取りするといふやうなさうした誤解を招いたこともあつた。やがて諸方面から批難の聲が囂々として起つた。楳嶺は四面楚歌の裡に陷つた。

少壯の楳嶺は憤然として京都を去つて名古屋へ移住を決行した。名古屋には知己が澤山あつた。名古屋の青年畫家を薫育して京都の畫壇と對抗させて見ようといふ遠大の抱負を持つて行つたのだつた。

名古屋の人々は大いに彼を歡迎した。家を借りてはいると、人々は世帶道具を持ち寄つて來て吳れた。楳嶺は其の厚意を喜んで、其の人々に繪を描いて禮をした。行燈を吳れた人には車

亂髪螢の圖、すり鉢を伏れた人には西行望富士の圖と云つた具合に、當意頗る即妙で人々を喜ばせた。

併し、當座はよかつたけれども、住み込んで見ると此の土地も案外面白くなかつた。彼が京都を出て來た時の抱負は容易に實現されさうな模樣もなかつた。名古屋には名古屋で古い勢力が根を張つてゐて、新來の楳嶺が思ふやうな活躍をする餘地は乏しかつた。幾許もなく彼は困つて來た。彼は名古屋には見切りを付けたけれども、京都の仲間へ對して今更すご〳〵歸られもせず、途方に暮れてゐた。

すると爰に渡りに舟といふ好都合な事が出來てきたといふのは、此の度び皇居御造營について、楳嶺は杉戸天井等の繪の御用を蒙つたのだつた。彼はそれを機會にして京都へ舞ひ戻つて來た。

京都へ歸つて、新町御池に居を構へた。皇室の御用畫は、其の翌年の秋完成して納めた。

四

明治廿三年の第三回内國勸業博覽會に、楳嶺は審査官を拜命して上京した。

其の時、審査の席上で楳嶺は、東京の某畫伯の態度に憤慨して大激論を始めてしまつた。それは某畫伯が餘り露骨な情[illegible]涉をしたからだつた。佐野常民がそれを仲裁しようとしたが楳嶺は承かなかつた。

「閣下は政治家でいらつしやるから、政治の事なら御意見に從ひますが、繪畫の事は楳嶺一歩もお讓り申すことは成りません」

楳嶺はさう云ひ捨てゝサッサと宿屋へ引き上げてしまつた。

後で佐野は久保田米僊を呼んで

「楳嶺が大層怒つて歸つたが、折角京都から來たことだから、貴公彼を吉原へでも案内して慰めて遣れよ」と云ひ付けた。

米僊は、其の前年佛蘭西の博覽會へ行き、西洋の風に吹かれて歸つて來ると、廿三年に德富蘇峰が國民新聞を興すについて、繪畫の方面を擔任することになつて入社して、東京へ來てゐたのだつた。一體米僊はどういふ經歷を持つてゐたかと云ふと、彼は京都の生れで、山城屋晋七といふ料理屋の息子で、幼名を米吉と云つた。兄弟がなく一人息子であつたが、小さい時から繪が好きで、寺小屋へ行つても手習ひはせずに繪ばかりかいてゐる。いつでも矢立を腰に差してゐて、方々の白壁やら門などに繪をかき散らすので、絶えず家へ尻がくる。父親も持て餘してゐた、或る時などは、丁度其の頃は維新の騷ぎの最中で、新撰組の人々が頻りに天下の志士を殺して、三條河原や四

條河原で曝し首にしたので、彼はいつの時にかそれを見て來て横丁の白壁へ盛んに曝首の繪をかいたので、所有者からきびしい抗議を持ち込まれて、到頭壁の塗り替へをさせられた。

十二三歳の頃、其の家に道具の會があつて、或る人が、彼が繪本を模寫したのを一見して「是れは非凡な少年だ」と感心して、彼に將來の目的を尋ねると、「料理屋は厭だから繪かきになり度い」と云ふ。そこで父の晉吉を其の人が説得して、自分が紹介して鈴木百年の門に入らせた。其の後米僊は孜々として繪の研究をし、或ひは又澤渡精齋や神山鳳陽に就いて漢學を學び、傍ら扇の繪をかいたり友禪の下繪をかいたりして苦學した。

米僊は楳嶺より八つ齡下だつたが、元來米僊は非常に才氣が横溢してゐるので楳嶺は彼を贔屓にして、例の畫學校以來親しく交際してゐるのだつた。

「今晩は君を吉原へ案内するから是非つきあつて貰ひ度い」と云つて米僊が遣つて來た。

楳嶺もクサ／＼してゐる處だから「それは面白からう」といふので贊成した。他にも二三人仲間をこしらへて米僊が先立ちで吉原へ乘り込んだ。藝者を上げて大いに愉快を盡したが、酒を吞んでゐる處へいろんな人間が覗きに遣つて來て、楳嶺の顏をジロ／＼見て行く。楳嶺は餘程變に思つた。

「おい米僊、先刻から樣々の人間が俺の顏を見に來るが、どういふ譯であらう」と云ふと、米僊は、

「いや實は、幸野楳嶺といふゑらい先生を連れて來ると云つて前觸れをして置いたから、それで彼等が君を見に來るのだよ」と澄まして答へた。

「ハ、ン、左樣か」

楳嶺は自分の名前が吉原にまで鳴り響いてゐるかと思ふと內心甚だ得意であつた。處が、引けてから相方の女が彼に向つて云ふことは

「貴郞は何處でそんなに上手な日本語をお習ひになりましたか」と訊くのだつた。

楳嶺は譯が分らなかつた。段々尋ねて見ると、楳嶺が朝鮮髯を生やしてゐるのを幸ひ、惡戯者の米僊が前以て此の家へ「今日は朝鮮の偉い人を案內するから鄭重に扱つて吳れ」と云ひ付けて置いたといふ事が判つた。

京都の畫學校は其の後餘り振はなかつたが、楳嶺が教頭として專ら其の任に當つてゐた。併し、如何せん經費の出所がなかつた。其の頃は北垣國道が京都府知事の時代で、全力を擧げて疏水工事の完成を期してゐる時で、他の一切の方面が顧みられ

なかつた。畫學校などは無用とあつて、到頭廢校の運命に遇つてしまつた。

其の時畫學校の生徒は七十餘名あつた。學校を失つた生徒等は結束して大成義會といふを組織して、全部の者が楳嶺の門に走つたのだつた。そこで楳嶺は遠國から來てゐる者などの爲めに、新町御池の自宅の前に寄宿舍のやうなものを設けて門生を收容した。

其の前から一方では古い門人達、都路華香、菊池芳文、竹內栖鳳、西川桃嶺、清水蘆松等が寄つて凌雲會といふ研究會を組織してゐた。

明治廿四年の秋、凌雲會と大成義會とが聯合して繪畫共進會を開催することになつた處が、其の鑑査の事で楳嶺と門人達とは意見の衝突を生じてしまつた。それは楳嶺が通過させると主張する繪を門生側の連中が反對したのが原因だつた。それから到頭事が大袈裟になつて、門人中、華香、芳文、栖鳳等の幹部は破門といふことになり、同時に大成義會の方は解散といふことになつてしまつた。

大成義會は其の儘再興を見ずに終つたが、會員の大部分は間もなく其の門人といふ意味で楳嶺に復歸した。破門された門人達も間も無く許された。

古い門人達はそれぞ\最早相當の名を成してゐた。就中栖鳳の如きは旭日昇天の勢で賣り出してゐた。初めは同門の中でも芳文が一番傑出してゐたが、楳嶺は夙くから栖鳳に囑目して「今に見ろ後の雁が先になるから」と云つてゐたが、果せるかな中途から栖鳳はぐん\／同輩を拔いて上達した。

栖鳳は楳嶺に就いてゐる間に三遍破門された。一度は東本願寺の嚴如上人に隨行して北陸へ旅行した時の出來事だつた。

嚴如上人は楳嶺の有力な後援者だつた。上人は祟文に就いて繪を習んだ人で、自らも巧みに畫いて、頗る鑒識に富んでゐた。楳嶺は初め文麟 に伴はれて行つて法主に謁したのだつた。其の席には數名の繪師が居たが、法主は一同を試みる積りで、「各各下り蜘蛛の圖を描いて見よ」と命じた。一同は紙に對つたが、一直線の蜘蛛の糸を引くので實に弱つた。曲つても、途中で切れてもいけない、天上から下まで眞つ直ぐな蜘蛛の糸は容易に引けるものではない。其の時楳嶺は、劍道では人を斬る場合に體を斜に構へて眞つ直ぐに斬り下げるといふことを聞いてゐた、それを思ひ出したので、筆を持つて大奉書紙に對ひ、筆を斜めにしてスーツと引き下した。見事な蜘蛛の糸が描けた。楳嶺は大層おほめにあつて、其の時分から上人の贔屓を受けるやうになつた。

明治十年には厳如上人が九州へ布教に行かれるについて、楳嶺は法駕に扈従して到る處の好山名水を研究して來た。其の後も上人が旅行をされる時は必ず隨行した。當時本願寺法主の旅行といふと、大名以上の格式で、非常に大袈裟なものだつた。諸役人悉く完備して、繪師も必ず附くものだつたが、併し醫者でも繪師でも一名ではなく、必ず門人を伴れて行くことになつてゐた。そこで北陸へ隨行の時には楳嶺は栖鳳を伴れて行つたのだつた。

御供の者の規則は非常にやかましかつた。朝は必ず四時には起きなければならなかつた。旅館へ着くと上役の人々は法主の御前で御酒をたまはつた。楳嶺は殊にお氣に入りの繪師のことだから毎夜缺かさず召されて十時十一時頃迄四方山のお話相手をさせられるのが例だつた。法主が御寢といふ時になつて漸う自分の室へ歸つて來るのだつた。楳嶺は大變酒が好きだつた、が、毎夜御前で頂戴する酒は、羽織袴で固くなつて呑む酒だから少しも呑んだ氣持になれない。そこで彼は自分の室へ戻つてから樂々と大あぐらで呑み直すのが例だつた。併し、さうなると今度は迷惑するのが栖鳳の番だつた。彼は師匠が呑んでゐる間は其の前に畏まつてお酌をしたり話相手をしたりしてゐなければならなかつた。處が、楳嶺の酒は恐ろしく長かつた。彼はチビリ、チビリと呑むのが癖で、さうして旅行をする時も必ず秘藏の小さな盃を持つて歩いた、其の盃でチビリ／＼とやつて一時から二時頃迄も呑んでゐた

是れが連夜のことなので栖鳳は殆んど參つてしまつた。併し師匠の方は一向平氣だつた。楳嶺は平常も宵つ張りの朝起きで幾らも寢なかつたが、旅行中などは二時間位しか寢なかつたが、栖鳳は、連日の睡眠不足の爲めに體がヘロ／＼になつてしまつた。彼は道を歩いてゐる時でも睡つてゐた。

新潟へはいる時栖鳳は先觸れの役にして貰つて、一行より數時間先きに旅館へ着いた。そこで彼は法主が到着になる迄一睡りする積りだつた。宿へ賴んで隅の方で寢かして貰つた處が、ぐつすり寢込んでしまつて、一行の到着したのも知らず睡りこけてゐた。楳嶺は烈火の如く怒つて直ちに其の場から破門を申し付けて栖鳳を追ひ返してしまつた。古來睡つて破門された者は栖鳳ぐらゐなものだつた。

併し其の時も直きに詫が叶つた。栖鳳は三週破門されたが、三度其詫びをして歸つた。其の師弟の間は膠のやうな仲だつた。

栖鳳の技倆は當時既に師を凌ぐものがあつた。明治二十四年に矢野龍溪が京都へ來た。それは矢野が支那公使をやめて歸つ

て間も無い頃だつたが、彼は一日赤坂の邸に川端玉章、久保田米僊、野村文擧等を集めて清遊を試みて、

「自分は近く京都へ行くから、彼地の畫家に會つて見ようと思ふが、今京都の畫家では誰が一番傑れてゐるだらう」

と云つた。すると文擧が、

「京都には楳嶺の弟子で栖鳳といふ男があります、此の栖鳳一人にお會ひになればそれで澤山です、老大家などはお會ひになるには及びません」

と云つた。そこで龍溪は京都へ來て栖鳳を訪問しようと思つたが、併し考へて見ると、それ程の弟子を生み出した師匠の力といふものは偉大である、栖鳳を訪ふて楳嶺を訪はぬのは非禮であるといふので、先づ楳嶺を訪問した。そして、文擧の云つた言葉から自分の目的を正直に話すと、楳嶺は却つて大變喜んで、早速門人に命じて矢野を油小路の栖鳳の宅へ案内させた。

其の後栖鳳は矢野の引き立てを蒙つたことが少くなかつた。

五

楳嶺は何處迄も繪畫の教育を以て自己の天職であると信じてゐた。楳嶺はよく門人に向つて、昔自分が人相見に云はれたこと話をして、

「俺はお前達の踏み台なのだから、お前達は遠慮無く俺を踏み台にして、俺よりも傑い者になつて呉れなくては困る」と云つた。

さういふ風だから門人を取り扱ふことは實に懇切だつた。一人々々の門人に就いても絕えず其の傾向に注意してゐた。恐ろしいことは、墨色で放蕩をしてゐることを看破した。門人が描いて來た繪をじつと見詰めて、

「貴様、ぜゞ裏あたりで遊んでゐるな」

なぞと遣られると、大概のものはギクリとした。

門人達が女の話でもしてゐる處を聞かれると、

「其の女は何處が美しかつたか云つて見ろ」

直ぐさうだつた。

「たゞ美しいと思ふだけでは繪かきになれない、何處が美しいかそれを研究しなくてはいけない」と云つた。

内弟子の門人が飯を食つてゐるのを見て

「貴様が茶碗に飯を盛る處を見てゐると、一と掬ひで山盛りになる時があるかと思ふと、二度も三度も掬つて漸う一杯にすることもある。高が飯櫃から茶碗へ飯を盛るだけの仕事にさう手が極まらぬやうでは仕方がない、もつと氣を付けて掬へ」

庭を掃いてゐる處を見ても同じやうなことを云つて諭へた。

「そんな描き方をしたら、綠青ならムラになるぞ、何處から始めてどう描くか、最初に目的を極めて順序を眼で計つて遣れ」

一人の門人が狗ころを描いたがどうも毛並がうまく揃はぬ。困つてゐると師匠は何處かから一匹の狗ころを貰つて來て

「それ、よく是れを見ろ、貴樣のは毛の生へ方がまるで間違つてゐる。だから毛並が揃はぬのだ」と云つて毛の生へ具合を詳しく說明して聞かせるといつた具合だつた。

門人を諭するにも、少し慢心してゐるなと思ふ者には繪の批評も痛烈にやるが、少々悲觀してゐるものがあると拙い繪でも賞めて遣つた。其の手加減が巧だつた。二十四年の門下生との衝突事件なども、楳嶺が其の流儀で手加減の鑑査をしやうとするのに對して、若い連中は斟酌なく實力本位で進もうとするので、到頭楳嶺を怒らせてしまつたのだつた。

其の時、大成義會の解散式をやることになつて、會の積立金が百圓ばかりあつたので會員一同が料理店へ行つて飲んでしまつた。師匠の楳嶺も列席したが、其の後で楳嶺は祇園の料亭から使を寄越して、會の牛耳を執つてゐた藤山鶴城と平澤袈嶺の二人を呼んだ。二人は叱られるだらうと思つて行くとさうではなく、一流の藝妓を澤山聘んで色々の藝をやらせて二人に見せて

「今日此處へ來てゐるのは祇園の一流の藝妓ばかりだ、一流の者の藝はかういふものだ、よく覺えて置け」と云つて一々藝についての說明をして聞かせた。さて其の後で

「見てしまへばもう用はない。こんな所は貴樣達の長居する所ではないから歸れ」

其の日は丁度濃尾の大地震の日だつた。京都も少しは搖れたが大したことはなかつた。併し、其の地震の爲めに、當時大成義會へ入つてゐた川合玉堂の父は岐阜の家が潰れて無殘の死を遂げたのだつた。楳嶺は其の年 の夏岐阜へ鵜飼を見物に行つて、玉堂の家に泊つて、彼の父とも會つてゐるのだつた。それだけに其の報知を得た時の驚きは强かつた。翌日玉堂は岐阜へ急行した。——

間も無く玉堂は母を奉じて京都へ出て來た。そして寺の一室を借りて母と二人で生活した。其の地震の爲めに彼は全然無物の身となつたのだつた。玉堂は初めて望月玉泉に就いて學んでゐたが、十八の年の秋から楳嶺に入門したのだつた。父を亡なつた時はまだ廿そこ／＼の若者だつた。彼は一人息子で、それ迄は何の苦勞も知らずに來たのだつた。楳嶺は彼に向つて

「君の今度の不幸は何と慰めやうもない、併し、君自身の將來の爲めから云へば、今の難境に處したことは却つて幸福の基に

なるだらう、」と云つて激勵した。

椒嶺は極く眞面目な人で平常餘り奇行は無かつた。が、時々矢張り常人と異つた振舞ひをした。

ずつと若い頃、例の幽靈で追ひ出した下婢と二人で暮してゐた頃のこと、或る日米僊が其の家を訪問すると、裏の方で返事はするけれど一向主人が出て來ない。そこで米僊が裏へ廻つて見ると、椒嶺は物置の中に居て、肌襦袢一枚になつて漬物桶の上に登つてゐた。米僊は不思議に思つて

「何をして居るのですか」と訊くと、

「いや、實は下女の手傳ひをして菜漬けをしたが、壓石が無いので下女に石を買はせに遣つた處だ。それ迄石の代りをしてゐるので、一歩も動かれない始末さ」と椒嶺は答へた。

また或る時椒嶺は、寛齋と二人で嚴如上人のお伴をして、嵐山に舟を泛べて紅葉見物をした。其の時上人が椒嶺に向つて

「お前は坂本の紅葉を見たか」と訊いた。

「まだ見たことが御座りません」と椒嶺が答へると

「坂本の紅葉を知らなくては話せぬ、是非一度見に行くがよい」と上人は云つた。

椒嶺は早速其の翌日門人を二三名伴れて近江の坂本の紅葉を見物に行つた。其處の風景は、紅葉ばかりでなく、古い堂閣などがあつて一層雅趣を添へてゐた。椒嶺は二三枚寫生を取つたりしてそれから歸途についた。蒸汽船に乘つたが途中で夜になつてしまつた。中秋の月が彼方の山の上に現はれ、湖水の上に金波銀波を躍らせて其の美觀は得も云はれなかつた。

「どうも何とも云へんな」

椒嶺は頻りに悦に入つてゐたが、ふと此の名月を肴にして酌を催し度くなつた。

「おい、酒はあるかい」

酒なぞある譯はなかつた。

「ありません」

と門人が答へると椒嶺はチョッと舌打ちをして

「酒を買つて來なかつたのは失策だつたな、折角月が出たつて酒が無くては仕樣がない」

さう思ふと彼は矢も楯も溜まらなく酒が呑みたくなつた。見ると船客の中に一人の軍人が居た。陸軍士官である。此の士官も酒が好きだと見えて先刻から向ふの方で用意のビールを拔いて頻りに滿を引いてゐたが、陶然と醉ひを發してさも心持よささうに月を仰ぎ乍ら朗々と詩吟をやり出した。其の様子を此方で眺めてゐる椒嶺は羨ましくて溜まらない。何とかして一杯御馳走になりたいものだと思ふけれど大分離れて居る。や

楳嶺はノソ〱士官の方へ近付いて行つて
「やあ暫らく」と聲を掛けた。
士官は喫驚りして振り向いたが知らない人なので
「やあ」と云つて頭は下げたが變な顏をしてゐる。
「どうも暫くでしたな、御壯健で結構」
「失敬ぢやが、貴君はどなたでしたかな」
「ほう、貴君は××君ぢやなかつたのか。いや是れは甚だ失禮、私の友人と大層よく似て居られるのでつひ人違ひを致しました、平に御免」
と云つたが楳嶺は立ち去らうとはせず、其の儘する〱と其處へ座り込んで
「時に貴君はどちらからお越しで」と頻りに士官に話し掛けた。すると先方も話相手を欲しく思つてゐた處で、直ぐ樣懇意になり「一つ如何です」と云ふのでコップを出した。
「や、是れは恐縮」
さう云ひ乍ら楳嶺は波々注がせてぐいと呑んで
「いやどうも此の月は格別ですな」
到頭半分楳嶺が平げてしまつた。

六

楳嶺は伏見の稻荷を信仰してゐた。
「何でも人間は信仰がなくてはいかんよ、自分は伏見の稻荷を信仰してゐるが、稻荷に限らない、佛教でも何でもいゝ、信心をすると精神が平らになる。私が以前居た家の近くに平安教會といふのがあつて其處へ行く人がいつも家の前を通るので、家で繪をかき乍ら聞いてゐると、往く時と歸りでは話をする聲から變つてゐる、どうも恐ろしいものだと思つたよ」
彼はさう云つて話した。楳嶺の稻荷の信仰は中々熱心だつた。
「矢張り先生お稻荷樣は赤の飯が好きなんですか」と弟子の一人が聞くと、
「ばかを云へ、それは野狐のことだ、お稻荷樣には法華經をあげるのだ」
楳嶺は度び〱伏見稻荷へ詣つて法華經をよんだ。
不思議なことには某といふ門人によく稻荷さんがおりた。其の男が十五六の時分からおり始めたのだつた。或る年其の門人を伴れて近江へ旅行した。そして或る田舍の宿家へ泊つて繪をかいてゐた。すると其の家の下婢が、田舍娘ではあるが一寸澁皮が剝けてゐて愛くるしかつたので、楳嶺は野心を起して一寸ふざけて見たが、門人は次の間に睡つてゐて何にも知らなかつた。處が、翌朝起きて楳嶺が例によつて伏見稻荷をおがんでゐ

がてると、忽ち門人にお稲荷様が乘り移つた。

「これ、楳嶺――」とお稲荷樣は仰しやつた。楳嶺は「はゝあ」と疊へ頭を擦り付けた。

「其方の昨夜の有樣は何事ぢや、厄介になつて居る家の下婢を捉へて不行儀を致すとは怪しからん奴だ……」

楳嶺は閉口頓首してお稲荷樣にあやまつた。

明治廿六年に楳嶺は帝室技藝員を拜命した。彼と同時に拜命した者は、瀧和亭、野口幽谷の二人だつた。

廿七年二月、楳嶺は三本木の有山といふ華族の邸宅を買つて引移つた。其處は賴山陽が晩年を送つた有名な山紫水明處の趾で、頗る堂々たる邸宅だつた。彼は其の邸宅を買ふ爲めに餘程無理をした樣子だつた。が、思慮深い楳嶺のことだから何か心に期する處はあつたかも知れなかつた。

併し、晩年の楳嶺は餘程精神的に荒んでゐるやうだつた。絶えずイラ／＼したやうな調子でゐた。祇園町邊りへもよく出掛けた。家庭でも妻との間が兎角圓滿を缺くやうな處があつた。

楳嶺は、それまでに三度び居を轉じたが、其の度び毎に一個の庭石と一株の梅の木とを持つて歩いた。それは彼が初めて柳の馬場へ世帶を持つた時の紀念物だつた。で今度もそれを三本木の邸へ運んだ。

其の年の三月、森寬齋が八十二歲の高齢を以て歿した。寬齋と楳嶺とは、通常の社交以外特に親しくはしてゐなかつたが、双方共常に好感を有ち合つてゐた。

夏の初め頃から楳嶺は健康を害ねた。病は肺患だつた。一時は病褥につき切りだつたが、二ケ月ばかり經つと輕快に赴いた。

其の頃、東本願寺の御堂の新築が落成した。それについて楳嶺は御堂の壁畫の揮毫を依囑されてゐた。彼は病氣が輕快に赴いたについて其の製作に着手しようと決心した。其の壁には蓮を描く心組みだつた。

彼は毎朝三時に家を出て、洛中洛外の蓮池を尋ねて、其の眞趣を探り韻致を索めて頗る意匠を凝らした。九月に稿を起して十一月に完成した。それは楳嶺の一代の大作で、其の壁畫に臨むと、滿堂荷花の薫りに包まれるやうな思ひがあつた。

十二月に入つて再び病を發した。此の度びは起てなかつた。或る朝長男の東閣が、病室の花瓶に梅の花を挿してゐた。病める楳嶺はそれを見て微笑して俳句一首を詠じた。

ちる梅やさむいあいだが花のやく

それが辭世だつた。其の翌日急に病が革まつて永眠した。明治廿八年二月二日のことで、享年五十二歲だつた。寺ノ内大宮の妙蓮寺に葬り、法號を香[illegible]院誠信楳嶺居士と曰つた。[illegible]

愛してゐた石を墓石とし、其の傍に梅を植えた。

楳嶺は、名は直豐、字は思順、通稱は角三郎、楳嶺又は嘉夢と號した。又、長安堂、青籠館、六柳北園、金仙茶寮、香雲深處、無聲詩屋、三守蝸室、如意山樵、春風樓、鶴鹿園、在五樵、時蝸禪房、雫栖家等の別號があつた。

彼は青年時代の修養が助けとなつて、畫家としては十分な學識を蓄へることが出來た。風流を解し、文學趣味があつて、狂歌俳句などをよくした。

明治廿三年の博覧會で同僚と衝突して京都へ歸る其の前の晩、富岡鐵齋と一緒に一と晩飲んだ。其の時の二人の合作が

楳嶺　にげ水を京の土産の旅寝かな
鐵齋　あすはいざ都に歸る別なり今宵を君と語りあかさん

鐵齋と楳嶺とは晩年迄非常に仲が善かつた。鐵齋は其の頃はまだ餘り絵はかゝず、學者として知られてゐて、主に書をかいてゐた。

楳嶺が佛蘭西の博覧會へ出品した牡丹花の圖が彼國の新聞で非常に評判になつた。其の事を徳川臨風が本人に傳へると、楳嶺は、

「あゝいふ物が評判がいゝのかな、ではあの通りの物をかいて貴君に差し上げませう」

と云つて、同じ圖を描いて臨風に贈つた。

彼は數種の畫譜を刊行した。明治十五年に初めて楳嶺百鳥畫譜六冊を刊行した。それには假名垣魯文が序文を書いた。すると是れが大層好評を博したゝめ出版元の大倉孫兵衛から勸められて其の後續々刊行した。楳嶺花鳥圖譜（二冊）楳嶺畫譜（三冊）千種の花（六冊）亥中の月（一冊）楳嶺菊百種（三冊）工筆畫帖（八冊）工業圖式（五冊）等だつた。

工業圖式は清水六兵衛三代目が刊行したのだつた。三代目六兵衛は、五坂亭瑞雲と號して畫もよくしたが、楳嶺の熱心な後援者だつた。曾て某所に楳嶺の遊女の圖があつたのを六兵衛が手に入れたが、其の時六兵衛は本物の遊女を身受けする時のやうに、客を招いて身引き祝ひをした。

楳嶺は花鳥畫家として近世の大家だが、併し彼は飽く迄も門人養成を天職として終始したのだつた。遂に門下から有數の畫家を輩出せしめた功勞は偉大であつた。彼は門人が宿入りする際には法螺の貝を描いて與へるのが例だつた。もう何を描いてもよいといふ意味だつた。そして獨立する門人に對してはよく處世の法を說いて聞かせた。

「世の中に出るのは戰場に臨むと同じ事だ」

と彼はよく門人に云つた。それ位だから、彼自身は社會に對

して何時でも戰闘的準備をとゝのへてゐた。平常孫子吳子等の書を愛讀して「是れを讀むと大いに處世上の利益を得る」と云つてゐた。

楳嶺には三男二女があつた。長男は角太郎と云ひ東閣と號す。東閣は出でゝ森本家を繼ぎ、次男四次郎西湖が父の後を繼いだ。面白いことは、長男が角で、次男が四である。三番目は女で鱗（三角）と云ふ。四番目にも女の兒が生れると菱子と命名した。

楳嶺が歿する前年久保田米僊が久し振りで京都へ來て、三本木の楳嶺の家を訪問した。米僊は其の時國民新聞の社員として日清戰役に從軍する途中だつた。米僊と楳嶺とは議論は合はなかつたが、何しろ舊い知己なので會へば親しかつた。楳嶺も一時は洋畫に凝つて水彩畫をかいたりした時代もあつたくらゐだが、晩年は純粹の四條に立ち返つて畫風が頗に重厚となつた。然るに一方米僊は其の後アメリカをも見て來たりして、平常新聞に挿繪をかき、繪畫の社會化を主張してゐる人だつたので、逢へば二人は必ず議論から最後には喧嘩になつた。米僊は非常に記憶が確かで物識りだつた。併し彼は餘りに覇氣橫溢した性格だつたので、筆力縱橫の割合に、高逸た韻致と沈着雄渾の氣象とを缺いてゐた。

「君が居ないので、喧嘩の相手が無くて淋しいよ」と、其の時楳嶺は笑つて言つた。

米僊は朝鮮へ渡つて京城へ行くと、其の時はまだ大鳥公使の談判中で袁世凱が引き上げない前だつたから、混雜はしてゐたが支那街の店舖は依然として營業をしてゐた。米僊が支那街の書肆に這入つていろ／＼漁つてゐると、畫譜が見當つた。どうも見覺えのある畫譜だと思つて手に取つて見ると、それは大倉書店で出版した楳嶺の百鳥畫譜を、上海の點石齋で翻刻した物だつた。米僊は以外な處で友人に逢つたやうな氣持がした。とにかく楳嶺として非常の名譽の事だ、殊に楳嶺は支那崇拜者だから是れを見せたらさぞ喜ぶだらう、よい土産だと思つたから米僊はそれを買ひ求めた。米僊は其の後陣中で赤痢に罹つて、漸う一命を全うして歸國した。廣島へ來ると、大本營からお呼び出しがあつて天覽揮毫の光榮に浴した。それから彼は京都へ來て早速楳嶺の家へ行くと、こはいかに楳嶺は既に此の世に居なかつた。米僊は淚ながらに其の本を墓に手向けて物語りをした。

追記

いつぞや笹川臨風氏を訪問すると、先生の書齋の壁に、楳嶺

の牡丹の一軸が掛けてあつた。楳嶺の話が出ると、臨風先生は私に向つて、君が楳嶺の傳記を書く時には紹介する人がある、それは楳嶺の門人で現在は東京に居る人だが、非常に詳しく楳嶺の事を知つてゐる、自分も曾て一度其の人から楳嶺の逸話を聞いて大變面白く思つた、と云はれた。其の時は其の儘で終つた。今年の正月、雜司ケ谷鬼子母神の伊藤重次郎氏から一夕招待を受けた。其の座に新進畫家の宮部秋芳氏が居た。其處でも偶然楳嶺の談が出た。すると不思議なことに秋芳氏は楳嶺とは餘程因縁の深い人だつた。氏は東京の人で京都の畫學校へ行つて學んだが、京都遊學中六年間を、楳嶺の長男森本東閣氏の許に寄宿して、二男西湖氏等とも親交がある。猶其上秋芳氏の初めの師は藤山鶴城氏で、鶴城先生は楳嶺の直門だから、宮部氏は孫弟子に當るわけである。そんな話から藤山氏が楳嶺の事を大變詳しく知つて居られると云ふので、段々聞いて見ると曾て笹川氏が話されたのも藤山氏のことだといふことが分つた。私が楳嶺の傳を書くなら藤山氏に紹介する、必ず喜んで話されるに相違ないと宮部氏が云ふので、私も急に乘り氣になつて至急其の手續きを宮部氏にお願ひして其の日は別れた。

二三日經つと秋芳氏から案内があつたので、其の日に先づ午前中赤坂臺町の秋芳氏のお宅を訪ね、同道で小石川第六天町の藤山鶴城氏を訪問した。

藤山氏は、舞鶴藩牧野侯の家老の家に生れたが、性來繪を好む處から京都畫學校へ入つて、大成義會當時から數年間楳嶺に師事して、門人中でも特に故師と親炙した人である。されば氏の談話は頗る精細で故人の面影を髣髴せしむるべく十分だつた。楳嶺の畫、書簡、寫眞、著書等も見せて戴いた。本傳の大部分は藤山氏から仰いだ資料である。

それから二三日後、藤山氏の紹介を以て、牛込若宮町の川合玉堂氏を訪問して、此處でもお話を聴いた。

是れに、明治廿八年の、繪畫叢誌に赤羽雲邨氏が載せられた「幸野楳嶺翁傳」が手許にあつたので、以上を綜合して本傳を作つたのである。

蘭亭曲水

池田桃川

永和九年三月三日、かねて右軍將軍王羲之から招かれてゐた人々は、三々伍々、東西から蘭亭さして集つて來た。そして晝頃には四十二人の顏が揃つた。要事ができて列宴することの出來なかつた者も二三人ゐたが、主なるものは皆寄り合つた。そう廣くもない亭上に列んだ顏は、春光のやうに軟いで、どれもこれもにこついてゐる。時々笑ひ聲がどつと崩れる。淸流を控へた山裾の茂林脩竹の間には、小鳥が囀り、水上には鷺が啼く。薄霞を透して見上ぐる蒼空には、一片の雲だにない。

やがて四十二人の人々は、亭から散つて、めい〳〵、庭園のよい位置についた。亭の左右に浴鵞池と洗墨池と二つの池があり、小川から引かれた水は、それ等を中心として、ぐる〳〵と九曲し、しまひは月池に注いでゐる。亭の前方は竹園で、三個の小亭があり、亭の後方は雜木林の山である。人々は水流の兩岸に沿ひ、あぐらをかいたり石の上に腰掛けたり、木の根にもたれたりして、五人の童子が運ぶ酒杯をとるのである。當日の世話役の謝安や孫綽は、紙や筆硯などを配つて廻つた。

「それでは、これから始めませう」

右軍が立ちあがつてさう言ふと、謝安は大きな聲で、

「一番上流にゐなさる方から、皮切りをやつて下さい。どなたぢやな、その木の根に後ろ向きに坐つてゐなさるのは」

と上流の方に向いて言つた。それが聞えたと見え、木の根に坐つてる人は、こつちを向いた。

「ヤア、隱谷先生ぢや」

誰やらがさう言ふと、謝安は前のことを繰り返して叫んだ。すると、もう眞赤な顏をして醉つてる隱谷先生は、瓶子と盃とを持つてよろ〳〵と、四五人を通り越し、下流の方へきて隱れた。右軍始め、一同はどつと笑ひくづれた。謝安は苦笑して、その次の人の名を尋ねた。次には中軍參軍の孫嗣が、長髯を撫して坐つてゐる。孫は筆を執つて、

望巖懷逸許　臨流想奇莊　誰云眞風絶　千載挹遺芳

と書き、立ち上つてそれを高く

掲げて見せた。一同の拍子が起つた。孫は盃をグツと干し、それを静かに流れに泛べた。

「お次は王肅之先生の番ぢや。盃がくる迄できなきや罰酒三觥だよ。アハヽヽヽ、さア外の方々も、めい／＼盛んに飲つて下さい。そのうちによいものが上の方から流れてくるから。」

春の日永を、盃がよち／＼と流れてくる。王肅之も見事に一首を作り、盃を拾つて飲み、又次へ流した。次にゐた行參軍の王豐之も及第し、曹茂も無事通過したが、參軍の劉密は、まだ第二句も書き終へないうちに、盃が目の前にきてしまつた。腹を立てゝ、盃を掴みとらうとした機みに、水を飲んだ盃は、ゆら／＼と沈みかけたので、劉は腕まくりして、やつと水中からつかみあげた。

雪の翌日のやうに、すつきりと、よい天氣である。池では鵞が頻りに啼き、竹藪では鳥が囀る。生温たかい風が、醉つた人々の面上を氣持よく吹き撫で、柳の枝が、ゆらりとゆらめく。

談ずるもの、笑ふもの、苦吟するもの、筆とるもの、飲むもの、食ふもの、水流に沿うて、四十二人の人々の興はだん／＼熟して行く。その間に、盃もだん／＼下の方へ流れてくる。自分の番に當つた上虞令の華茂は、飲んだ勢ひに、肌ぬぎになり、その大きな圖體を蛙のやうに這ひ、太い筆を執つて、林榮其蔚　淵激其隈　汎々輕觴　載欣載懐と墨痕淋漓と書き、

「どうぢや、當日第一の筆蹟ぢやらう」

と言つて、割れるやうに哄笑した。

酒豪の虞谷と后緜（府主簿）とは、詩よりも酒ぢやと言はぬばかりに、人々の間を泳ぎ廻つて盃を勸め、自分も飲み、一座を騒がしてゐる。酒に親しみの薄い府主簿の呂本や郡功曹の謝懌、王徽之、王豐之、王彬之等は、對談したり、耳掃除したり、讀書したり、畫冊を眺めたりしてゐる。そのうちに、后緜は醉つ拂つてとう／＼草原に眠つてしまつた。

司徒左西屬の謝萬、左司馬の孫綽、前餘杭令の孫統等は、詩も書も、きれいにすら／＼と書いてのけた。中にも王元之の、松竹挺懸崖　幽澗激清流　蕭散肆情志　酣觴豁滯憂の一詩は、字が殊の外よくできたので、皆からやんやとほめられた。

興はもう十二分を通り過ぎようとしてゐる。さつきから、澤山の人の對手をして、だいぶ醉つた右軍は、紙と筆とを童子に命じてとりよせた。紙は蠶繭紙、筆は鼠鬚筆である。墨もこく磨られた。右軍は、筆に程よく墨を含ませ、やゝ暫らく紙を見つめてゐたが、やがて、元氣に、そして用心深く、永和九年歳在癸丑暮春之初會于會稽山陰蘭亭……と書き始めた。流石に、皆はどや／＼と馳け寄り、その周圍に坐つて見つめてゐ

る。筆は型にはまつたやうに動いて、脩褉事也群賢畢至少長咸集と書いて行く。咳一つする者もゐない。奔放に走らず、愼重に縮まず、のびやかに、しかも崩れず、一字々々が彫刻のやうに、紙面に浮き出てくる。右軍の全精神をこめた字が、生きて動くやうに見える。興に乘じ、張りきつた元氣と、まだどこかにゆとりのあるやうな氣分で書き續ける字が、素晴らしくよく出來る。自分の力以上によく書ける。右軍は筆を運ばせながら、この力は、どこかに潛んで、假りに自分の腕を働かせるのではあるまいか、少しも骨を折らないで、こんなによく出來るのは、どうしても自分の力計りでないなどと考へ、自分を忘れ、夢中になつて書き續けた。そして亦將有感於斯文まで、三百二十四字を二十八行に書き、筆を靜かに置いて、ホツと輕い疲れの溜息を吐いた。側で見てゐた皆も、今更のやうに、その書品に見とれて感歎してしまつた。后綿と羨介は、醉ひつぶれ、草の上に、手枕でぐうぐう眠つてゐる。

「古今の絕品ぢや、王先生、これは所望するわけには參りませんかのう」

鎭國大將軍の卞廸が、いかにも欲しさうに言ふと、右軍は、

「いや、けふはいつになくよく出來た、折角ぢやが、これは、この會の記念として、わしとこに預けといて下さるまいか」

と輕く受け流す。

「ぢやア、先生のさつきの詩を一つ、お願ひ申す、けふは素手では歸れませんわい、アハヽヽヽ」

卞廸に追求せられ、右軍も苦笑して、又筆を執りかゝつたが、所望者が一時に詰め寄つたので、右軍は筆を置き、

「衆寡敵せず、逃ぐるに如かずぢや、アハヽヽヽ」

と言つて立ち上つた。

「さア皆さん、まだ會の方がしまひになつてゐませんから、元の場所について、終りまでやつて下さい。酒の醉もだいぶさめたやうぢやから、熱いのでも、こうぐつとやつてな」

謝安は童子に又酒を命じた。一同はどやどやと、又水邊に歸つた。

それから又暫らくは、酒が廻り、詩ができ、談笑の聲が續いた。そのうちに、孫綽の後序も書かれた。

さうしたさわめきのうちに、春の日も、いつしか暮れて行つた。人々はお互ひに名殘を惜みつゝ、覺め殘る醉を帶び、何だか悲しい心にさへなつて、紹興への山裾の道を、火をともして辿つて行つた。振り返ると、山は黑ずんで、星ばかりが殘つて白かつた。

永和九年と言へば、今から千五百七十年の昔で。東晉の穆帝の時である。その頃羲之は、吏部尚書として朝廷に招聘せられんとしたのを、臣は志廟堂に在らずとして斷り、右軍將軍會稽內史として山陰（今の紹興）に來り、山水に遊んでは、謝安、孫綽、許詢、支遁等文雅の友と唱和してゐた。

その日、右軍が書いた蘭亭序は、彼も人に分つのが惜しい位氣に入つたので、降るやうな所望も皆斷はり、大事に藏つてをいた。彼の死後も、その書は家寶として大切に王家に保存せられてゐたが、右軍七世の孫智永禪師は、會稽の雲門寺に住み、書室を法極閣と名づけ、そこで三十年間も書を學んだので、一かどの書き手となり、退筆塚人といふ禪師の雅號を慕つて書を賴みに來る者每日ひきもきらなかつた。禪師は一々斷はるのが面倒くささに、鐵門を造つて人を入れなかつたので、當時の人々は、これを鐵門限と呼んでゐた。

禪師の子に徽之といふものがゐる。これも俗を舍てゝ僧となり、越の永欣寺にゐたが、その書は、右軍と並び稱せらるゝほど巧みであつた。徽之の弟子に、これも書畫詩文に心得ある辨才といふものがゐたが、徽之は、死に臨んで、先祖から永く傳はつてゐた右軍の眞蹟蘭亭序を、この辨才にくれてしまつた。

なにしろ見るだけでも壽命が延びるやうに思はれる世に名高いその書であるから、貰ひ受けた辨才は、狂喜して神樣よりも大事に、ちやんと匣に入れ、人の氣づかないやうに、自分の寢室の梁上に隱して、めつたに人に見せようとしなかつた。

時の天子、唐の太宗は、二王の書が大變好きで、その眞蹟を集むること三千六百枚に上り、暇ある每に、魏徵と二王の書を論じ、古今の名家を談じて倦まなかつた。ある時魏徵は、蘭亭序のありかを不圖人から聞き込んだので、すぐに太宗に告げた。太宗は直ちに人を遣はしてこれを求めようとしたが、苦勞人の魏徵は、辨才もそれは命よりも大事に藏つてゐるに相違ないから、寄越せと命じても、恐らくないと言つて斷るでせう、ないと言はれてはどうにも仕樣がないから、これを引き出すには、多少の策略が必要です、そして急いては駄目ですから、まア時機をお待ちなさいと言つて諫めたので、太宗も尤もに思ひ、その時はそのまゝになつた。

翌年の春、太宗は辨才を長安に呼び寄せた。呼出し狀が屆いた時、辨才は、それが何の要件のためであるかを直感したので、豫め贋本を作り、これを携へて上京した。要件は果して豫想通りであつた。辨才は皇帝の前に、恭々しく贋本をさし出し、

「折角の御所望でございますから、手許にありさへ致しますれば、すぐにも御覧に入れるところでございまするが、實申しますると、その眞蹟は、兵火のため寺堂が燒けました時、共に燒失致しまして、この世からなくなりましてございまする。一世の寶を、誠に惜しいことを致した。よるひる、歎かぬ時とてはございません。その後ある知る邊からこんな模本を貰ひ受けまして、せめてもの愁ひを消してをりまするが、これにて宜しうございますれば、どうぞ永くお手許にお止めをき下さいませ。愁ひを消すつもりのこの模本も、時には却つて愁ひを增すことになりまするので、手許にない方が宜しいようにも思はれまする。………何でもこの蘭亭序の三百二十五文字は、右軍が、夢に、天台の白雲子から、永字の秘訣を授かり、その法で書いたものだとかいふ話が傳へられてをりまする。燒失致しましたのは、故人に對しても、相濟まぬことゝ、いつも心の中でくやんでゐますやうな次第でございまする」

としらが頭を下げて答へた。太宗は不快な顏をして默り込んだ。微は心の中で、こりやなかく面倒なことになつた、一通りの手段ではとてもとれまいと考へて、一とまづ辯才を下げた。少し逆せ氣味になつてゐる太宗は、辯才をそのまゝ長安に留め、密かに人を遣はして窃視しさせたが、只千字文の千文を得つて歸つただけで、目的のものは見つからなかつた。やがて辯才は、病氣と稱して越の國に歸つた。

それから暫らく經つて、一人の見知らぬ男が、每朝永欣寺の壁畫を見に來るようになつた。粗服をつけてはゐるが、どこかに犯し難い上品な容貌を持つてゐる。辯才も始めは氣にもとめなかつたが、每朝每朝その男が壁の前に立つてゐるのが、どうも何かわけがありそうなので、ある朝、あなたはどこの檀家ですかと尋ねると、その男は、自分は北方の者で張發といふ一學究ですが、暇に任せて名山大川を廻り、すきな書畫詩文などを書いてゐます、この壁畫が大變氣に入つたので、こうして每日お邪魔に來るのですと答へた。その樣子がさらりとしてちつとも嫌味がなく、いかにも俗を離れた風流人らしいので、辯才は內に招じ入れ、詩文を談じ、棋を圍み、琴を撫したが、この男何一つ出來ないものはなく、しかも皆その奥儀を極めてゐる。辯才は心中窃かに敬服し、夜まで引きとめて酒盛りを始めた。辯才はこの張を大變氣に入つたと見え、よく談じよく飲み、前後を忘れてメートルをあげる。そして卽興として、韻を探して詩を作らうといふことになつた。辯才は來の字をひき當てゝ、次の一首を作つた。

初醞一缸開　新知萬里來　[illegible]

步月共徘徊　夜久孤琴思　風長旅雁哀
非君有秘術　誰照不然灰

張は招の字が當つた。

邂逅款良宵　殷勤荷勝招　彌天假若舊
初地豈成遙　酒蟻傾還泛　心猿躁自調
誰憐失群翼、常若業風飄

初めて遭つた二人は、こんな風で大いに共鳴し、一見舊知の如く、夜更ける迄愉快に語り續けた。

二人の交際はこれから始まつた。會すれば詩を作り、文を談じ、酒を飲み、日月の過ぐるのを忘れるといふ風で、殊に辨才には、寂しい寺僧生活に、同趣味の濃い色彩が施されたことが、感謝したいほどに、嬉しくてならなかつた。その時辨才は年六十であつた。

一月ばかり經つたある日、張は、これは自分の祖先が書いたものだと言つて、職貢圖を持つてきて見せた。つくゞ見てゐた辨才は、口を極めて嘆賞し、それから又翰墨の話に移つた。

「私の家には、この外に二王の楷書が四五帖珍藏してあります、手許に持つてゐますから、今に見てやつて下さい」

張が言つたので、辨才は、見ない前からもうすつかりあがつてしまつた。

あくる日、張は、約束の書を携へて永欣寺に行つた。辨才は熟視して、それが疑ひもなく本物であることに、むしろ驚ろいてしまつた。

「自慢ではござらんが、實はわしとこにも王右軍の眞蹟が一本あるんぢや」

辨才は、何だかよいもの許り見せつけられ、自慢され通しなのが、少し癪にも障つたやうな樣子で、一つこんどはこつちから驚ろかしてやらうといふ氣もあつてそう言つた。

「ほう、右軍の眞蹟ですかい、それは定めし見ものでせうが、一體何帖だな」

「實は蘭亭序ぢや」

「あはゝゝゝゝゝなぶつちやいけませんぜ、今頃迄そんなものがあつてたまりますかい」

「いや、決してなぶるんぢやない、眞實あるんぢや」

「こればつかりは、何と言はれても信じられないね、永い間に、屢戰亂を經てきてるし、今日まで無事であらうとは、わしは信じないよ」

「そう思はれるのも、一應は無理はないが、實はその品物は、わしの先師徽之が死ぬ時に、わしにくれたもので、あんたも御承知ぢやらうが、徽之は智永禪師の子で、右軍七世の孫ぢや、

右軍もあれだけは家寶として永く子孫に傳へるようにと言ひ遺したに由つて、代々秘藏してゐたから、戰亂の餘波も蒙らず、けふ迄無事でゐたんぢや、これぱつかしは、あんたが何と言はれても、眞正眞銘の本ものぢやよ」

「どうだかな、わしには何としても合點が參らん、あるにはあつても、それは、失禮ぢや眞蹟ぢやあるまい、模寫ぢやらう」

「實物を見るのが何よりの證據ぢや、あんたの計りが本もので、わしのがにせとは限らん、あすお出でなさい、わしが自慢の一帖をとくと御覽に入れるから」

「いや、きつとお伺ひ申さう、樂しみにして待つてゐますぞ」

張は、門口を出る時、わなにかゝつた鳥を、目の前に見るやうな心地がして、思はず微笑をもらした。辨才は不興な面つきをして見送りもしなかつた。

翌日、張は約束の刻限に出かけて行つた。辨才は、前夜、人が寢靜まつてから、梁の上から例の匣を取り下ろし塵を拂ひ、寢床の中に隱してをいた。張が尋ねて來たので、早速匣を持ち出し、若々しくとり出して見せた。もちろんそれは本物であつた。張はこれを見て、態とらしく大いに驚き、前言を謝し、あらゆる言葉でその書法を賞し、併せてこれを秘藏する幸福を悦んでやつた。こゝに於て、辨才も心大いに溶け、又前の如く文事を語つて分れた。張の法帖は、暫らく辨才が借ることゝなつて、蘭亭序と共に机の上に置かれてあつた。二人の往來は、再び前よりも繁くなつた。

ある日、辨才が檀家に赴いてゐる留守に、張がきて、師僧が淨巾を忘れたそうで、わしが頼まれてとりに來たから、室の錠をあけてくれと言つた。弟子は、日頃親しい張先生のいふことだからと思つて、造作もなくあけてやつた。中に入つた張は、暫らくして出て來たが、挨拶もそこ〳〵に、うろたへ氣味に、寺門を出て行つた。弟子は、見送りながら、いつもに似ぬそわそわした樣子に、一寸不審を抱いたが、それもすぐに忘れてしまつた。

檀家の内にゐた辨才の許へ、都督齊美行から急の呼び出しの使がきた。何事が起つたのかと不審に思ひながら、すぐにかけつけて見ると、張を中央にして、都督の齊美行と、永安驛長の凌愬とが控へてゐる。樣子が愈分らない。兎も角、辨才は丁寧にお辭儀をした。そして何事を言ひ出すかと、樂しみに待つてゐた。

「こゝに居られる方は、御史蕭翼と申される、今回皇帝の勅命を奉じ、遠路そこ許を尋ねて參られたが、早や要件も濟んだから、今日出發して歸京される、今からお別れの御挨拶があ

る、その前に璽勅を拜してをけ」

齊都督はさう言つて、太宗帝の璽勅をさしつけた。辨才は跪伏しながら、何が何だかさつぱりわからずにゐる。何が別れの挨拶だらう。

「辨才、予は今齊都督が申した通り、御史蕭翼である。今回勅命を奉じ、遙々そこ許を尋ね參つたが、幸にして無事に要件も濟んだから今日歸京する、就てはこれまで永々厄介をかけて誠に濟まなかつた。お蔭で旅情を慰し、無聊を消すことができて、厚く禮を言ふ。ところで辨才、これは皇帝陛下に代つて、汝に禮を言はねばならぬ、そこ許を尋ねた要件といふのも、畢竟はそれである、辨才…蘭亭序はありがたく貰つて行くぞ」

「えツ」

辨才は、仰向けにひつくり返つて、そのまゝ人事不省に陷つてしまつた。そしてやつと目がさめた時は、もう蕭翼たる張先生の姿は見えなかつた。

長安に歸りついた蕭翼は、その功で員外郎に擢でられ、金縷瓶、瑪瑙盌、それに良馬莊宅などを賜はり、又蕭を使者に推擧した元齡には、錦綵千端を下賜され、辨才には、慳吝のかどを以て何も賜はらない筈であつたが、可愛想といふもんで、數日してから、衣三千段穀三千斛を下された。辨才はこれで三級の塔を建てた。

太宗は、多年望んでゐた書を手に入れて非常に喜び、馮承素、韓道政等に命じて眞蹟を摸寫せしめ、その榻本を皇太子、諸王、近臣に分ち與へられた。貞觀二十三年、太宗は病氣に罹り、玉華宮に幸し、含風殿に病を養ふたが、再び起たないのを知つて、蘭亭序眞蹟は、自分に殉葬するよう、皇太子に遺言して崩じた。かくて、稀世の珍は永久に土に化してしまつたのである。今日殘る蘭亭序は、もとより模寫の末裔である。

當日、詩二篇成りし者十一人、一篇成りし者十五人、遂に成らずして罰酒三觥に處せられたもの十六人あつた。その中には、酒豪の阮谷、后綿、鎮國大將軍の卞緬なども、名聲ある面を列べてゐる。

かくして、文事風流の曲水の宴は、こゝに先例を開かれ、今でも三月三日には、花下水邊に坐して、短冊に色紙に書を興ずものがあるようになつた。

蘭亭は今でもあるが、ある本に、この蘭亭といふのに、錦城は里と同意義で、即ち地名であつて、亭射の名ではない、尤も亭もあるにはあつたが、地名を亭名にしたので、その本末を違へてはいけないと書いてあるが、或はそうかも知れない。秦法の十里毎に一亭を造つたその驛亭の一つで、地名と同樣な名が

つけられたのであらう、むかしはそこに鵞が多かつたさうである。

山陰時代の右軍に就て面白い話がある。

今日右軍を祀れる廟には、極つて鵞池と名づけられる池がある。これは彼が生前鵞を愛し、池中に飼つて、その聲を聞くのを樂しみとしてゐたからで、鵞を愛してゐたからと言つて、何もその肉を賞美してゐたわけではない。九江廬山の右軍祠にも、紹興城内の蕺山にも、それから現在の蘭亭にも、鵞池が造つてある。明の高祖御製流觴曲水圖記にも、二羽の鵞を添へたのは、古人の心を汲んだので、實際當日も鵞がゐたといふことだ。

ある日右軍は、會稽山麓にゐる一人の老婆が、大變いゝ鵞を愛養してゐる噂を、ちらと耳にした。近頃は久しくよい鵞を見ないで、鬱いでゐたので、これを聞くと矢も楯もたまらず、友達を誘ひ、老婆の許へ買ひ出しに出かけた。行く道々も、評判通りとすれば、その鵞は丸々と太つた大きなやつで、啼く聲も、ひよつとしたら一里四方位に聞えるかも知れないなぞと、自分勝手なことを考へ乍ら、戀人の許へでも通ふやうに、氣もそわ／＼として落ちつかず、むやみに足を急がした。街を離れて野道を辿り、林の間をぬけると、もう聲が聞えさうなものだと、首をさし出し、右左を見廻したが、一向それらしい聲も聞えない。さうかうしてゐるうちに、一行は、教へられた老婆の家に着いた。

老婆の家では、けふ王先生が鵞を見にお出でなさると知らしてくれる者があつたので、老婆は朝早くから起き、それ／″＼用意して心待ちしてゐた。そこへ先生が見えたので、婆はいそいそとして招じ入れた。右軍はいきなり來意を告げ、一刻も早くその鵞を見せてくれと言つた。委細承知した老婆は、臺所へ引つ込んで、大きな鍋を下げてきた。右軍は御馳走なんかはどうでもいゝから、鵞を早く見せろと言ふと、老婆は平氣で、まアごゆつくりおあがりと言ひ乍ら、茶などを淹れて出すので　右軍は焦つて、一體鵞はどこにゐるのかと怒鳴ると、老婆は平氣で鍋を指した。

右軍は老婆の顏を見つめたまゝ、眞蒼になつた。元より蓋を取つて見る勇氣もなく、顏を掩ふてそこを出て、喪神したやうになつて、轎の上にぐつたりしてゐた。

そんな目に逢つても、鵞となると、右軍は目も鼻もなかつた。それから暫らくして、山陰の一道士の許を訪ひ、愛鵞を所

望すると、道士は、道德經を寫してくれたらといふ交換條件を持ち出した。金で書を賣らぬ右軍も、鵞のためには却つて欣々としてこれを書き、鵞を籠に入れ、にこ〱として持ち歸つた。

一日、右軍が蕺山を通りかゝると、一人の老婆が、六角の竹扇を賣つてゐるのに目がついた。默つて店の側に寄つた右軍は、その中の四五本に、五字づつ字を書いて與へた。老婆はとんでもないことをしやがると、口汚く罵つたが、右軍は微笑して去つた。あとで通り掛りの者がこの書を見、俺も俺もと百錢を出してその竹扇を買つたので、老婆は驚ろき、こんどは澤山の扇をかつぎ、右軍をたづね廻り、やつと探しあてゝ揮毫を賴んだが、右軍は笑つて何とも答へなかつたさうである。

古今第一人の書聖と言はれる彼の、書き捨られたものすら、眞蹟は今は見ることはできない。

蘭亭古蹟は、紹興から小舟で二時間、それから步行約四十分の山麓に在る。上海から紹興に行くには、滬杭甬鐵道で杭州に行き、錢塘江を渡り、西興から運河の小蒸汽に乘れば、そのまま紹興城外に着く。西興から紹興まで約七時間の運河の船旅は又一種の情緒がある。

蘭亭の入口には、幅三四間の清流がある。欄干のない橋を渡り、立派な道を十間許り行くと、樓門があつて、康熙御筆之寶の印ある蘭亭の額を掲げ、又少し行くと、文昌閣で、側壁に民國八年冬十月に建てられた重修蘭亭收支各款開列於後の石碑がある。義捐金約三萬元を以て修理した決算報告である。閣後はすぐ鵞池で、鵞池の石碑がある。小石橋を渡り、竹園を拔けると本園だ。まづ中央に十間四方位の平家建の流觴亭があり、その右手に右軍祠がある。祠中には晉右軍將軍王公逸少諱羲之神位の位牌を祀り、その左右に、當年脩禊を共にした四十一名の位牌が並べられてある。左右の兩廡內には、例に由り、澤山の詩文の石刻が、壁間に塗り込んである。流觴亭の後方に、康熙帝の筆に成れる行書の蘭亭序全文の大石碑があり、その裏面には、乾隆帝筆草書の一詩が刻されてゐる。碑は高さ約二丈、幅八九尺、厚さ約一尺で、支那に於ける石碑中の最大なるものであらう。この外庭園內には、倭小簡素な一棟の平家と、池と、「蘭亭」亭などがある。面積五六百坪もあらうか。墻壁はなく、直ちに畑から山林へつゞく。一寸よい別莊地である。

多くの記錄を綜合してみると、蘭亭は晉以後明迄全く湮滅し、方角見當さへ分らなくなつてゐたのを、明の嘉靖二十七

年、時の知府沈啓が、色々地理を相し、方位を定めて探してゐると、荒墟榛莽の中から、故址らしいところを發見したので、天章寺前に在つた蘭亭書院といふのをそこへ移して修理を加へ、水を引いたり、庭を造つたりして、どうやら形ばかりの蘭亭ができ上つた。この天章寺といふのは、今も畑の中に在る。開基は誰だか不明だが、宋の至道二年仁宗帝が天章之寺の額を賜はり、紹興八年には高宗が蘭亭の書を下賜せられたので、石刻し保存して置いたが、元末火災に罹り殿宇石碑悉く失ひ、右軍の畫像も燒失してしまつた。今は寺とは名ばかりの、見るかげもないあばら家で、本堂と覺しきあたりには、藁や薪などが一ぱいつめ込んである。

かうして明代にやつと出來上つた蘭亭は、その後燒失し、萬暦の初め、時の知縣徐貞明が、故址に亭を起して舊に復し、同十二年知府蕭良幹又更に修理を加へたが、以來顧るものなく、淸朝に至る五十餘年間に再び大分荒れてしまつた。それを康熙十二年知府弘勳再興し、乾隆帝の時も手入れし、最近即ち民國八年に大修理を加へて今日に至つたものである。だから建物は現代式たるを免れない。

そこに字を知らぬ番人の老爺が一人ゐて、朝晩米やら餅やらを搗いてゐる。ぼんか、ぼんたん、ぼんとこだまに返す杵の音を聞いて、永和の昔を思へば、その身が現世からのがれて、夢の昔に返るやうな氣もする。（完）

わが交友錄（二）

芥川龍之介

田端人

この度は田端の人々を書かん。こは必ずしも交友ならず。寧ろ僕の師友なりと言ふべし。

下島勳　下島先生はお醫者なり。僕の一家は常に先生の御厄介になる。又空谷山人と號し、乞食俳人井月の句を集めたる井月句集の編者なり。僕とは親子ほど違ふ年なれども、老來トルストイでも何でも讀み、論戰に勇なるは敬服すべし。僕の書畫を愛する心は先生に負ふ所少なからず。なほ次手に吹聽すれば先生は時々夢の中に化けものなどに追ひかけられても、逃げたことは一度もなきよし。先生の膽、恐らくは駝鳥の卵よりも大ならん乎。

香取秀眞　香取先生は通稱「お隣の先生」なり。先生の鑄金家にして、根岸派の歌よみたることは斷る必要もあらざるべし。僕は先生と隣り住みたる爲、形の美しさを學びたり。勿論學んで悉したりとは言はず。且又先生に學ぶ所はまだ澤山あるやうなれば、何ごとも僕に盜めるだけは盜み置かん心がまへなり。その爲にも「お隣の先生」の御壽命のいや長に長からんことを祈り奉る。香取先生にも何かと御厄介になること多し。時には叔父を一人持ちたる氣になり、甘つたれることもなきにあらず。

小杉未醒　これも勿論年長者なり。本職の油畫や南畫以外にも詩を作り、句を作り、歌を作る。呆れはてたる器用人と言ふべし。和漢の武藝に興味を持つたり、テニスや野球をやつたり

する所は豪傑肌のやうなれども、荒木又右衛門や何かのやうに精悍一點張りの野蠻人にはあらず。僕などは何か災難に出合ひ、誰かに同情して貰ひたき時には、先づ未醒老人に細々と愚痴を述べるつもりなり。尤も實際述べたことは幸ひにもまだ一度もなし。

鹿島龍藏　これも親子ほど年の違ふ實業家なり。少年西洋に在りし爲、三味線や御神燈を見ても遊蕩を想はず、その代りに錆きたるランプ・シエエドなどを見れば、忽ち遊蕩を想ふよし。書、篆刻、謡、舞、長唄、常磐津、歌澤、狂言、テニス、氷辷り等通ぜざるものなしと言ふに至つては、誰か啞然として驚かざらんや。然れども鹿島さんの多藝なるは僕の尊敬するところにあらず。僕の尊敬する所は鹿島さんの「人となり」なり。鹿島さんの如く、熟して敗れざる底の東京人は今日既に見るべからず。明日は更に稀なるべし。僕は東京と田舍とを兼ねたる文明的混血兒なれども、東京人たる鹿島さんには聖賢相親しむの情――或は狐狸相親しむの情を懷抱せざる能はざるものなり。鹿島さんの再び西洋に遊ばんとするに當り、活字を以て一言を餞す。あんまりランプ・シエエドなどに感心して來てはいけません。

室生犀星　これは何度も書いたことあれば、今更書き加へずともよし。只僕を僕とも思はずして、「ほら、芥川龍之介、もう好い加減に猿股をはきかへなさい」とか、「このステッキはよしなさい」とか、入らざる世話を燒く男に餘り外にはあらざらん乎。但し僕をその小言の前に降參するものと思ふべからず。僕には室生の苦手なる議論を吹つかける妙計あり。

久保田萬太郎　これも多言を加ふるを待たず。やはり僕が議論を吹つかければ、忽ち敬して遠ざくる所は室生と同工異曲なり。なほ次手に吹聽すれば、久保田君は酒客なれども、（室生を呼ぶ時は呼び捨てにすれども、久保田君は未だに呼び捨てに出來ず。）海鼠腸を食はず、からすみを食はず、況や烏賊の黑作り（これは僕も四五日前に始めて食ひしものなれども）を食はず。酒客たらざる僕よりも味覺の進步せざるは氣の毒なり。

北原大輔　これは僕よりも二三歲の年長者なれども、如何にも小面の憎い人物なり。幸にも僕と同業ならず。若し僕と同業ならん乎、僕はこの人の模倣ばかりするか、或はこの人を殺したくなるべし。本職は美術學校出の畫家なれども、なほ僕の敵手たるを失はず。只僕は捉へ來れ、北原君の藏家底を盜み得るに反し、北原君は僕より盜むもののなければ、畢竟得をするは僕なるが如し。これだけは聊か快とするに足る。なほ又序手につけ加へれば、北原君は底拔けの酒客なれども、未だ曾て醉うて崩

したるを見ず。縦に平生の北原君よりも手軽に正體を露すだけなり。かかる時の北原君の眼はその俊爽の色あること、甕中の人も及ばざるが如し。北原君の作品は後代恐らくは論ずるものあらん。然れども眼は必ずしも論ずるものありと言ふべからず、即ち北原君の小面憎さを說いて醉眼に至る所以なり。

交友八九人

田中純

性を交際文士のやうに言ふ人があるが、實際には、さう廣い交際などはない。勿論、交際嫌ひではないが、久米などのやうな淋しがり屋でもない。鎌倉に引つこんでゐた頃の或る時期には、一月も二月も、誰にも會はないで、毎日、日なたぼつこをして暮したが、それでも平氣だつた。結局、小遣ひの心配がなくて、その代り仕事もしないが、呑氣だつた。東京に來てからは、割りにいろ／＼な人に會ふ。現に、この下宿だけにだつて、宇野君が居り三宅君が居るので、その人たちには殆んど毎日顏を合せるし、三人のどちらかに共通した友人が來れば、その人たちにも會ふから、お互ひに隨分忙がしい交際になるわけだが、元來非常に出不精な私は、自分から誰かを訪ねて出かけるやうなことは殆んどない。その癖、誰かゞ訪ねて來てくれるのは非常に嬉しいのだが。

かうした私に、だから、非常に多くの交友などがあらう筈がない。求めない者には與へられないのだ。が、それが一部の人たちに、何となく交友の範圍が廣くて、身邊が何時も賑やかなやうに見へるらしいのは、多分、私の交友範圍が無系統で、早くから文壇の學閥關係などを無視したことによるのではないかと思ふ。實際、今でこそ、文壇に學閥の影が薄くなつて、赤門、早稻田、三田と云つたやうな言葉が、その意味を失ひかけては來たが、以前は決してそんなものではなかつた。赤門には赤門の氣風があり、早稻田には早稻田の氣風があり、三田には

三田の藝風があつた。少くとも、おの〳〵がさう思ひ、さう主張して來たのである。そして、彼れ等の交友の範圍も、大體、それらの系統によつたものであつた。三田と早稻田と赤門とが、新時代の名のもとに結束して、新感覺主義を呼號するなんてことは、その當時では全く夢想することも出來ないのであつた。

一例を擧げると、當時の早稻田派の鬪將相馬御風氏が、赤門派の寵兒鈴木三重吉氏に初めて會つたのは、相馬氏が越後に引退する僅か一二ヶ月の前だつた。その二人を紹介したのは、その頃新小說の記者をしてゐた私だつたが、この二人の初對面の挨拶の慇懃さには、私は心ひそかに驚歎させられたことを憶へて居る。

しかし、さう云ふ時代に、私は、學閥に無頓着な交り方をした。一つには、私が、早稻田を出ると同時に新小說記者を勤めたと云ふ境遇上の理由からだつた。それまでの長い間、反自然主義運動の先驅として、早稻田派を、と云ふよりも、島村抱月氏と博文館を向ふに廻して來た新小說は、その頃でも、早稻田派以外の作家との間に、いろ〳〵親しい關係を結んでゐたからである。が、今一つの理由は、私には、初めから學閥などの觀念が殆んどなかつたし、その上に、當時の早稻田派のあのじめ〳〵した氣風が、私には何うにも我慢がならなかつたからである。

私は、自分の職業上の必要から、學閥の墻を撤して、いろ〳〵な人々に會つた。そして、會つて居るうちに、自然に、自分の好きな人々との交りを深めて行つたのである。私が、吉井勇と飲み廻り、長田兄弟を識り、久保田萬太郎と會ひ、里見弴と語り合ひ、室伏高信と往來するやうになつたのは、みんなこの時期だつた。今から考へて、これがみんな名だゝる酒豪であるのを見ると、私と云ふ人間も、よつぽど酒好きであるには違ひない。

しかし、久米正雄と親しく交るやうになつたのは、それから少し後、私が新小說を止してからである。或る朝、吉井が私を訪ねて來て、一緒に淺草方面へ飲みに出かけた途中、電車の中で、當時失戀の噂高かつた久米の話しが出て、急に會ひたくなつて、藥研堀から呼び出しの使ひを出したのが、恐らく彼との親友づきあひの始めだつたらうと思ふ。その後の彼との交りに就ては、僅かな紙數ではとても書きつくせない。もしこれを書くならば、可なりに曲折もあり、辛みもあり甘さもある一大長篇になりさうだが、それは二人のうちのどちらかゞ死んだ後の仕事にした方が好いかも知れない。前號の此の雜誌に、彼は、彼らしい辛甘さで僕とのことを書いて居るが、まア、あんなものだらう。「欠點だらけだが、分つてゐる」とはよく言つてくれた。私が久米のことを書かされたら、やつぱりさう言つたかも

知れない。私の甘さが彼の辛さと食ひ合ひ、彼の甘さが私の辛さと食ひ合ふ——さう言つた關係が、長年の間にこん然とした友情になつて來たやうな氣がする。ただ、あんな場合、やつぱり、冗談にも、女房のことなぞは言はない方が好いな。どうも久米は、見物を喜ばせる術を知り過ぎてて困る。

さて、現在の私の交友狀態を記すと、大體、こんなことになる。

久米正雄——東京にゐれば、大抵、一日に一度か二日に一度は會ふ。私は出不精だし。彼は出好きだから、大抵彼が來てくれる。もう來さうなものだなと、心待ちに待つてるところへ、ひよこりと現れるのだ。そして彼に金がある時は何處かへ夕食に出るし、金がない時は、私の下宿で食べる。外に出れば、大抵彼の財布を當てにする。彼の方が稼ぎが荒いのだから止むを得ない。

吉井勇——一ケ月一度くらゐの平均で會ふ。會へば、普通り、二三日、彼の梯子酒のお對手をすることがある。

里見弴——二人が逗子と鎌倉とに住んでゐた時は、ちよいちよい訪れ合つたが、東京に來ては殆んど訪ねない。どちらも出不精で、誰かに誘はれなければ出ないからである。二人きりでは、一寸しんみりと話せる人である。

三上於莵吉——一人酒の飲めないらしい彼は、ちよいちよい山の上から、私を電話で呼び出す。この頃、あまり呼び出しがないのを見ると、彼の酒も少々世帶じみて來たのかも知れない。

宇野浩二——同宿なれば毎日一度くらい顏を合す。うまい茶を飲ませてくれるので有難い。苦患をすゝりながら謝家の創作を語つてくれるので、怠け者の私には啓發されるところが多い。

三宅周太郎——やはり同宿だから、一日一度は顏を合せる。合せると、しばらく話しこむが、私とは隨分違つた性格だが、知るに從つて不思議な親しみを感じて來る。

榊原直——一緒に盛岡に講演に行つて以來の友人だが、毎週月曜日に彼の家で開かれる榊原トリオの練習には、一ケ月に一度くらゐ傍聽に出かける。同じ夜に集るセロの平井保三、ヴァイオリンの多忠亮、聲樂の武岡鶴代など、彼に準じて親しい。練習が濟むのが十時、それから終電車近くまで、一緒に酒を飲んで別れるが、これが、今のところ、私の唯一つの悔ひのない享樂である。榊原は、我儘な父つちやん坊つちやんで、その稚氣愛すべく、平井は頗る生粹の江戸ツ子、多は快活な世話好き、武岡は氣むづかしい世話女房で、いづれもそれぞれに大い

によし。

和辻和郎――鎌倉にゐた頃よく會つたが、この頃はプランタン以外では會はない。一緒に地震の苦難時を過したせいか、時々思ひ出して、會ひたいなと思ふ少數の友人の一人也。そのほか、プランタンでは松山省三、佐々木茂索などによく會ふ。

北澤秀一――私の惡友を以て任じる男。何處からか惡錢を拉しては誘ひに來てくれる。たゞし、口ほどにはなく親切である。

羽太鋭治――花柳病の醫者だが、私には健康合部の主治醫である。だから、病氣にならなければ訪ねないが、彼の指示は的確で親切だから、健康に關してはすべて彼に信賴してゐる。一種の露惡家だが、無類に親切な友人である。但し、敵に廻したら怖い人らしい。

桃葉書樓師友錄抄

田中貢太郎

大町桂月

桂月大町芳衞先生は當年五十七歲になる。私には『桂月先生從遊記』と云ふ隨筆集がある。これは私が桂月先生に從遊した喜びを紀念するための著であるのは云ふまでもない。私が最初桂月先生に贄を執つたのは明治三十六年であつたが、その時は不幸疾病のためにすぐ國に歸り、明治四十年になつて再び上京して、改めて師事して今日に及んでゐるのである。

桂月先生は土佐藩の御馬廻り即ち騎士の家に生れたもので、呱呱の聲をあげたのは高知市の北門筋であつた。雅號の桂月は高知市の入口になつた浦戶港右岸の桂濱の月下漁郎と云ふ意から採つたものである。十八歲の時に上京して、今、雜司ケ谷の墓地に瓢簞形の石碑の建つてゐる酒徒で陸軍大佐であつた外叔の許に寄食して、苦學して帝大の國文科を卒業してゐたが、も

る冬の如きは一そろひの足袋がなくて、片方の足袋を穿いて學校に行つたことがあるとも聞いてゐる。

桂月先生の逸話はたくさんあるが、その中で桂月先生の人となりを良く現はしてゐる逸話があるから云つてみる。それは私が湯島天神の男坂の下にあつた日高有倫堂と云ふ書肆の編輯にゐた時のことであるが、ある日、私は他へ出かけてゐて、歸つてみると主人が雜誌の切り拔きやらの原稿を持つて來て『今日原稿を賣りに來たが、桂月さんの序文があつたから買ひました』と云つた。見ると何何すべきなりと云ふやうな所へ桂月先生が使ひ癖せになつてゐる也と云ふ文字などを使つて、口調も似せてあるが、筆蹟が全然違つてゐるので、『これは桂月先生の字でない』と云つてゐるところへ、折よく桂月先生が私に用事があつて逢ひに來た。そこで序文を桂月先生に見せると、桂月先生は笑ひ出して『也を書いてあるね。しかし、まア、僕の序文で買ふと云ふなら、ほんとうに僕が書かう。』と云つて、その場で新しく序文を書いた。

世間では桂月先生を目して活潑磊落の人としてゐる者もあるが、その實小心謹愼の老成人で、從つて平生は非常に謙遜で、『僕などはまア村夫子だ、文學者と云ふがらぢやない、』などと云つてゐるが、酒の日がつゞくと文學者としての自信が強くなるので、兎もすると夫子自身の口から「大文豪」と云ふ言葉が飛び出すことになる。それで同門の子弟は桂月先生と行旅を共にした者があると、『おい、今度は大文豪が出たのかい、』と聞いて、その行の如何を卜することになつてゐる。

馬場孤蝶

孤蝶馬場勝彌先生は彼の有名な馬場辰猪先生の令弟であるのは人の知るところである。高知縣高知市の生れで桂月先生に一歲の兄であるが、もう後一兩年で六十の老翁になる人とは思はれない若さである。ただ昨年になつて義齒を改めたがために猫のやうな顏になり、當年樋口一葉女史に一座にはんべるは美少年馬場孤蝶』と書かれた面影がなくなつたのを遺憾とするのである。

資性溫籍、寛厚の長者であるから、その門に遊ぶ者が多い。私も桂月先生について師事してゐる師父で、大正十一年には共に行脚をすすめて土佐の遊行を共にし、飯坂溫泉に遊び、昨年の五月には霞ヶ浦の水鄕に遊んだ。その水鄕に遊んだ時は、同門の安成貞雄一緒であつたが、安成はその遊行を最後として他去してしまつた。その霞ヶ浦行には、「桃崎大民」、「畑耕一」、佐々木味津三、「柳木類の諸君も一緒であつた。私は佐原の旗亭のほりお

ぜに、

行く春の佐原の里の小酒盛

入商押へて

とつをひつ

有明ぶしに春の行く

と戯句を書き、それには『孤蝶翁大にうかる』と附言した。

大泉黒石

黒石大泉濟は長崎市に近いイナサの生れである。イナサは嘗ロシヤの比には、毎年ウラジヲにゐる東洋艦隊が避寒に來てにぎはふ所で、この時になるとイナサの遊廓に女が不足するので、土地の貧しい女がそのすけに行くことになつてゐた。さうしてイナサにはロシヤ情調ができた。黒石はそのロシヤ情調の中から生れたものである。

黒石と長崎の中學校が一緒であつた俳友の一人は、黒石の祖父のことを私に話した。維新の際、長崎からも土地のあぶれ者を募つて、一隊を編成し、それを征東軍の旗下に送つたが、黒石の祖父もその卒伍の一員として、後に士族になつたのであつた。私が黒石を知つたのは大正七八年の頃であつた。ある日、『謡の世界』と云ふ雜誌を發行してゐる神田の書肆へ行つてみると、紅玉碧眼の青年が原稿を持つて來てゐた。それが黒石であつた。話を聞いてみると、ロシヤの革命にも遭へば、トルストイにも會ひ、中學校の教師をしてゐたドウデーには耳をひつぱられたと云ふやうなことを云ひ、最近の出版だと云つて何所かの赤本屋で出版したらしい『俄ろ馬車巡禮』と云ふやうな自著を持つてゐたので、拾ひ讀みしてみると、なかなか旨い所があるので、中央公論に紹介してやることになり、日を期して牛込加賀町の印刷所へ校正に行つてゐる瀧田君の所へ伴れて行つた。そして黒石に内容の話をさしたところで、ドウデーの耳になると、樗陰先生は、『年代がちがふが、』と笑つたが、黒石の紅玉碧眼に興味を持つてゐるので、書かしてくれることとなして書いたのが、『俺の自叙傳』であるが、あれは要するに小説である。

そして『俺の自叙傳』が完成して、玄文社から單行本になつた時、私逹が發起して、紀念の會を日比谷の松本樓でやつたが、その晩、數人の者で黒石を取り捲き、新宿の某所へ行つたとこで、黒石の室にゐた女が出て來て、私に、『あの方はすこし違ふは、ね、』と云つた。私は、『すこし違つたつていいぢやないか、』と云ふと、女は『まるきり日本人がいい、わ、』と云つた。黒石は幽幽たる好者であるが、時ドウデーの耳が交る

ので人から誤解せられる。昨年の八月にもフランスに行くと云ふので、大大的に送別會をやらうと云つて、そのつもりでゐると樗陰先生が、ドウデーの耳を思ひだしたのか、『もしものことがあると幹事をやつた者が困るから。』と云つて、島中雄作、生方敏郎、村松梢風の三君を交へて、五人で、不忍池畔の『笑福』で一席の宴を張つたが、それもやつぱりドウデーの耳であつた。この野郎しつかりしろ。

生方敏郎

世間では生方敏郎を警句家諷刺家として見てゐるが　彼の眞骨頂は創作家である。まだ時が來ないのか、彼が安逸に流れてその方に心を向けないのか、それは判らないが、從來ちよいちよい書いた物の中には佳い物がある。私の見た物の中には、『田中純が新小説の編輯をしてゐる比、新小説に書いた物などは、逢つた味のある面白い物であつた。女とあひびきする標に暖いのにインバを着、キリギリスの籠を持つて江戸川の橋の上を往來する情景などは今に忘れないところである。

敏郎は上州沼田の産である。『上州名物、嬶天下にからつ風』なるほど敏郎は小さい時からその風に吹かれて營養をさまたげられたと見えて、痩せて木の端のやうに見える男であるが、口辯の雄で、閨房の秘密まで、あけすけに喋つてゐるやうに思はれるが、その實志慮周匝、肚の中では別にしつかりと考へてゐるところがある。交友としては小面にくくもあるが、これが、また男らしくてたのもしく思ふのである。

松崎天民

天民松崎市郎は直情徑行の士である。人の目色を見ずに思ふことを口にするところに純粋愛すべき所がある。しかし、それがために咏歎に支配せられることがある『おい天民さん、この次は、六十男の悲哀だね、』と云ふと、『田中貢太郎、馬鹿云ふな、』と云つて笑ふ。私とは非常に嫌厭相通ずるところがある。『おい天民さん、影がうすひぞ、』とからかふと、『田中貢太郎、まだ生きてゐるのか、』と酬うて來る。

天民は作州の産、杉村楚人冠について、新聞の雜報を讀物にして、所謂情話を創始した人である。彼は魚の乾物が好きだと云ふので、ある時、土佐のうるめ鰯を持つて訪問して見ると、ちやうど遲い朝食を攝らうとしてゐるところであると云つて、非常に喜んでくれた。冷たい飯に熱い茶をかけ、乾物をお菜にして喫ふと云ふ趣味は私も天民と共通してゐる。その天民ももう五十の老翁となつた。

村松梢風

梢風村松義一は靜岡縣周智郡飯田町の産で、明治二十九年の生れと云ふから私達よりはよほど若い。私が中央公論へ『殺人殺し』と云ふ物語を書いた時、梢風はそれを見て物語を書く氣になつて書きだしたと何時か自分で話したことがあつた。

梢風は酒嗜會中坐談の第一人者である。大正十二年上海で一緒になつた時に、ボーツーロの貸室でさんぎりの婦人と同棲してゐた。朝遲く私が出かけて行つてみると、金盥へアルコールを浸した綿を入れ、それに湯沸をかけて湯を沸かしながらパンを喫つてゐた。背に思へ、色の蒼惡い頬のすこしこけた作のひよろ長い男と、小さな顔の蒼白い瘦せた女とが二人でげんなりと椅子に腰をかけてパンを撮んでゐる傍に、青い燒酎火がとろとろ燃えてゐる。それを見せられては、僕でなくとも前世にさ[illegible]はりがあつて一緒になることのできなかつた相思の男女が、幽界でそれも劫火の燃えない刹那の隙を窃んで前世の思ひを晴らさうとし、それで湯を飲まうとしてコップを執ると中から青い炎が燃え立ち、パンを喫はうとするとそれが赤い火になると共に、劫火が炎炎と燃え上つて、男女の二人は世にも悲しさうな叫びをあげて消えてゆくと云ふ、草双紙にあるやうな光景を感じない者があるだらうか。それに二人は午食にクマロの菓子屋へ行つて一ドル均一の輕い洋食を攝り、晩には天どんもすき燒もできる日本租界の『三竹』と云ふ蕎麥屋へ行つて二三圓ふんぱつして、鳥のすき燒ではじめて米の飯を喫つてゐるのを見ては、私は賽馬で二十五萬ドルを取りたいと思つた。この相愛の男女は、私が七月になつて東京へ歸つた時には、もう一緒にゐなかつた。人に聞くと、最初は飯田町の飯田館に宿泊してゐたが、まもなく音羽の小さな旅館に移り、そこから又下谷あたりへ下宿してゐたが、そのうちに女は何所かへ行つてしまつたとのことであつた。私はつくづく上海の賽馬の二十五萬ドルを取らなかつたことを殘念に思つた。

中村武羅夫

中村武羅夫君はもと桂月先生をたよつて北海道から出て來たと云ふので、同門のやうな氣もするせいもあらう、そんなに時時は逢はないが逢へば杯を共にすることになつてゐた。

世に偸盜の友と云ふことがあるから、私と武羅夫君とは偸盜の友と云つていいだらう。私がはじめて武羅夫君に逢つた時は、なんでも正月らしかつたが、今大久保彦左衛門、その時は閣下の一物によりをかけて、ボンと叩き初對面の私に「どうで

す、これは、…と云つた。座には加藤武雄君であつたか、はつきりした記憶がないが何人か新潮社の人がゐたやうであつた。

酒中印象二三

葛西善藏

舊「奇蹟」同人のことは、新潮の印象記などの場合で、お互に幾度も書き合つてゐるので、特に言ふほどのこともない。その他には、僕は文壇には殆んど交友といふものを持たないといつていい。奇蹟同人を通しての友人か、その他極く少數の友人もあることはあるが、引込み勝ちの僕のことで、誰とも一年に何度と指を折るほどしか會つてゐない。

秋聲先生にはかれこれ二十年ほど御世話になつて來てゐる。先輩としては相馬御風さん、中村星湖さんなどの御好意を受けた。その他の諸先輩、敬意を抱いてゐる文壇の諸君にも面識を得てゐる方が、餘程少ない位である。

で、こんな譯なので、僕の乏しい記憶の中から、二人きり差し向ひで飲み合つた文壇諸君との、その時の一二の印象を述べることにしますかな。

奇蹟同人の中では廣津も一月の新潮に書いてゐたが、何んといつても死んだ光用穆君は僕の一等の飲み合棒だつた。さういふ點からも、僕には惜しい友人だつた。昨年の十月死んだ相馬泰三君も奇蹟時代以來の、飲み合棒だつたのだが、恰度四十といふ年で斃れた。ほんの二三度輕く飲み合つた間柄ではあつたが、腦溢血で頓死された安成貞雄君のことを、朝新聞で讀んだ時には、聊か愕然とした氣持ちに打たれた。出不精で、滅多に悔みなど出かけたことのない自分なんだが、その朝は九時頃に下宿を出て名刺だけ置いて來た。そろ／＼自分も年貢の納め時に迫られてゐることゝ思ふと、あまりいゝ氣持ちはしない。

友人以外の文壇の諸君と、最初に二人切りで飲み合つた人は、現在に活躍してゐる人では久米正雄氏からかも知れない。萬造寺齊君の方はちよつと前なんだが、萬造寺君は今どうして

ゐられるか。七年前の夏、信州別所溫泉で落ち合つたのが、剛君とも初對面だつた。萬造寺君の酒は實に愉快な、飛躍的な酒であつた。僕は三十三の年だから、久米君は二十九の若さだつたのだが、今考へて見ても、酒客としても立派に出來た、しつかりした酒であつたといふことが、ちよつと不思議な氣さへされる位である。その後君とは二人切りで飲み合ふ機會はつひぞなかつたのであるが、偶々一座に連つて彼の醉振りに接したこともあつたが、やはり當時の印象とちつとも變つてゐない。容易に取り亂さない、腹の出來た酒であることを思はせる。

　秋、別所から歸つて、今の下宿で、初めて中戸川君と會つて一二本ビールを飲み、それから外へ出かけたやうな記憶がある。君はまだ二十四才、新進氣鋭の時分だつたので、「犬に顏をなめられる」といつた小說を書いたりした時分で、人懷こく、面白い酒だつた。その時分とは比べて、隨分大人になつたやうで――當然の話しなんだが、酒も亦ひどく大人臭い飲みぷりになり、嚴しい酒になつて來てゐるやうに思ふ。といつて、自分の酒はもつともつと險惡なものになつて來てゐるらしい。二三年前だつたか、箱根の歸りだといつて僕の部屋借りの寺に、ちよつと寄つてくれたことがあつたが、終ひに喧嘩なぞおつぱじめて、大いに恐縮したことがある。

足かけ五年ほど建長寺内にゐたのだが、雜誌關係以來の作家で、訪ねて來てくれて二人で飲み合つたやうな例も、殆んどないといつていい位だ。精二君が泊りがけで來てくれて飲み合つたり、恭三君や舟木重雄、重信兩御兄弟が訪ねて來て飲んだりした外には、田中純君も一二度も來たり、自分の方から押しかけて行つて飲んだりしたことがある位のものかも知れない。田中君の酒は實に落ち着いた、こなれた、素面の時と殆んど變りないやうな親切な酒である。田中君のことで思ひ出したが、いつ頃だつたか、川路柳虹君がまだ太陽の編輯をしてゐる時分、二人でやつて來て三人で飲んだのだが、酒が廻ると、あの羊のやうなおとなしやかな眼した、小柄な、瀟洒とした洋服姿の川路柳虹君が、學校時代のチヤカホイ、チヤカホイといふ歌を唱ひながら踊つたが、高いお寺の天井に屆きさうなほど、三四尺も輕快に飛び上りつ踊り廻つたには、自分は心から愉快な驚嘆を感じさせられたものである。その後一度も柳虹氏とは飲み合ふ機會を持たないが、その時の印象を自分は忘れることが出來ない。

　重雄君とは以前隨分飲み合つたものだが、最近機會を得す。重信君は篤學溫厚の人だが醉ぶりは放膽なところがある。光用穆君、宮地嘉六君、相馬泰三君などとも以前は隨分飲んだものつ

だが、久しく會はない。精二君は自分では醉振らふほど飲まない酒だが、酒飲みづき合ひの出來る面白い酒なんだが、昨年の夏以來會つてゐない。僕の最も寂寥とするところである。三上君、宇野君、ともに然り。病弱蟄居、遊里の嗜みを解せざるを嘆く。

どうも、喋舌るのがかなり嫌になつた。天子喚び來れども、ぢやないけれど、盃中の印象は喚び來らされども多々あるんだが、もう嫌になつた。里見君のだけ一つでやめにしやう。

十一年の暮だつたと思ふ、里見君とはその前一二度は何かの會の席で會つてゐるといふだけの間柄なんだが、恰度新年號の原稿を書きに扇ケ谷の香風園に來て居るといふことを聞いてゐたので、或る日の午後、香風園の隣りのちよい〳〵行く鑛泉に入りに、手拭を持つて出かけたのだが、ふと香風園に寄つてみる氣になつた。自分も新年號のものを書けずに寺の暗い部屋で閉口してゐる場合だつた。たしか久保田君も香風園に來てゐるといふやうな消息を、自分は新聞で讀んで居た。そんな場合でもあつたので、自分は風呂行きの姿で、つい寄つてみる勇氣も出たわけだつた。多分二時頃だつたと思ふ。園内の離れでしばらく雜談した上、本館の鑛泉に一緒に入り、そこの廣い立派な座敷で、自分は上座に据えられて慇懃なもてなしを受けた。久保田君はまだ來て居ないらしかつた。美しい女中や、太つた女將さんなども出て來て踊つて見せてくれた。たしか里見君も三味線を彈いて長唄をやつてくれたやうである。今迄に、後にも前にもかうして二人で飲み合つたことは初めだつたが、流石に周到にして溌溂たる、酒客としての氏の面目には、自分はかなり感心させられた。裝つてゐるやうで裝つて居ない自らなる嚴しい態度、節儀ある應待――何しろあれだけの鋭い才氣の人だから、ともすると脱線しさうなところを引きしめて、ウソやゴマカシを言ふまいと力めてゐる張り切つた心持ちは、長い酒の間にもちつとも弛められては居なかつたやうな感じを、自分は與へられた。醉うて來るに從つて、烈しく眼をパシ〳〵さして相手の眼に喰ひ入つて來るのが、それがやはり、ただの眼付きでないことを自分に思はせた。この頃文士野球團の仕合ひで里見の眼がどうとかかうとか記事を自分は新聞で讀んで、自分は微笑を感じさせられたのだが、昔太閤様が朝鮮の使者を追ひ歸へした時、使者は國へ歸つての報告に、他の奇なしただ廣の上に落つこつた雷のやうに鋭い眼だと、國王に言つたさうだが、多少さういつた感じがあるやうに思へる。とにかくにかなり鋭いいい眼をしてゐると思ふ。横から見た鼻の線なぞには、流石に爭はれない氣品を感じさせられた。

で、その時の話なんだが、お互の年の話になつて「一たいあなたは何のとしですか？」と彼に訊かれて「僕は三十六の亥の五黄です」と云ふと、

「さうですか、あなたは五黄ですか、なるほどねえ！私の友人では水上瀧太郎君――ちよつと逢ふやうですけれども長田幹彦君、なるほどねえ、とにかくちよつと角が立たないと言つた感じのところを持つてますねえ。實はうちの大きい兄も寅の五黄なんですが、私なんかにはちよつと、何と言つていいですかなあ、とにかく大きい兄にはかなわないと思はされることが隨分ありますね、ちよつと角の立たない感じですねえ……」かういつて里見君は、幾らか嘆息の調子だつたやうに、自分は憶えてゐる。

中戸川君のことを書いた新潮の小説のことに就て、「直輔の夢」に就ての君自身の感想、琅麟錄に就いて、生馬さんが僕の短篇集「悲しき父」を賞めてゐたので君も讀んでくれたといふこと、その他自分にはかなり有益な話題もあつたやうに思ふ。その時の約束で君は直に、僕に「直輔の夢」を贈つてくれたのだが、僕のふしだら、未だに「悲しき父」を贈らずに居ることを、心がゝりに思つてゐる。

ところがその翌年の秋でしたか、武郎氏輕井澤事件と、その晩の里見氏の言葉と思ひ合せ、未だにいろ／＼なことが考へなされて、自分は暗然とした氣持ちになることがある。

その他在中印象擧げ來れば、それこそ數ふるにいとまなしなんだらうが、水守君、中村武羅夫氏、久保田さん、吉井さん、殊に隨筆以來の友人なんだが、牧野信一君とはかなり飲み合つてゐるやうだが、また後日の機會を待つことゝしやう。牧野君の酒も相當に難しく、それだけに年にしては行き屆いた酒だと思ふ。

酒は年齡、地位、貧富、智識――さういつたものゝ凡てを離れて酒飲は酒飲みとしての親切、氣合ひ、禮儀――さういつたやうなものでつながつて行くものらしくも考へられるので、あるやうでないのはしんからの飲み合掃である。それだけに死なれたり遠くなられたりする酒飲みのさみしさは、酒を飲まない人には判らないことだと思ふ。

諸兄等の健康を祝し、盃を乾して此の口述を了る。

――二月七日夜――

スバル時代の友だち

長田秀雄

心をゆるすもゆるさぬもない。昔の友だちの内で出會つてゐれば、他人といふ意識が、少くとも大部分なくなるやうな種類の人がゐる。

木下杢太郎君と私との交はりは、數へてみれば、もう廿四五年にもならう。私が、まだ獨乙協會に通つてゐた頃からの同窓生であるから……

中學を卒業する頃、杢太郎は、家庭で要求するとほり醫者にならうか、それとも文學で立たうか、繪を畫いて一生を送らうかと云ふ點で、大分迷つたやうであつた。

然し、彼は、家庭の要求にしたがつて、醫者になるべく高等學校の三部に入學した。

私たちは、若い一向な心から、會へば必らず文學を論じた。

彼が、大學へ進んだ頃は、彼も私も詩をつくつてゐた。

そこに、北原白秋がやはり友人として現はれてきた。北原は、もう新詩社で青年詩人として一家をなしてゐた。

吉井もゐた。私の弟の幹彦もゐた。期せずして、私の飯田町の家は、その頃の詩人たちの倶樂部になつてゐたのであつた。

吉井がすばらしい歌や詩をつくつてゐたのは、やはりその頃であつた。

あの時代は、まことに夢の多い時代であつた。弊衣破帽の木下杢太郎が、日本橋の居酒屋で、勞働者たちと一緒に酒を飮んでは歌を唄つたりした。日本橋の裏町の方へ行くと、あの頃までは白壁の土藏が並んでゐたり、その間に、舊來の日本建築の商店を、そのまゝ面白く洋風にかざつて、落付いた感じを持つた洋食屋などがあつた。

杢太郎や私や、吉井や北原などで、よくさういふ處で知僻したものであつた。永井荷風氏がきたり、蒲原有明氏がきたり、高村光太郎氏がきたりした事もあつた。

今のメーゾン・コーノスが、小網町のさゝやかな通りに始め

て店を出した頃で。五色の酒が世の中に現はれた始めであつた。

ゴーノスの二階で、エスカルゴや蛙を食ひながら、みんなそろそろ興味をおぼえて來たドラマの議論をしたり、詩をつくつたりした。パンの會が生れたのは、その時分であつた。

杢太郎と北原と私とで、屋上庭園と云ふ同人雜誌をつくりはじめた。物價の安い頃であるから、相當にいい紙をつかつたり、ぜいたくな色ずりを入れたりしたが、それでも安いものであつた。杢太郎と私とで、故人になられた黑田淸輝氏を訪問して同氏のデスサンを每號表紙に貰ふ事を願つた。

黑田氏は快よく承諾して下すつた。

雜誌は北原の「おかる」の肉體を唄つた詩のために二號で發賣禁止になつた。それつきりもう、出なくなつてしまつた。今では、もう何處にもあるまい。私の家に四五冊づゝあつたのを好事の士に求められたので一部づゝ殘して上げてしまつた。

日本の文化に始めて西洋の文化が流れこんだ時代が、大へん私どもの興味を曳いた。

「南蠻」、「長崎」「デウスの鐘」など云ふ言葉が、美しい魅惑となつて、私どもの空想を刺激した。

この頃の杢太郎の脚本や詩や、北原の詩などを讀むと、廿年に近い昔の私たちの若い心が、自づと引出されて、不思議ななつかしさが湧出てくる。

その頃の文壇は、硯友社の沒落した後で、丁度自然主義が新興した時であつた。

早稻田出身の文士が時を得顔に、文壇を橫行してゐた。愚にもつかないやうな事が、さも重大らしく論ぜられてゐた。

成程、自然主義は、德川時代から續いた日本の小說の傳統を破つて、嚴肅な人生を見せてくれたには違ひないが、彼等の徒は、藝術に一番大切な詩を忘れてゐた。少くとも大部分の人たちは、さうであつた。

私たちは、屋上庭園と並んで發刊せられた「スバル」によつて、彼等に對抗した。

スバルには、先輩として故森林太郎先生、上田敏先生、與謝野御夫妻などがゐられた。

その他平野萬里、茅野蕭々、高村光太郎、吉井勇、木下杢太郎、私弟の幹彥などがゐた。スバルの發刊に非常に力を盡したのは、もう故人になつて十年にもなる平出修君であつた。平出君は少壯有爲の辯護士で、自身小說も書いた。

資本の方は平出君が世話をして居られたから、每月の會計も同君の手で整理されてゐた。同君なくんば、スバルは決してゐ

れ程、文壇的に成功はしなかつたであらう。

いま、スバル時代の諸先輩を憶ふと、森、上田の兩先生は、旣に故人である。その他の人も、わづかに與謝野御夫妻をのぞくと、文壇に顏を出してゐる人はあまりない。年月の經過は、わづかに廿年、まだ昨日のやうな氣がするのに、もう、いつか私も四十の聲をきいてしまつた。

スバル一派の人たちは、まだ若かつた。朗らかな享樂を希ふ心と、詩を追求する心とで一パイになつてゐた。私は別に此處で彼等の藝術的傾向を論じるつもりはないが、要するに自然主義の思想にあき足らなかつたのである。

私たちは、パンの會によつて、享樂を希ふ心持を、實行した。パンの會には、當時の文壇の人と美術家の大部分が集まつた。日本の文化の傳統と南蠻、あるひは西洋の文化の不思議な調和をよろこぶところから、會場は、やはり、前にのべた日本橋の裏町の洋食屋のやうな處を撰んだ。

壁間に浮世繪と外國のヒラのやうな物を並べて飾つたり、藝者を椅子にかけさせて、三味線を曳かせたり、北原の美くしい詩を合唱したりして、一種の異國情調をつくり上げた。

その頃、はじめて、日本に新劇の運動が起つた。一つは坪內博士の文藝協會の運動であり、一つは小山內、左團次兩氏の主宰する自由劇場の運動であつた。

その前からドラマに興味を感じてゐた私たちは、主に自由劇場の運動に刺激されて、ドラマを書き出した。吉井の美くしい戲曲が生れたのはその頃である。

木下杢太郎もドラマを書いた。私もやはり詩からドラマにはしつた。

吉井や私や秋田雨雀君のドラマが、始めて自由劇場によつて演出されたのも、やはりその頃であつた。

自然主義一派の人たちは、小說を主とし、スバル一派は、戲曲と詩とを主とするやうに自づから分れてきた。

* * *

その頃の交友は、多く離散してしまつた。

木下杢太郎は、それから、長い間、滿洲の學校で先生をしてゐたが、四五年前に西洋へ行つて、やうやく去年の暮に歸つてきた。

顏が大きくなつて、額の處に一かたまりの白髮が出てきた。

北原白秋は、小田原にゐるので、あんまり會はないが、これは、ますます肥つて、頭が禿げてきたやうだ。そして、相かはらず酒を飲むと躍るさうだ。

吉井は仕事の都合やら、東京に居ついてゐる關係から、一番

よく會ふ。一番變らないのは、吉井であらう。然し、當年の從五位さまも、この頃では、年を取つて、氣むづかしさうな顔付になつたのは、やはり爭はれ

善友惡友珍友奇友

松崎天民

一、友情と年賀狀

毎年、年賀狀を五百自乃至六百通は出す。如何にも友人、知人が多いやうであるが、果して眞の友達が、幾人あることか。一々、宛名を書きながら、何時も、淋しい心持がする。それでも、元旦の朝になつて、玄關先に一束の賀狀が、ドサリと置かれる刹那には、何だか心強い氣持がするのである。この感じを起させてくれるだけでも、『友達や知人は、澤山、もちたいものだ』と言ふ心持がする。

友情とは、こんなに淡いものか。

二、二人の亡き友

ほんとの友達らしい氣持で、頼り（たよ）にして居た人は、皆、若死（わかじに）をしてしまつた。あの男が生きて居たならと、月末に屈托する折々、ほんとに、亡友の一人二人が懷しくなる。

米國へ渡つて、寫眞術を專攻して歸つた水井宗太郎は戀人（こひびと）に啖（たん）を拭いて貰ひながら、京都大學の病院で死んだ。小説家になるのだと言つて、幸田露伴の弟子だと自稱して居た田中稻月も血を吐いて死んでしまつた。

好い友達は、皆、夭折するのか。

三、親友は貧乏だ

惡い友達ばかりが長命（ながいき）して居るのではない。私にも一人や二人の親友はある。いざと云へば、大事の心配を半分分けにし

て、自分の事のやうに、苦勞してくれさうな友達が、少くとも、一人か二人は有る筈である。

けれども、『今困つて居るから、百圓ほど何とかしてくれないか』と云つても、おい、それと出してくれるやうな友達は、今のところ一人も無い。私も隨分、内實は窮迫して居るが、賴りになる友達も、金には困つて居る。

四、ニコ〳〵山人

多いのは、遊び友達である。ニコ〳〵山人松永敏太郎翁の如きは、私の最も推服した遊び友達であつた。『酒が飲みたい』と言へば、何時でも、何處かへ連れて行つてくれた。

それほど親しくなくても、亡くなつたと云へば、何だか急に身の廻りが、寂しくなつたやうに感ずるところがある。長田秋濤翁の死んだ時が恰度さうであつた。松永ニコ〳〵山人よ、願くば酒のために、此の生き甲斐ある世の中を、早く去り行き給ふこと勿れ。

五、結城禮一郎氏

同じ年齢ではあるが、友達といふよりも、恩人であり、先輩であるのは、結城禮一郎氏である。新聞記者としての手ほどきを、私に授けてくれた唯一人で、私が今日の私として、新聞記者として在り得るは、結城氏に負ふところが多い。私は結城氏にどんなに威張られても、遂に頭が上らないのである。

新聞界の鬼才とも言ふべき結城氏が、久しくその手腕の冴えを見せずに、遊んで居られることは、我が新聞界にとつても、大きな損失であると思ふ。——

六、酒の兒玉花外

忘れ得ぬ友達として、私は兒玉花外君を思ひ出すことが多い。詩人としての情熱や、その作品などは問題で無い。素面で居る時は、淋しさうに見えるが、飲めば止めどもなく奔放になつて、『おい、こら、松崎……』などと云ふ。あの酒の兒玉花外君を私は長かるべき將來にも、遂に忘れることが出來ぬであらう。それほど兒玉花外の醉態は、私に親しさと懐しさとを、感じさせて居る。

相逢はぬこと、思へば六七年にならん。

七、益友北澤秀一

北澤秀一君は親友の一人である。時には[illegible]いけ[illegible]、頭腦の明敏な、常に有益な刺戟を[illegible]一人であ

る。

新聞記者生活から、滯英三年歸朝後は讀賣新聞に勤めたり、日本活動寫眞會社に入つて、愉快さうに働いて居た。手腕よりも頭腦の方が、先に發達した人だ。押しも押されもせぬ近代人の性格を具へて居る。好き舞臺に立てば、ウンと働き得る人であるが、一日も早く、落着く所に落着かせたいものである。

八、路傍の音樂者

添田啞蟬坊とは一淺草の會」で知り合つたが、流行唄の本家本元としてよりも、長髮のスタイルよりも、彼の有つて居る熱意に、私は引ずられて居る。下谷山伏町の貧民窟に住で、四疊半一室の家に、平然として淸貧を體驗して居る風格は、尊敬すべきである。

深切な實意があつて、いざと云へば火の中へでも飛び込みさうな、一種の實行力をさへ、蓄積して居さうに見える。彼は其の不平と憤悶とを、流行唄に遣つて居る革命兒か。

九、魚善の岩崎君

日比谷交叉點の山勘横町は、花月食堂に相對して、魚善といふおでん茶飯屋がある。岩崎善右衛門君と云つて、時代に對する不平と、人間に對する仁俠とを、ゴッチャ交ぜにしたやうな好漢である。五六年前から、その茶飯を食べに行くやうになつて、岩崎君と知合になり、知遇を辱ふして居るのである。『松崎さん、一杯やりませう』と云つて、よく方々で御馳走になる。小金に困つた時には、何時でも工面してくれる善友である。

十、羊公と天華と

田井羊公は、新聞の社會記者として、第一流の男であるが、神經を病むでから、ブラブラして居た。舊友で親友の一人であるが、今は何うして居るか。親しい友達であるだけ、それだけ平生は、音沙汰が無い。

和田天華は、神戸で新聞記者として働いて居る。大正三年に、私が東京朝日を退社した時、彼がたつた一言であつたが、交詢社前の路傍で、私を泣かせるやうな文句を言つた。その時の友情を、私は長く忘れることが出來ぬ。

十一、田中貢太郎君

一番親しく往來してゐるのは、村松梢風君である。生方敏郎、水木京太、畑耕一の諸君とも、交際はして居るけれど、未

だ友達としての實感が、ピタッと來ないのである。
そこへ行くと、田中貢太郎君とは、戯談惡口を言ひ合ながら、友達としての親し味が一番強い。一つには年齢の相違もあらうが、田中君と逢ふ時には、何時でも友達らしい心持が起きる。彼の風貌を想ひ起すだけでも、此世の中に於ては、愉快なことである。

十二、漫畫家一平君

（帝劇のバックを塗つて居た彼は、ヒョッコリ東京朝日新聞に入つて來た「秋晴十日間」を書くため、私は彼を方々へ引廻してやつた。初めて漫畫集を出版する時にも、本屋へ渡りを付けて遣つたのは、私であつた。
舞臺も好かつたが、彼れにも天才的の手腕があつて、先づ「大きな手」で賣出した。「漫畫家岡本一平」の存在は、ドエラいものになつた。私は愉快で堪らない、嬉しい。何うだ岡本君、舊友のために、一枚描いてくれないか。

十三、大勢新聞社長

美作津山の產で、佐藤去來と云へば、一種の手腕家として、活躍して居る奇才である。盤根錯節を經て、今や大勢新聞社長の椅子に納つて居る。彼がほんとのものになるのは、愈々これから後の歳月かと、私も嬉しい。
平生は頓と往來もせず、社長さんになつた姿を見ぬが、私が死だ時、逸早く驅け付けてくれて、一番多額の香典を置いてくれる友達は、佐藤祭吉君だと確信してゐる。彼が何んな事を云つて居やうと私は構はない。

十四、五郎と五九郎

澤田正二郎氏はその芝居が好きで堪らぬが、未だ友達と云ふほどの感情ではない。曾我の家五郎の和田久一氏には、逢ふと直ぐ友達になれて、無遠慮な人とでも云へる。
曾我の家五九郎の武智故平氏は、知人であると共に、友達交際も出來る人である。一緒に飲食したことも、此の方面の人では一番多いであらう。五九郎で無く武智になり、天民でなく松崎になつた時、談論の如何に風發するかは、これを世人の想像に任せやう。

十五、森冷土の森香

赤坂教坊の名妓（と、私は思ふ）で本名をむらちゃんと云ふ。百町時代は知らず、新橋時代に相知り、赤坂時代に邂逅

す。酒席に相見て、何時も一賑の哀興をそゝつてくれるため、女性の中の友達の一人に數える。

『あなた、私の旦那にならないこと…』などと、戯談を云はれて、何時もタヂ〳〵となつて居る私である。此の頃、神經過敏な妻に讀まれても、神明に誓つて、うしろめたきこと、夢さら〳〵無しと斷言して置きます。

十六、姓の無い外骨

一代の鬼才宮武外骨先生は、多年知遇を辱うして居る先輩にして、老友の一人である。先生、その宮武の姓を廢し、たゞの外骨として、餘世を珍史の研究に沒頭して居られる。

先生が大阪で、猾稽新聞を發刊して居た時私は大阪朝日記者として、月給二十八圓を得て居た。二人目の子供が生れて、暮し向にお困りでせうとて、月々十五圓を支給して、私の惡文を買つてくれた舊誼は、二十年後の今日に至つても、忘れることが出來ない。

十七、めし屋の友達

東京朝日新聞社の前に、私の同窓から出て飯屋を營んで居た藤井の店には、苦學生がゴロ〳〵して居た。私が大丼を二つも食べるので、何時もそれを羨ましさうに眺めて居た群の中から、法學士の矢田[illegible]郎が出たり、根岸興行部の立花寛一君が現れたりした。

同鄕の矢田君には、その後、音として逢はぬが、立花君とは淺からず相交るに至つた。齢若くして精悍なるめし屋友達の、願くば大に勇奮して、大丼を二杯も三杯も食べてくれ。

十八、籾山半三郎氏

燒けぬ前の演伎座で、澤田正二郎氏を中心として、籾山半三郎氏と相知るに至つた。佛典上の敎養深く、多方面の趣味に通じた籾山氏は、知人中での富豪であると共に、好個のゼントルマンとして、尊敬して居る一人である。

築地の八百善で、初めて八百善の飯を食はしてくれたのは、此の籾山氏であつた。金に困つた時の助けとしては、餘りに事情が隔絶して居るけれど、何時でも私のために、美味求眞の慾望を滿たしてくれる益友に數えて宜からう。

十九、代議士連中

この頃、議會の雜觀書きに出かけて行つて、代議士連中の中に、友人や知人が多いのに、我ながら驚いた。政友本黨の瀬

水長郷、簑田秀雄、中山貞雄、政友會の安藤正純、河上哲太、憲政會の小島七郎、小山松壽、田中萬逸、横山勝太郎、頼母木桂吉、平野光雄の諸氏とは、曾て同業記者であつたり、よく酒席を共にしたり、月日の因縁が淺くない。

高松正道や清瀨規久雄の姿を、議席に見られぬのは、一寸、淋しい氣持がする。

二十、小說家の二三

文壇の人々では、その昔の少年時代、田山花袋先生に、「書生に置いて下さい」と美作の山中から、手紙を送つたことがある。民友社の小使時代には、廣津柳浪、小杉天外の二家を知つて、牛込矢來中の里の廣津先生の許には、わざ〳〵出かけて行つて、書生に置いて下さいと言つたことさへあつた。

古くから知つて居るのは、正宗白鳥氏一人で、故人では國木田獨歩、岩野泡鳴、平尾不孤など、再三飲食したことがあつた。

廿一　作者と役者と

角田々歌寄氏は、私の恩人の一人であつた。薄田泣菫氏にしても、青年の私を精神的に、何んなに鞭韃してくれたことか。その頃は、花房柳外、富山古轍など云ふ、新派劇の作者も居たが、若うして死でしまつた。

井垣増太郎と云ふ役者が居て、大阪新聞記者であつた私に、朝日座の成美團の作者部屋に入らないかと勸められたことも、思へば二十餘年の昔である。その井垣とは、大阪の南地で、よく飲食に歩いたものであつた。

廿二　瀧田兄島中兄

思ひ出すままを、何の順序もなく、一氣に書いて來た。あの人も此の人も、靜に考へたならば、一篇の長い交友錄が出來さうである。中央公論社の瀧田兄にしても、島中兄にしても、思へば十餘年の知合である。その瀧田兄、病で病床にあること久しと云ふ。まだお見舞にも參らず、御無沙汰をして居るが。

『逢つたら、酒をやめるやうに言つて下さい』

と、今日、議院で逢つた瀧田兄の伯父さん町田忠治翁は、眞面目に傳言されて居ました。

大正十四年二月七日夕、中央公論社の伊藤兄、泥濘を冒して來訪され、明日午後四時までに、交友錄十枚を執筆せよと云はる。感興大に動いて、それより一時間三十五分を費して、この十二枚を書き上ぐ。原稿紙に標題とも十一行づゝそろへて、二十項目をあぐ。これも亦た注文に於ける余の果敢き遊戯の一つとして、自ら慰めとせんのみ。匆々。

『奇蹟』同人その他

廣津和郎

やつぱり第一番に擧げるべきは『奇蹟同人』の事だらう。
舟木重雄、谷崎精二、葛西善藏、相馬泰三、光用穆、峰岸幸作
舟木は自分の最も古い友人で、自分が小學校に通つてゐた頃、彼は自分の父をよくたづねて來た。その頃からの知り合ひである。――『奇蹟』といふ雜誌はこの舟木を中心として起つたもので、彼は仲間中一番の年長者だつたが、一癖も二癖も三癖もある奇蹟同人達を、いつでも統一して、互に喧嘩もさせずに仲よく集まらせ、交はらせて來たといふのは、彼の總ての友人を理解する寛い溫かな心の働きに依つたと云つても過言ではない。舟木がゐたからこそ、みんなが集まり得たのだと思ふ。舟木があつての『奇蹟』だつたと思ふ。

ひと頃は毎日彼と會ひ、毎日彼と文學の話などをしてゐたが、近頃はあまり會はなくなつた。これは舟木とばかりではない。青年時分には親しい友人と會つて、語り合ふといふ事その事が生活の全部であつたが、だんだん互に互の生活が複雜になつて來たためであらう。友人同志がだんだん顏を合せなくなつて來た。『彼はどうしてゐるか』といふやうな事を始終考へながら、日々の生活の習慣が出來てしまつて來て、互にたづね合ふ機會がなくなつて來た。――そんな事を考へると、淋しい氣もするが、併し大體人間の生活といふものがそんなものなのだらうといふ氣もする。

舟木重雄の弟に重信がある。中學時分に自分より一級下だつた。重雄をたづねると、よく重信君とも話し合つたが、近頃は重雄と會はないので、重信君とも會はない。

光用穆――『奇蹟』になかなか好短篇を書いてゐる。今の文壇に持出したつて、その洗練された技巧と云ひ、新鮮な文章と云ひ、なかなかハイカラな作だが、(恐らく最近の新感覺派と併せられる諸君の作物に匹敵する位氣の利いたものだつたが)併し文壇生活を押し切つてやつて行くのには、少々温順過ぎたのだらう。自身から引つ込んで行つてしまつたが、一寸惜しい氣

がする。

相馬泰三——相馬泰三とも暫く會はない。毎日どんな事をして暮して居るか。なかなか墻壁を築いてゐて、人をその墻壁の中に入れない氣むづかし家——惡く云へばイゴイストだが、併しそれだけ時流に媚びず、人と妥協しないで、彼獨特の生活法を、彼獨特のやり方で押し通して行くところに、遠くの方からながら、賴もしさを覺えない事はない。時々彼の發表する短篇にしろ、隨筆にしろ、大向の喝采を博するやうな分子は少しもないが、何と彼一流の凝り方で、徹頭徹尾凝り切つてゐることよ。——『相變らず、やつてゐるな』と云つたやうな微笑を感じさせる。少し病的と思はれる位孤獨好きで、ひとりで引込んでゐるが、併しいづれにしても相馬は腹の底からの藝術家だ。

峰岸幸作——これも我々の仲間中での一人物であり、いろいろな意味で強い個性の持主だつたのだが、もう數年前に死んでしまつた。——『奇蹟』時代を考へると、この峰岸の死は、少々淋し過ぎる。

谷崎精二は自分の最も信賴してゐる友人だ。もし自分が誰に後事を托するかと云へば、結局この男だらう。もつとも、後事を托すると云つても、この男は『自分の分』をよく知つてゐる男だから、背負ひ切れない程の重荷を、背負ひ切れないと解りながら背負つてくれるやうなことはあるまいが、併し腹の底から心配し、彼に出來るだけの事はやつてくれるだらう。谷崎はよく『人生の暗礁』と云ふ言葉を使ふ。『友人達の多くが人生の暗礁に乘り上げて行く』といふ言葉をよく使ふ。自分や葛西善藏などの生活は、溫厚なる谷崎精二には、恐ろしい『人生の暗礁』を、何の顧慮するところもなく、盲滅法に飛びまはるもののやうに思はれるらしい。又實際自分や葛西善藏などの生活は、少し破綻があり過ぎるのかも知れない、一向本人等は恐さ知らずで平氣で飛びまはつてゐるのだが、もう少し『恐さ』を知る方が本當なのかも知れない。——さういふ點を谷崎はよく心配してくれてゐる。心配してくれてゐるどころか、谷崎の心持は憂欝にまでなつてくれてゐる。……だが、さういふ谷崎自身が、今やどうやらその所謂『人生の暗礁』に乘り上げかかつてゐるけはいがないでもない。寅年の一本氣で、谷崎は苦しみ出したら、我々の比ではなく苦しむだらう。葛西や自分などだと、どんな事があつても、「世間が狹くなる」と云つたやうな神經を持合はさないから、本人達自身は割合に氣樂なんだが、精二はどうもさういふ性格でないから、人一倍煩悶するだらう。併し『人生の暗礁』を測量することもしないで、遠くの方から恐れてゐるよりか、それに乘り上げる位、未知の世界に乘り出

しかけて來たといふ事は、我々から見ると、精二の生活の一進轉と云ふ氣がしないでもない。何も世間などを恐れる事はない。谷崎精二よ、平氣で生活してくれ。どうせ人の一生だ。我々には『損』などといふものは、この世の中では一つもない。君に『後事を托する』といふ氣のある自分は、君の後事だつて、背負ひ切れるだけは背負ひ切つてやる覺悟だ。もつとも、背負ひ切つてやる覺悟だと云つても、安全第一を旨とする君では、僕に托するんでは、安心出來ないやうな氣がするかも知れんが………

葛西善藏――葛西との交りも『奇蹟』以來もう隨分長くなる。葛西の言葉を借りて言へば、『長き道伴れ』だ。だが、後事を托する段となると、どうも葛西ではなくて、やつぱり谷崎精二を撰びたくなる。後事を托するといふやうな考になつた場合には、やつぱり『安全第一』といふ考が、何よりも一番先に浮んで來るだらう。そして『安全第一』と云ふ觀念と葛西善藏とは凡そ緣遠い。

葛西善藏とも昔ほどは會はなくなつた。一つは葛西が酒を飲み、自分が酒を飲まないからである。それに葛西が徹頭徹尾葛西の生活法で押し通して行くのに、自分が徹頭徹尾自分の生活法で押通して行くといふ事も、相會ふ機會を尠くするのだらうと思ふ。だが、それでいい。自分に何か變事のあつた場合、現實的な意味で、どう面倒を見てくれるやうな男ではないが、併し葛西は『ただ、彼も彼の思ひ通りに生きて來た』と自分の事を考へながら、酒を飲んでくれるだらう。葛西獨特の嗅覺で、そつくり自分の生きて來た道を、どん底から嗅ぎつくし、理解つくしてくれるだらう。――さういふ意味の彼は友だ。現實的な意味で、互に後事を托し合ふのには、二人とも一種空想家なのかも知れないと思ふ。『安全』『平和』『子孫繁榮』『後顧の憂なし』と云ふやうな言葉が、我々に魅力を以て感じられない事は、十年前でも今日でも、さう變りはないらしい。恐らく今後も變りはないだらう。葛西もああ酒を飲んでゐたら、一般的に云つたら、ロクな事がないに違ひない。だが、彼の子供は彼の淸德の譽高い細君が、どんな事があつても、一人前に育て上げるだらう。さう云ふ意味で、彼の後事は彼の細君に托すればいゝ程、それ程彼の細君は實夫人だ。『白根山峰の白雪夕映えて淒し思へば胸いたむなり』――などと葛西は近作『湖畔手記』の中で歌つてゐたが、そして世間一般的な見方から見れば、好い氣なもんだが、併し彼のタイラント振りを發揮させ、或意味で彼に後顧の憂なしめてゐるのは、彼の細君の實夫人なるによる。――女と云ふものは時によると、驚くべき程の忍耐力と、始終變らさる

『靜かな情熱』の美を發揮する。ほんたうの直觀だけで、人生の深奥に觸れて行く。もつとも、滅多にそんな女性にこの世の中ではお眼にかからないが、誰が何と云つても、我々の友人仲間で、誰が賢夫人を持つてゐるかと云つたら、自分は葛西善藏を第一に推す。

これで舊『奇蹟』同人諸君の事は一通り書いたが、この同人の中で、葛西、相馬、自分の三人が、共に未だ下宿住居をしてゐるといふのは、何かの因緣事見たやうな氣がする。この事は『文藝春秋』にも嘗て書いた事があるが、我々の一種の現實輕蔑——と云つては强すぎるが、少くとも現實輕視觀によるのだらう。三十にして家を成さずといふ時期をもう疾うの昔に通り過ぎて、一番年少だつた自分が最早三十五に達した。葛西は三十九、相馬は多分それよりも一つ位上だ。四十にして家を成さず、か。——もつとも世帶崩しといふ感じはあるが、それにしても學生や獨身者の會社員諸君の群がつてゐる下宿生活から未だに拔け切らないといふのは、あきれたものだ。何處か『人生の大人』になる要素か何かが缺除してゐるのかも知れん。——とは云ふものの、自分も近頃は自分の書齋らしい書齋が心の底から欲しくなつて來た。誰にも亂されない、小さくて好いが、心の澄むやうな書齋が欲しくなつて來た。自分で鍵を持ち、自分のその中に籠る時だけ扉を開き、それ以外には鍵をかけて置くやうな書齋が。——書齋でも出來たら、自分の放浪癖もなくなるかも知れない。書齋でも出來たら、恒産といふやうな慾望が、腹のどこかに萠して來るかも知れない。西洋畫家が物質にめぐまれないと云はれながら、文學者よりも大體財産を持つやうになるのは、何より先に畫室を建てるからに違ひない。この廣漠たる取留めない世界に二十坪とか三十坪とかの建坪の自分の所有の建物が出來たら、そこから『現實』に向つて根が生えて、一つの所有慾が芽生えて來るのかも知れない。——何しろ書齋が欲しくなつて來た。誰からも亂されない書齋が。

▽

『宇野浩二』との交友は、『奇蹟』同人について長い。所謂文壇に出る前に、彼と自分とは始終顏を合はせて——と云ふよりは、或時期などは同じ家に起臥して暮して來た。自分の方が少し早く世の中に出たが、その後も毎日會ひ、毎日一緒に銀座通りを散歩して、そして毎日同じやうな事を飽きもせずに語り合つてくらしてゐた。二人で毎日出かけて行くカツフエの女給が、『あなた方は毎日さうしてお二人で、よく話がつきませんね』と云つた位だ。ほんたうによく話が盡きなかつたものだ。どんな話をしてゐたのだかよく覺えてゐない。けれども二人の饒舌

家の寄つた事だから、一時も默つてゐない。何か喋り合つてゐた。宇野はその時代を『書生時代』とか『貧乏時代』とか云つて、今から振返つて呼んでゐるらしいが、自分などはその時からの連續で、未だに『書生時代』『貧乏時代』を繰返してゐるので、宇野の『成人』振りが、時々頰笑まれる。大體自分などと違つて、宇野浩二は最初から『大人』だつたのかも知れない。やんちやな自分の『書生振り』に苦笑しながら、調子を合せてゐたのかも知れない。と云つて、今でも會へば昔の通りで、同じやうな事を語り、同じやうに銀座とか神樂坂とかをぶらりと散歩して、それから別れるのだが、併し宇野はその性質から云つて、つかず離れずと云つた具合の友人關係が、適してゐるらしい。同じ卯年の浮氣者の人情家と云ふやうな點で一致してゐるところが、久米正雄や直木三十三など一緒にあるが、併し卯年の人間には、又割合に冷靜なところがある。來る者を拒まず、去るものを追はずと云つたやうなところがある。――この性質は宇野にあり、久米にあり、直木にあり、三上於菟吉にある。又自分にもある。一應は人とつき合ひながら、何處か一點に警戒性を持つてゐる。久米正雄は前月の本誌で、その警戒性を以て彼の交友關係の出鱈目でない事の證明としてゐたが、併し或は又これが卯年の泣きどころかも知れない。――とは云ふものの、宇野浩二も自分に取つては、『長い道伴れ』だ。感じ易い青年期に、毎日顏を合せては、よくは未だ解らない人生といふ戰場で、これから何をしやうかと語り合つてゐた戰友だ。人に話せないやうな事を、互に打明け合つた仲だ。宇野の方が人生についての考へ方や趣味が自分より『大人』なので、日常のつき合ひが互に一致しなくなつて來たところはあるが、併し過去を振返ると、彼に負うてゐるところも非常に多い。なつかしい氣がしない筈がない。

宇野浩二を語ると、次に語るべきは片岡鐵兵だ。これも長い交友だ。いきなり上京して、自分と一緒に暮してゐるかと思ふと、急に關西に歸り、その次に上京するまで、一年でも二年でも音沙汰がない。氣紛れ者の鐵兵はその氣紛れな點で、氣紛れ者と云はれてゐる自分より餘程上手な氣紛れ者だ。昨年の大晦日に又關西に歸つたきり、かなり用があるのに、うんともすうんとも云つて來ない。何處にゐるのやら居所も知らして來ない。暢氣者の、一種やんちやの、その癖どこか可愛らしい男。

この外に神戸に引つこんでゐる増田篤夫がある。自分の敬意を拂つてゐる友人だが、併し生活や趣味の上で、互に距離があり過ぎるので、日常の友人とはならない。自分の[illegible]性が病的な彼の神經を苛立たせる事を考へて、濟まなく思ひながら、ど

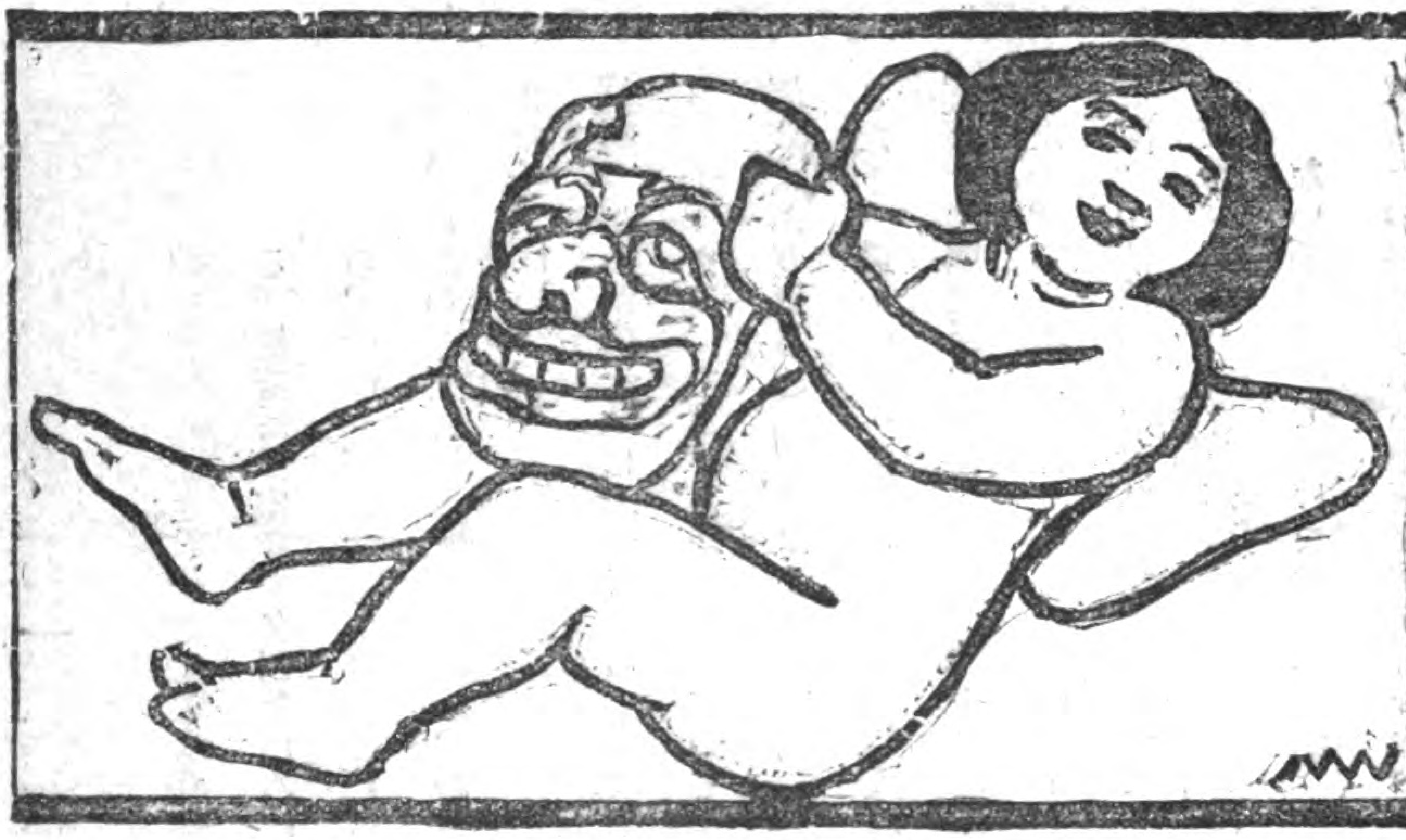
うも彼に對して無沙汰勝になる。

林倭衞――これは今佛蘭西に行つてゐる畫家だ。大酒飲みの彼と、酒を少しも飲まない自分とが、どう云ふものかへんに氣が合ふ。外國で淋しがつてゐるだらうと思ひながら、この男に對しても、自分はいつでも無沙汰してゐる。烈しい性質を持つたアナアキスト。もつとも佛蘭西に行く前から、だんだんニヒリスト傾を帶びて來てゐたが、その後の氣持はどうか知らん。いきなり畫筆を握つて見て、最初からうまい繪を描いた彼は、いきなりペンを握つて見ても、とてもうまい文章を書く。彼が『改造』に書いた大杉榮の佛蘭西に於ける生活を書いた文章を讀んだ人は、彼が立派な文學者である事を承認したらう。――彼が佛蘭西に行つてからもう三四年になる。その間に自分は彼に二度しか手紙を送つてゐない。それだのに、自分は彼を自分の最も眞實な友人の一人だと考へてゐる。若し後事を托したら、この思想的のニヒリストは、その純な感情で、本氣になつて自分につくしてくれさうな氣がする。

▽

文壇的の知友で、若し深くつき合つたら、親交を結び得られさうな人物が二三あるが、大分ながくなるから、後日に讓る。

(終)



女の職業

長田秀雄

主要なる人物

きぬ子　　女事務員
伊東寛　　その夫
深水眞藏　　きぬ子の父
さだ子　　その妻
黑木欣二　　獨身の技師
田中茂夫　　寛の年上の友人
油谷角五郎　　小使
その他

現代
東京市内

第一幕

曲中女主人公きぬ子の父深水眞藏の家――秋の夜である。みんな夕飯をすまして、女中が茶の間を片付けてゐる。眞藏は、座敷で夕刊をひろげて眼をとほしてゐる。妻のさだ子はリヨウマチで不自由な身體を動かしながら、やはり茶の間で小包をこしらへてゐる。玄關の土間で、頻りに犬の鼻をならす聲がきこえる。

眞藏。（新聞から眼を放さずに）。おい、おさだ。返事なし。）おさだ。

さだ子。はい。

眞藏。ポチが飯を欲しがつてゐる――はやく喰はせてやれ。

さだ子。えゝ、ちよいとお待ちなすつて。いま宛名だけ書いてしまひますから……

眞藏。（ふり返る。）何をしてゐるんだ。何だ、今時分小包なんかこしらへて――何處へ出すんだ。

さだ子。眞一の處へ送るんですよ。綿入れと甘納豆を……

眞藏。馬鹿だな、お前は。まだ、十月になつたばかりぢやないか。何もそんなに急いで送らなくつたつていいのに……

さだ子。でもねえ、早くしとかないと……

眞藏。お前は愚痴を云ひながら、やつぱり始終せかせか仕事をしないぢやゐられないんだ。

さだ子。（宛名を書きながら）性分ですもの。仕方がありませんわ。それに、お友だちや上役の手前、あんまり見つともない姿はさせて置けませんからね。

眞藏。福岡は暖かい處だよ。何もお前のリヨウマチスを、非道くしてまで夜鍋をしなくつたつていいんだ。

犬が鼻をならす音が烈しくきこえる。

さだ子。仕様のないポチだねえ。少しお待ちつたら――また、きつと、玄關を泥だらけにしてゐますよ。（女中に）みつや、お前、ポチに御飯をやつておくれ。

女中。はい。（退場。）

さだ子。ポチ、今すぐ上げるよ。（宛書を書きおはつて）あなた。さだ。小包は出せますわね。（女中がポチの飯を持つて玄關に行く。）

眞藏。八時までだな。郵便局は。

さだ子。（柱時計をみる。）おや、もう廿分しきやない。みつや。

女中。（玄關から）はい。

さだ子。お前御苦勞だがね、ちよいと、この小包を出してきておくれ。

女中。はい。かしこまりました。（さだ子、錢を出してやる。）では行つて參ります。

女中臺所口から退場。

さだ子。あなた。

眞藏。うん。

さだ子。き奴子はどうしたんでせう。

眞藏。……仕様のない奴だ。

さだ子。もう八時だつて云ふのに。……今晩だこんなに遲くなる筈にありませんよ。

直藏。また、調子にのつて、銀座あたりをブラ〳〵してゐるんだらう。

沈默。

格子のあく音がきこえる。ポチが吠える。

さだ子。（耳を傾けて）おや、きぬ子ぢやない。どなたかお客さまですよ。

「御免。」と云ふ男の聲がきこえる。さだ子が足を曳きづりながら立つて玄關にゆく

客の聲。どうも夜遲く……お居でですか。

さだ子。おや、何方かと思ひましたら……まあ、ようこそ。さ、居りますから、どうぞ、お上りなすつて……あなた、田中さんですよ。

直藏。おう。これはお珍らしい。（田中茂夫が上つてくる。）ようこそ……

さだ子。さあ、どうぞ（座布團をすゝめる。）さあ、お當てなすつて……

田中。（座る。）や、御無沙汰ばかりして居ます。

直藏。いや、私の方こそ……

さだ子。もう、あなた、すまないすまないと申しくらして居りますけれど、何しろ、宅は一日役所へ參つて居りますし、あと私一人で何やかや、つい忙がしいもので御座いますから……

田中。いや、痛み入ります。

直藏。何うです。相かはらずお忙がしいでせう。

田中。えゝ、何ですか、毎日こき使はれてゐます。

眞藏。しかし、あなた方は結構ですよ。あゝ云ふ大きな會社だから、半期半期のボーナスだつて、澤山くれるんだし、働くものははげみがありますよ。

田中。いや、何うしまして（笑つてゐる。）

眞藏。そこへ行くと、我々官吏は、まつたく慘めな者ですよ。

田中。あなたなんか、金を殘して、道樂半分に勤めていらつしやるんだからいいですよ。

眞藏。冗談ぢやない。

田中。それに、お子さんだつて二人とも、もう大きくおなりなすつたんだから世話は燒けませんしね。

さだ子。だといいんですけれど……

眞藏。（間）田中さん。あなたには、いつも愚痴ばかりおきかせしますが、全たくきぬ子には閉口しましたよ。

田中。やつぱり伊東へ歸つてやらうと云ふお心持は出ないんですか。

眞藏。ええ、今度と云ふ今度は、私も堪忍袋の緒がきれましたよ。

田中。困りましたな、どうも。

眞藏。何しろ、あのとほりの我儘者ですから……

さだ子。つまり私どもの平生のしつけが惡いんですから、どうもいたしかたは御座いませんが……

眞藏。眞一の方は、まあ、あゝやつて、どうやらかうやら一人立ちでやつて行つてくれますから、安心してゐますが、きぬ子とくると仕末に終へません。

さだ子。ほんとに親泣かせで御座います。

田中。今夜は御留守ですか、きぬ子さんは。

さだ子。えゝ、まだ會社から歸りませんの。

田中。きぬ子さんにちよつとお眼にかゝれるといいんですが………

さだ子。もう歸つて參りませうとは思ひますが………

田中。ぢや、お歸り前に、一應、あなた方にお話いたして置きます。實は昨日の晩、遲く伊東が、私の處へやつてきまして………

さだ子。まあ、さようで御座いますか。

田中。いろいろこれ迄のきぬ子さんと伊東との話をきゝましたが、（眞藏うなづく。）………無論夫婦の間の事は他人には分らないものですが、どうも、やはり氣質の相違と申上げるより他にないやうです。

眞藏。さうです。私もさう思ふんです。

田中。伊東は私の舊い友だちですが、別にきぬ子さんを虐待するやうな殘酷な男でもなし、そりや、少しくらゐ酒は飮みますが、道樂者と云ふ譯でもありませんし………

さだ子。ええ、さうですとも――今時のお方にや、どちらかと云へば、珍らしい堅い人ですわ。

田中。つまり夫婦の間に、さう大した事件も何もないんです。たゞ氣質がどうも折合はないと云ふのが、今度の事件の眞相に近くはないかと、かう思へるんです。

眞藏。ごもつともです。私もきぬ子の口裏から察して、そこへらが一番確かな事だらうと思つてゐました。然し、いくら、氣質が違ふからと云つて、無斷で、亭主の家を飛出してくると云ふ法はありません。全たく不埒な奴です。

田中。それは私たちには、伊東と一緒にゐられるのが、そんなに辛からうとは、どうしても思へませんがなあ………

眞藏。いや、辛からうが、辛くあるまいが、不埒な事です。

沈默

田中。伊東は私に昨夜から云ふんです。――まあ、少しも隱さずにお話した方が、お宅の方にも伊東の方にも、お爲ちやないかと思ひますから、申上げるのですが……

さだ子。……あれときたら、親に苦勞をかける事なんか、何とも思つちやゐないんですからね。

眞藏。そりや、あなたのおつしやるとほりです。底意なくお互に話合つた方が、どれだけいゝか知れやしませんとも。

田中。その……何です。伊東の考へは、きぬ子さんに對して、これ迄の仕打は、無論、自分の方が惡い。それは充分謝罪する。殊に、まだ、學校を出たばかりで、收入も少ないし、さまざまな生活上の御苦勞をかけた事は何ともすまないと思つてゐる。然し、きぬ子さんの自分に對する仕打も決していゝとばかりは云へまいと思ふ。成程、お互の氣質の相違はやむを得ないとして、兩方でよく考へたならば、將來は、或は、もう少しお互に氣持よく暮らして行けはしまいか……折角、かうして結婚したものを、この位の事で別れてしまふのは、如何にも殘念だと、かう云ふのです。

眞藏。成程。

田中。……私も至極穩當な云分だと思ひましたから、そこで、一應、こちらへ伺つて、きぬ子さんのお考もとくと承はつた上、もし出來る事なら、やはりこれ迄どほり伊東の方へ歸つて頂きたいと、かう思つて出て參つた譯なのです。

さだ子。まあ、どうもあなたには御面倒ばかりかけまして……

眞藏。全たく、家内も申しましたとほり、どうも一方ならぬお世話ばかりかけて申譯ありません。

田中。いや、そんなお心配は御無用です。伊東と私とは、とに角、十年以上の友だちですし、お宅とも、かうして長い間御懇意に願つて居りますのですから……

さだ子。それにしても、あなた、お嫁附は願ふし、また、こんな厄介な事まで……

眞藏。（さだ子の言葉の終らぬ内に）いや、田中さん。寛さんの考へには一言も私どもは異存はありません。若い人に似合はずまことにおだやかなお考だと思ふにつけても、きぬ子の仕業が腹が立ちます。

さだ子。本統に寛さんには、お氣の毒でたまりませんわ。

眞藏。それも無理に私どもが押しつけて嫁にでもやつたんならですが、あゝして、當人が是が非でも寛さんの處へ嫁きたいと云つてきかないもんですから、貰つてもらつた譯ぢやありませんか……それを今になつて氣質が合はないからとか何とか云つてふいと飛出して來るなんて、わが娘ながら呆れてしまひました。

田中。失禮ながら今度のきぬ子さんのお仕打は、私としても殘念に思はれます。

眞藏。いや。言語道斷です。

沈默。

田中。（獨語のやうに）それに伊東は、まだまだ將來のある男ですから、もしも、今度の事が彼の男の將來のさわりにでもなると、可愛さうだと思つて心配してゐるのです。

眞藏。ごもつともです。（間を置いて）寛さんの腹の内は全たくお察しします。

さだ子。……あの娘は我慢と云ふ事が、ちつとも出來無い性分ですからねえ……

眞藏。いや、我慢ぢやない。本統の夫婦の情愛が分らないんだ。そりや夫婦になつて一生送る内には、面白くない事も辛らい事もある。お互に人間だもの……それを押切つてゆくのが夫婦ぢやないか。厭だと云つて無責任に飛出してくる事なんか出來る筈がない。

さだ子。せめて、二人の間に子供でもありましたら、こんな事にもならなかつたでせうよ。

田中。さうです。お子さんの出來ないのが、一番いけませんでしたね。きぬ子さんが、あゝして事務所通ひをなさるやうになつたのも、お子さんのない寂しさからですよ。

眞藏。あの事務所へ出る事については私は始から大反對だつたんです。然し、もう、寛さんに上げた以上、さうさうは實家からは口は出せませんからね。

田中。伊東も内心では、好まなかつたんです。然し、あんまりきぬ子さんが熱心だつたので………

さだ子。あれから、あの娘がガラリと變つてしまひましたよ。

ポチが吠える。一同沈默。

眞藏。とに角。歸つてきましたやうですから……

田中。(聲を低めて)實は、伊東が、通りのカフエに待つて居るのです。一應、私がお話してみまして、その上で自分も、きぬ子さんにも一度お眼にかゝりたいと云ひますので。

眞藏。あゝ、さうですか。私の方は一向構ひません。

「ポチ、あたしよ。何をそんなに吠えるの。」と云ふ聲がきこえて、格子が開く。つゞいて障子が開くと、きぬ子が現はれる。下町の女事務員風の派出な姿、年は、もう廿二三である。

きぬ子。（田中を見る。堅い表情）たゞ今。

眞藏。（不氣嫌に）大へん遅いぢやないか。

きぬ子。（反抗的に笑ふ。）えゝ、會社に用事があつて遅くなりましたの。（田中に）いらつしやいまし。（急に後を向いて）みつや、みつや。

女中。はい。（出てくる。）

きぬ子。あたしにお茶を一パイ頂戴。

女中。はい。（退場。）

さだ子。おや、みつやは何時の間に歸つてきたのだらう。

きぬ子。いま、あたしと一緒に歸つてきたの。（女中の持つてきた茶を飲む）急いで歸つてきたら、咽が乾いて耐らないわ。

田中。（悪意をかくして）きぬ子さん。お久振にお眼にかゝります。

きぬ子。（堅い表情で）御無沙汰いたしました。すみません。

沈默。

さだ子。（きぬ子に）お前、夕御飯は、

きぬ子。喰べてきたわ、お友だちと…………

さだ子。ほんとうにこんなに遅くなつて、一人で若い女が歸つてくるのは物騒だよ。

きぬ子。大丈夫よ、お母さんは　苦勞性ね。

さだ子。だつてこの頃は、お前 よく物騒な噂があるよ。

きぬ子。あたし黒木さんに送つて頂いたのよ。

貞蔵。何んだ。また黒木と一緒に歸つたのか。

きぬ子。ええ。

貞蔵。（いやな顔をして黙つてゐる。）……

田中。（貞蔵に）では私からきぬ子さんにお話しませうか。

貞蔵。さあ どうぞ。私どもはあちらへ参りませうか。

田中。いや、此處にゐて下すつた方が却つて結構です。きぬ子さん。

きぬ子。はい。

田中。お歸り草々で疲れてもお出でせうが、また、伊東の事でちよつと御話したいと思ふんですが………

きぬ子。（冷たく）えゝ、伺ひますわ。

田中。（わざと打解けた調子で）實はね、きぬ子さん。いま、御兩親にもお話したところですが、昨夜伊東が私の家へやつてきましてね（きぬ子ヂロリと田中を見る。）いろいろと、まあ、今度の事について話合つたのですが。………結局、私は兩方に、つまり伊東にもあなたにも失禮ながら、誤解がありやしないかと思ふんです。

きぬ子。（下を向いたまゝ）誤解なんかありませんわ。

田中。まあ、私の云ふ事をきいて下さい。そりやあなただつて伊東だつて決してお互に誤解してゐるたあ思つちやゐない。が、然し、私の方がいくらか年齢が上だ。それだけにあなた方の誤解が分るやうに思ふのです。いや、伊東に

も、昨夜その點をよく話しました。仕合せにあの男は、よく私の心持を了解してくれて、それで今日、私が御邪魔に出たやうな譯です。

直毅。きぬ子。よく伺つてみるがいい。寛さんの心持は、さすがだぞ。あれだけ學問をしただけあつて、お前とは丁でものにやならない――恥かしいとは思はないか。

きぬ子。(冷笑。)えゝ、伊東は立派な男ですわ。皆さんが同情なさるとほり……

直毅。何だ。もう一度云つてみろ。不埒な。

きぬ子。………

直毅。お前がさう云ふ我儘な氣性だから、折角望みのところへ嫁にやつても落付けないんだ。

田中。(唇を嚙んで涙をこぼしてゐるきぬ子に)まあ、きぬ子さん。私が誤解と云ふのはそこもあるんですよ。誰も伊東にだけ同情してゐる譯ぢやないぢやありませんか。あなたと伊東と兩方がいいやうにと思へばこそ、私だつて、かうやつて御節介にも飛出してきてゐるんですよ。

きぬ子。………

田中。伊東は昨夜、から云ふんです。自分としては、成程、これ迄きぬ子には、生活上の苦勞やら何やら、隨分いやな思ひもさせてゐる。その點では、非常に後悔してゐるから、よく、そこをお話してくれ。それから、自分の性格上、自分では氣がつかないが、いろんな皮肉な事を云つたりして相當あなたを苦しめた……もつとも、これは私が側でてみゐた處を說明してやうやくあの男にも納得が行つた事なのです。――誤解と云ふのは、つまり、これが一番ちやなかつたかと私は思ふのですよ。で、さう云ふ點であなたを苦しめた事があるとすれば、將來は、誓つて改める。

兎に角長年一緒に居たものが、この位の事で別れられる筈がないから、どうか・もう一遍歸つて貰ひたいと、あの男としては、隨分折れて來てゐるのです。

きぬ子。……

田中。兎に角、あいつも御存じの通り意地の強い男ですから……これだけ折れてくるのはよくよくですよ。

眞鍋。どうだ。きぬ子。(間。)お前だつて、このまゝ强情を張つて寬さんと別れたとしてだ。これから先をどうするつもりだ。

きぬ子。そんな事は別問題だわ。

眞鍋。(むらむらとして何か云はうとする。)

きぬ子。(きつと顔を上げて)田中さん。あなたはあたしの云ふ事はちつともきいて下さいませんのね。

田中。そんな事はありません。あなたの方に何か別な……たとへばあゝして欲しいとか、かうして貰ひたいとか云ふお考があれば、無論、私はよろこんで伊東へ傳へますよ。

きぬ子。(憎々しげに田中を見る。)きらひだわ。あたし、そんな誤魔化しは。

田中。(むつとして)誤魔化しですつて。

きぬ子。ねえ、田中さん。後生ですから、あたしを向ふへ歸す工風ばかりしないで、何故、あたしが飛び出してきたかをきいて下さいまし。

さだ子。失禮な……きぬ子。何を云ふんですよ。

田中。(冷たく)でも、そりや、もう、何度となく伺つたぢやありませんか。

きぬ子。え丶、何度もお話しましたわ。でもあなたは分つて下さらないんですもの………（涙を拭く。）あなたばかりぢやありませんわ。父も母も……誰も分つてくれやしませんわ。

眞藏。そんな馬鹿な事があるもんか。自分の子だもの、お前のためよかれと思へばこそいろんな事を云ふのだ。

きぬ子。え丶、そりやあたしだつて分つてゐます。たゞ、あたしが伊東の家を出てきた譯が分つて頂けないんです……

田中。……（眞藏に向つて）どうも困りましたね。私は分つてゐるつもりなんだが……

眞藏。（きぬ子に）お前は自分を離れて物を考へる事の出來ない女なんだ。

きぬ子。………、そりや、さうですわ。自分を離れて、物を考へられる筈がないぢやありませんか。

眞藏。それが間違だ。ちつとは、寛さんの身にもなつて見ろ。お前には夫婦の情愛なんか分らないんだ。

きぬ子。………夫婦の情愛つて云ふものは、あたし一人でおこせるものぢやありませんわ。

眞藏。ぢや、一體この結婚は誰が一番望んでゐたのだ。

きぬ子。そりやあたしですわ。

眞藏。ぢや、あれは、ほんの一時の浮氣心だつたのか。

きぬ子。そんな事が………

眞藏。だつて、さうとしきや取れないぢやないか。

きぬ子。（間を置いて）あたしは伊東とお互に上面を取りつくろつた交際をしてゐたのですわ、結婚して見ると、あの人はまるつきり變つた氣性でしたわ。

眞藏、自分で望んだ以上、そこを折合つてゆくのがお前の責任だ。

きぬ子。ぢや、伊東の罪はどうなるんです。
眞藏。だから、寛さんはこれ迄の事を後悔して居るぢやないか。
きぬ子。いくら後悔しても、もう、駄目です。遲すぎますわ。
眞藏。お前はどうしても歸らないと云ふのか。
きぬ子。………
田中。（きぬ子の決心を見て取つて）きぬ子さん、さつき、お父さんのおつしやつたとほり、伊東の身の上にも同情して下さる譯には行きませいか。伊東はどちらかと云へば、あなたに動かされて、結婚したんですよ。それを今になつて、かう云ふ結果になつては實に立つ瀬がなからうと思ふんです。
きぬ子。（涙をこぼす。）あたしはおつしやるとほり、伊東を動かしました。（咽び泣く。）しかし、伊東は眞底から動いてはくれなかつたんです。
眞藏。そんな事があるものか。
きぬ子。いいえ、さうです。あたしよく分つてゐましたわ。でなきや、あんなに一月不氣嫌な顔をしてあたしのする事なす事氣に入らない筈はありませんもの………
田中。私はそれが誤解だと云ふのです。皮肉はあの男の持前ですよ。もし、あなたのおつしやる通り、事實、あなたが厭なら、何で昨夜私の處へ來るもんですか、あの男の性質として
きぬ子。（泣いてゐる。）………
眞藏。お前は一體何事でもやりすぎるのだ。惡く云へば御節介、よく云へば、氣がつきすぎる………それが、寛さんの

氣にさわるんだと、俺は思ふよ。夫婦の間の事は親でも分らんけれど………

田中。深くうなづく、さうです、伊東も仄んやりしてゐるやうで、なかなか神經質ですからね。

さだ子。それに、今も田中さんとお父うさんと話してゐらつしたが、お前が會社に出たのがいけないよ。

きぬ子。だつて、伊東がゆるしたんですもの……

さだ子。でも、寛さんはお腹の内ぢや面白く思つてゐらつしやらないわね。

きぬ子。あれだつて、やつぱり伊東のためですよ。一日仄んやりして家に居るより、いくらか生活のたしにもなるだらうと思つて……

眞藏。だがね、男の身になりや、一日仕事をして歸つて來て、家内のゐない家で、仄んやり夕飯を食ふのは耐らないよ

さだ子。全くですわ。

田中。成程。かうしてお話をしてみると、段々お互の事情がハツキリして來ますね。きぬ子さん、實は今日はどうかと思ひましたが、伊東をつれて來たんです。どうでせう。一つ會つて腹藏のない話をなすつてみては……

きぬ子。（田中を凝つと見る。）

田中。どうでせうね。きぬ子さん。

きぬ子。あたし、もう、會ふ必要はないと思ひます。

眞藏。また、そんな事を云ふ。寛さんの心持がお前には分らないのか。

きぬ子。（涙をこぼして）……あたし、もうすつかり氣持が變つてしまつたんですもの……

眞藏．田中さん、とに角、寛さんに來て頂きませう。

田中。でも、きぬ子さんが……

眞藏．いえ、よう御座んす。私が伴はせますから。

田中．さうですか。では。（立たうとする）

さだ子、もし、何なら、女中をやりませう．何處にゐらつしやるんですの，

田中。通りの郵便局の前のカフエに待つてゐます……いや、私が行きませう，

さだ子．いゝえ、よう御座んす．みつや．みつや，

女中。（出てくる。）はい。

さだ子，お前御苦勞だがね、通りの郵便局の前に洋食屋があるだらう。（女中うなづく。）あすこにね、伊東さんの旦那さまがゐらつしやるから、ちよいとお伴れ申してきておくれ，

女中。はい。（退場。）

田中．きぬ子さん。

きぬ子，……

田中。あなたがお嫁家へ歸つておしまひなすつてからの伊東の家は、そりや慘めですよ．四五日前に、家内をちよつとやりましたがね、婆やに泣かれて困つたさうです，

きぬ子。……

田中。（さだ子に）伊東は役所から歸つて來ても書齋へ入つたきり、物も云はないし、衣服の出し入れから、おかずの注

合まで、まことに氣毒で仕樣がないから早く奥さまにお歸り下さるやうにお願しますつて、さう云つたさうです。

　沈默。さだ子が涙をふく。

眞藏。私としても、全く寛さんに申譯がないのです。こんな事になる位なら、決してあゝまでして貰つて頂く筈ではなかつた――寛さんは勿論、御親類御一同に對しても、私は何と云分けをしていいか……ほんとうに面目の出來ない事になつてしまひました。（きぬ子を見る。きぬ子は唇を嚙んでうつむいてゐる。）どうだ。きぬ子。頼むからもう一度、思返してみてくれ。

きぬ子。………

さだ子。それにお前だつて、これからさき、一生一人でくらす譯にはゆかないからね。

きぬ子。……あたし、きつと一人で暮らしてみせるわ。

さだ子。そんな事が出來るものかね。お前にはまだ分らないが、女が一生一人で暮らすのは、そりや大へんな苦勞だよ。

　ポチがけたゝましく吠える。

さだ子。（つぶやく）あ、ゐらしつた。（立上つて玄關へ出る。）

女中。（勝手口から入つてくる。）おつれ申して參りました。（退場。）

さだ子。（障子を開ける。）寛さん。お待申して居りました。さ、お上り下さい。

　格子が開く。伊東寛が洋服であらはれる。

田中。あ、伊東。此處へ來玉へ。

　伊東寛はすつと田中の傍へ行つて坐る。眞藏とさだ子に無言で挨拶する。

眞藏。寛さん。御無沙汰しました。

寛。いや、私こそ……それに、此度はどうも御迷惑をかけまして……

眞藏。いや、それは私の方から申上げる事です。

さだ子。寛さん。いらつしやいまし。どうもきぬ子がねえ……ほんとうに何と申上げていいやら……

田中。今ね、寛は、昨夜、君と話合つた事をすつかりきぬ子さんにも、御兩親にもお話したんだ。(寛うなづく。)で、この上は君ときぬ子さんと、もう、一度、よくお互の氣持を話合ふより他にいい途がないんだ(伊東を凝視つとみる。)

寛。(田中を見てうなづく)……

田中。それで、君に來て貰つたんだ。よく一つ二人で話合つてみ玉へ。

寛。(うなづく。)どうも、君には、いろいろ有難う。

田中。(眞藏に)では、私はこれで失禮します。(眞藏の顔を見つめて)何れ、また明晩でも上りますから(立上らうとする。)

さだ子。(殆んど無意識に)まあ、あなた……

眞藏。田中さん。我々は二階へ行きませう。汚ない處ですが……それに一つ……これはあづかり物ですが、序に見て頂きたい物がありますから……

田中。何です。物は。

眞藏。無銘の古刀ですが……私は國俊とふんでゐる。

田中。ほう。是非拜見しませう。(立上る。伊東ときぬ子に)おやよく話合つてみ玉へ。

伊東うなづく。

さだ子。寛さん。どうぞごゆつくり……（一緒に茶の間から二階へ退場。）

伊東もきぬ子も石のやうに押黙つてゐる。

寛。（冷えた茶をガブリと呑んで）おい、きぬ子。

きぬ子。（しつかりした聲で）何です。

寛。（何か云はうとする。が、やがて、苦笑して）田中はお前やお父さんに何て云つたい。

きぬ子。……

寛。きつと、俺(おれ)があいつに涙をこぼして頼んだので、見兼ねてやつてきたつてさう云つたらう。

きぬ子。…………

寛。（皮肉に）あいつはお節介だからな。

きぬ子。あなた。そんな腹にもない事は云はない方がいい事よ。

寛。（蒼くなる。）何、腹にもない事だと……

きぬ子。あたしには分つてゐる。

寛。俺はお前のその早わかりが厭(いや)なんだ。

きぬ子。あなたはお酒を召上つたのね。

寛。酒なんか飲むもんか。この位の事で……

きぬ子。いゝえ、隠してもだめ。すぐ分るわ。

寛。また始まつたな。お前の感覺は鋭敏だよ。まるで犬だ。

きぬ子。ねえ。どうして。あなたはさうなの……あたしの顏をさへ見りや、皮肉を云はないぢや居られないのねえ。

寛。（苦痛をまぎらすやうに毒々しく）お前がさう云ふ風に持ちかけてくるからだ。

きぬ子。（咽びながら）あたし、眞からあなたが憎いわ。何故、ほんとうの心持が云へないんでせうね……

寛。俺は嘘なんか云つた事はない。

きぬ子。あなたは何でもあたしの云ふ事に逆に出たいんだわ。それがあなたの病氣よ。

寛。逆に出たいと云ふ事を知つてゐながら、お前は、何故、あの會社へなんか出たんだ。

きぬ子。だつて、お金が足りないぢやありませんか。

寛。（冷笑する。）それこそ嘘だよ。

きぬ子。あら、どうして。

寛。俺にはよく分つてゐる。お前は時代にかぶれてゐるんだ。淺薄な雜誌學問から……

きぬ子。あなたのお株が出たわね。

寛。俺の月給が少ないからと云はれりや、事實俺は齒嚙をしても、默つてゐなけりやならないんだ。お前にそこをよく呑込んでゐて、あの會社へ出たんだ。

きぬ子。だからあの時厭なら厭と云へばいゝぢやないの。

寛。俺はあの場合厭とは云へない性分だ。それを呑込んであゝ云ふ事をするのが俺は憎いよ。

きぬ子。……だつて、あたしだつて仕事がしたいわ。一日家にゐて、ぼんやりしてゐるのは耐らないわ。

寛。俺はお前が毎晩會社から歸つてきて、やれ今日は徳川樣の奥方がゐらしたの、内務大臣の奥さんがゐらしつたのと云ふ話をきかせるのが一番耐らない――今度の事の起りはあれが因だ。

きぬ子。……子供も何もない家庭に何もしないであたしがゐられると思つて。

寛。いま、子供でも出來てみろ。それこそ惨めな生活だ。俺の仕事だつて、もうおしまひぢやないか。

きぬ子。それがあなたの獨斷ですよ。

寛。いや、獨斷ぢやない。さう云ふ例が澤山あるぢやないか。

きぬ子。（涙を呑む。）あなたは、たゞ、あたしをおもちやにしてゐらつしやるんだわ。

寛。お前は俺の心持が分らないんだ。

きぬ子。（泣く。）……駄目だわ。やつぱり別れる方がいゝわ。

寛。（涙をぼろぼろ流す。）きぬ子　お前がさう云ふ氣なら、勝手にするがいゝ。今日俺が屈辱を忍んで此處に來たのが、つまり馬鹿だつたのだ………

きぬ子。（聲を立てゝ泣く。）………

寛。（咽びながら）俺はお前なんか居なくたつて立派に生きて行けるんだ。

きぬ子。あなた。それをよして頂戴つては……後生だから……

寛。俺の心配は御無用だ。（齒を喰縛つてゐる。）

二階からさだ子が足を曳きずりながら降りてくる。

さだ子。寛（ひろし）さん。御免なさい。（通りがゝりに）きめ子。どうしたのさ。

二階から貞藏が「さだ子、さだ子こつちへ來てゐなさい。」と聲たかく呼ぶ。

幕

第二幕

一

奥に二つの扉（ドア）がある。一つは社長室、一つは應接室に通じてゐる。銀座のあるビルデイングの三階にある化粧品會社の販賣部。中央より二つにスクリーンによつて劃（しき）られた室である。右手、事務室。左手販賣部。販賣部には、美くしい賣子三人。事務室には、事務卓が並んでゐる。卓上電話數個。帳簿などの必要品が置かれてある。兩方の室に各スチームが通つてゐる。右手に扉があつて、給仕や小使の室になつてゐる。壁上には、この化粧品製造會社の建物の大寫眞が何枚となくかけてある。一段高いところに大きな時計がかゝつてゐる。クリスマスの前日の正午である。外は大雪で一面銀世界になつてゐる。事務室の方では、會計が一人で計算をしてゐる。

女タイピストがカチカチ、タイプライタアを打つてゐる。

販賣部の方では、金錢登錄器の前が空席になつてゐる。三人の賣子が目白押にスチームにたかつてゐる。

兩方の室に電燈が點いてゐる。

賣子一。御覽なさいな。村瀨さん。もう五寸位つもつてよ。

賣子二。このまゝ夕方までふれば電車が止まるわよ、きつと。

賣子一。いやになつちまふ。

寳子二。(微笑)でも、あなたはいゝわ。

寳子一。あら、どうして。

寳子二。(少さな聲で)タクシーで送つて貰へばいゝぢやないの………

寳子一。誰に。

寳子二。(狡さうに笑ふ。)ちやんと知つてるわ。

寳子一。誰よ。

寳子二。ほら、あの黒い石入りの指環をはめたハイカラな人………

寳子一。(ハツとして)知らないわ。

寳子二。だめよ。かくしても………あたしちやんときいたんですもの………

寳子一。分つたわ。しやべつた人――小使でせう。

寳子二。えゝ、あの爺ね。あたしても……つて云ふのよ。

寳子一。(力を入れて)いやな奴だわね。

寳子二。(寳子三に)吉岡さん。何を仄やりしてゐるのよ。

寳子三。………明日はクリスマスだわね。

寳子二。それがどうしたのよ。

寳子三。(思出を追ふやうに)面白いわ……あたし、クリスマスの晩雪がふつてるのは大好よ。教会の内だけ明るくつて、外はしいんとしてるてほんとに好きだわ。

午砲が鳴る。

賣子一。(腕時計をみて)あゝお腹が空いたわ。早く行つて御飯を喰べてきませうよ。

賣子三。おや佐藤さんと丹羽さんと先に喰べてゐらつしやい。あたし後で交代するわ。

賣子一。さう。おや、御願してよ。さ、行きませう。(二人つれ立つて退場。)

はでな奥様風の女と、その友だちらしい四十格好の女とが入つてくる。

奥様風の女。おゝ寒い。(賣子三に)あの……香水を見せて頂戴。

賣子三。はい、

奥様風の女。ムゲーがいいわ。

賣子三。はい。(陳列棚の方へ三人でゆく。)

友だち。それからね。あたしに、シヤボンを二ダース別々に包んで下さいな。箱に入れてね、お歳暮に上げるやうにして………

賣子三。はい。

三人は陳列棚のところで、あれこれと品物を撰つてゐる。

支配人が社長室から出てくる。

支配人。(タイピストに)石川さん。

タイピスト。はい

支配人。それがすんだら、一つこれを打つて置いてくれたまへ。(四五枚とぢた紙を出す。)

タイピスト。はい。(タイプライターを打ちつゞける。)

支配人。(室中を見廻して會計に) 皆どうしたんです。

會計。今、午飯(ひるめし)を喰べに行つてゐます。

支配人。(急がしく時計を出してみる。) さうか。丁度十二時だな。(時計を捲きながら、販賣部の方へ出てくる。お客を見て、如才なく挨拶する。そして、事務室の方へ歸つてくる。タイピストに) 石川さん。伊東さんはどうしました。

タイピスト。きぬ子さんは、今、お客さまがゐらしつたので、應接間にゐらつしやいます。

支配人。(舌打をする。) 仕樣がないな。どうしたんだか、この頃、伊東さんは落付きませんね。

タイピスト。えゝ。何だか少しお家に取込があるやうです。

支配人。それに、一週に一度も二度も來ない時がある……あれぢや、役に立たない。お客がすんだら、ちよいと社長室に來るやうにさう云つて下さい。

タイピスト。はい。(支配人は社長室へ入る。) ねえ、小倉さん。

會計。何だい。

タイピスト。伊東さんは旦那さんと別れるんですつてね。

會計。いよいよね。どうもそんな事ぢやないかと思つたよ。……だが、黒木も罪な男だな。

タイピスト。女たらしね。

會計はにやにや笑つて、煙草に火をつける。應接間の扉が開いて、きぬ子は田中茂夫を送り出してくる。田中は怒つたやうな顔付で挨拶もせずに歸つて行く。きぬ子、金錢登錄器の前に坐る。

賣子三。（奥様の風の女と、その友だちに傳票をわたす。）……有難う御座いました。

　　二人の客はきぬ子の前へ來て金を拂ふ。きぬ子登錄する。

きぬ子。どうも有難う御座います。

　　二人の客退場。

タイピスト。伊東さん。今、支配人さんがちよいと社長室へ來て下さいつて云つてゐらしつてよ。

きぬ子。さう。有難う。（社長室へ行く。）

　　沈默。

會計。支配人も薄々感づいてゐるね。

タイピスト。（タイプライタアを打ちながら）何に。

會計。黑木の事をさ……

タイピスト。さうでせうか。

會計。伊東さんも、いよいよ首になるのかな。

タイピスト。かも知れないわね。今頃社長室へ呼ばれるなんて。

　　黑木欣二がしやれた洋服で販賣部に入つてくる。

黑木。（賣子三に）おい、社長は居るかい。

賣子三。いゝえ。お留守です。

黑木。（事務室をちよいと覗く。）困つたな。何時頃歸るか分らないかい。

貴子。お午には歸るつてさう云つてお出かけなさいました。

黑木。伊東さんはゐないのかい。

貴子。いゝえ、社長室にお出でなさいました。

黑木。ふうん、おやれ、伊東さんが來たらね、俺がちよいと會ひたいつて云つてゐたつてさう云つてくれないか。

貴子。はい。(後向で舌を出す。)……

黑木。おや應接間で待つてゐるからね。(退場。)

タイピスト。(それなきいてチラと會計をみる。)隨分亂暴ね。

會計。(頁をすてる。)俺も社長の甥に生れてくればよかつた……

タイピスト。全くだわ。

小使の油谷角五郎が何處からか歸つてくる。

油谷。(會計に)　支配人さんはお出でなさるかね。

會計。いま用談中だ。どうだ、すぐ分つたかね。

油谷。全たく分りにくい處だね。でも、やうやく探しあてゝ行くと、御留守さ。でも請求書だけは置いてきましたよ。

會計。おや、また、一二三日して行つて貰ふんだよ。

油谷。何度行つたつてよこしやしねえよ。こんな大雪の中を歩きまわらせられちや、やりきれねえ。(小使室に退場。)

會計は計算をはじめる。

タイピスト。(筆を置いて)伊東さんは、お父さんの家を出ておしまひなすつたんですつてさ。

會計。ふうむ……

タイピスト。今ぢや、あの油谷の家へ下宿してゐなさるのですつて……昨日お母さんが私を尋ねてゐらしつて、散々愚痴をきかされたわ。

會計。昨日は伊東さんはたしか欠勤だつたね。

タイピスト。えゝ、ゐらつしやらなかつたわ。

會計。油谷はよくない噂があるぜ。氣をつけないと、伊東さんもひどい眼に會ふよ。

タイピスト。ほんとねえ。

沈默。タイプライターの音がカチカチきこえてゐる。

きぬ子が社長室から出てくる。顔色が非常に惡くなつてゐる。グタリと金錢登錄器の前に坐る。

賣子三。（きぬ子のそばへ來て、さゝやく）……

きぬ子。さう。應接室に……

賣子三。えゝお待兼ね。さつきから。

きぬ子はすつと立つて、應接室に行かうとする。

二

應接室

やはり、いろんな化粧品が陳列棚に並べてある。社長の寫眞が、壁間にかゝつてゐる。電燈が點いてゐる。

卓一つ。椅子數脚。正面の窓から近所の家々の、屋根が、雪で眞白になつてゐるのが、ハツキリ見える。スチ

ームの前の椅子に、黒木欣一がかけて、新聞をみてゐる。

扉があいて、きぬ子が入つてくる。

黒木。(きぬ子の入つてきたのをみる。)あゝ、きぬ子さん。何うしたの、顔色が馬鹿に悪いぜ。

きぬ子。さう。(顔をなでゝみる。)この頃心配がつゞいたからよ。きつと……

黒木。お察しするよ。君の氣持は……

きぬ子。黒木さん。手紙讀んで下すつて。

黒木。手紙……知らない。

きぬ子。一昨々日出したのよ。

黒木。僕はね、まだ、宅へ歸らないんだよ。

きぬ子。ぢや、東京驛から、すぐ此處へゐらしつたの。

黒木。あゝ、タクシイでね―君の事も氣になるし、それから大阪の工場から、叔父に言傳を云ひつかつてきたのでね……

きぬ子。さう。

黒木。二三日で歸るつもりだつたんだけれど、何やかや工場の方の用事が片付かなくて困つたよ。

きぬ子。あたし隨分待つてゐたわ。

黒木。すまない……全くすきない。

きぬ子。……

黒木。僕は行きたくなかつたんだよ。だけれど、叔父の厳命だからね……それに、去月からどうしても大阪の工場へ

行かなきやならないのを延ばし延ばししてゐたのでね………

きぬ子。あたし心細かつたわ。何をするにもたつた一人なんですもの………

黒木。もう大丈夫だ。安心し玉へ。僕が歸つてきたから………ね、きぬ子さん。

きぬ子。え〻………でも考へてみると、あたしやつぱり心配だわ。

黒木。何がさ。（答なし）何がそんなに心配なのさ。

きぬ子。あなた。あたし一生懸命なのよ。分つて………

黒木。僕だつて一生懸命だよ。

きぬ子。本統、ほんとうにさうなの。

黒木。あたり前ぢやないか。君も疑ぐり深いね。

きぬ子。だつて、もし、あなたと結婚が出來なけりや、それこそ、あたしの一生は惨めなものよ。――だから、手紙に
　それを書いてあげたの………

黒木。え………ぢや本統に離縁してしまつたのかい。伊東さんとは………

きぬ子。（顔を押える）え〻、四日前に籍を返してきたわ。

黒木。………

きぬ子。黒木さん。何故、そんな顔をなさるの。

黒木。そんな顔つて………僕はたゞ聞いてゐるだけだよ。

きぬ子。でも、なんだか進まないやうね。

黒木。そんな事はあるもんか。たゞ、少し事が早まりすぎたと思つただけだよ。

きぬ子。あら、どうして。（熱してくる。）あなたと、結婚するにはどうしたつて離縁しなければならないぢやありませんか。

黒木。だからさ、もう少し僕の方の準備が出來てからにしたかつたつて云ふのさ。

きぬ子。準備つて何なの。

黒木。まづ叔父の意向をよく確かめて置く必要があるぢやないか。

きぬ子。……あなたは、この間、もし、叔父が不同意なら、自分一個の意見でどうでもするつておつしやつたぢやないの。二人貧乏さへする覺悟なら何でも出來るつて。

黒木。それやさう云つたさ。然し、出來る事なら圓滿に事を運びたいからね……

きぬ子。黒木さん。やつぱりあたしの考へてゐたとほりね。

黒木。何がさ。

きぬ子。あなたは責任を背負ふのがいやなのね。たゞ、あたしを、玩弄にしたかつたのね。（唇を噛んで黒木を凝乎と見つめる。）

黒木。君にや僕の氣持が丸つきり分つてゐないんだ。

きぬ子。だつて、さうぢやありませんか。伊東と云ふ者がある間は、どうしたつて、あたしあなたの云ふとほりになる譯に行かないぢやありませんか。

黒木。そりやさうさ。だから、これ迄君は僕の云ふ事をきかなかつた……いや、僕だつてそれを不服に思つてゐやしな

いよ。あとで考へりや、あれは無理なのさ。云はゞ夢中になつてゐたんだからね。

きぬ子。……ぢや、分つて下さつたのね、あの時のあたしの心持は。

黒木。そりや分つたよ。安心し玉へ。

きぬ子。……あたしね、黒木さん。あなたに早く伊東と離縁した話をしたかつたの……でも何だか　するのが氣後がしたのよ、だから手紙を上げたの。

黒木。何故さ。可笑いぢやないか、氣後がするなんて。

きぬ子。でも……何だか、あたし恐かつたんですもの。

黒木。いいさ。僕だつて、君が離縁するのを實際は望んでゐたんだ。

きぬ子。ほんと。

黒木。きまつてゐるぢやないか。

きぬ子。あたしやつと安心したわ。

黒木。（笑ひながら）きぬ子さん。これからは、もう、あんなに強情は張らないだらうね。

きぬ子。強情つてなアに。

黒木。（頬つぺたをつゝ突く。）白つぱくれちやいけないよ。

きぬ子。（赤くなる。）いやな黒木さんねえ。

黒木。ねえ、きぬ子さん。今日、何處かへ夕飯を喰べに行かうぢやないか。

きぬ子。ええ……行つてもいいわ。

黒木。叔父にちよつと會つて、大阪の言傳を云ひさえすりや、もう、僕は身體が空くんだ。

きぬ子。今日は工場の方へはいらつしやらないの……

黒木。行くもんか。あんなゴミゴミした處へなんか。でも、君は六時迄は此處に居なきやいけないんだらう

きぬ子。いいの、あたし少し頭痛がするから御願して早く歸して頂かうと思つてゐた處なの。（間、ぐづぐづしてゐる。）でも、いづれくはしい話は後でするわ。

黒木。（凝乎つときぬ子をみる。）珍らしいね、いつも仕事仕事つて口癖のやうに云ふ君が、早く歸るなんて……

きぬ子。あたしこの頃そりや怠け者になつたわ……でも、そんな話、もう止しませう。くさくさするから……

黒木。あんまり遲く歸ると、また君のお父さんが喧ましいだらうから、早く行かうよ。だが、まだ叔父は歸つて來ないだらうな。

きぬ子。黒木さん。

黒木。何だい。

きぬ子。今日は少し位、あたし遲くなつてもいいわ。

黒木。どうして……本統にいゝのかい。

きぬ子。あたし、もう、家には居ないのよ。

黒木。え、家に居ない。

きぬ子。（悲しさうに笑ふ。）えゝ、

黒木。一體どうしたつて云ふんだい。

きぬ子。でも、さうするより他に仕方がなかつたんですもの……

黒木。僕の事からぢやあるまいね。

きぬ子。いいえ、家ぢや、まだ、あなたとの事は、そんなに深くは考へてゐないやうですわ。

黒木。ふうん……ぢや、何で家を出たの。

きぬ子。伊東と別れると云ふのが、父の氣に入らないのよ。

黒木……。そりやさうだらう。

きぬ子。あなたは御存じないけれど、家の父は、そりや頑固なのよ。あたしの方の心持なんか、てんで考へちやくれないの。何て云ふと、すぐ、お前が我儘だと、から來るんでせう。本統は、もうこの二三ケ月前から、ろくに口もきかなかつたの。

黒木。……ぢや、お母さんがさぞ心配してゐらつしやるだらうね。

きぬ子。（烈しく泣く。）黒木さん。もう止して頂戴。お願だから……あたし、それを云はれるともう……

黒木。おい、きぬ子さん。そんな聲出してもし人にきこえたら事だよ。ね、もう、云はないから、泣くのはよし玉へ。

きぬ子。（齒を喰ひしばつて）えゝ、もう泣かないわ。勘忍して頂戴。つひ、悲しくなつたもんですから……

黒木。で、いま何處にゐるんだい、君は。

きぬ子。小使の油谷の家にゐますの……

黒木。油谷の家に……妙な處へ行つたもんだね。

きぬ子。えゝ、あたしどうしても下宿屋へなんか行く氣がしなかつたの。

黒木。そりやさうだらう。
きぬ子。お友だちの家へ御迷惑をかけても悪いしと思つて、いろいろ氣をもんだんですが、素人屋でいい處がなかつたんですの……始め、油谷に貸間をさがして貰つたのが縁で、まあ、汚ないけれど當分家（うち）へきてゐらつしやいつて云つてくれたもんですから……
黒木。（意味ありげに）あいつは評判のよくない奴だから、用心しなけりやいけない……
きぬ子。あたしも、さう思つたの。だけれど、急に家を、飛出してしまつたんですもの、行先がなかつたの。
黒木。まあ、いゝさ、僕がゐるから……
きぬ子。（縋るやうに）さうよ、あなたさへゐて下さりや大丈夫よ。。あたし、今ぢや、あなた一人がたよりなんですから……
黒木。安心し玉へ。悪いやうには決してしないから……
きぬ子。ねえ、あなた。ほんとうに早く結婚出來るといゝわね。
黒木。まあ、待ち玉へ。第一に叔父を說きつけるから……
きぬ子。でも、もし、叔父さんが承知して下さらなかつたら……
黒木。その時はその時で、また考へるさ。
きぬ子。叔父さんは承知して下さらないでせうね。
黒木。まあ、そんなに案じすごさないがいゝ。
きぬ子。でも、心配な事があるんですもの……

黒木。何だい。
きぬ子。（首をふり振ふやうに）いゝえ、後で話すわ。
黒木。何か君は隠してゐるね。
きぬ子。……まあ、いゝの、後でゆつくり話すから……
黒木。（窓から外を見る。）叔父はまだ歸つて來ないな。
きぬ子。よく分るわね。
黒木。うむ、自働車が置いてないもの。
きぬ子。お午(ひる)にお歸りになるつておつしやつたんですけれど、遲れるわね、三十分位。
黒木。きぬ子さん。油谷は、僕と君の事を知つてゐるのかい。
きぬ子。えゝ、知つてたわ。もう、事務所で知らない人はないわ。
黒木。さうかな。
きぬ子。油谷に知れちや惡いの。
黒木。いや、知れたつて構やしない。
きぬ子。あたしが油谷の家へ行つたのを惡く思つてゐらつしやるんぢやないの。
黒木。いや別に惡く思つちやゐないよ。
きぬ子。あたし、あのお師さんが氣味が惡いの。
黒木。あれは女郎上りだと云ふからね。

きぬ子。さう云へば、さう云ふ處があるわ。

黒木。（自働車の音をきゝつけて、窓から外をみる。）あ、叔父が歸つて來た――ぢや、きぬ子さん。僕の用は十分ばかりですむから、横町のタクシイのところで待つてゐ玉へ。タクシイを飛ばしていゝ處へ行かう。

きぬ子。（縋りつく。）黒木さん。ほんとに見すてないで頂戴。あたし一生懸命なんですから……

黒木。大丈夫だよ。ぢや、十分ばかり…………ね、きつと待つてゐ玉へ。（扉を開けて退場。）

きぬ子は、そのまゝ、考へ込む。やがて 窓の傍へ行つて、一心に外の雪景色を見てゐる。

油谷仲五郎がバケツと箒とを持つて出てくる。

油谷。伊東さんかね、そこに居なさるのは。（返事なし）ちよつと退いて下さいな。いま、社長さんが歸つてゐらしつて、今日三時から、お客があるから、應接間をよく掃除して置けつて云ふから…………（返事なし。顔をのぞきこんで）何だ。あんた泣いてゐるんだね。（間、笑ふ。）意氣地のねえ話だ。いい年をして、何がそんなに悲しいんだね。

きぬ子。（顔をおさへて）お爺さん…………

油谷。何だね……何か心配な事でも起つたのかね。

きぬ子。あたし、いま支配人さんに呼ばれたの…………

油谷。…………ふん。それで……

きぬ子。もう 明日から出勤しなくつてもいいつて云ひわたされたの…………

油谷。あいつは因業な奴だからね…………

きぬ子。あたしいろいろ事情をお話しして散々賴んだの。だけれど、駄目だつたわ。

油谷。……可愛さうに、不斷から、あんたはあいつに白眼まれてゐなすつた………

きぬ子。お爺さん。何とかして、此處に居られる工風はあるまいかねえ。

油谷。（掃除をはじめる。）あいつが云ひわたしたら、もう駄目だ……なアに、心配する事はねえ。あんたなんさ　若くて、學問があるんだから他に、まだ、いくらもいい口があるよ。

きぬ子。でもねえ、あたしこの會社から離れたくないんだもの………

油谷。なアに、あんたは、まだ世間を見ねえから、さう思ふけれど、他處へ行つて御覽なさい。月給だつて此處よりか餘程いい處があるよ。

きぬ子　あたし月給なんかどうでもいいわ。

油谷。ははは。まだ　若いね。よく考へて御覽なさい。家を飛出したら、いやでもあんたの月給で食つて行かなきやならないよ。

きぬ子。そりやあたしだつて知つてゐるわ。

油谷。成程、わしの家に居て自炊してゐりや、そりやいくらもかゝらねえが……あんただつて、何んな事があつて金がいるかも知れねえからね。

きぬ子。……さうねえ。ねえ、お爺さん。

油谷。何だね、

きぬ子。あたし、ほんとは此處を斷はられた事を、まだ、黑木さんにも話さないのよ。（油谷、凝手つときぬ子を見る。）

そりや、もう、すぐ知れるわ。知れるにきまつてゐるわ。だけれど、どうしても云出せなかつたの………

油谷。黒木さんにや、早く話しといた方がいいよ。

きぬ子。あたしもさう思つたの。でね。何度か云はうとしたんだけれど……

油谷。しつかりしなさい。さう氣が弱くちや駄目だよ。いいかね。

きぬ子。でもね。それをきくと。黒木さんが厭にたりやしないかと思つて……

油谷。ははは……大丈夫だ。そんな事があるもんか。（間。）あんた、まだ、づぶのお嬢さんだね。

きぬ子。お爺さん。あたし、黒木さんに頼んで見やうかと思ふの。社長さんに願つてこれまでどほり勤めさして貰ふやうに……

油谷。駄目だね。そりや、よした方がいいぜ。

きぬ子。駄目かねえ。

油谷。だから此會社は、もうあきらめてしまふんだ。そして、わしの家へゐて、他處を捜す方がいい。わしの家にゐりや、金はかゝらず婢はあの通りお人好だから、氣兼はなしさ。まあ さうしてゆつくりいい口を捜すんだねえ。

きぬ子。……

油谷。まだ、この會社があきらめられねえかね。

きぬ子。……でも、かうなつちや、もう仕方がないわね。

油谷。お家からは、何とも云つて來ないかい。

きぬ子。今朝、人がきたわ。

油谷。（何事かに興味を感じたやうに、掃除をやめて、）人が……此事務所へかね。

きぬ子。えゝ。（胸がせまつてくる）でも、怒つて歸つちやつたの……

油谷。あんたが怒らしたんだね。

きぬ子。……仕樣がないわ。どうせなるやうにしきやならないんだから、……（顏をおさへて）お父さんは、やつぱり怒つてゐるんですつて。來た人がさう云つてゐたわ。でもね。お母さんが、氣狂のやうに泣いてゐるんですつて……（泣く。）

油谷。それぢや、あんたを訊ねて來た人はやつぱり家へ歸れつて云ふんだね。

きぬ子。（うなづく。）……口を酸つぱくしてすゝめたのよ。でも、あたし强情を張りとほしたの。お爺さん。（また泣く。）昨日はお母さんが此處へ訊ねて來たんですつて……今日もね、來る筈だけれど、この雪でリヨウマチが痛んで來られないんですつて……

油谷。そんなに泣いても仕樣がねえ。なアに……そんな事はすぐ忘れてしまふよ。少時すりや、胸がカラリと開けて、また世の中が面白くなるとも……人間は腹が坐つてゐねえといけねえ……

きぬ子。（長い間、泣いてゐる。ふと）あ、もう、あれから十分位たつたわね。（立上る。）

油谷。ぢや。あんたは、これから家へ歸へるんかね。

きぬ子。あのね、お爺さん。あたし今夜は遲くなるわ。

油谷。（凝乎つときぬ子を見つめる。）お樂しみだね。へへ……

きぬ子。……（沈んだ調子で）厭なお爺さんねえ。

油谷。黑木さんなんさ、まだまだお坊ちやんだ。腕さへありや、丸めるなあ、譯はねえ……だがね、あんたは駄目だ。

きぬ子。（そはそはして）何が駄目なの……

油谷。すぐ男に惚れこんぢまふから駄目だ。

きぬ子。あら、あたし惚れこんでなんかゐやしないわ。

油谷。まだまだ、修業がいるよ。人間、腹が坐つてゐなくちやいけねえ。こつちが惚れこむより、男に夢中にならせなくつちや……

きぬ子。あたしそんな事出來ないわ。

油谷。だから、駄目だつて云ふのさ。ははは……さあ、行つてお出でなさい。そして思ふさま、引ついたり、くついたりしてくるのさ。

かう云つてまた掃除をはじめる。

きぬ子。また、お爺さん。からかつちやいやだわ。

三

また、販賣部と事務室の光景にかはる。販賣部の方には、女學生風の耳かくしの女二人、母親らしい老人につれられてきて何か買つてゐる。女賣子一、二、が、その傍で品物を見せてゐる。女賣子三はゐない。

事務室の方では、さつき昼飯を喰ひに行つた事務員五人がもう歸つてきて、事務卓を圍んで坐つてゐる。皆せつせと仕事をしてゐる。

社長室の扉が開いて、支配人が出てくる。

支配人。（タイピストに向つて）石川さん。伊東さんは何處へ行きました。

タイピスト。(顏を上げる。)おや、ゐらつしやいませんか。

支配人。(ちよつと販賣部の方を覗く。)いや、ゐなければ、よう御座んす。(かう云つて、會計のそばに歩いて行く。)おい、君。(會計が顏を上げる、支配人は小聲で)あのね、仕事中、御氣の毒だが、一つ、伊東さんの月給を日割にして勘定してくれ玉へ。

會計。はい。

支配人。それからね。それが出來たら、(ある符號で)これだけ……別封にしてこしらえて置いてくれ玉へ。

會計。承知しました。(計算にかゝる。)

支配人。(室の中央に出て)それから、ちよつと皆さんに申し上げて置きます。實は、伊東きぬ子さんの事ですが、これまで皆さんと一緒に働いて頂いて、社長も大へん喜んで居られましたが、今回家庭上の都合でどうしてもお退きにならなきやならない事になりました。まことに殘念ですが、御家庭の御事情とあればやむを得ません。何れ、いま、御暇乞に見えるでせうが。……兎に角、さう云ふ次第ですから、ちよつとお話して置きます。

皆顏を見合せる。支配人は輕く會釋して、社長室にかくれる。

幕

第三幕

六月過ぎの陰欝な日、雨がじとじとふつてゐる。午後三時頃。油谷角五郎の家の小奇麗な二階である。

正面に高い窓が一つ開いてゐる。左は壁、右は階子の上り口になつてゐる。小さき床の間には二宮尊徳の肖像を畫いた掛軸が一本かゝつてゐる。きぬ子が、すつかり面やつれしてセルの寢衣をきたまゝ、搔卷で、寢てゐる。

少時して、階下から、油谷の女房のおなかが上つてくる。四十四五歳の更年期に入つた女、女郎上りの化粧流れのした險のある顏立である。言葉に茨木のなまりがある。

おなか。きぬ子さん。どうです。やつぱり心持がよくありませんか。

きぬ子。えゝ、何だか朝から眩惑がして……

おなか。そりやいけませんね。きつと血の道が起つたんですよ。

沈默。

きぬ子。（眼をつぶつたまゝ）お内儀さん。

おなか。何です。

きぬ子。まだ、雨がふつてゐますか。

おなか。えゝ、降つてゐますよ。もう、梅雨ですもの……なかなかやみませんよ。

きぬ子。六月と云ふのに、大へん寒いのね。

おなか。ほんとですよ。御覧なさい。今朝もお爺さんに笑はれたんですよ。あたしが羽織を出してきたものですから……

きぬ子。……でも、お内儀さんはいつも丈夫で結構ですわ。

おなか。これであんた。煩らひでもしたら、それこそ上つたりですよ。

きぬ子。……あたしも早く丈夫な身體になりたいわ

おなか。……もう、譯はありませんよ。たゞ、かう冷えると、女は血の道が起るんでねえ……

きぬ子。やつぱり流産のあとが、まだ本統ぢやないのね。

おなか。何しろまだ、二週間しきやたゝないんですもの……無理はありませんよ。

きぬ子。……あたし、今日は何だか氣がふさいで仕樣がないんですの。

おなか。若い時分、あたしも覺えがありますよ。血の道は、女に付物ですからね。

きぬ子。……考へてゐると、お内儀さん。お産と云ふものは、女には大へんな仕事だわね。

おなか。そりやさうさ、あんた、死ぬか生きるかの苦しみをするんですもの……

きぬ子。お内儀さんは一人も生んだ事はないの。

おなか。あたしみたいに若い時分商賣をしたものは駄目ですよ。でも、やつぱり年だわね。この頃は時々しみじみ子供が欲しいと思ふ時がありますよ。

きぬ子。あたしも欲いわ。

おなか。あんたなんか、まだ、まだ、これから出來るからいゝけれど……あたしの年ぢや、もう貰ひつ子でもしなくつちやアね

きぬ子。あたしこの頃、よく子供の夢を見るのよ。流産したのが、殘念でしやうがないわ。

おなか。あんな薄情な人なんか忘れておしまひなさいよ。馬鹿馬鹿しいぢやありませんか

きぬ子。(肉を喰ひしばつて)……たゞあたし口惜しいのよ。

おたか(笑ふ。)それがやつぱり未練のある證據ですよ。

きぬ子。未練なんかないわ。黒木さんは、もう、何んとも思やあしないけれど、あの子だけは、どうしても思ひきれないわ。

おなか。やつぱりお嬢さん育ちだけにあんたは人は好すぎて駄目だわね　あたしなら、いつかも云つた通り、構ふことはないから、社長さんの家へ押しかけて行つて、うんとお金をとつてやるんだけれど……

きぬ子。……あたし死んでも、そんな事は出來ないわ　自分の身を責めるやうに云ふ。)

階下から、釘を打つ烈しい音がきこえて來る。

きぬ子。(顔をしかめて)お内儀さん、あの音はなアに。

おなか。あれですか。お爺さんが、雨がもるつて云つて、臺所の天井に板を打ちつけてゐるんですよ。

きぬ子。……いやな音ねえ。何だか、身にこたへるわ。

おなか。お爺さん、昨夜の事があるもんで、今日は朝から御氣嫌を取つてゐるんですよ。日曜でせう、今日はね。

きぬ子。(間を置いて)昨夜はどうしたの。

おなか。あんた眠られなかつたでせうね。あの爺ときたら、いゝ年をしやがつて……まあ、呆れるぢやありませんか。

きぬ子。何かしたの。

おなか。女をこしらえやがつたんですよ。あたしにかくしてさ。

きぬ子。まあ。

おなか。だから、うんとしぼつてやつたんですよ。昨夜、一パイ飲んで……

きぬ子。（眞面目に）男つてほんとうに厭なものねえ。

おなか。みんなさうですよ。男は――だから何を云つても、お金ですよ。お金さへありや……どんな事でも出來ますからね。

きぬ子。……あたし身體さへよくなりや、何とかして返しますよ。もう隨分御迷惑をかけてゐるわねえ。

おなか。（世辭笑ひをして）何ですね。きぬ子さん。そんなつもりぢやないんですよ。……いゝえ、ね、これが見ずしらずの方なら兎も角、ちやアんとお家が分つてゐるんですから、そんな心配なんか私どもぢやしやしませんよ。

階下から油谷角五郎が聲をかける。

油谷。きぬ子さん。お母さんがお出なさいましたよ。さあ。汚ない處で御座いますが……いいえ。もう何もお構ひも致しませんで……（きぬ子蒼白い顏をして起上る。おなかが、壁にかけてある袷を寢衣の上にきせる。）

きぬ子。いいのよ。お内儀さん。

おなか。いいえ。着てゐないと、風邪を引きますよ。

きぬ子。いえ。構ひません。このまゝで……

おなか。さうですか……でも……

きぬ子の母親きだ子が上つてくる。きぬ子は母の顏を凝乎とみる。やがて、唇を嚙んで下を向く。

さだ子。お前まあ……（眼を押える。）

きぬ子。お母さん。

さだ子。（おなかがそつと會釋して階下へ下りやうとするのをみて）まあ、ほんとにこの娘が御世話になりまして……

おなか。いいえ、あなた。ちつともお世話なんか出來やしません。たゞ、かうやつて置いてゐるもんですから、ほんの一階をお貸申してゐるだけで御座いますよ。さあ、奥さま。ごゆつくりなすつて……只今、お茶を持つて參りますから……

さだ子。どうぞ、もうお構ひ下さいますな。

おなか。いいえ、お構ひなんかいたしやしません。（退場。）

さだ子。（氣嫌を取るやうに）でも、思つたより奇麗な家だね。

きぬ子。よく分つてね。

さだ子。角の煮豆屋で教えてくれたのよ。會社の小使なんかしてゐて、よく、こんな家に住へるね。

きぬ子。いろんな厭な事をしてゐるやうよ。よくは知らないけれど……

さだ子。厭な事つて。

きぬ子。若い女が、澤山出入りするわ。

さだ子。お前、こんな處へ、また、何だつて間を借りたのさ。

きぬ子。他になかつたんですもの……

さだ子。（眼をおさへる。）何だか、すつかりお前は變つてしまつたのね。少時見ない内に……

きぬ子。……お母さん。もう、何も云はないで下さい。(涙ぐむ。)

さだ子。だつて、云はないぢやゐられないぢやないか。お前が我儘なばつかりで　お前

きぬ子。(鋭く)お母さん。それをおつしやるとあたし、もう、お眼にかゝらないわ。

さだ子。困るねえ。ほんとに……

きぬ子。(唇をかんで)何もかも、あたしが悪いのよ……いいわ、もう、どうせかうなつちまつたんだから……

おなかが茶菓子とお茶とを持つて上つてくる。

おなか。まあ、只今は、また結構な頂戴物をしまして有難う御座いました。あんな御心配をして頂いちや、困ります
よ。奥さま。

さだ子。いいえ、ほんのつまらないもので……

おなか。きぬ子さん。よくあなたからもお礼をおつしやつて下さいましな。

きぬ子。(眼に一ぱい涙をためて横を向いてゐる。)えゝ。

おなか。ぢや、奥さま。御免下さいまし。(退場。)

沈黙

きぬ子。(突然)お母さん。(さだ子と視線が合ふ。)あの手紙読んで下すつて。

さだ子。(ハラハラと涙をこぼす。)読んだよ。(間を置いて)今更云つても仕様がないからあたしは何も云ひません……
けれどもね、あたしはどうしても愚痴が云ひたくなりますよ。

きぬ子。……

さだ子。伊東の家に對してだつて、顔向けが出來やしません。昨夜も、お父さんは、これを云つて、お怒りなさるのさ

…………

きみ子。………伊東だつて罪があるわ。こんな事になつたのも……一つは、あたし伊東のせいだと思ふわ。

さだ子。それがお前の心得ちがひです。お前女つて云ふものは、もとから、男の氣嫌氣褄を取つてゆかなきやならないやうに出來てゐるのですよ。

きぬ子。…………(熱い涙をこぼす。)

さだ子。お父さんはね、俺はきぬ子が黒木と懇意にするのが、はじめから厭だつたつておつしやるのさ……あたしが、あの頃あれ程云つたのに、お前が用ひなかつたから間違が出來たんですよ。

きぬ子。どうせ、あたしは馬鹿よ。だから姙娠までして、來てられるんだわ。

さだ子。で、お前これから、どうするつもりなの。

きぬ子。…………

さだ子。云つて御覧。とに角お前の考を………

きぬ子。あたし、お母さんにあんな手紙なんか書かなきやよかつたと思つて、今ぢや後悔してゐるの………

さだ子。さう、お前のやうにひがんでしまつちや、話が出來ないぢやないか。あたしはお前が可愛いからこそ(泣く。)かうやつて、やつて來たんだよ。

きぬ子。………

さだ子。本統にどうするつもりなのさ。云つて御覧。

きぬ子。……

さだ子。あたしそれをきかない内は、安心して歸れないから…………

きぬ子。やつぱり事務所へ務めるわ。身體が直つたら………それより他にお金のとれる途はないんですもの………

さだ子。あたしは、やつぱり身を堅めた方がいいと思ふがねえ。

きぬ子。いやだわ。そんな事……あたし事務所へ出て、獨身で通すわ。そして伊東の顔を見返してやるわ。

さだ子。でもね。獨身で行くつてのは、なかなかむづかしいからね。

きぬ子。私はもう頭から駄目になりましたわ、あたし。

さだ子。實はお前の手紙は、まだ、お父さんには見せないの。でね、今日はお父さんに内緒で出てきたのよ。あれを讀んだら、あたし、どうしても來はないぢやゐられなくなつてね。（悲しげに微笑する。）

きぬ子。……

さだ子。それでお前お金はあるの

きぬ子。お金。

さだ子。かうやつてゐると、隨分かゝるだらうからね。

釘を打つ音が、また、鋭どくきこえてくる。

きぬ子。（身をふるはして）お金はいいの。

さだ子。でも、お前、もう、持つてゐないだらう。

きぬ子。いゝのよ。

さだ子。（懐中から紙入を出して、紙幣をその内から出す。）これね。五十圓あるの、とても足りないだらうが、お父さんに云へないから、内緒でやうやくこれだけ持つて來たのよ。またあとで何とかするからね。

きぬ子。（顔を喰ひしばつて）本統にいいの。あの會社をよす時に、澤山退職手當を貰ひましたから……まだ、隨分殘つてゐるのよ。

さだ子。さうかい。でも、これだけは取つてお置き……

きぬ子。いいのよ。お母さん。持つて歸つて頂戴。また、お父さんに惡いから……

さだ子。（泣く。）さうかい。本統にお前が持つてゐるなら……おや、持つて歸りますよ。でも、いつでも入用があつたら、手紙をおよこし……何とかしますからね。

きぬ子。あたしこれからお金を貯めますわ。一生懸命に仕事をして……

さだ子。でもよかつた――あたしはお前の顔をみたんで、ほつとしました。その内、お父さんにもね、御機嫌のいい時をみて、あたしから會つて下さるやうにお話しとくからね。

きぬ子。あたし成功するまでは誰にも會はないわ。

さだ子。それがお前の意固地と云ふもんだよ。

きぬ子。だつて、口惜しいんですもの……

さだ子。困るねえ……それぢや、お前あたしが仲に立つて何うにもならないぢやないか。

きぬ子。（俯向いてゐる。）……

さだ子。お前がもう少し素直に出てくれるとお父さんだつてあんなにお怒りなさりやしないんだよ。

きぬ子。（强情に俯向いてゐる。）……

さだ子。そりやお父さんだつて、お腹の内ぢやお前が可愛くて耐らないんだよ。それくらゐ分りさうなもんだがねえ……

きぬ子。……お父さんは自分の體面ばかり考へてゐらつしやるんだわ。（涙をこぼす。）あたしがどんなに辛い思をしても、伊東の家にゐさへすりや御氣嫌がいいんだわ。

さだ子。また……どうしてお前はさうひがむんでせうね。

きぬ子。ひがみぢやありません。……あゝあたし、もう、身内の人は誰もかれも厭だわ。みんなよつてたかつてあたし一人を苛めるんだわ……

さだ子。そんな馬鹿な……お前。

きぬ子。（ヒステリツクな聲で）あたしを生埋にして、その上で、唄つたり踊つたりしてゐたいんだわ。誰がそんな……みてゐるがいいわ。今にあたしどんな恐ろしい事でもしてみせるから……

さだ子　そんな捨鉢な事を云ふもんぢやありません。あゝ、どうして、かうなんだらう、お前はすつかり人は變つたよ。

きぬ子。（泣く。）あたしをこんな者にしたのは、一體誰なんです……

さだ子。きぬ子。後生だから、そんな無茶な事を考へないでおくれ。ね、その内にきつとあたしがいいやうにするから……

きぬ子。身をふるはして泣入る。）……お母さん。歸つて頂戴、あたし一人でゐたいんですから……

さだ子。（泣く。）あゝ、歸るよ、だがね。今云つた事をお忘れでないよ（電氣がポカリと點く。）あゝ、もう、電氣がつ

た。早く帰らないと、お父さんはお帰りなさる。

きぬ子。（泣きながら）帰って下さい……此處にゐちやいやです……

さだ子。（涙をふいて）ぢや、歸るからね。身體を大事におしよ。いいかい。また、その内に折をみて來ますからね。

　きぬ子はひた泣にないてゐる。さだ子しよんぼりと退場する。

沈默。少時止んでゐた釘を打つ音が烈しくきこえる。

きぬ子。また、お爺さんが釘を打ちだした……何て厭な音だらう。

　長い沈默。

　おなかが上つてくる。

おなか。きぬ子さん、あんた、夕御飯は……

きぬ子。あたし欲しくありません。（堅い表情で）お內儀さん。お爺さんをちよいと呼んで下さいな。

おなか。あゝ、よう御座んすとも。（退場。）

　きぬ子は考へ沈んでゐる。

　伯五郎が上つてくる。小ざつぱりとした身裝をしてゐる。

油谷。きぬ子さん。何か用かね。

きぬ子。お爺さん。あの……この間あんたが話してゐたカフエね。

油谷。うん。

きぬ子。ほんとうに、そんなにお金になるの。

油谷。あんた行つてみる氣になつたかね。
きぬ子。あたしお金が欲しいの。……（聲を落して）でもねえ……
油谷。そりや金にやなるよ。女事務員なんかとちがつて、月に百やそこらは受合つて取れるね。
きぬ子。……そんなに取れりやいいわね。
油谷。それにあんた、此間話した家は、主人がわしと懇意だもんで、なアに、うまく話を持込みや、百や二百、前貸してくれるよ。
きぬ子。ほんと。
油谷。向ぢやしきりといい女給さんを欲しがつてゐるからね。あんたなら、錢の百や二百出したつて喰付いてくるね。
きぬ子。……そうすりや、それであんたの處の借りを拂へるわね。
油谷。あんたが行く氣なら、すぐ、わしが行つて話をしてくるよ。（間。）どうだね。
きぬ子。あたし何だか寂しい氣がするの……かうやつて、ぶらぶらしてゐるのが心細くつて仕樣がないの。お金さへありや何でもないけれどねえ……
油谷。まあ、行つて見なさい。世の中が丸つきり違ふからね……若い人にや面白からうよ。
きぬ子。……あたし、あの子が居てさへくれたらカフエになんか、行く氣にならないわ、きつと……
油谷。段々あんたも世間がわかつてきなすつた……ははは……まあ、結構な事だ。わしも、この儘、此處に置いてあげたいが、何しろ、隨分、このお產以來、錢がかゝつたからね……昨夜も嚊に愚痴を云はれて往生しましたよ。
きぬ子。あたし行くわ。お爺さん。

油谷。さうしなさい。なァに、行つてみりや、また、いい事もあるよ、派手な處だからね。

きぬ子。いいわ。構ふもんか。お父さんや、伊東にうんと耻をかゝしてやるから……

幕

第四幕

一

カフエ、アサクサの二階。狹い食堂、卓子四個、そのまわりに椅子が並べてある。凝つた絹のシエードで包んだ電燈が天井から下つてゐる。六區の活動寫眞館や、劇場の裏手にあるカフエである。四方の壁はハイカラな舶來の壁紙で張つてある。正面露臺へ出るガラス戸が開け放してある。外の夜景に、活動寫眞館の電燈が、反映してゐる。右に入口、その外の廊下に階子段があり、廊下をへだてゝ、隣室の開放された扉から明るい室内が仄かに見える。階下から、蓄音器で、フォックストロットのダンスレコードをかけてゐるのがきこえてくる。秋の夜、十一時過ぎの事である。

油谷角五郎が和服で、片隅の卓子によつてゐる。料理二品と正宗の瓶が前に置いてある。

他の卓子には、會社員らしい二人づれの客一組と、夫婦づれの四十男が七つ位の女の子をつれてきてゐる。

會社員甲。だがね、とに角、かうして、土曜日の晩、淺草をブラックのは結構だね。

會社員乙。これで金さへあつたら、なほ面白からうと思ふよ。

會社員甲。さうすりや淺草にや居ないね。
會社員乙。全くだね。フライとビフテキを喰つて、活動寫眞を見て歸りやしないね。
會社員甲。（コーヒを呑む。）いや、この方がいい――少くとも、趣味が健全だよ。
會社員乙。實際健全すぎらァ……はは……
會社員甲。ぢや、吉原にでもくりこむかな。
會社員乙。これが、社長さんのやうに茶屋へ行つて藝者を上げてさわぐんならいいがね。
會社員甲。（うなづく。）へんな家へ押上つて越後なまりのめりんすの長襦袢に抱かれて寢るんぢや全たくやり切れないよ。（時計をみる。）もう十一時半だ、そろそろ引上げやうか
會社員二。赤電車をはずしたら、君、巣鴨宮仲までテクらなきあならない身の上だからね。どりや、出かけやう。
二人は廊下に出る。
會社員甲の聲。どうだい。この階子の急な事は……
會社員二の聲。ふみはづしたら大へんだぜ。
會社員甲の聲。まるで地下室か何かに降りてゆくやうだね……
沈默。
四十男。（グビリグビリ飲んでゐる。）
妻。あたし何だか寒くなつてきた。あのガラス戸を閉めてもいいでせう。
四十男。うむ。（子供に）たかちやん。もう、腹はいゝかい（硝子窓の戸をしめる。）

子供。もう、喰べたくないの……お父さん、歸りませう、ね。

四十男。うむ。今歸るよ……

妻。あなた。少し霧が下りてきましたよ。

四十男。明日は雨かな。

妻。さうね。とに角今日出かけて來てよう御座んしたね。

子供。母アちやん。松の助はいゝわね。

妻。まあ、この子は、生意氣だね。

四十男。はは……今から、どうも活動がかう好きぢや末が思ひやられろぞ……

妻。たかちやん。寒かないかい。

子供。少し寒いよ。歸らう。ねえ、母ちやん。

妻。あなた。もう十二時近くですよ。

四十男。うん、よしよし、ぢや、歸らう。さあ、行くぞ。（立上る。）

妻。お勘定は（帶の間に手を入れる。）

四十男。階下へ行つてすりやいゝんだ。

三人退場。

妻の聲。たかちやん。あぶないよ。まあ。この階子は眞暗ねえ……

沈默。

女給一が出てくる。料理の皿を持つてゐる。

女給一。もうおかつらへはよろしう御座いますか。火を落しますから……

油谷。あゝいい……熱いのを一本持つてきてくれ。

女給一。はい。

油谷。それからおきぬにちよいと顔を貸してくれつてさう云つてくれ。

女給一。はい……さつき、さう云つたんですけれど、丁度階下が立込んでゐたもんですから……

油谷。すぐきてくれつてな。…… いいかい。

女給一。はい、かしこまりました。（他の卓を片付けて退場。）

油谷。（獨語）畜生、逃げてまわつてゐやがる……

沈默。

お客の五十位のでつぷりした男につれられて、二十七八の女形の俳優が出てくる。

女形。旦那、この眞中の處に一つ陣取りませう。

旦那。成程、ちよいとした家だね。（腰かける。）

女給一が出てくる。

女給一。いらつしやいまし。

女形。今晩は。

女給一。大へん遲いお出で御座いますね。いまハネましたの。

女形。いいえ。旦那のお伴でハネ後をちよいと浮氣してきたんだよ。

女給一。まあ、御馳走さま……

旦那。(女形に) 君は何か喰べるかい。

女形。いいえ、もう、結構です。

旦那。ぢやビールにするかな。それともウヰスキイかね。

女形。折角頂くんなら、後の方を……

旦那。(女給に) ぢや、ウヰスキイを二つ……ソーダ水もだよ。

女給。ウヰスキイお二つ……かしこまりしした。(傳票に書いて退場。)

女形。旦那。今度に取つて置きませうね。

旦那。何をさ。

女形。今夜おごつて頂く分を……

旦那。戯談いつちやいけない。何もおごる事なんかありやしないぜ。

女形。とは云はせませんよ。今夜のどうもバイセンダイ(梅干代)との醜態は何です……私やすつかり櫟丸郎さ。

旦那。どうぞ此處の處は一つ御目こぼしを願ひます。はは……

女給一がウヰスキイを運んでくる。

女給一。お待遠さま……あの生憎と、もう火を落しましたが、冷たいものなら出來ますが……何か召上りますか。

旦那。何うだい。(女形に云ふ。)

女形。いえ、結構、おつたちやん。ぢやウヰスキイのおかはり……
女給。はいお二つですね。
旦那。あゝ。

女給退場。

入れちがひにお酌と藝者とがお客につれられて上つてくる。

藝者。（室内を覗いて）あら、兄さん。
女形。おや、萬作さん。
藝者。さきほどは……また、こんな處へきてゐらつしやるの。
旦那。山の宿の、太夫が、どうしてもウヰスキーを召上らないと歸らないとおつしやるのでねっ
藝者。兄さん、ほんと。
女形。可愛さうに……私や旦那に誘惑されたんですよ。まあ、此處へゐらつしやいな。おぺんちやんも……
お酌。有難う。
藝者。いまね、御客と一緒なの……ぢや、また、後程……（會釋して隣室へ入る。）

女給ウヰスキイを持つてくる。

女形。旦那。これを一パイ飲んだら歸りませう。もう、十二時ですぜ。
旦那。急に里心がついたね。
女形。えゝ。どうせ私や今夜は旦那にさばかれるんだから……

旦那。いやな事を云ふぜ。はは……君こそ怪しいもんだ。

女形。御屋敷へ歸ると、七十になるお袋が待つて居ります、あんまり面白くないね。ははゝゝゝ

旦那。ははゝゝゝ

女形。ぢや、そろそろ出かけませう。（立上る。）

旦那。行くかい。（立上る。）

　兩人退場。

　女給一が後を片付けにくる。

油谷。おい。

女給一。はい。

油谷。おきぬにさう云つてくれたかい。

女給一。はい、さう云ひましたわ。もう、すぐ、參りますよ。（女給退場。）

　油谷は自分で酌をして飲んで居る。やがて、きぬ子が上つてくる。耳かくしに結つた頭から裝まですつかり變つてゐる。眼のふちに隈が出來て、以前より險に見える。

油谷。おゝきぬちやん。忙がしい處を呼びたてゝ、すまない……何うだね、この頃は……

きぬ子。（グタリと椅子にかける。）何か用なの。

油谷。（盃をさす）どうだね、一杯。

きぬ子。澤山……今日は飲みたくないわ。

油谷。（手酌で飲む。）此處はなかなか忙がしい家だから、貰ひも多いだらう……

きぬ子。駄目……この頃は不景氣だからね。

油谷。でも月にすりやまとまつた錢になるだらう。

きぬ子。……やつぱり足りないばかりだわ。

油谷。お前やつぱりまだ、お孃さん氣が失せないからいけねえ……なあ、きぬちやん。お前は男に此方から惚れこんぢまうから、つひ取られるんだ。

きぬ子。……

油谷。わしや、チラリときいたばかりだからほんとか嘘か知らねえが、お前、とんだ不良少年に引つかゝつたつて云ふぢやねえか。（隣室から藝者の笑聲がきこえる。）

きぬ子。えゝ……もう、隱したつて仕樣がないから云ふけれど、非道い眼に會つたわ、あたし……

油谷。人間腹が据つてゐなくつちや駄目だ。なあ、おきぬちやん、わしが始終云ふこつたが……これが人間の値打だよ、實際。

きぬ子。……ほんとに、あんな恐ろしい奴始めてだわ。

油谷。（凝乎つときぬ子をみてゐる。）……

きぬ子。帝大の學生だつて云ふふれ込みでせう。あたし本統だとばかり思つてゐたの……

油谷。何しろ向ふから惚れこんでくるやうにしないぢや、錢はしぼれねえ。この世智辛い世の中だからね。

きぬ子。お陰で朋輩にも借りが出來るし、來るお客からは冷かされるし、あたし居づらくつて仕樣がないわ。

油谷、だから、早くその男と切れてしまふんだ。さうしなきや、お前うだつが行りつこねえよ。

きぬ子、もう切れたわ、とつくに……

油谷。かう、おきぬちやん。そりやちつと、料見が面白くねえな。お前、わしを欺しちやいけねえ。

きぬ子。欺したりなんかしやあしないわ。本統なんですもの……

油谷。ふざけちやいけねえ。わしが、そんな甘口な手に乗ると思つてゐるのかい。

きぬ子。嘘だと思ふなら、さう思つてるがいゝわ。

油谷。その料見がいけねえつて云んだ。いいかい。おきぬちやん。お前。わしに隠して、變な事を目論でやしないか。

きぬ子。(ギョットする。)變な事つて……

油谷。云つてしまへば、實も蓋もないがね。お前、その不良少年としめし合はせて、此處を飛出すつもりだらう

きぬ子、……

油谷　まだ、まだ、お前は考が若いよ。そんな事をして見なさい。それこそ、どんな非道い眼に合ふか……

きぬ子。(絶望的に)もう、あたし、どうなつたつて構やしないわ。

油谷。それがいけねえ。お前さんはまだ若いんだ。これからどんないい芽が出るか分りやしない。今からさう自棄になつたら、それこそもうおしまひだ。終にや、鐵道往生をするか。牢屋へ打込まれる位が落だ……それちやつまらない。(きぬ子苦しさうに泣く。)わしなんさ。若い時から、隨分いろんな事をして來たもんだ。滿州から朝鮮を飛び廻つてね。だが、人間に生意地がねえから、いまだにかうやつて、事務所の階子段を拭いてゐなきやならねえ　だから、お前も。此處のところは一つよく考へて……その不良少年と切れてしまはなくちや……

きぬ子。あたし惚れても何うしても居やあしないのよ。たゞ、いろんな恐い事されるから、仕方なしに云ふ事を聞いてゐるのよ。

油谷。それが向の手なのよ。お前を脅かしたりなぐつたりして、捲上げるのさ。

きの子。お爺さん。どうかして、手を切る工合はないでせうか。ほんとうを云へば、あたし、恐くつて恐くつて……夜もおちおち寝られないわ。

油谷。家の婦も昨夜心配してゐたよ。根が素直ないい子なんだから、何とかして、助けてやりたいつて云つてたなあ。

きぬ子。ほんとに、もう、何もかも駄目になつちまつたわ。カフエに出てお金をこしらへやうなんて考へたのが、淺墓だつたわ。（隣室からお客と藝者の笑聲がきこえる。）

油谷。おう、さうさう。黒木が來やあしなかつたかい。此處に。

きぬ子。黒木さん。來ないわ。

油谷。あいつもお前さんを捨てゝ大阪の工場へやられてゐたが。あつちで藝者にはまつて、散々な眼に會つたんださ。一體女に鈍い奴だつたからね……

きぬ子。あんな人……いい氣味だわ。

油谷。二三日前にちよいと東京にきたつて云つて、會社へ顔を出したよ。わしがお前さんの話をしたら、是非一度、訊ねて行くつて云つてゐたが……

きぬ子。（急に）お爺さん。あの時、流産しないで、あの子がゐてくれたら、あたし、曲りなりにも、眞面目でゐられたわね、きつと……

油谷。なアに、あの子が居たら、それこそ、お前、惨めだ。今頃、何處へやられてゐるか分るもんか。

きぬ子。あたし決して、他處へなんかやりやしないわ。立派なお母さんになつてみせるわ。

油谷。女事務員ぢや、子供を育てちやいけねえからね……

きぬ子。駄目ね、全たく……女が仕事をしてくらして行かうなんて大間違だわ。あんな處で貰ふお金は、ほんのお白粉代だわね。

油谷。若え女が金を取るなあ、やつぱりこれさ。(寝る眞似をする。) 男のおもちやになるのさ。

きぬ子。あゝ、厭だ厭だ。何故、女になんか生れてきたんだらう。(新内の流しがきこゑる。)

油谷。もう、大分夜が更けたやうだ。

きぬ子。……

油谷。でも、お前なんざ、器量がいいから、徳さ。

きぬ子。……かうやつてゐると、段々深みにはまつて行くだけだわねえ……

油谷。だから、わしが云ふんだ。つまらねえ奴に引かゝつてゐたんぢや、それこそ身のつまりだよ。

きぬ子。お爺さん。どうかならないでせうか。

油谷。あんな不良少年なんて云ふ者は、お前からしぼれる間は、なかなか離しやしめえ。

きぬ子。あたし生きてゐる氣がしないわ

油谷。つまらねえ者に引つかゝつたもんだね。

きぬ子。ねえ、お爺さん。後生だから、どうかして頂戴。

油谷。わしも考へてみたがね、仕樣がなけりや、身をかくすんだね、一時。
きぬ子。どつか他所へ行くの。
油谷。さうさ。
きぬ子。でも、あの連中は、方々に網を張つてゐるから駄目だわ。
油谷。なアに、それにや、いい處があるのさ。
きぬ子。(さぐるやうに)何處……また、惡い處ぢやなくつて
油谷。こんな處とちがつてうんと金になるんだぜ。
きぬ子。お金になるの……
油谷。うん。
きぬ子。一體、何處よ。
油谷。濱さ……横濱のホテルさ。
きぬ子。横濱の何處。
油谷。本牧と云ふ處さ。わしが滿洲にごろついてゐた時分の友だちがね。此頃金を殘して、バアとホテルを開いたのさ。何しろ相手が異人だから金にやなるよ。海のそばで、お前、海水浴も出來るんだ。
きぬ子。何だか氣味が惡いわね。そんな處。
油谷。何、氣味の惡い事なんかあるもんか。
きぬ子。でもねえ……

油谷。お前が今のまゝでよけりや、たつて、すゝめやしねえが……何うだね、行つてみる氣はないかね。

隣室で、藝者がきやつきやつと騒ぐ。

笑聲。

きぬ子。まあ、考へてみるわ。

油谷。よく考へるがいい。全たくお前の云ふとほり、こんな事をしてゐちや、錢は殘りやしないよ。

きぬ子。さうねえ。

お客と藝者とお酌とが隣室から出て階下へ降りてゆく。

油谷。（それをみて）どりや、大分遲くなつた。わしも歸らう。（立上る。）

きぬ子。（考へこんでゐる。）……

油谷。おきぬちやん。お前、流産した時の苦しみを忘れちやいけねえ……男に惚れると、欺されるよ。いいかい。ちや、わしは歸るから……

きぬ子。歸るの……お内儀さんによろしくね。

油谷。あゝ、いいとも……

兩人退場。

二

正面に大きな時計がかゝつてゐる。階下のバアの光景。時計は一時をさしてゐる。室内の裝飾に、怪奇な趣味である、

時計の下に、穴倉の入口のやうな階子段があつて、二階に通じてゐる室は右と左と二つに別れてゐる。右の室は、もう、電氣を消して窓かけを閉め、椅子をすつかり、卓の上に積上げてある。左の室には、マウォーの連中の描いた油畫が三四枚壁間にかゝつてゐる。床には、コップの破片やら、紙くづやら、きたならしくちらかつてゐる。左の端に酒賣場があり、その傍に女給が二人くつゝいて腰かけてゐる。

白い服の給仕が蓄音器のそばに坐つて、一心に聞入つてゐる。金錢登錄器の前には、年増の女が坐つて婦人雜誌を讀んでゐる。此處の内儀である。蓄音器には、チゴイネルワイゼンの曲がかけてある。醉漢二人――一人はゐぎたなく眠つてゐる。一人は洋服をきて、眞蒼に醉つたまゝ、ウヰスキイのコップをなめてゐる。

二階から賑やかな聲がきこえて、藝者とお客が降りてくる。

お客。おい、勘定はつけて置いてくれ玉へ。

女給一。はい、かしこまりました。(送つて出る。)おやすみなさい。(女給二に)表は霧がふかいのね。

女給二。(ふけた女)おぺんちやんは、もう、十六だつて云ふのに、まだ一本にならないのかねえ。

女給一。ほんとだわね。

油谷角五郎が、きぬ子に送られて下りてくる。

油谷。(金錢登錄器の前に立つ。)いくらだね。

年増の女。へえ、有難う御座います。三圓七十錢……角さん。大分いいお氣嫌ね。

油谷。(金を拂ふ。)おかみさん。大將によろしく云つておくれ。

年増の女。今日は留守よ。

油谷。ちや、さよなら。（退場。）

女給二。もう、一時だわよ。

女給一。きぬちやん。

きぬ子。なアに。

女給一。ピンが抜けかゝつてゐるよ

きぬ子。有難う。（髮に手をやつてピンを差しなほす）

女給二。あゝ、厭になつちまう。

女給一。（給仕に）藤田さん。

給仕。何だい。うるさい女だなあ。

女給一。それ、なアに……いいわね。

給仕。ヘイフエツだよ。（かう云つて一心にきいてゐる。）

きぬ子。（女給二に向つて）たみちやん。あんた横濱へ行つた事がある。

女給二。あるわ。

きぬ子。本牧つて何んな處。

女給二。町から一里ばかり離れた海岸よ。電車で行けるわ。

きぬ子。ホテルなんかあるとこ。

女給二。ホテルつて、みんなチャブ屋よ。

きぬ子。チヤブ屋つて

女給二。異人さん相手の淫賣屋さ。

きぬ子。そんな處なの……

醉漢。(大きな聲で)こら、女。

女給二。はい。(立つて行く。)會計で御座いますか。

醉漢。何だ。貴樣の面は……はは……まるで骸骨がお白粉をぬつたやうだ。それでもウヱトレスか。

女給二。(ふくれる。)知りません。(きぬ子の傍にくる。)馬鹿にしてるよ。よつぱらひのくせに……

女給一。もう飲めやしないんだよ。たみちやん。早く會計を持つてゐつておやりよ。

女給三。(行く)はい、お會計で御座います。

醉漢。會計ぢやない。ビールだ。賣笑婦め。

女給三。藤田さん、ビールですつて

給仕。うるさいなあ。(ぶつぶつ云ひながら、スタンドへ入つて、ビールを出す。)

女給三がそれを醉漢の前に持つてゆく。給仕は、また蓄音器にへばりつく。

きぬ子。(間をおいて、)おや。こほろぎがないてるわね。(きゝ入つてゐる內に涙が眼に一パイたまつてくる。女給一の膝に突伏す。)

女給二。きぬちやん。どうしたのさ。

きぬ子。御免なさい。あたし、何んだか、急に悲しくなつちやつたの……

女給二はきぬ子を抱くやうにしてゐる。

女給二。何がそんなに悲しいの。きぬちやん。

きぬ子。何だか分らないの……たゞ。あたし孤獨になつたやうな氣がするの……世間の人たちが、みんな居なくなつてしまつて…

女給二。お前さん。またお酒を飲んだね。

きぬ子。いいえ、今日はちつとも飲まないの……たゞ心細い氣がして仕樣がないの。(頭を上げる。)でも、もう、直つたわ。(悲しげに笑ふ。)泣いたつてつまらないわね。



露及の手記

室生犀星

一

正月三日は朝から荒れて雪になつた。永い間ゐた川岸町の家ともお別れだから、今夜は知り合ひの人を招んで旗源平の遊びをしやうといふのだつたが、そとは雪交りの烈風で傘さへ差せなかつた。とにかく小西やその他の友だちへ使を出し、中越のお嬢さん、紺屋の姉妹、林の奥さんと坊ちやん、おとなりの清水の奥さんと嬢さんなどへ、電話の架るところへは最う一度かけて見ることにした。そしてみんなお伺ひするといふので、露及は町へ出て折詰になる菓子を二十人前注文して、夕方までとどけてくれるやうに頼んだ。

「毎年正月三日にはこんな遊びをするんだが、そのたびに想ひ出すことがあるんだ。」

露及は女の方をちょつと眺め、同じ炬燵にあたつてゐる大學生の新六の方を見た。

「すこし厭な想ひ出だがね。」

露及はその日も根岸の奥さんに、十五になる文子とあい子の姉妹を招んで、例の遊びの旗源平をしてゐたが、既う宵の程過ぎてから、おすしをつまんでこれから遊びをしやうとしてゐたときに、玄關先きへ駈け込んで來た使があつた。

「あのときは全くびつくりしましたね、ふうちやんはさすがに泣かなかつたけれど、あいちやんと坊やとが一時に泣き出してしまふし……。」

女はさう言つて露及の顏を見た。全くあの不吉な使が來たときにみんなの、これから色々な遊びをしやうとしてゐる顏色を數秒の間に硬張らしてしまつた。おすしの皿がなまなましく靜まり切つた部屋の中で、電燈を眞上にして冴え返つてゐた。あぶらぎつた鮪のおすしがぼたんの一瓣のやうに露及の、吃驚りした指さきから垂れてゐることも知らなかつた。

「奥さん、僕も行きます。」

「ええ、どうぞ。まあどうしたらようございませう。」

おろおろになつた奥さんは、なぜか裾をからげ四十過ぎのつやのないふくら脛を見せ、おぼつかない足もとで暗い通りへ飛びだした。主人は三年前に亡くなり何故かほつとしたやうなこのごろだつた奥さんに、頑な主人の顏が目にみえたにちがひないと、露及は坂上へ出たときにさう思つた。

「だからあれ以來、正月には遊んでも人を招んだりしない人だけれど、今年はあんなことも起りはしないと思つてね。」

露及が根岸へ行つたときには奥さんの家はくらい闇の中で、既う白蛛の巣のやうに燒け落ちてゐた。ぽんぷの水があ

たりの道路を泥にごりにさせ、何一つ殘らず燒いてしまつた。家を出るとき行火の火をよく埋めて出たのだつたが、火は疊づたひに床の間の天井を拔いて二階へ攀がつた。そこにあつたかなりやの籠がへし潰れながら殘つてゐた。露及はそのとき奧さんがじつくり自家の燒け落ちた姿を見凝め、悪いことをしましたと獨りごとを呟いたのを耳づらく物悲しく聞き入れた。

「その奧さんの主人といふのはむづかしい人でね。もうなくなつたがね……。」

飼猫のために障子を一と棧だけ雁風に切り、そこから庭からくる猫の出入口にしてあつたが、泥足でたたみを汚すからと言つて、いつも勝手へまで新聞紙を敷いて猫の通り路にしてあつた。猫もしまひには狃れてしまつてかそこそと新聞紙の上を歩いてゐたが、そんな辭づけることにも主人のひとは頑固にやり通させた程だつた。だから奧さんも何も彼もかたがついて、やつと自分の思ひとほりに娘たちをそだてやうとしてゐる矢先きだつたので、露及は苦しいまでに奧さんの悄げるのを手痛くかんじた。

「その話はもう止しませう。こはくなつて來ますから。」

女はさう言つて、みかんを一箱、菓子の手分け、火鉢の數などを合せた。露及は夕方近くなつてから益々降りしきる雪を硝子戸越しに眺めたが、どうやら風は落ちたらしく思はれ、いい鹽梅たと思つた。

「この家で人があつまるのもおしまひだから、賑やかな方がいいね。」

男の客がさきに來て玄關で雪を拂つたが、次いで近くの紺屋の姉むすめが日本髮で、厚いラシヤのコートを脫いでゐるときに、その妹さんも來た。だんなさまが米國へ行つてゐるので淋しさうにしてゐたが、けふは元氣で美しいつやのある瞳で坐敷へ這入つた。

「おひなさまの荷づくりだけわたしにさせて下さいな。」

さう言つて家の女と話してゐる容子には、ひとの奥さんらしくもない娘らしさがあつた。結婚して二月にもならない間に夫なるひとが米國に行つたのだつたが、うちの女はそれを頻りにふんがいしてゐた。

「ではおひなさまの方はおねがひしますからよろしく。」

と、女がいふと、「ええ。」とこたへた。

甥の小西はその妻君が子供を生みに田舎へ行つてゐるので、もの忘れしたやうに淋しがつてゐたが、いい奥さんだねと言つた。しばらくして中越のお島さんが來たが、年も若くまだ娘さんだけに一番うつくしかつた。けふだつたのかしつかり覺えてゐなかつたんですよ、夕方のおでんわですつかりびつくりしてしまひましたの、さう言つてお島さんはいかにも綺倆のいいことを知つてゐる利發さうな口をきいた。が、念入りな化粧はそんな忘れてなぞゐさうもないことを露及にほほ笑ませた。

「おとうさまがね、すこしでございますけれどもと言つて、お好きかどうかわかりませんが、これをもつてまゐりましたの。おきらひだつたらわたしどうしませう。」

茶の間でお島さんは小さい紙包みを露及の前へ置いて、うちでもあまえて育つたらしい口調で、とても大きな瞳で微笑ひながら言つた。

「大の好物です。先生によろしく言つてください。」

「あら、これがおわかりになりまして？」

お島さんは吃驚りしたやうな顔色で言つた。

「これ、からすみでせう。」
「まあ、よくおわかりになりますのね。えらいわ。」
仰山にさう言つたが、露及は包みが小さいからさう思つたのですと答へた。お父さんがお醫者だつたしへいぜいから子供がお世話になつてゐたから、ときどきお島さんまで見舞ひに來てくれた。まだお島さんが尋常四年のときに或日體操の時間に、校長が見送りに來て上肢運動の手がななめに擧げてゐるお島さんのそばへ來て、もつと眞直ぐに手を上げなければいけないと言つて、その手つきをなほしたが、その時間が濟んでからお島さんはわざわざ校長室へ行つて、先刻先生になほしていただいたのは、こんな風に手をあげればいいんですかと、一二三と言つて手をあげて見せたさうだつた。それには三十幾人の先生がたも呆氣に取られてゐた。校長の爺さんはあそれようごす、ようごすと言つたきり茫乎とお島さんの顔を見成るだけだつた。
「うちではからすみをお茶受けにいたしますの。おいしいものですからみんなが好きなんでございます。」
お島さんはさういふと、みんな集まつてゐる坐敷の方をながめて、わたし一番强うございましたのねと言ひ、淑やかに男だちにあいさつをした。中學校教師をしてゐるAがどうも別品だねと、甥にささやいてゐた。おとなりの淸水さんの六つになるお孃さんが、へいぜいから默んまりやだつたものだから、てれて一人で笑ひもせずに窮屈さうに坐つてゐるのを見ると、女の子といふものはあんな六つくらゐの時分から氣質が出てゐるものらしく思はれた。
「そろそろ始めますかね。」
旗源平といふのは、源平の紋のある大旗や小旗をさいの目を振つて取りつこするので、東京地方にはない遊びだつた。さいの目を二つ合せ、片一方が・が出て、も一方に∴が出るのや、同じく⠿が出るのが、最も秀れた目であつた。その

かはり……が出ると勝つた旗數を小旗で十本引かれることになつてゐた。北國地方に生れたものは誰でも知つてゐるが、東京地方の人には分らないらしかつた。それ故、林の奥さんなど、わたし、どうしても分りませんのと言つた。だが分らぬなりでやつてゐるうちに、ひどりでに解るやうなところもあつた。これにはずるをするのが面白かつた。六人づつ別れた敵と味方とが、おたがひの目を掠め旗やさいの目を胡魔化した。さうするのが公けに許され、それを巧みにやつてのけるのが面白かつた。

お島さんは大膽にそのずるをしたが、あくまで眞白面でみんながそれを言つても、知らん顔をして微笑ひもしないで遣つてのけるところが鮮やかだつた。

「そら、やつた、見てゐた。」

大學生の新六がさう叫んでも、上氣した美しいふくれた片頰を新六の方へ見せたきり、振り向きもしないで、いいえ、いいえ、を續けさまに言つた。そして低いこゑで、先生、先生もすこしおやりなさいましと言つて、いたずららしくぷつと微笑つて見せた。いまやらうと考へてゐるんですとさういふと、やあ、相談してゐるぞと誰かが叫んだ。二つの骨牌が明るい電燈の光の下でしやりからぺのやうに跳つては、ぱつたり止つて目をあらはし、その上を男と女の手がひらいたり掉んだり、ゆびわの紅い玉がざくろの實のやうにこぼれては、また森としたりした。そのたびに女れんは叫んだり呼んだり、また雛のやうな聲が裂かれたりした。六十度近い溫度をもつたこの部屋のそとで、雪が前大の上を辷り落ちても誰も知るものがゐなかつた。彼等は雨戸越しに白々しい內庭の雪をながめたが、障子一重の賑やかな遊びを外に冴える淋しい冬が一皆さむざむと心に映じた。

夜が更けみんなが歸つたあと、[illegible]

と、荒砥のやうな硬い刺々しい空氣が、いままで溫かくなつてゐた部屋を縱橫に逆卷いて流れるのを、その雪の吹き込むのと一しよに眺めた。何か大きな氷柱のやうな風だつた。部屋にはすぐに冷えが訪れた。そこに今までの一人もゐなくて、露及が國にゐる間だけ怠らない日記をつける姿だけが、瘠せた肩を立てゝゐるくらゐだつた。

女中があとで床にはいらうとしたときに、こんなことを言つた。

「はんかちが二枚忘れてありました。」

露及はただそれだけの言葉であつたが、妙な物寂しさにおそはれた。誰のにしてもそんな物が忘られてゐるのが氣がかりであつた。

二

途中でとある空地に茶の花が咲いてゐたので、二三本折りながらそれを提げ、盲腸炎で寢てゐるおみよの家へ寄つたが、日あたりのわるい二階の間で仰向きになりやや瘠せたおみよは、まあよういらしてくだされたと言つて起きなほらうとした。

「そのままでゐてくれたまへ、いくらかいい方かね。」

「いたみはなほつたがやけれど、くすりが利きすぎてぼろぼろができたがや。」

と言つて橫向きになつた。そしてこのぼろぼろさへなほつて了へば、もとのとほりなんですと言つた。面窶れしたので二重瞼がひとえぐり平常からみると深くなり、行火のほてりで皮膚が輕くあぶらぐんだ上、赧らみが顏ぢゆうを冴えて走つてゐた。

「それ何んです。」

帽子の下からハミ出してゐる硬い梁々とした枝を指さした。露及は默つて帽子の下から枝を取出して見せた。

「お茶の木の花やね。」

今まで氣がつかなかつたが鐵瓶が低い音を立てて、炭火は白々と消えかかつてゐる。

「いまお茶をいれますから。」

おみよは起上つたが寢衣が肩の方へ綻れ、病みついて艶の失せた腕に元のまま寢衣をかぶせた。そして炭をついで乏しい火種をその上に乘せた。先刻から明るい通りからこのうす暗い部屋へ這入つたので、よく分らなかつたが床の間に凍てた椿が挿され、梅室の掛物がかかつてゐた。全く障子だけが白い部屋だつた。

「この間うちのお母さんがあなたのお母さんに町で會つたがや。そんときあんたがもうこちらをお引上げだときぎましたの。」

「もう知れたのか、――。」

「ええ、ふるさとに身もとあらはるさむさかなや。」

おみよは鳴り出した鐵瓶の湯をきうすに注いで、溫かい仄かな湯氣を立てた。露及はその消えやすい湯氣を眺めてゐると、何かは知らない果敢ない弱々しい氣になつた。東京からの客をあつせんするために紹介されたが、そのたびによく勤めてくれたりしたこの女は、古い觀音と言つても鎌倉時代のものによく似た顏をしてゐた。或る呉服屋を旦那に持つてゐたが、そんなことよりか人懷こい、誰とでも懇意になる氣質をもつてゐて、一夕の宴の知人もこころよく飲むことができた。

「お正月前にやすんでゐるのはいいけれど、どうかしてお正月になほりたいもんやと思ひましてね。この容子だと間に合ひさうに思ひますのや。」

「しばらくは動かないで靜養してゐるんだね。」

「あと日がないけど、ぼろぼろさへなほつて了へばいいがや。」

おみよのあせり氣に誘はれ、よく見ると顔のむくみも引いてゐるやうで、四五日經てば快くなるだらうと思へた。何か持つて來やうと思つたが、そんなしらじらしいことは嫌ひだから……それに何がお腹にいいか分らないから食べられさうなものを言つてくれれば、あとで屆けてもいいと言ふと、いまのところではカステラくらゐならお腹にいいんですと言つたが、

「いえ、そのお茶の木でたくさんや。」

と、微笑つて言つた。

「こんなものが何になるものか。」

「生けてをきます。」

と、やはり微笑つて言つたが、べつにつけたらしくもなく、心で左う思つたから言ふのだといふ意味に受取れた。お茶の木なら置いて行つてもよい、さう言つて帽子の下の枝をたたみの上に置きかえたが、白い蠟のやうな冷たいつぼみが、葉がくれに五つ六つ膨れ凍えてうす青かつた。おみよは感心して見てゐたが、生れてからこんな花をこんなにもじつくり見たことはなからうと思つた。

「お立ちになるまでにわたいらして、何かおわかれのしるしに御馳走したいがやけれど、あんた何がお好きでせう。た

とへば卵巻きとか、燒とりとか、そんなもののうちで一つ二つ言ふてたい、そしたらお好きなものばかりをあげたいがや、このあいだ、しん子さんなどとそのお話を決めてをいて、つがうのいい日をきいておくことにあたいが言ひつかつたのや。」

「そんなことをして貰はなくともいいよ、何日の間にか消えてなくなればいいんだから、それに業々しいことは僕はきらひなんだ。」

「ではほんの一つ二つ言ふてたい、たまご卷はどう。」

「たまご卷きをくふやうな奴はきらいでさ。」

「ぢや、くるみのきんとん。」

「それならいい。」

うなぎは、うなぎもいい、露及はおかしいので笑つたが、おみよはちよつと待つてたいと言つて、忘れるといかんからと一々卷紙にかきつけた。そして最後にたまご卷とかいて墨で棒を引いた。一體このかねはみんなで拂ふのだらうと思ふと、どれだけも招びもしないでご馳走になるのは氣が引け、腹ではおかしかつた。ゐなかものの實直さがこもつてゐるが、感情にこたへては居づらかつた。

とうふ屋の鈴の音がすると、電燈が何時の間にか來てゐた。それと氣がつくと雪が中庭へふり込んで、丹塗のえん側を白く染めては、はかなく消え失せた。物干場へとどいた梅の木に、つぼみの朝さしがにがみ走つて先尖りに冴えてゐるのを、露及はしばらく佇つて眺めてゐた。ふるさとに身もと洗はるさむさかな、いろいろな事から露及が生ひ立ちのことまで、人人は知つてゐたからうつかりしたことはできなかつた。品行が清く持してゐるらしいのはここにはあつたが、

味氣なく何ごとも物佗しかつた。

「いつころご都合がいいがや。日を決めておかんとこまりますから。」

「いまのところでは分りかねるね。それはそのときのことにしてをいて與れんか、約束してをいても都合がわるかつたりするとこまるし……。」

「それもさうね。」

「なるべくならそんな事をしない方がいいんだよ、こちらもらくだから。」

「けれども切角みなさんできめたのやから、いらしてくださいね。」

暫らくしてすこし寒くなつたぢやないですかと言ひ、おみよは半玉が夜さむの道をあるくやうに、痩せた肩をすぼめた。寢てゐたまへ、だいぶつもつたやうだからと一寸ばかり障子をあけたが、まあ、と、おみよは隙間もないわた雪を夕近い中庭の塀の上に見て、襟足をすぼめて見せた。

「ぢや、ごめんなさい。すこし横になりますさかえ。」

それでも重さうなからだを腰のところをどんよりと病しげに折つて、そつと横向きになりふとんをかむつた。所在ないつやのない手が天鵞絨の襟のところに置かれたが、見るからに物憂さうであつた。露及は少時默つてゐるうちに或る陰氣なたいくつめいた氣分をかんじた。それは凡て病人の枕頭にゐる共通の陰鬱さであつた。この狹い部屋にあるものは何か、ちりや埃にひとしい忘れはてる人と人との日常だつた。何の推展もまた價値ない許でもなかつた。が、露及はふたたび鐵瓶の湯氣がすこしづつのぼりかけ、また消えるに早い音に耳を澄したが、それはやはり微細微尼ものの果敢なさをそつくりささやいてゐるものに過ぎなかつた。

「盲腸といふものは人間のからだの中でいらんもんやさうですね。どうしてそんないらんものがあるのやら。」

「字でかいてもめくらの腸とかくんだからね、手術をして取つた方がいいと醫者は言つてゐるよ。」

「おなかを切るんですか。」

「さうさ。」

「おそろしや。」

露及はしまひに息づまる退屈を感じ出し、切角大切にしたまへと言つて、丹塗のえん側から雪の通りへ出た。出發は明日ではあつたが關係のない隣り近所へそれを知らせないやうに、露及は默つて話さなかつた。

雪の堺ぎわ梅もどきの枝が覗き出てゐるのに足をとどめ、傘のとんぼでその枝の雪をはたはたと落して美しいと思つた。その堺ぎわに小さい川がながれ家鴨ががあがあと啼いて、雪と水の中を從えながら泳いでゐた。家鴨の背中にふうわりと綿雪がぶつてゐたが、ときどき羽搏いてはそれを落した。露及はふしぎな珍らしいものを眺め込んでゐるやうな顔貌で目をさらしてゐたが、これは十年前にもこんな風景を見たことがあると思つた。

「あの時やはり家鴨がゐたらうか。」

露及は若い時分の冬景色にも、やはり若さが潑溂として跳つてゐさうに思はれた。眺めてゐる露及自身の中にも、その時分は寒風をつんざくやうな氣慨があつた。その時の眼の前にも心にも今あらためて思ひ出すことがない。たゞ、ぼんやりと一群れの家鴨ががあがあと啼いて、青い葱が流れ去つて漫然と潑溂の中に一味の哀愁をかんじたものであつたが、それが十年の後には何といふ妙な成長をつゞけて來たものであらう。諦らめ切つた、むしろおすましさんのやうなさとり方をしたものであらう。露及はみづからを嘲笑ふ思ひで、うそ寒い音のする小川のそばを離れた。そして人家に

は灯の色がやうやうに染つてゆくのを、しんしんとして聲なき雪の中に眺めた。あんな薄暗い丹塗りの二階の間で、おみよは凡ての女がさうあるやうに老け衰へてゆくであらうと思つたが、さういふ人世の些事も冬されの一日の過ぎ去るごとく、あとかたもなくなるだらうと思つた。

三

セルロイド製の鳥籠の中の一羽の鳥が、いつの間にか柵を抜け出して列車の床の上に落ちてゐるのを、まんじりともしない子供が紅い顔つきで昂奮し通して、あゝあゝと言つて指差した。黄ろい親指くらゐのおもちやの小鳥だつた。どうして柵から抜け落ちたのかと路及はそれを拾ひ上げ、また鳥籠の中へすつぽりと入れてやつた。

「これでいゝね。」

「あ、あ、——。」

いつも靜かな山谷の家の部屋に慣れてゐた女の子は、車中のひとびとに目を走らせ絶えず吃驚りしたやうな眼付でゐて、すこしも睡付かうとしなかつた。あんまり睡らないとあとで熱でも出したらこまると思つても、やはり馳る列車の中では睡らうとしなかつた。寢臺を取つてあつたが向側に印度人がふたりまで寢てゐて、その所を珍らしがり怕がつて落着がないので、また二等室へ取つてかへしたりした。夜明け近く信州の山奥へ這入つてもやはり睡らうとしなかつた。路及は身もからだも疲れてゐたが、それでも恥や外聞を忘れて子供を抱いて寢つかせやうとしたもの丶、いつもの手には乘らないで四邊へまんまるい眸を走らせ異常な興奮をつゞけてゐた。路及は子供をねならせるために毎晩のやうに抱いてやつたが、ふしぎに子供は痩せたかれの胸の上ですやすやと美しいひとみを閉ぢたりした。寢つくとやゝ重いから

だが一さうしみじみと重りかゝつてくるのが樂しみであつた。それゆゑ、露及は前に亡くした子とは反對に、あるひはお湯をつかはせ、毎日檢溫をし又たとぼけた子守唄をうたつて寢つかせた。それが露及にはえも言はれぬ身に沁みた仕事だつた。

向ひい席にゐた十二三の女の子が、夜明けごろになつて目をさましハモニカを吹き出した。目のみえぬ子だつたがハモニカをうまく吹いた。山狹からしぼり出された朝日が窓硝子を透し、露及の方の窓から又た外へぬけ出て、螢のやうに暗い列車のかげに添ふて走つてゐた。が、やつとそのころに子供はうとうとと一とねむり短かい睡りをしただけで、ぽつかりと朝日の沁みた山の方をながめたりした。

田端の旅籠屋の二階で一家五人が朝飯を食べてゐると、或る日水つぽい雪がたゝめに人家の屋根へ吹きつけ白く埋めた。寒さも烈しかつたが、旅籠屋の箱火鉢を抱いて家をさがしてゐる氣もちとは反對に、どこかのうのうした心もちだつた。お茶を飮んだりして、永年住み馴れた東京の地に、こんな佗びしい暮しをするも却つて嬉しかつた。子供はべつに熱も出さないで平常のやうに睡りつづけた。以前ゐた家があかないのでその空くのを待つために、手ごろな家をさがして見たが、八幡さまの欅の並木の見える二階家へ越すことにした。

「前の家の門の前へ出て、はつと氣がついて引き返したくらゐだよ。やはりあそこが自分の家のやうな氣がしてね。」

露及はこんな話をした。すると甥もやはりあそこの前を通ると變な氣がすると云つた。

二階家の二軒長屋ゆゑ隣りで剝く蜜柑の匂ひまでが、壁のすき間から酸ばく走つて來たりした。大方となり家のこほろぎお時にはこちらへも來て秋は啼くだらうと、風流なれば風流でもないでもなかつた。大龍寺[illegible]すくすく

細かい枯れ枝を立てて、ときたま込いひよどりが高啼きをしたりした。日かげが毎日さすので、さういふもの丶珍らしい田舎でそだつた子供は、温かい日かげの中で毎日二階で遊ばせることにした。露及自身にもよく陽氣の勝手は知つてゐるもの丶、毎日天氣つゞきの温かい日かげだけでも、からだに利くやうな氣がした。

「國の人が冬の間に出て來たら、默つて日和へ座布團を出してさあどうぞ何もないけれどと言ふんだね。こんな日かげなんて國の方ぢやまるで無いんだからね。」

露及はさう言つて日光を珍らしがつた。

追々客があるやうになつてから或日カフヱへ出てゐる、もと女中をしてゐたのが訪ねて來て、こんな姿でお目にかかれないんですけれどと詫びるやうに言ひながらも、その腕に金時計を卷きつけてゐた。かれは女中をしてゐたときからも腕時計がほしいと言ひ暮してゐたが、もう光るものを指の間にも挿んでゐた。露及はその女があとで、默つた客には默つてかかるし、ふざける客にはこちらからもふざけてかかるんですと言つたときに、女といふものは置くどころ次第でどうにでも變質するものだと思つた。足を洗はうと思つても自分が身をひくとカフヱの客が減つたりするので、主人へも氣の毒だからと滿更らうそでもないらしい口調だつた。

荷物がつかないので、さきの家の隣りや近所からいろいろなものを搬んで來てくれたり、[illegible]先生から机をかりたりしたが、さういふ人情の間にもだんだん住みなれたむかしの心にかへつて、電車にもこころ靜かに乘れるやうになつた。唯、煤煙でよごれて生色のない樹や草をみるごとに、國の美しい松のみどりに心が惹れた。そればかりではない。子供の鼻の穴からも煤ばんだはなが出てくるのには、物佗びしい以上のつらさが感じられ、はじめはどうして何時までも汽車のすすが出るのだらうと思つたのは、この煤煙だつた。露及はいまさらにこの都會によい空氣のないことが突然

ろしく感じられたが、それはみんなが同じい目にあつてゐるのだと思ふと、氣もちがらくだつた。

或晩、ゆるく揺れたので、露及は子供と二人きりゐたので慌てて外へ飛び出したが、近所に二三人出てゐるきりしんとしてゐた。子供を抱いたまま星ぞらを見上げ、足袋素足で出た自分はよほど田舎者のやうに思はれ、なぜか恥かしい氣がして、ねづみぢや、ねづみぢやと言つて、子供をあやしながら皆の前で足袋素足のことは默つて話さなかつた。全く露及は一年ぶりでこつえたいの分らぬものに襲はれたのだつた。

國にゐるころからのくせだつたが、妙になまの花を生けることをしないで、木槿の實や桐の實、あるひは虎杖の枯れ穗、野いばらの黒ずんだ實などを川原へ出て剪つて來ては、床の間の壺に挿したが、こちらへ來てから花屋へ使を出して買はせても、水仙とか寒菊くらゐで派手な花ばかりで氣もちに添はなかつた。それに古備前や南蠻ものには生色の烈しい花などよりも、木の實草の穗がよく壺の色をさまたげなかつた。べつに風流がるわけではないが自然にさういふ心づかひになつてゆくのが、わたし自身にはふしぎではなかつた。それ故、仕方なしに自身で花屋に出かけてみると、なまなましい花ばかりで、椿の花を三束ほぐして見せて貰つても、生花もののたけの伸びたのばかりで、枝振りのおもしろいのなぞなかつた。親切な花屋のあるじは最後に一枝を取り出してこれを貰ひませうと言つたわたしに、厭な顏もしないでそれは五錢ですと、三束もときほぐさせたのを別に苦にもしないで、當節そんな一本の花をあなたのやうに選つて買つてゐらつしやる方はたくさんありませんからね、いいえ、どうぞご遠慮なくとハッキリした東京辯で言つた。わたしは五錢の椿と猫柳とを提げ、

「どうも氣の毒です。」

と言つたきり寒い通りへ出たが、花屋のあるじの心に身も温まるやうな氣がした。國の方だともつとしやれた垢ぬけ

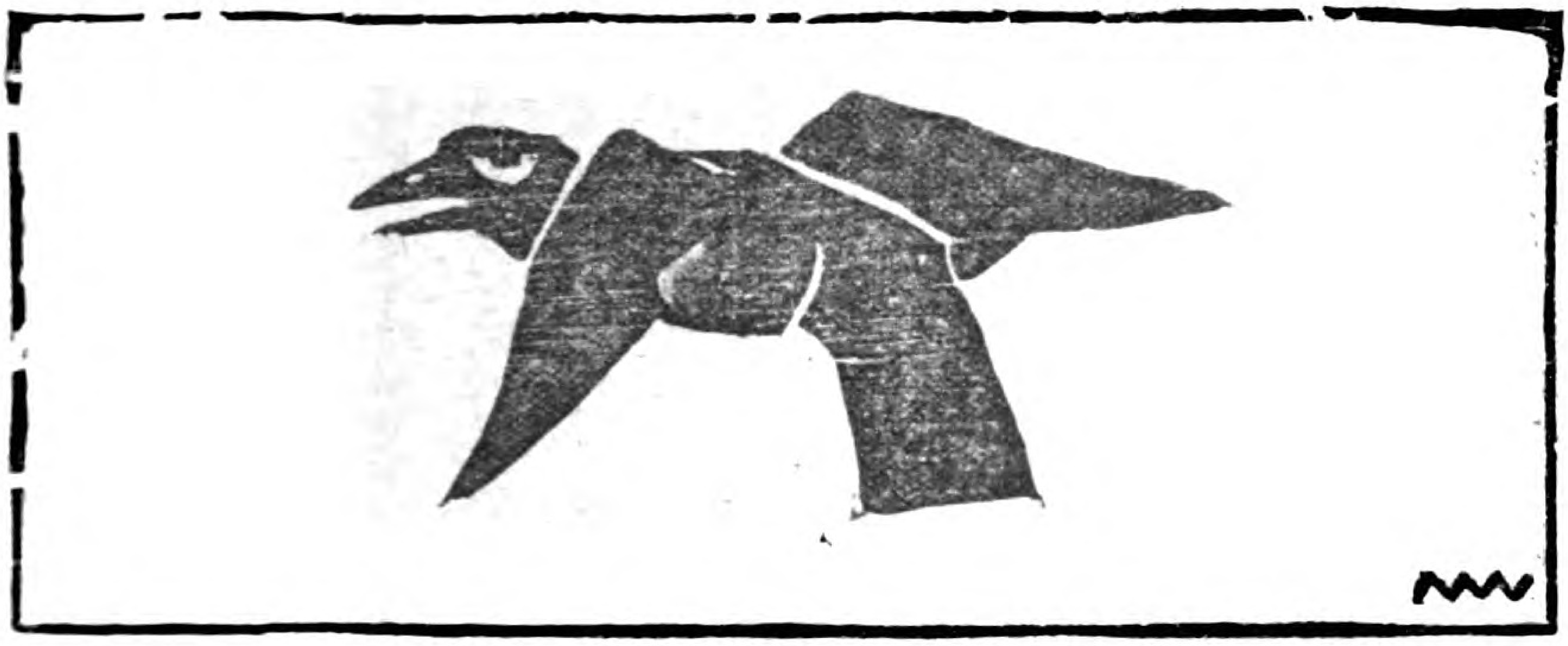
のした花があるんだが、フリイヂヤやじや香撫子の流行る東京では、つるもどきさへ求めるにむづかしいと思つた。

田端の八幡さまの坂の上り口で、冬木のまゝの枝のさきにもくげの實のはぜたあとのやうな實が、枝の先きに褐色に日からびて着いてゐるのを見ると、見たやうな枝だと思つたが、すぐ備前の平たい銹口を目にえがき、あれに生けたらちやうどよかろうと思つた。なほよく氣をつけると、その木に絡みついた美男かつらの、實はくろずみ乾びてしまつてはゐたが、霜枯の葉裏に茜の強い葉なみが何とも言へず好ましかつた。しかもその葉なみが蔓になつて垂れてゐるのが、二枚目から五寸くらゐ離れて一枚殘つてゐる。その蔓は全くたとへやうもなく雅びてゐた。あれを一つもらつてやらう。

そこはもと植木屋でいまはおばあさん一人きり住んでゐて、植木は賣り減らしにしてゐたし、これまで色々貰つたからわけなく頒けてくれるだらうと思つた。いつ來ても爽竹の多い家だ。

「あれは蜂の巣といふださうです。どうぞいくらでもおもちくださいまし。」

さう言つておばあさんは鋏を手渡ししてくれた。褐色の實は蜂の巣、――さう言へば蜂の巣によく似てゐた。わたしは美男かつらの一枝と、蜂の巣とを剪つて家へもどると、それを床の間に生けて見た。壺の色とよく落着いたしつとりした淋さを、やゝ暗みのある床の間に象眼のやうにはまり込んで、それを眺めてゐると始めて心が落着いてくることを感じた。



白刃に戯る火

小川未明

水仙は、あたゝかな春の日を待つて、咲かうと思つてゐました。しかし、無理やりに球を切られて、霜の降る世界に、頭を出さなければならなかつたのです。彼は、その身震ひのする、怖しい夜を思ひ出さずにはゐられませんでした。裏通りの支那の雑貨を商ふ店さきへ來た、顔の四角張つた老人は、澤山の水仙の中から、一つを選んで、いづこへともなく持ち去つたのでした。

その夜は、星のふりさうな寒い晩でした。一室の裡には、燈火が、しんとしてついてゐました。硝子戸や、雨戸や、さらに厚い壁に遮ぎられて、こゝは街から、遠く隔つた離れ島の如くにも、また、すべての四境から關係の斷ち切られた未知の世界のやうにも思はれました。そして、この室の裡に坐つてゐる老人が、この室の主人で、室の中にあるものは、一切、たとへば、書棚でも、燈火でも、机でも、火鉢でも、あらゆるものは、主人の命令どほりに從はけなればならぬ運命を持つてゐる

もの丶如く思はれました。そして、いま、疊の上へ轉げ出された、水仙を、いや應なしにこれから主人の言ひつけ通りにしなければならぬもの丶如く思はれました。しかし、曾て、さういふ約束をしたことがあるでせうか。さう思つても、こ丶に來たからには、自分はしなくても、させられるので自分の意志といふものは、ないも同じなのでした。たゞ、ぢつと默つて、成行を見てゐるばかりでした。

それにしても、なんといふ靜かな晩でせう。天井裏を走る鼠の足音一ついたしません。風も、外には、吹いてゐないやうです。いま老人は、ちよつとこの室にゐなかつたので、吊下つてゐる燈火が、主人の代りをつとめるやうに、こ丶にあつた一切の物の上に光りを投げてゐます。しかし、何といふ、やさしみもない、あたゝかみもない、神經質な光りでせう。水仙は、光りを好いてゐましたけれど、この光りにだけは、すこしの好意も、また親しみも持つことができませんでした。從つて、笑顏などを微塵も見せる氣にはなれなかつたのです。

光りといふものは、また、すべて生物を可愛がり、いたはるものでしたのに、この光りばかりは、そんな氣ぶりもせず、むしろ冷淡に、乾き丶つた靑ざめた色で晒すばかりでした。戸棚や、火鉢や、机は、それでもい丶と思つてゐるといふよりか、そんなことすら感じないやうでしたが、南淸の土に培はれ、大河の流域に、芽ぐんで、曾つて日光を呼吸し、海を渡つて來た水仙には、かうしたことをば敏感に悟るのでした。

足音がして、障子を開けると室にはいつて來た老人は、火鉢の前に坐りました。傍に、ぴか／＼光る五六寸の小刀を置きました。刄は、そこに置かれると、ぢつとあたりを見詰てゐます。「なんで、俺をこんなところへ引出したのだらう。こ丶にあるどんなものを切れといふのか。俺は、もう長い間、渇いてゐる。何かに、さくりとはいつて、思ひ存分、水氣を吸つて見たいと思つてゐる。何を俺れに切らせようといふのだ……なんでも、鋭利な俺は、觸れたなら切

つて見せるぞ」かう、小刀は、言つてゐるやうに、青光りを放つて、冷たく落付いてゐました。

それとも、戸外に降る、霜の音を、澄んだ頭できゝ分けやうとしてゐたのかも知れません。

机の蔭になつて、水仙は、なる丈け、小刀を見ないやうにしてゐました。できることなら、老人の眼からも永久に隠れてしまひたかつたのですけれど、それはできないことでした。水仙は、たゞ成行に委かせてゐました。そして、運命が、必ずしも自分を見捨てると限つて居るものでないといふことを堅く信じてゐたのです。

この時、誰も、氣味悪い小刀に近寄らうとはしなかつたのに、燈火だけが、さも狎々しげな様子をして、忍び寄るのを見ました。

「なんといふをかしなといふよりか、珍らしいことだらう……」と、水仙は、息を殺して、見てゐました。

冷たい、これも乾いて、情といふものの見たくもない燈火が、さも處女らしく、面を赧めて白刃に戯れかゝるのでした。

「妾の大好きな、あなた！どうか、妾といつしよに、かうして、ぢつとしてゐて下さいな」と、言つて、火は、星のやうに澄んだ瞳を白刃の青ざめた、怒りぽさうな顔の上に落しました。

「勝手にしたらいゝ」と、小刀は、言つて、彼女のなすまゝに委かしてゐると、燈火は、少女の如く、また赤い石竹の花の絡むがやうにぞつとする白刃にしなだれかゝたのです。

老人の頭の髪は、灰白色に彩られてゐました。老人は、白刃と燈火の痴情について、氣付きません。しばらく、ずつと何事をか考へてゐたのです。

不意に、老人が、水仙を片方の手に取り上げて、さらに、片方の手で、小刀の柄を握つた時、燈火は、俄に再び逆

いたのでした。そして、遠い、龍球の中へ戻つて、何が、これからはじまるかと眺めてゐました。

老人は、支那水仙の球を、さくりと切り裂いたのです……。

春の麗かな日になると、いまゝで堅く閉ぢられてゐた、王城の門が開かれるやうに、水仙の花は、自から球を破つて、王様の冠のやうな、また、將軍の胸を飾る勳章のやうな、空の深みにかがやく星のやうな、また、雪の花形のやうな、香氣の高い花瓣を開くのでしたが、不意に、球のうちにつゝまれて眠つて居るのを晒し出されて、小さな芽は、痛ましく、寒さのために凍つてしまふかと思はれました。

すべてのものに、生きる力が與へられてゐます。路傍に生み落された犬の子供でも、どうにか大きくなれば、また親を失つても、人間の子供が育つて行くやうに、草でも、鳥でも、木でも、生きて行く力は、不思議な程、強いものです。そして、また、命のある限り、育たうと勵まずには居られないのでした。

まだ早く眠りから醒された水仙の芽は、その日から、働きはじめたのです。大きく、大きくなつて、花を開かう。たとへ、世の中はまだ寒く、春が來なくとも、花を開かなければならないと、自分の務めを自覺したのでした。

それに、老人は、酷たらしくも、「もつと早く花を開け！」と、急ぎたてました。彼は、割いた水仙を水盤に浸して、露臺の上に出したりしました。そこでは、本當の暖かな、慈愛にみちた太陽の光りを水仙は受けるとができたのです。とはいふものゝ、太陽は、あまりに水仙の頭から、遠方のところにありました。灰色の雲が、太陽の面を掩めたり、ま

た全く、暗く、空いつぱいに、銀色の雲がはびこつて、その下を、家根を蹴散らして、寒い風が吹く日もありました。

そんな時は、また限りなく、水仙は悲しかつたのでした。

何といつても、世界は、冬枯の季節であります。花といふ花はありませんでした。つい、この間まで咲いてゐた菊花も、色が褪せて、黒く朽ちて、露臺の片隅に置かれたまゝになつてゐます。鉢の中の土は乾いたけれど殊更に水をやるものもありません。たゞ、花が枯れはてゝしまふまで、その最後を見守つたものは、毎日のやうに、花の盛りの頃から訪ねて來た數疋の虻達でありました。

杏色に、西の空に燃えて、街の家々を見落しながら沈んで行く太陽の餘炎が、こゝのバルコニーにも躍る時分、虻は、枯れて、だん〳〵と色の褪せていつた、花のために悲んだのでした。

花が、全く、黒く朽ちてしまつてからも、虻はやつて來ました。彼等は、まだそこに懐かしい、ゆかしい菊花の香氣がたゞよつてゐるやうに感じたのでした。そして、花の死骸の上に、乾からびた葉の上に止つて、彼等は、眠るやうにぢつとしてゐました。

それから、怖ろしい霜の日がつゞきました。見わたすかぎりの街の家根が、眞白に輝いて朝日の光が、凍つた大氣の裡に煙るやうな日がありました。哀れな虻は、全く、動かなくなつて、細い、手足をちゞめたまゝ、曾つて朗らかに唄をうたいながら、その上に來て止つたり、蜜を吸つたりした日のあつた、花の死骸の許に、これもはかなく轉がつてゐるのが見られました。そして、最後に、たゞ一疋の虻だけが生き殘りました。

すべての花が凋んで、寒い風が荒さみ、霜が天地を閉ぢこめるやうな日に、黄色な盃の形をした水仙の花は、寒空を

あげたのです。

「生きる力を持つてゐるかぎり、生きなければ止まない」

花の中に宿つた、生命は、雄々しげに叫びました。

星も凍りさうな、寒い晩に、水仙は露臺から家の中へ取りいれられもせずに、そのまゝに置かれたこともありました。それがために、水盤の水は、厚く鋼鐵のやうに凍り、細い白い絲のやうな根先は切れ、綠色の葉が、知覺を失ひました。けれど、太陽が、ほんのりと提燈に火を點したやうに、霧の深い空に燃えると、花は、頭を上げて、太陽を眺めました。生れたばかりの花には、希望があつたからです。小さな花は、まだ絶望といふことを知りませんでした。自然は、すべて花の瞳には、憧憬の波の中に漂つてゐる如く思はれたのでした。

空氣は、寒く、しかも、太陽は、ずつと遠くても、もうやがて春が來かゝつてゐるといふ豫感は、この花を勇氣付けました。

花は、清らかな姿と、浸み透るやうな香ひを、青々として、鏡のやうに冴え渡つた、空の下で、たゞ獨り遠くの笛の音に耳を傾けてゐるやうに、恍惚とした顔付をして、咲いてゐました。

この時、どこからか、一疋の虻が飛んで來て、水仙の花の上に止まりました。

「なつかしい花の香ひをかいで、私は、僅かに氣力を恢復することが出來ました。さもなければ、今夜にでも、私は、死んでしまつたかも知れない。でも、こんなに寒いのに、早く、誰が、あなたに花を開かせたのでせう。冷酷な人間の氣儘勝手に、無理やりに、あなたは、花を咲かされたにちがひない。一度花を開いたからには、二度ともとのやうにはな

らないといふことを、よく知つてゐる癖に……そして、この家の老人は、人間のうちでも、我儘で、自分勝手で、冷酷だと言はれてゐます。だが、あなたは、春の魁でした。ぢきにほんたうの暖かい春がやつて來ます。私は、前の時代に、とつくに死んでしまふ身であつたのでした。友達等がゐなくなつたのに、幸か、不幸か、獨り生き殘つてゐるために、あなたとかうして、話をすることもできるのです。あなたは、いましがた咲いたばかりで、世の中のことは、何も、かも珍らしいのにちがひない……」と、虻は、蕾の澤山についてゐる水仙に向つて言ひました。

「どうぞ、私に、世の中のことを話して下さい。誰も、あなたが、こゝに休んでゐなさるのを妨げるものはないでせう。それに、まだ太陽は、あんなに高いし、光線が、こゝにもよく當つてゐますから……」と、水仙の花は答へたのであります。

町の廣やかな通りに面して、一軒の大きな家があり、その家の周圍には、高い石垣が繞らしてありました。冬の黄色味がかつた、日の光りは、いつも埃の家根にかゝつたやうな家を照らし、人や、車や、馬などの往來する白い路の上を照らしてゐましたが、また、この冷たな石垣の片側にも當つてゐたのです。冷たい石の面はいくら光線を吸ひ取つても、吸ひ足りないといふ風で、日の光りは、奥底の知れない、鼠色にくすんだ石の内へ吸ひ込まれてゐました。それでも、石は、ほんの僅かばかりの温味しか、持たなかつたので、無表情な顔付をして[illegible]しさうに、人間を見下してゐました。

しかし、この僅かばかりの温味に、小さな鰐を暖ためようとするものか、それとも、こゝにぢつとして止まつてゐて、背中を太陽の光りであたゝめようとしたものか、一疋の蛇が、力なげに一つの石の面に、うすい羽子を啣やかしながら止つてゐました。

この時、石垣の際で、少し程隔つたところで、ガヤ、ガヤ言ふ人間の聲がきこえ、笑ひ聲が起り、また、鐘を鳴らす音がしたりしました。

顔の黒い、まだ若い支那人が、路傍で奇術をやつて、みんなを笑はせてゐるのです。

「こゝに、球二つある。これに茶碗かぶせる――こちらの茶碗の内、何にもない。いまこの球こちらに移す。實に、不思議――よく見てゐて下さい」

彼は、赤い球を二つ一方の茶碗の下にいれました。それから、日本語、支那語、ロシア語で、掛聲を、別々にかけて、みんなにきかせたりしてゐました。たとへ、生れた國は支那であつても、少年の頃から、かうして、諸方を流浪して、ある時は、西比利亞の平原の中の小さな町で、人々を集めては、かうして笑はせ、時に、夕日に赤く、旅の愁しみの刻まれた顔を彩らせたこともあつたと思はれました。

「ヤー、パツ！」

これを見てゐるみんなは、あまり不思議なので、いつしか笑ふよりは、默つて、歎聲を洩らしたのでした。

同じやうな藝當を、二三番もつゞけると、見てゐる人々から、錢を地面へ投つてやりました。若い男は、その錢を大急ぎで拾つて、

「ありがたう………」と、いつて、頭をぺこ〳〵下げてゐました。

一人の勞働者風の男が、石垣の方へ寄つて來て、咒れながら、

「あんなに魔法が使へるものなら、なぜ、銅貨でも、銀貨でも、魔法でこしらへないものかな」と、さも、金錢ばかりは、どうにもならないのが、却つて、不思議だと言はぬばかりに獨語をしました。

「さあ、こんどは、大變なづかしいあります。こんな大きな鐵の球ある――なか〳〵口へはいらない。口小さい。これを口へいれる、呑む――まちがへば、死んでしまふ――」

この時、さかんに、鑛の鳴音がしたのでした。

石垣の面に、ぢつとして止まつてゐた虻は驚いて、飛び立ちました。虻は、ぐる〳〵と大きな輪を描いて、三四遍中空を廻はりましたが、バルコニーの方から、滑らかな香の流れて來るのをきゝつけて、そこに飛んで行くと、水盤の中に、水仙の咲いてゐるのを見付けたのでした。

この家の門前に於ける午後の物語りも、虻は、水仙に向つて話しますと、水仙は、

「支那人の奇術師ときいて、私は、故國をなつかしく思ひます。なんでも、私が、まだあちらの土地にゐる時、ある夏の日のこと、流れへ、赤い着物を被た、十二三歲の子供の死骸が漂つて來ました。人間の語るのをきいてゐると、圓い球を呑んで、死んだといふことでした。奇術師の親方が、月夜の晩に、こつそりと、その死骸を河の中へ投げ込んだのだといふことでした。支那の町には、いろ〳〵な奇怪な事件があります………」と、言つて、同じ漂浪の悲しみを水仙は深く味つてゐる如くに見えました。

太陽の光りは、赤い硝子球を微塵に砕いたその刹那のやうに、地平線に沈みかけてゐました。青い空は、奥深く、暗色を帯んで、その下に街の建物は、凹凸に頭を上げてゐました。

「また、今夜は、寒さうですね。あなたは、こんな日には、いくら冷酷な主人でも、室の裡にいれてくれますから、ほんたうの寒さをお知りにならないけれど、私は、多分、今夜にでも、霜に晒されて死んでしまふかも知れません。また、命があつたら、明日たづねて來ますよ」と、虻は、名殘りを惜みながら言ひました。

水仙の花は、日蔭になつて、冷たくなつた水盤の水に、その姿を映しながら、

「なんで、あの室の裡が、いゝものですか？あの神経質な赤い燈火、いつも眠つてゐるやうな茶棚、机、そして、自分の體をサクリと切つた小刀のあるところが、なんでいゝものですか。私は、あの赤い温味のない燈火に照らされると、眼眩がしてきます。しかし、あなたは、もう、年をとつて、疲れてゐなさるから、霜の怖しいのは、無理もありません。私の葉の陰に、しつかりと掴まつてゐなさい。人間の眼は、そこまでは達しない筈です……だが、あの赤い燈火に驚いて、私の體から離れたら、最後、あの冷酷な主人は、きつと、あなたを叩いて殺してしまふでせう」と、水仙の花は、言ひました。

虻は、これをきくと、しばらく、どうしたらいゝだらうかと躊躇してゐましたが、

「今夜は、あなたの葉の陰に、止まらして下さい」と、頼んで、水仙の花の下をくゞつて、葉陰の裡に、身を潜めました。

顔の四角な主人は、日が沈むと水仙を室の中へ取りいれました。

温味に乏しい、ヒステリカルな電燈は、室の裡を明るく照らしてゐました。何が、この室の中へはいつて來たか、一度は、燈火は水盤を注意深く照らしましたが、いまでは、全く珍らしくもない、水仙の花なので「お前か」と、いはぬばかりに、燈火は冷淡に見えました。そして、一枚、一枚、緑色の葉を分けて、詮索するやうなこともしませんでした。

主人は、火鉢に向つて、何を頭の中に考へてゐるか、しばらく、ぢつとしてゐました。多分、伜のことを思つてゐたのでせう。幾十萬といふ巨額の富を有しながら、金のために親と子の間柄が、至つて面白くないのでした。それで、伜は、いま、外に出て下宿をしてゐます。ある時、主人は、抱への辯護士に向つて、

「どうしたら、私は財産を、安心して持つて行くことができようか。伜の處置を何とかしたければたるまいが?」と、秘密に、相談をしました。すると、脊の低い、陰險な目付をした辯護士が、前へにぢり出て、しやがれた、低い聲で、

「いよいよの場合は、氣狂として、座敷牢にいれてしまはれることです……さうすれば、いまゝでの心配はありません」と、言ひました。

主人は、膝を叩いて、

「決して、一言も、外へは洩らすまい!」と、言ひました。

多分、主人は、その伜のことを考へてゐたのでせう。さもなければ、金を儲けるについて、他の人の思ひもよらない、奇怪な手段についてかも知れません。

そこへ、足音がして、靜かに、一人の女中がはいつて來ました。女中は、[illegible]

「ちよつと旦那様にお目にかゝりたいといつて、妙な男が玄關に立つてゐます。いまお留守だからと申しますと、お歸りまで、こゝに待つてゐると申します」と、告げたのでした。

これを聞くと、主人は、急に、額際に八の字を寄せて、厭な顔をしました。

「いつたい、どんな風體の男だ」

女中は、膝頭で自分の體を支へながら、飽迄言葉を丁寧にして、

「先刻、お婆さんが、門の前で、支那人の奇術を見てゐる時に、石垣に依りかゝつてゐた男ださうです。ちよつと見ると、勞働者風の男でございます」と、答へました。

主人は、舌打をしました。

「あんな、手品などを家の門の前でやられては堪らない。明日にでも警察へ言つて、追拂つてやらう。その男といふのは、支那人ぢやないか？」

「いゝえ、日本人のやうでございます」と、女中は、申しました。

主人は、憤然として起ち上りました。

「ヨシ、俺が、一つ逢つてやらう……」

彼は、足音高く、女中の先になつて、梯子段を降りて行きました。つゞいて、女中が、室から立去つたのであります。

室の裡は、しんとしました。街の中で起つてゐる何の物音も、こゝへはきこえて來ませんでした。あの高い石垣があ

つて、この家を取り卷いてゐるからかも知れないが、しかし、バルコニーへ出たら、街の家々の火や、また遠くの物音もきかれるであらうと思はれます。

「きつと、晝間、私の見た勞働者にちがひありません」と、蛇が、葉蔭から、水仙の花にさゝやきました。

水仙の花は、だまつて、たゞ、ちよつと頷いたやうにも思はれました。

「何しに來たのでせう？あの時も、魔法でお金を造ればいゝに、金錢ばかりは、さうはたらないものかと言つてゐましたから、きつと金をもらひに來たのかも知れません」と、蛇は、言ひました。

水仙の花は、やはり默つてゐました。そして、「もう夜だから、何事も話をしてはならない。たゞ、心の中に、さう思つてゐればいゝ。明日、また、外へ出て、太陽の光りの照らした時に、ゆつくり話をしませう」と、言はぬばかりに、樣子をして見せました。

しばらくしてから、主人は、室に戻つてまゐりました。しかし、その顏色は、何となく不安と憤りのために、青白く震へてゐるやうに見えました。

「あんな圖々しい奴は、また、いつか强迫に來んとも限らない。今夜にでも、强盜となつて、押込まんものでもない。それはいゝが、火でも付けられた時には大變だ。早速、警察へ屆けて置かなければならぬ」かう言つてゐました。主人は、それでも、まだ、何となく心が落付かないといふ樣子で髯をもぢ／＼さしてゐました。

「太い奴だ。よくも圖々しく、金をよこせなどと言へたものだ。骨を折つて貯蓄した金の中から、たとへ一錢でも、あ

いつ等にくれてやる理由があるものか？さうだ、今夜はこの匕首を枕の下にいれて置かなくちや」と、言ひました。

主人は、抽斗の中から、いつか水仙の球を切つた小刀を取り出しました。それから、鞘を脱つて、白刃を眺めました。

青光りを放つて、乾き切つてゐる刃は、

「人間を切りたくつて、切りたくつて」と、渇いた、細い聲で言ひつゞけてゐました。

白刃を見ると、忽ち、ヒステリカルな烽火が走つて來ました。

「なぜ、もつと、早く、顏を出して見せてくれなかつたの？」

あたゝか味のない、それでゐて、白刃を見ると、急に、情人に遇つたやうに、はしやぎ切つた、赤い火は、蔦の絡らむやうに、また石竹の莖のまつはるやうに、凄い、切味の極めて爽さうな白刃に戯れてゐたのでした。

翌日、太陽の當るバルコニーで、蛇と水仙は、前夜のこの有樣を思ひ出して、どんなに氣味惡く感じながら語り合つたでせう。殊に、水仙は、前に自分の切られた記憶もあることだから、さまでには思はなかつたが、蛇は、魂消てしまつたのでした。

主人は、露臺に出て、日頃から、密かに、雙眼鏡を目にあてゝ、あちらの角を曲つて、家の横手の路を歩るいて來る年若い婦人を眺めることを樂しみの一つとしてゐました。

そんなことゝは知らずに、無心に、女達は大股に歩いたり、俯向きながら、着物の裾が足に絡らむのを氣にしたり、また、何か考へながら、おつと前を向いて行つたり、何か、思ひ出したやうに、なかには、微笑みながら行くものもあ

つたのでした。

彼は、科學者が、鋭い、細心な觀察を遂げる時の態度と同じやうに、眞劍に、女の顏や、胸をレンズの中に收めて、息を殺して見詰めてゐました。その雙眼鏡は、餘程精巧なものであつたに、ちがひなかつたのです。

水仙の花には、人間が、どんなことをして興味を感じてゐやうと、自分の生存には、何の關係もなかつたのでした。時々、空に灰色の雲が出て、日の光りを遮ぎるので、花は、そのたびに暗くなると、寒冷を感じたのでありました。

雙眼鏡を目に當て、あちらの町の角の方を見てゐた主人は、不意に、慌たゞしげに叫びました。

「強請に來た、あの惡い奴が行く・・・早く警察へ知らせてやらう・・・」

かう言つて、彼は、露臺から、家の内にはいると電話室の方へ降りて行きました。

そのあと、この時まで、水仙に止まつてゐた虻は、少しく、日の當るところへ飛び出て、「何か、はじまりさうですね。どれ、私が、見てまゐりませう・・・」と、言ひ殘して、虻は、人や、車や、馬や、自動車や、いろ〳〵の影が動いてゐる、賑かな往來の方へと飛んで行きました。

町には、店によつて、きら〳〵と、すでに火影の閃いてゐたのもありました。垣根の上から、路傍へ、一本の樫の木が、枝を垂れて、西に傾いた日の光りを、去年からの黒ずんだ葉に浴びてゐました。

虻は、その樹に沿つて、色づいた葉の面に止りました。そして、歩るいて來る勞働服を被た青年が、果して、あの家の門の石垣に凭りかゝつてゐた、同じ男かと見守つてゐたのであります。

その青年は痩せてゐました。頰には明らかに憔悴で窶いて、どことなく病身らしく見えました。全く、昨日の男と

は、異なつてゐました。

「あの主人は、何を見違へてゐるだらう？」と、蛇は、思つたのです。

この時、あちらから急ぎ足で、警官がやつて來ました。いま歩るいて行く青年の後を追つて來たといふことが直に分りました。

「オイ、待て！」と、いきなり警官は、うしろから呼び止めました。

青年は、ちよつと立止つて、うしろを振り向きましたが、呼び止められる覺えがなかつたので、自分でないと思つたらしく、また、歩るいて行かうとしました。

「オイ、待て！待たないか？」

警官は、腹立たしさうに言つて、佩劍を左手で摑んで驅けて來ました。

青年は、道の上に立止つて、神經質な眼できつと警官を見ました。

「何ですか！僕にですか？」

「分つてゐる！ちよつと、いつしよに來い」と、言つて、警官は、青年の腕を捕へました。そして、あちらへ連て行かうとしました。

青年は、一歩も、そこを動くまいとしました。

「僕は、行きません。連れて行かれる理由がないからです！」

青年は、摑まれた手から、體を自由にしようと、反抗しました。

「ヨシ、抵抗するつもりか！」

警官は、威丈高になつて、青年の腕を握りながら、小突きました。だん／＼群集が、周りへ寄つて來ました。

やがて、青年は、怨みを呑んで、警官に連られて、夕日の彩る街を行つたのであります。

虹は、水仙のところへ戻つて來ました。そして、見て來た儘を告げると、

「主人は、強迫されてから、怖しく、誰を見ても、昨日の男に見えるのです」と、水仙は、冷笑ひました。

其夜、主人は、水仙を露霜に置いたまゝ取りいれませんでした。それどころではなかつたからです。夜中に、星の下で、哀れな虹は、とう／＼死んでしまひました。

――一九二五、一作――

腰越狀

小杉天外

所　相模國腰越村の寺院
時　文治元年五月二十四日

（一）

梅雨の雲の流れ低く、忽ち細雨來り、忽ち日光輝く。二人の武士默々と居ならび、一人（堀彌太郎）は鎧の草摺の紐を繕ひ、一人（片岡八郎）は竹箙の矢くばりを繕ひ居る。その繕ひの手の働き鈍し。庭の木立に小河の流聞ゆ。

片岡八郎。また暗くなつた。

堀彌太郎は眉を寄せて庭の空を見る。

片岡八郎。天氣までが人を馬鹿にし居る、降るものなら降るがいゝ、やまずに降るがいゝ、里も山も流すまで降るがいゝ。

二人とも縁に近く膝をにじり出る。また默々と手を動かす。

堀彌太郎。泥だ。燕が巣を造くるところと見える。

片岡八郎。矢張り、この寺の巣で生まれた、去年の燕であらう。

堀彌太郎。行きたいところへは自由に行き、歸り度い時には自由に歸る。面白い鳥ぢや。

片岡八郎。この嘴へて來る泥は、往來の人に捏ねかへされた鎌倉の巷の泥かも知れぬ。

堀彌太郎。鎌倉の泥とな、異な事を聞くものぢや、嗅いで見るがいゝ、どんな匂ひがするか。

互に眼を見合はす、云ふところ有らんとして云はず、また繕ひの武具に對ふ。正面の板戸を明けて、奧の間より金子與一出づ。庭に下り、生垣の外に立ちて、暫く彼方の街道を望む。さて解せぬ貌にて再び屋内に入らんとせしが、

金子與一。彌太郎殿、お身は笑つて居らるゝな、何が可笑しくて笑ふのぢや。

堀彌太郎。戀に迷ふた女子のやうに、暇さへあれば垣の外へ出て、來もしない者を待つ人の顏を見ると、わしは可笑しくてたまらなくなるのぢや。

金子與一。それではお身は、鎌倉殿からの迎ひの使ひは、何處までも來ないと云ひ張らるゝのぢやな。

堀彌太郎。お身はまた、何うして來るものと、獨りできめて居らるゝのぢや。

金子與一。來る者を來ると極めるのに、何が不思議。水の流れが海へ來て落着くやうに、今日暮れた日が、明日は東から出て來るやうに、來るに極まつた者を知らずに居る人こそ、笑ふ可きうつけ者と云ふものぢや。

堀彌太郎。なんぢやと。

金子與一。これだけの理屈がお身に分らぬか。世は、鎌倉殿の世で有らうが、それ故、殿へは勝つに極まつたわけ故と

云ふ物があるからぢや、わが殿を弟に持たれた果報の賜物に過ぎんのぢや。木曾殿が都を退かず、平家が四國西海に亡びなかつたなら、鎌倉殿の今頃は、どう成らせられた事と想ふ。

堀彌太郎。お身達には物にあぐむと云ふ事が無いものと見える、仕合はせな性分ぢや、能く左樣な同じ事が、繰返へして云はれるものぢや。

金子與一。わしは、道理の有る事は何度も繰返へすのぢや、誰の前でも繰返へすのぢや。明日にも鎌倉殿の御前に召されたなら、見ん事滿坐の中で、繰返へしてお目にかけるつもりぢや。

堀彌太郎。それなら、わしも繰返へして云はう。この間北條殿が、前内府親子を受取りに來られてから、最早今日で七日も過ぎた。この長い七日と云ふ間、此所に居るわが殿をば忘れたやうに、鎌倉へ入つて來よとも、京へ歸つて行けよとも、御沙汰が一つ無いばかりか、凱旋の殿をねぎらふ爲の、酒一つ賜はらぬ鎌倉殿の心は何うした事で御坐る。暮れた日が、明日の朝日となつて昇るにしては、餘りに長過ぎる夜では御坐らぬか。

金子與一。それは、この間から各方も推量する通りで御坐らう。一方に、殿の勳功をたゝへる者が在るかはり、一方にはまた、其の勳功を嫉んで、鎌倉殿へ讒言を進め、御兄弟の仲を隔てやうと計る者も在つて、流石聰明第一と云はるゝ器量人も、どちらに極めて宜いものか、心を極めかねて居らるゝ爲で御坐らう。

堀彌太郎。それでは、戸の隙間から隙見でもするやうに、鎌倉殿の胸の中を、誰ぞ覗いて參つた者でも御坐るかな。

金子與一。なに、鎌倉殿の胸を覗いて參つた者とな。

堀彌太郎。覗いて參つた者でも無くて、迎の使の來ると云ふ事を、お身は何うして知つて御坐つた。

金子與一。彌太郎殿、お身は此の與一を嘲弄めさるのぢやな。

堀彌太郞。刀の柄に手を掛けて、お身は此の彌太郞を斬らうと云ふのか。

片岡八郞。はゝゝゝ。愚かな爭ひ止めになされい。鎌倉殿の胸の中が、覗かうと覗かれまいと、それが我等にどれ程の必要が御坐る。今宵にもあれ、わが殿から下知の出るが最後、お互の馬の蹄に、蹴散らすべき鎌倉では御坐らぬか。

堀彌太郞。なに、馬の蹄に蹴散らす鎌倉。

金子與一。八郞殿、何をたわ言云はれるのぢや。

片岡八郞。いや、たわ言ぢや御坐らぬ。愈よ鎌倉殿の御沙汰が、鎌倉の內に入れぬと極れば、關を踏破り、刃向ふやからは斬つて棄てゝ、驀地に鎌倉殿の館へ乘りかけ、云ふ可き怨みも云ひ、誇る可き手柄も披露せんと、殿には、疾から肚をきめて居らるゝのぢや。

堀彌太郞。して、お身はそれを、何うして知られた。

片岡八郞。主と賴む大事の殿の心ぢや、目色顏色の晴れ曇りを見るばかりでも、わしには手に取るやうに知れるのぢや。

金子與一。いや、左樣な事はない。殿の心はわしにこそ分る。鎌倉殿から參る筈の迎ひの使が、今日見えるか、明日見えるかと、唯そればかりを待つてゐるのぢや。

堀彌太郞。大海の底のやうな殿の心が、お身達如きの眼に、さうたやすく見え透いて何うなるものだ。殿には、口へそれと明かされぬが、之より都へ歸られて、一度捧げた鎌倉殿の天下を、わが手に取戾す謀を立てねばならぬと、專ら心を碎いて居らるゝのぢや。

片岡八郞。いや、呼べば答も屆く此の所まで來て居ながら、鎌倉の土も得踏まないで、おめおめと都へ歸られるやうな殿ではない。

堀彌太郎。いゝや、違ふ。左樣な輕はづみな事を思ひ立たるゝ殿ではない。

金子與一。いゝや、鎌倉殿の使を待つて居らるゝのぢや。

　垣の外より江田源三あらはる、縁に驅上がると共に、息せはしく呼ぶ、

江田源三。各方、參られましたぞ、鎌倉殿から迎ひの使者が參られましたぞ。

片岡八郎。鎌倉殿から迎ひの使者が。

金子與一。お身は見て參つたのか。

江田源三。もはや村の入口まで參つた頃でござります。北條殿の手とも見えれば、三浦殿の手とも見えました。一人は淺黃の直垂、一人は萌黃色の直垂で御座りました。

堀彌太郎。では、二人ぢやな。

　皆々抑へ切れぬ悅びに氣ほひ立つ。疾く殿へ申上げよと呼ぶ者あり。奥へ驅け込む者、奥より驅出る者、取散らしたる武具馬具を整頓する者。いづれも歡喜の色を掛け交はす。伊勢三郎、龜井六郎、紀井權守兼資、鷲尾七郎、駿河次郎、熊谷太郎と、既出の四人を混へて、着替へたる直垂の襟をなほしながら、大口袴の紐を結びながら、誰の口より發するとも無く、左記の談話が連絡も無く、或は一事に急はしく、或は途切れ勝ちに、歡喜の情に彈んで聲高に起る。

甲。さすがは鎌倉殿ぢや、考へられたのぢや、深く考へられたのぢや。

乙。考へても考へられいでも、此うなるより外に、決定の道が無かつたのぢや。

丙。賞罰に暗い處置があつては、これから後、誰も勤勞を捧げる者が無いのぢやからな。

丁。屹度、諫め上げた者があるのぢや、誰であらう、佐々木殿か、それとも土肥殿であらうか。

戊。いや〱、心からわが殿を歎いて居らるゝ、あの畠山殿で御座らう。

己。都で新しく調へ參つた物の具も、これでまア、調へ參つた甲斐があるといふものぢや。はゝゝゝ。

庚。この間、西國から凱旋した時の事は、わしは想出しても可笑しくてならぬわい。晴れがましい物にも、きらびやかな物にも、見飽いて居る筈の都の男女が、何所の大路にも人波を打つて、眼と云ふ眼を悉く見張つて、この世に無い物にでも出逢つたやうに、わし等の顏を仰ぎ見るぢやないか。

辛。都にくらべては、明けても暮れても汐風に吹き曝されて、春咲く花の外に、美しいと云ふ物を知らぬ鎌倉の男女ぢや、どのやうな顏をして、我等の行列を見上げることであらう。はゝゝゝ。

壬。我等の新しく縫はした直垂、新しい太刀の飾りを一目見たら、田舍者、目を廻はすかも知れぬわい。はゝゝゝ。

使者の到着の遲るゝを訝る聲あり。庭へ駈下りて街道の方を望む者あり。

癸。これは何うしたと云ふのぢや。

甲。街道には、村の百姓らしい人影が、二つ三つ見えるはかしぢやないか。

乙。誰だ、鎌倉殿の使者が見えたと云ひ觸らした者は。

丙。こんなに人を騒がせて、憎い奴ぢや。

江田源三。はて、確かに此所を指して駈けつける使者と思ふたが。

片岡八郎。源三、お身は何を見て參つたのぢや。

鷲尾七郎。うつけ者。その眼のくり球つぶして呉れるわ。

鷲尾七郎憤然として江田源三を摑つ、片岡八郎横より蹴る。江田源三抵抗せずに平伏す。他の人々は、猛り立つ鷲尾と片岡を制せんとして揉合ふ。

龜井六郎。まァ静かになされい。見あやまり、思ひあやまりは誰にも有るならひぢや。

金子與一。源三殿を打擲したとて、それで來ない使が來るのではない。

駿河次郎。忌々しい事ぢや。

江田源三。お詫の申しやうも御座りませぬ。

江田源三男泣きに泣く。各人言葉なく眼を見合はす。雨の音。暮色せまる。

（二）

古く廣やかなる室の内部。幔幕を張りて後ろを仕切りたり。太き柱目立つ。中央に源九郎義經（疊あるべし）義經の左右に主なる家の子郎黨居ならぶ。長き酒盛の終りに近く、醉ひて臥したるあり、半ば醉の醒めたるもあれど、なほ杯を手にする者多數を占めたり。

庭に焚きたる篝火は消えかゝり、燈臺の灯は油涸れて細し。夏の夜深けて、蛙聲絶え絶えに聞ゆ。

義經。左様な談は、最うよしては何うぢや。戰場の手柄談と云ふものは、いくら語つても語り盡きず、いくら聞いても聞き足らぬものと思ひ居つたが、今宵は、誰の談を聞いても、手のひらの筋でも見詰めて居るやうにしか覺えぬ。これで考へると、木曾を滅ぼし、平家を滅ぼした俺の手柄なぞも、聞く者も話す者も飽いて仕舞うて、五年十年と月日の立つ中には、壇の浦と云ふ海も、義經と云ふ名も、大かた此の世から消えて無くなることであらう。

紀井權守。お言葉とも思へませぬ。仁安二年、清盛が太政大臣の位に昇つて此のかた十八年になります。一しきり平家熾んの頃は、一門の公卿が十六人もございました、殿上人は三十餘人もございました、日本六十ケ國の中、平家の知行は三十餘國に亘つて居つたのでございます。あれ程勢威を恣まゝに致した平家が、箒で掃き浄められた落葉のやうに、今は此の地上に無くなつたので御坐います。箱根、足柄、富士の山々を海の底に掃き込む程の不思議が有りましても、殿の此の大きないさほし、平家の世を源氏に更へられた大きないさほしに較べましては、中々、不思議では無からうと存じます。

太郎。この日の本の在らん限り、人の記憶の有らん限り、源氏平家の軍物語は、語り傳へて津々浦々まで傳はることでございませう。おのが住む里の名、おのが生みの親の名を忘れることがあつても、恐らく殿の雄々しい名を忘れる者はありますまい。

伊勢三郎。千年二千年の後までも、弓矢の道に心を勵む者は、さながら日月を仰ぐやうに、殿の御名を心に念ずることで御坐いませう。

龜井六郎。殿には、何うやら酒が醒めなされたやうにお見受いたします。此の大きな杯で、勢ひよく今一つ召上がられて如何でございます。

義經。酒も飲んで飲めぬことに無い。お前達の飲むくらゐは、まだまだ飲める。だが、今宵は酒の味も旨くはないのぢや。

堀彌太郎。はゝゝゝ。それは堀川の館の酒盛のやうに、お側に美しい酌取手が居らない爲でございませう。

義經。左樣なことも有るにはあらう。はゝゝゝ。だが、俺は日頃酒を飲んだり、女子共に戯むれたりして居る時でも、

お前達の思ふやうに、それ程心から興じては居らぬのぢや。なる程時の退屈を紛らすためには、遊ぶと云ふ事も必要なものぢや、だが俺には都合のわるい癖が有つて、あんな事をして居ると、心の底が淋しくなつて參つて仕方がなくなるのぢや。

堀彌太郎。遊んで居られる時に、淋しくなるので御坐いますか。

義經。なんと云ふたもんか、心の目が覺めるとでも云ふのか知れない。俺は、自分のして居る事が馬鹿らしくなつて來るのぢや、俄かに下らない人間に成り下がつたやうな氣がして來るのぢや。俺は高聲で笑ふたり、歌を唄ひ出したりするのはそんな時ぢや。側の者は思ひ違へて、俺が機嫌が好いのぢやと思うて喜ぶけれど、あれは、何うにもたらない此の淋しい心を紛らすためにする事ぢや。

紀井權守。それでは、殿のすぐれて興を覺えらるゝ遊びは、何う云ふ事で御坐いませう。

義經。いや、遊びではない。俺のすぐれて興ある事に思ふのは、なんと云ふても矢張り戰場ぢや、戰場へ出て味方の大軍を下知する事ぢや、矢合はせの矢を初めとして、敵味方の放つ矢が、陸奥に降る雪のやうに飛びかふ中へ馬を乘出し、打合ふ刃物と刃物が、夕日に輝やく薄野のやうに閃めく中へ立つと、俺は、夢から覺めたやうにしやつきりするのぢや。砂けむりを蹴立てゝ、逐ひつ逐はれつする敵味方の足音、おめく聲、馬の嘶、勇ましい物の具の打合ふ音、何も彼も一緒にからみ合つて、自分の聲すら聽取れない中で、俺の耳は敵將の鍛へた掛け聲まで聽分けるのぢや、俺の眼は、森に隱れて居る敵の人數もかぞへるのぢや　敵を破るか、破らるゝか　首を渡すか、受取るか、其の素晴らしい負け勝が、俺の引く息吐く息の間も、刻々と現はれて來るでは無いか。その時ぢや、俺は武門に生れた身の果報を、心から感謝したくなるのぢや、生き甲斐の有る本當の生き方をして居る自分を幸福と感ずるのぢや。

龜井六郎。憚りながら、それは私共とて同じ事でございます。戦場に驅け向ふ程の者は、誰とて己が強さを頼みに致さぬ者は無い筈で御座ります、此方が勝たうと望むだけ、敵も勝たうと望んで居る筈で御座ります。刃物を拔いて互り合ふまでは、どちらが強いのか、どちらにも分らぬので御座ります。また夫ぢやから、勝負が面白いので御座ります、夫ぢやから、敵の首を討取つた時には、神の思召にかなふた此の身ぢやと云ふ事が分り、武運の仕合せを有りがたく感ずるので御座ります。

伊勢三郎。私にも似た事がござります。私は、戦場で敵と互り合ふ時に、その敵の血走つた眼を睨み返すのでござりますが、睨み返しながら、何か得がたい貴い物にでも出逢つたやうに思ふ事がござります。私がこれ迄の戦場で勝つて參つたやうに、此の敵も、勝ち軍の場を經て來たからこそ、斯樣に生き殘つても居るのぢや、此う思ふのでござります。五十年、七十年と、生き長らへて何かせん、誠にすぐれた勇士ならば、今日を最期の働きして、この首を授くるも武士の本望ぢや、此う思ふのでござります。此う思ひながら、刃も合はせ、組討をも致すのでござります。それだけに、敵の首を掻落した時の喜びは一倍でござります。私は、今迄知らずに居つた自分の強さを發見したやうに思ふので御座ります、武士と生れた此の身を、つくづくと果報な事ぢやと思ふのでござります。

片岡八郎。戦場では、私も不斷思ひ寄らない心持になる事がござります。中でも可笑しな事には、忘れ居つた幼な友達の身の上などが、ふと胸に浮ぶのでござります。同じ男に生れながら、飲み食ひする事と、女子に兒を生ませる外には、此の世に大事な仕事が無いやうに、醜いと云ふ事も、恥かしいと云ふ事も忘れて、罵しつたり、罵しり返したりして、年が年中額を聚めて暮らす友達に較べては、大將軍たる殿の旗下に働く己が身は、なんと云ふ男らしい、立派な身分で有らうと思ふのでござります、左樣な時には、殿の姿が生きた神のやうに、私の眼に映るのでござります。

鷲尾七郎。私にも覺えが御坐ります。敵味方入り亂れて、その日の戰ひの酣な時でござりました、氣が附いて見ますれば、私の左右は皆な敵方ばかりなのでござります。血氣に逸り過ぎて、何時か私だけが味方とかけ離れて居るのぢやと氣が附きました、併し、氣が附いても最う遲いと云ふことが分りました、今にも强い敵が出て來れば、その者に首を渡す分ぢやと諦める外はありませんでした。その時でござります、私は、遙かに殿の兜を見つけたのでござります、立あがる土けむりの中から、殿の兜の鍬形が光つて見えたのでござります。私の胸が熱くなつて參りました、私には不思議な力が出て參りました、そこらに群つた敵は、私の揮上げた太刀に怖れて、草のやうに靡いて道を開くので御坐ります。

駿河次郎。それは私共ばかりでは御坐りませぬ、畠山の郎黨でも、佐々木の郎黨でも、一樣に申して居る事でござります。殿の馬上の姿が目に入れば、疲れも忘れ、疵の痛みも消える、新しい勇氣が湧いて參ると申して居ります。最前願ひましたのも、玆の事でござります、殿のお名を名乘つて參れば、關を固める者は固めを解き、弓持つ者は弓を棄てゝ、道を通すに違ひござりませぬ。短かい夏の夜の明け切らぬ間に、梶原親子の首を下げて參る事は、ほんに容易い事で御坐ります。

伊勢三郎。いや、梶原の討手ならば、是非私に仰せつけて下さりませ、外に加勢を頼ふので御坐りませぬ、私の手勢だけで澤山でござります。

龜井六郎。佐々木、畠山、三浦黨は云ふに及ばず、土肥、和田、千葉と、名ある大名を擧げたところで、殿の名を名乘る者に、手向ふやからの有らうとは思へぬ。成程これは、二三十騎もあれば澤山かも知れぬ。

片岡八郎。なアに、手向ふ者が有つてもいゝのぢや、目に餘る多勢の敵にでも遇はんでは、わしは睡氣が醒めんわい。

鷲尾七郎。我等も同意ぢや、勝軍して敵の大將の首を下げて來るばかりが強い武士でもあるまい、鎌倉中の大軍を敵に取つて、刀も腕も折れるまで働いて討死したら、わしは武士の本望ぢやと思うて居る。

駿河次郎。それはわしも願ふところぢや。誠を云へば、わしは梶原親子の首を貰ふたばかりでは、まだ物足らんのぢやや。木曾も平家も、わが殿の驅引一つで滅びたのぢや、それを、天晴れおのれ一人の働きで手柄した顏付し居る、あの恩賞にぬくもつて居るやからも、わしはあの儘にして置き度うないのぢや。

片岡八郎。然うぢや、然うぢや。殿へ目通りの時ばかり、三年も畜つた猫のやうに、殷懃ぶりを見せくさつて、鎌倉へ歸れば忘れたやうに、執成し一つ仕やうとしない北條殿の首も、ついでが有らば申受けてもいゝ首ぢや。

龜井六郎。それからあの大江因幡守は何うぢや。日本中の大事な智慧は、なんでも持合はした顏付して居ながら、御兄弟の不和と云ふ、此の目の前の大事は氣がつかん顏して居るではないか。智慧者の體の中には、狸の血がめぐつて居るか蛙の血がめぐつて居るか知らぬが、あのやうなとぼけ者とは、わしは一緒に生きて居れぬ性分ぢやて。

鷲尾七郎。北條殿ぢやの、大江殿ぢやのと、お身達の望はさて小さなものぢや、わしは、どうせ貰へるものなら、鎌倉殿の首の方を貰ひ度いと思つて居りますぢや。

駿河次郎。ほんに然うぢや。あの人並はづれて大きな首なら、どつしりと目方が有つて、嘸ぞ貰ひ榮えがすることで御座らう。はゝゝゝゝ。

伊勢三郎。
外四五人。｝はゝゝゝゝ。

武藏太郎。お身達は勇ましい事ばかり云はるゝ、わしはさう思はぬ。やがて天下の北條殿として、六十六ヶ國の大名の

司とも成らるゝ殿の軍始めぢや、假りにも後世に笑ひを遺すやうな、輕はづみな事あつては大事でござる。矢張り茲は、一先づ都へ歸らせられ、馬も揃へ、糧も蓄はへて、靜に機運の熟する時を待たるゝが、萬全の計事と申すものぢや。

紀井權守。わしも同意ぢや。恐多いことぢやが、院の御所をはじめ、大臣も公卿も、都はみな殿の恩顧昵近の方々ばかりではないか、鎌倉追討の御院宣を乞受ける事も、殿のお力では六ケしい事でござらぬわい。その御院宣を觸廻し、同心の武士を招いだなら、そこは殿の威勢ぢや。十萬の大軍も立どころに集まると云ふものぢや。

金子與一。先づ西國に隱れ居る平家の殘黨、北越には木曾殿の餘類も居る、その外鎌倉殿に怨を存するやからは、六十餘州の隅々から、我遲れじと馳けつける事でござらう。

常陸坊海尊。現在鎌倉に居る大小名とても、鎌倉殿が石橋山の旗上に、みぢめな敗軍した記憶を無くしては居ませぬ。如何な武骨一片の荒武者でも、わが出世の道を擇ぶ事にかけては拔目のないものぢや、最後の勝利のこちらに歸するか、こちらに奉公するが身の利益か、その判斷を間違ふ者はござるまい。

片岡八郎。それ故にこそわしは、不意に鎌倉へ押寄せたまへと、心に念じもし、飽足らず思うても居ますのぢや。

堀彌太郎。お身達の勇は血氣の勇ぢや。天下を渡すか受取るかと云ふ晴れの合戰を、野武士の斬合ひかなんぞと同じやうに思ふて居らるゝ、大將軍には大將軍にふさはしい、出陣の法があるものぢや。

片岡八郎。野武士だらうと野伏せりだらうと、これ、軍は勝ちさへすればそれで可いものではござらぬか。

龜井六郎。然うぢや、鎌倉殿のお首さへ貰ひ受ければ、一夜の中にも天下の大事が定まると云ふものぢや。

紀井權守。一夜の中に天下の大事が定まるとな。はゝゝゝゝ。それは、繪師にかゝする繪の事でもござるか。いや、

たとへ手まめな繪師であらうと、お身達の見て居るやうな夢なら、刻々、一夜や二夜でかけ果せるものではないぞ。

龜井六郎。奇怪な事を云はるゝ、鎌倉殿を討取る事が、なんで夢ぢや。

伊勢三郎。鎌倉殿の堅固に怖れて、討入る勇氣の失せた人々は、都へなり、西國へなり、勝手に逃げて行かるゝがよい。我等には我等の所存がある。無用な差出口は控へて貰はう。

堀彌太郎。聞捨てにならぬ一言ぢや。鎌倉殿の堅固に怖れたとは、何を指して云ふ事ぢや。我が殿の御武運に、靡く將來の有れかしと、縱にも横にも考へた上に勸め上げるのぢや。主と頼む大事の殿を、ばくち場に投げる賽かなんぞのやうに、輕々しい事をお勸めする、愚な者のお身達とは違ふのぢや。

片岡八郎。なんぢや。我等が愚か者とな。

伊勢三郎。我等が愚か者なら、お身達は不忠者ぢや。

龜井六郎。不忠者の臆病者ぢや。

堀彌太郎。勘忍もこれ迄ぢや。

　方に太刀の柄に手を掛け、起上がらんと身構へする。坐に在る者の總てが、一派に分れたる意見のいづれかの一派に同意する者なることを現はす。

義經。これ、双方とも控へ居らぬか。(間) お前達は、誰にも手の屆く所に在る考を一つ考へると、それだけで心の中が一杯に成つて仕舞ふものと見える。お前達の云ふやうな事は、俺は疾に考へて來た事ぢや。最う心の中から掘出してもいゝ程の、考へ屑に過ぎんのぢや。

伊勢三郎。併し殿、いか程深う考へさせられても、所詮は弱を蔵つて鎌倉に入るか、このまゝ思ひ忍んで、十三日掛か

つて來た道をまた十三日掛かつて、遙々都まで歸らせらるゝか、二つの中の一つに極める外、極めやうは無いではござりませぬか。

堀彌太郎。殿、茲は大事な場合でござります、無謀なお擧ひあつてはなりませぬ。是非都へ歸る事にお極めなさらねばなりませぬ。

片岡八郎。いや、都へ歸られては、人の物笑ひとなるばかりで御坐ります、勇ましく鎌倉へ攻入る事にお極めなさらねばなりませぬ。

義經。六十餘ケ國の廣い日本に、故郷も無ければ領地も持たぬ義經ぢや。この村を立つとならば、右の足から踏出して都へ上るか、左の足から踏出して鎌倉へ入るか、どちらか一方に行くより、行くあても無いのぢやが、さてどちらへ踏出していゝものやら、俺の心はまだ極まつては居らんのぢや。

金子與一。何かまだ、考へて居らせらるゝ事が有るのでござりますか。

堀彌太郎。何方からか、參る筈の消息など待つて居らせらるゝのでござりませうか。

義經。いや、待つ者もない、考へる事も最うないのぢや、唯だ俺の心が動かんのぢや。

紀井權守。お心が動かぬとは。

龜井六郎。それは何うした事でござります。

義經。何うした事か、俺にも宜う分らんのぢや。だが、それぢやからとて、何もお前達に失望させる事は無い筈ぢや。見ろ、俺はこの通り、今迄とかはらぬ俺ぢや。木曾を滅ぼした、平家を滅ぼした、善う働いた、勳賞として取らす物は無い、鎌倉へは足を踏入れてはならぬ、お前には最う用が無いのぢや…。はゝゝゝ。日月の照らすこの地上

に、左様な道理の行はれる筈はないではないか。

紀井權守。誠に、殿の勳功にふさはしい賞與ならは、この日本國の半ばを賜はつたとて、決して過分ではござりませぬ。

義經。働いた者に、その働きに相當した報償を與へると云ふ事も、何時の時代にか行はれねばならん道理の一つかも知れない。併し左様なあてにもならぬ事をあてにするのは、それは弱い者、愚な者逹の見る夢に過ぎんのぢや。欲しい物は自分の腕で取るまでのものぢや。己が力で取つて見せるのぢや。この俺の腕には、その力がまだ無くなつては居ない筈ぢや。俺の智慧は　衰えこそすれ減つては居らんのぢや。そればかりでは無い、俺が此の世に緣つて來た本當の仕事は、これから先に行るとさへ思うて居るのぢや。俺はまだ、二十七にしかならんのぢやないか。はははははは。

常陸坊海尊。強い木曾殿と云ふ者の現はれましたのも、一の谷、屋島、壇の浦と、大合戰が三段にも行はれて、榮華を極めた平家らしい、花々しい滅びかたを致しましたのも、みな殿のすぐれた戰術と、殿の武名を輝かすためばかりに、運命の神が組立てられた、いみじい手段であつたかも知れませぬ。

義經。面白い理屈ぢや、だが俺は、然う云ふ事は考へ度うないのぢや。運命の神とやらは、何所に居つて、何う俺の運命を極めて呉れられる事やら、それは俺の知つた事ではないのぢや。俺は、唯俺の思ふ通り進んで行く外はないのぢや、河が俺の道を遮つて流れて居るなら、その河を渉つて進むのぢや、山があれば、その山を踏越えて進む迄ぢや。踏出した足を躓いて溪深くころげ落ちやうとも、流れにさらはれ一淵の底に沈まうとも、俺はかまはぬつもりぢや。足を中途で引返へすよりは、その方が遙かに立派な事と信じて居るのぢや。

栗彌太郎。殿の進んで行かるゝ道を、何所に妨げる程の者がございませう。運命の神とやらも、殿のお心にも添はぬと

ならば、一旦極めた筋書も、急いで組立を更へらるゝことで御坐いませう。

龜井六郎。殿が一たび旗を上げたまへば、それだけで天下の武士の運命も極まるので御坐います、殿のお心が、取りもなほさず運命の神のお心に違ひないので御坐います。

片岡八郎。今は、殿の御決斷一つで御坐います。

駿河次郎。勇ましいおん下知一つありますれば、湛へた水の堤を切つたやうに、天下の勢ひが極まるのでございます。

義經。それは、俺にも考へない事はないのぢや、だが俺には、何うしてもそれを思ひ立つ事が出來んのぢや。

伊勢三郎。勝つにきまつた戰が、何故思ひ立たれないので御坐います。

義經。勝つに極つたと申すか、いや、然うばかりも云へぬものぢや。お前たちには氣が附かずに居るか知れぬ。なる程俺は、戰ふ度毎に勝つては來た、併しあれは、お前達が烈しく働いて吳れたばかりで勝つたものでは無い。敵方よりも、味方に多分の運が有つた爲でもない、俺に力を附けて、始終俺を勵ますものが在つたからぢや。

堀彌太郎。殿へ力を附ける者とは。

龜井六郎。それは何方に居らるゝ者で御坐います。

義經。いや、外に居る者ではない。俺の心の内に居る物ぢや。まあ、魂の力とでも云ふのであらうか。俺は鵯越を馳落とす時でも、風波の逆卷く中を漕切つて屋島を襲ふた時でも、平家を討詰めると云ふ事で、胸の中が張切つて居たものぢや、俺の體中の血は、腸も破るやうにたぎり立つてゐたものぢや、髮の毛の一本一本にまで、不思議な力が漲つてゐたのぢや。俺は、自分の生死など云ふ事は、とんと忘れて居つたのぢや。あの力ぢや、あの魂の力が有つたればこそぢや、俺は十倍二十倍の敵にも、易々と勝つ事が出來たのぢや、だが肝腎な此の力が、ふところにして來た

物を途に落したやうに、ふつ、つり、と俺の心に無くなつて仕舞ふたのぢや。

紀井權守。なんぞ、異つた事を考へられた爲ではござりませぬか。

常陸坊海尊。それは解せぬ事で御坐ります、何時からの事で御坐ります。

義經。丁度、兄を自分の敵と思ふた日からぢや。木曾も滅びた。平家も滅びた、今は鎌倉に在る舍兄こそ、此の義經の敵ぢやと思ふた日からその魂の力が無くなつて仕舞ふたのぢや。

四五人同時に。おゝ。

義經。これ迄頼みもした兄から棄てられて、心の花が萎んだやうには思ふて呉れるな。俺は、兄から授けられる恩賞をあてに働いて來たのでは無い。斯樣な事は、俺は想ふても耻しい位ぢや。俺は何所までも獨り立ちの俺ぢや。

常陸坊海尊。魂の力と仰せられますが、それは、斯樣な片田舍に滯在なされて、快からぬ日を送られた爲かと存じます。今にも、氣分を換へる事が起りますれば、前にも倍して、强い力を感じさせらるゝに違ひござりませぬ。

義經。然うあれば善いが、俺は何うかと危ぶんで居るのぢや。これ迄は、如何なる窮地に陷る事があつても、遂ひ自分の力を頼みなく思ふたことのない俺ぢや。また、自分の力に及ばぬ困難に出遇ふても、源家の氏神、八幡大菩薩を一たび念じ上ぐれば、神靈いやちこに此の身に加護を下されたものぢや。それが、舍兄を身の敵と思ふて此かた、氏神を念じやうとしても、俺は心を籠めて念ずる事がかなはなくなつたのぢや。

幔幕の後より武藏坊辨慶と、小内記信俊とが出で來る。

武藏坊辨慶。果ては不時を過ごしましたが、漸く只今書き終へました。

義經。何を書いて參つたのか。

武藏坊辨慶。何をとお尋ねでござるか。

少內記信康。今日、日が暮れて間もなく、殿より仰せつけられました、鎌倉殿へ差上ぐるお文でござります。

武藏坊辨慶。大江因幡殿へ宛てた披露文でござります。

義經。然うであつたか。宵からの酒盛に、終ひ忘れて居つた。お前達、二人で認めたのぢやな。

武藏坊辨慶。左樣でござります。二人が智慧を絞り集めて、漸く作り上げたのでござります。

義經。大義な事であつた。そこで讀上げて見るがよい。

武藏坊辨慶。左衛門少尉源義經、恐れながら申上候趣意は、御代官の其一に選ばれ、勅宣の御使として朝敵を傾け、累代弓矢の藝を顯はし、會稽の恥辱を雪ぐ、抽賞せらるべき處に、思ひの外に虎口の讒言に依つて莫大の勳功を默止せられ、義經犯すこと無うして咎を蒙り、功有つて誤無しと雖も、御勘氣を蒙るの間空しく紅涙に沈む、倩事の意を案ずるに、良藥は口に苦く、忠言は耳に逆ふとは先言なり、玆に因つて讒者の實否を正されず、鎌倉の中に入れられざるの間、素意を述ぶる事能はず、徒らに數日を送る、此時に當つて、永く恩顏を拜し奉らずんば、骨肉同胞の義既に空しきに似たり、宿運の極まる處か、將又前世の業因に感ずるか、悲しきかな、此の條、故亡父の尊靈再誕し給はずんば、誰人か愚意の悲嘆を申披き、何れの誰か哀憐を垂れんや、事新しき申條、述懐に似たりと雖も、義經身體髮膚を父母に受け、幾くの時節を經ずして、故左馬の頭殿御他界の間、實無し子となつて母の懷中に抱かれ……。

武藏坊辨慶の聲は低音に始まり、讀進むと共に感激に滿ちた高音に轉ず。酒を飲む者は杯を置き、耳語するものは襟を正し、讀み進む一句一句に緊張を增す。義經流涕す。郎黨等驚く。少內記信康、辨慶の袖を引きて注意す。辨慶背讀を止む。室內寂然。

義經。あたし事に心を奪はれて、忘るともなく忘れて居つた。誠に然うぢや、父上この世にましましたなら、この兄弟の醜き爭ひを、如何ばかり嘆かせ賜ふたことであらう。

義經直垂の袖にて面を覆ふ。郎黨も言葉を發する者なし。

武藏坊辨慶。殿、如何でござります、只今の狀を讀みませう。

義經。これへよこせ。

武藏坊辨慶居ざり出て其の狀を捧ぐ。郎黨の一人は燈臺を近く据ゑなほす。義經默讀す。

義經。廣元のことぢや、此の狀を手にしたとて、披露するとは限らぬ。また、假りに披露をしたところで、これに心を飜へす舍兄でもあるまい。(間)明日は此地を發足して、都へ歸るべき義經ぢや、人の憐憫を乞うて、笑ひを後の世に殘すも心外な事ぢや。

義經讀終りたる狀を破りて傍に投げる。

伊勢三郎。殿、明日は此地を發足と仰せられますか。

堀彌太郎。彌よ、都へお歸りになるので御坐りますか。

義經。極まらぬ心も、最う極めなければならなくなつた。

郎黨等は、いづれも愕然として義經の顏を仰ぎ見る。

武藏坊辨慶。殿には、此のまゝ都へ歸らせらるゝのでござりますか。

義經。然うぢや。夜明けと共に發足するのぢや。下々にも觸廻はして、手落なきやうに、用意を急いで呉れ。

龜井六郎。併し、あまりに急なお立ちではござりませぬか。

伊勢三郎。何事にもあれ、仰せを背く我等ではござりませぬが、都へ歸らせられて、此の後いかゞ成さるゝ思召でござります。

————

義經。さア、何うして善い事やら、まだ其處までは考へては居らんのぢや。まア、緩々と、强い將軍に成る工夫でも致すであらうか。

堀彌太郎。殿には、まだ將軍としての强さが不足なのでござりますか。

紀井權守。武勇に優れておはすばかりか、軍略にも兵術にも、殿ほどの將軍が、この世に二人と在らうとは存じませぬ。

義經。左様なことは云うて呉れるな、俺は、顔の向け場が無いやうな氣が致すわい。それは、俺にも優れた處が有るにはあらう、兵術も心得て居らぬ事は無いのぢや、併し、何が有つたところが、肝腎な魂に力と云ふ物が無くなつてはなんの役にも立たん事ぢや。丁度、千本二千本と松明が在つても、火を附けない松明では、夜途の用に立たぬも同じ事ぢや。

伊勢三郎。その魂の力とやらは、松明に附ける火のやうな物と仰せられますか。

義經。然うぢや。不覺に落した今の涙で、ふとそれが分つて來たのぢや。武士と云ふ者は、一概に强くさへ有れば善いとばかり信じて、今日まで勵んで來た俺ぢや。その强い力と云ふものゝ源が、何處から生れるかと云ふ事には、終ひ氣を留めずに過して來たのは不念な事であつた。

常陸坊海尊。して、その强い力の源は、何所から生れるのでござります。

義經。强さにも色々有らう。併し、いづれの强さにも優れた强さぢや、限りの無い强さぢや、その尊い强さと申す物は只今、義經に涙を落させたと、丁度同じ心からのみ生れると云ふ事が分つたのぢや。

片岡八郎。松明の火ともなり、殿の涙の種とも成る上は。
義經。何う云うて善いのか、俺も云ひ現はす言葉を知らないのぢや。まア、生れたまゝに持つて居るとでも云ふのか、生命と一緒にいぶきして居る心とでも云ふのか……。誰の胸にも持つて居ながら、誰からも粗末な取扱ひを受けて居る其の心ぢや。功名に氣のあせる若者ばらからは、不斷邪魔物とまで思はるゝ其の心ぢや。俺は、今になつて其心の偉さが分つて來たのぢや。倒れても強い武士で在らうには、この心を守る外に道が無いと云ふ事ぢや。思へば都から馳せ下つて、この腰越の關にせき留められたのも、此の心の大切さを覺えるためであつたかも知れぬのぢや。

郎黨等は一樣に口を噤んで、主人の言葉の意味を沈思す。雨は息みたれど、雲厚き東の空より、夜明の色微かに洩れ來たる。

(終)

中央公論大賣捌所

同	神田區通神保町	上田屋
同	京橋區銀座三丁目	東海堂
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	日本橋區本石町	至誠堂
同	本鄉區春木町	盛春堂
大阪	市北區梅田町	盛文館
同	北區東梅田町	立盛社
京都	市七條停車場前	共盛社
同	新町通り七條南入	大誠社
名古屋	市富澤町	中京堂
朝鮮	京城本町二丁目	日韓書房

◎定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれは一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金口座番號は東京三四番　長野三三〇五番なり

一郵券代用は謝絕す　但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれは雜誌發送せず

一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十四年二月廿日印刷納本
大正十四年三月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話長丸ノ內三〇二二（當分不通）
牛込五〇八九
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

東京小石川研精社印刷